OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究
Author(s)	荒川, 裕紀
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55695
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

平成二十七年度　大阪大学大学院文学研究科　博士学位申請論文

西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究

荒川　裕紀

平成 27 年度
大阪大学大学院文学研究科
博士学位申請論文

西宮神社
十日戎開門神事福男選びの人類学的研究

荒 川　裕 紀

目次

序章　本研究における問題の所在

1 節　本研究の目的・対象ならびに意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2 節　先行研究の概観と本研究の論点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

1.祭礼を対象とした諸研究

2.本研究の論点

3 節　本研究の調査の概要・方法および本論の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・6

1.調査の概要および方法

2.本論の構成

第 1 章　十日戎の歴史的変遷

1 節　西宮神社の中世における展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

2 節　旧暦・新暦併記によって行われた十日戎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

3 節　電鉄会社による新たな参詣形態の成立・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第 2 章　十日戎での開門行事の創出

1 節　新暦による「門開け」の発生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

2 節　創り出された福男・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

3 節　移入者と青年団活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

4 節　戦時下における十日戎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

第 3 章　戦後から現代に至る開門神事の変遷

1 節　終戦後の十日戎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

2 節　高度経済成長を経て・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

3 節　周縁から中心へ十日戎に関する気づき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

4 節　創られた「十日戎開門神事福男選び」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

5 節　マスメディアによる報道の増加・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55

第 4 章　参与観察、インタビューから
1 節　参与観察に入るまで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
2 節　はじめての参与観察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
3 節　1998 年の参与観察の詳細と 2004 年までの十日戎開門神事・・・・・・・・・・63
4 節　2004 年 1 月 10 日・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
5 節　各時代における福男の語りから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
1.開門行事創生期の福男 T.T.氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
2.戦時中の福男 U.K.氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
3.戦後復興期の福男 Y.H.氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
4.高度経済成長後の福男 N.K.氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
5.1990 年代最後の福男 S.S.氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
6.えびすさまに好かれた福男 H.R.氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
6 節　第 4 章のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80

第 5 章　開門神事の現在
1 節　2004 年から 2008 年にかけての動き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
2 節　福男が立ち上がる時、保存会の講社化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
3 節　参加者が主催者となった神事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
1.現在の講社の一年間の動き
2.十日戎当日の開門神事講社の動き
4 節　東北へ。拡がる福男選び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91

第 6 章　質問紙調査からみえること
1 節　定量調査の手法とそこに至った動機・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
1.年度別の被調査者数
2.質問紙の内容
3.全体の性別・スポーツ経験・種目
4.職業・年齢
5.出身地の属性

2 節　2001 年から 2004 年までの参加者の属性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
1.性別
2.職業・年齢
3.出身（青年期に住んでた場所）
3 節　2005 年以降の参加者の属性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
1.性別
2.職業・年齢
3.出身（青年期に住んでいた場所）
4 節　参加動機・感想などから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
1.いつ、誰から開門神事を知ったか
2.いつ、誰から（西宮神社の）十日戎自体を知ったか
3.参加動機
4.感想
5.複数回の参加動機
6.クロス検定（巻末資料参照）
5 節　第 6 章まとめ、定量調査から見えること・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
.
結章　まとめと課題
1 節　歴史的変遷と祭礼の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・126
2 節　考察：人々は十日戎開門神事に何を求めているのか・・・・・・・・・・・・・129
3 節　本研究の成果と意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・129
4 節　これからの展望・今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・130

謝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・132

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134

添付資料
1、歴代福男（1～3 番福）および参加人数リスト
2、開門前配布アンケート用紙
3、第 6 章におけるクロス検定表

序章　本研究における問題の所在

1節　本研究の目的ならびに意義

兵庫県西宮市の西宮神社では、毎年1月9日から11日にかけて、「十日戎」が催行される。その中でもとりわけ有名なのが、「西宮神社十日戎開門神事福男選び」である。

1月10日の午前6時、神社の表大門（赤門）が開き、門前で待機していた参加者が一斉に飛び出し、230メートルの境内を駆けきって、拝殿まで走り参りをするものである。一番先にたどり着いた者から3番目までを、西宮神社は「福男」と認定し、それぞれにその年の「一番福」「二番福」「三番福」の称号を与え、副賞を授与するものである。在関西のメディアはもとより、日本の全国ネットが取り上げ、2008年にはロイター通信にて当神事が外電されるなど、年々報道は拡大している。

2015年現在、この30秒余りの神事に、5000名以上の人々が西宮神社に集い、230mの参道を駆け抜け、拝殿を目指している。本論文では、この「十日戎開門神事」について、その歴史的変遷・変容を明らかにしつつ、18年にわたる参与観察、フィールドワークを経たうえで、現代社会における都市祭礼の新たな姿について考察をするものである。

都市部・農村部でも、」民俗学でいう「祭礼の伝統継承」に関して、地域住民の高齢化・地域の空洞化などの諸要因によって、問題が顕在化している地域が多い。それに対して、この神事には多くの人々が集まり、開門前には雄叫びをあげている参加者がいる。まさに集合的沸騰の場が、表大門の前で形成されている。

ただ、門が開いて、参加者が走り参りをして拝殿に詣でる。その中の先着3名を神社側が福男と認定するだけの神事である。そこにマスメディアが注目し、日本全国に放映され、多くの参加者が、西宮で夜を明かし、この神事に参加しているのである。この時代に、この一瞬のためだけに、これだけの人を集める「開門神事福男選び」とは、いったい何であるのか。この神事の全体像を捉え、総合的に理解することによってこそ、現代社会における都市民俗の在り方が見えてくるのではないか。

これまで、報道先行で行われていた十日戎開門神事福男選びに対して、本研究ではいつごろから成立をし、どのような変遷を遂げ、社会の中で祝祭として認知されてきたのかを、文献調査ならびに各時代で参加した「福男」と呼ばれる参加者にインタビューを行うことで、歴史的な側面から明らかにする。そして、現在行われている神事の参与観察を18年もの期間で経年的に行ってきたことによって、神事の全容の解明に迫り、注目され続ける理由とそこで浮かび上がってきた問題点についても考察を行う。

また、2004年以降は、「事件」が起こってしまった。この神事の存続をも揺るがしかねない事件がきっかけとなり、本研究者自らが、この開門神事の運営メンバーとなり、直接神事に関わることとなったのである。その経緯を説明するとともに、当事者として経験した民俗誌を示すことで、調査者でありながら、フィールドでの当事者にもなるという一事例の紹介としたい。このことは、研究者がもしかしたら直面するかもしれない、民俗学や人類学の知見を持った研

究者が、直接地域の活性化に寄与する実践的な研究の提起にもつながる。社会的に注目されている神事の全容を解明し、その中での問題点に対して研究者が実践的事例として取組み、更なる地域の活性化の一翼を担うことにつながる研究は、社会的見地からも意義があると考える。

先行研究の分野としては、祭礼・祝祭論として、人類学・民俗学・社会学・宗教学・歴史学・観光学からの多岐にわたる分野からのアプローチが試みられている。次節では、祭礼を対象とした先行研究を挙げながら、本研究がどのような論点での研究になりうるのかを考えたい。

2 節　先行研究の概観と本研究の論点

1.祭りを対象とした諸研究

これまで、人類学・社会学・民俗学・歴史学において多種多様な祭礼に関する研究が行われてきた。伝統の継承を伴った地域の祭りや電鉄会社などの参詣のイベントが祭礼として根付いた祭り、地方自治体の主導によって生み出された祭りなど、様々な祭りがある。

祭礼研究であるならば、まず柳田國男の「日本の祭」[柳田 1942]が挙げられる。この中で柳田は、モノイミ・ミカリなどの事例から、祭りの本質は籠ることであるとし、神人の共食を重要視している。

> つまりは「籠る」といふことが祭の本体だつたのである。即ち本来は酒食を以って神を御もてなし申す間、一同が御前に侍坐することが祭であつた。さうしてその神にさし上げたのと同じ食物を、末座に於て共々にたまはるのが、直会であつたらうと私は思つて居る。[柳田 1942：219]

柳田は、この祭りが中世以来の都市文化の力により変化して、都会において祭礼が誕生したと説く。この「日本の祭」中の「物忌と精進」では、本研究対象の西宮神社の十日戎の原型である「イゴモリ祭り」が登場する。

> 摂津の西宮の正月九日の忌籠りも、一に又ミカリとも謂つたことが、西宮戎神研究に見えて居るが、是はどうやら神職の家だけの物忌になつているらしい。[柳田 1942：223]

つまり、西宮の十日戎に関しても、他の祭礼同様に、中世以降から都市の祭礼化の中で生まれたと考えられる。しかし神職の家のみ、この原型ともいえる忌籠りが行われているというのである。この祭りの原型である「物忌」をする文化は開門神事にどのように受け継がれているのかにも着目したい。

祭礼を人類学的に研究を行った者としては、まず中村孚美がいる。1970 年代に秩父祭り、川越祭り、さらに博多の祇園山笠などを調査する中で、祭りには地域社会の持つ性格が反映されているとする視点から、例えば、秩父祭りであるならば、一つ一つの儀礼に着目するのではなく、「祭り全体の設計と計画、実施への手順、人々の参加のしかた、祭り全体の構成のしかた」に着目し、各町内の役割について論じた[中村孚美 1972a:152]。

米山俊直は京都の祇園祭[米山 1974]、大阪の天神祭[米山 1979]の研究の中で、中村と同じく、「祭礼から都市をみる」ことを行った。高度経済成長をたどり、都市が複雑化する中

で、参与観察を行いながら、何か知見を得ようと考えた点では、その後の森田三郎、阿南透、そして和崎春日へと受け継がれていくこととなる。

森田は『祭りの文化人類学』[森田 1990]の中で、長崎くんちにおける「ウラくんち」であるような「ウラまつり」が発生した理由について、アイデンティティの確認であると指摘した。既存の祭りに対して、よりエミック的な「祭り＝アイデンティティの確認の場、欲求充足の場」として、「ウラまつり」が派生的に生み出されたと主張する。つまり、祭りの成立は、当事者がその中でアイデンティティを確認できるか否かにかかっているとしたのである。

> 祭りはこの精神的報酬の獲得を暗示的、無意識的目標としているのであるから、結果的にこの目標を充足できないイベントは祭りではありえない。[森田 1990：122]

逆を言うと、イベントとして生まれたものであっても、参加者がそこに精神的充足を見出し、アイデンティティを確認できるものであるならば「祭り」であるといえる。

和崎春日は、京都の大文字五山送り火の研究[和崎 1976、1981、1987、1994、1996]の中で、祭りにおける他者との関係についての考察を行った。他者である参加者との思惑が拮抗し、対立することが起こるが、そこをうまく許容しまとめていくのが都市の祭りであり、開放系であると主張した。

阿南透は、「時代を再現する」祭礼とよんだ、時代祭（京都）、名古屋祭り、信玄公祭りを調査し、これまでの都市祭礼で論じられていた空間的な関係性（住民の連帯）を持つのではなく、時間的なアイデンティティ確認のための祭りだとし、祭りに参加する個人として考える中で、もう一つの軸が存在するとの見解を示した。

このように、都市における祭礼研究は、1980 年代までに醸成された。そして 1980 年代半ばに上野千鶴子は「祭りと共同体」[上野 1984]において、新たな祭礼研究の地平を生み出すこととなった。これまでの祭り、特に都市祭礼の研究においては、空間的な関係性、すなわち住民同士の連帯感を高めていくための祭礼研究が主であった。いわば祭礼は、地縁・血縁・社縁の結びつきの中で存在し、それらに対しての社会的な機能の研究をしていくものであった。上野はこの 3 つの縁（地縁・血縁・社縁）を「選べない縁」と定義し、新たな祭りの視点として、それと対比する概念としての「選択縁」の存在を指摘したのである。「選択縁」は社会的な拘束性がない代わりに、「選択縁的な共同性は、断片性と部分性を免れることができず、自らの至高性を他の共同体に対して主張することが出来ない」と論じた[上野 1984：78]。そして、今日の社会学がこの選択縁を重視するのは、「（社会構造の変化によって）地縁から生産の共同が失われた後は、地縁の拘束性は著しく弱まり」、「流動性が高く規模の大きな都市のオープン・コミュニティでは、選択の余地のない閉鎖的で排他的な地縁関係を、結ぶ必要も理由もない」と主張したのである[上野 1984：76]。

上野の指摘した選択縁に関連して、松平誠は都市の中で新しく創造されたイベント・祭りに注目した[松平 1990、1991、1993、1994、1999、2000、2008]。松平が調査対象に選んだものは、戦後になって創り出された、関東地方における高円寺阿波踊りであった。「連」

さえ組めば、誰でもが参加可能な祭りであり、祭りが終われば連はその場からは消えてしまう。松平は、この祭りの輪に参加する縁こそが「選択縁」であるとしたのである。このような「選択縁」に光を当てる中、松平は『都市祝祭の社会学』[松平 1990]の中で、この既存の縁とは関係な様々な選択縁がつながって出来上がる祭りを、様々な人々が参加するという意味で「合衆型」祝祭と名付けたのである。

1990 年代、2000 年代を過ぎ、これまでの祭礼研究を受け継ぐ研究者が現れた。松平の合衆型祭礼に関しての研究が特に進められている。その中でも、特に「よさこい」系のイベント・祭りの研究が活発である。内田忠賢が調査を行ってきたよさこい祭り自体は、1954 年に高知市にて商店街の復興の祭りとしてはじめられた。その中で出し物の一つであった「鳴子踊り」が、注目を集めた。歴史的な変遷の中で、音楽や踊り、踊り手のグループなどの変化があり、現在に至っている[内田 1992、1994a、1994b、1999、2000、2001、2002、2003a、2003b、2009、2013 など]。内田はこれらの論考の中で、踊り子の構成員は毎年募集をして編成されるため、極めて流動性が高いことから、上野のいう「選択縁」的な集団であると結論付けている[内田 1999：38]。よって、よさこい祭りは選択縁であるがために自主的な参加が促され、パワーダウンしないと言明する。

矢島妙子は高知市のよさこい祭りの他に、全国に広がった「よさこい」系祭りの都市民俗的な研究を行っている。1992 年には、北海道大学の長谷川岳によって札幌で「YOSAKOI ソーラン祭り」としてまず北海道にもたらされた。結果として、これが成功をおさめ、そこから現在全国へと広がりを見せていくきっかけとなった。

松平が調べた高円寺の阿波踊りも、徳島からの広がりを見せた祭りであるが、矢島はよさこいの広がりの特徴について各地のよさこい系の祭りの創始者の多くが、高知市や札幌市の「よさこい」をみて、「感動して」祭りを始めていたとしている。行政主導ではなく、個人が祭りを創ったということである。踊りのチームがお互い遠征し合うというネットワークが形成されていったことも特徴である。また、踊りそのものの伝播ではなく「祭り形式」の伝播であり、ネットワークができる一方、取り入れるものは「形式」であるために、オリジナリティの強い自分たちの祭りの創造が出来た点が広まりの要因となった。さらに、これらの組織が厳密な地域性に捉われないことで、それまで内包されなかった人々が取り込まれ、女性参加者が増加するきっかけにもなった。矢島はこの形を、都市における「新たな伝承母体」であると主張する[矢島 2006：1]。民俗学ではこれまで語られてこなかった、「変わる文化」に視点を置き、そこから日本の民俗をもう一度見つめ直そうとする動きである。同時に、このような「合衆型」の祝祭を見ていく中で、都市における新たな人のつながりに目を向けようとする研究でもある。

現在、このような選択縁によって結びついたその他の祭りの研究では、中野紀和の北九州市における小倉祇園太鼓に関する研究もある。小倉祇園太鼓は、原則として町内を単位として参加する形態が一般的であり、幼児期から太鼓の叩き手として育てていくための組織が存在している。しかし、近年そういった枠を飛び越えて、有志が「選択縁」によって

結ばれたのが有志チームの存在がある。本来いた町内に「なんとなく戻りづらい」太鼓の叩き手など行き場を失った人々の受け皿ともなり、また地縁のない、または成長の過程でエアポケットに陥った若者たちを受け入れる窓口にもなっている[中野 2007:109]。中野は、その有志チームの人たちの内面を調査し、従来からある町内のチームと有志チームとの葛藤、そしてその中で揺れ動く人たちの心理的な動きを記録し、小倉という都市の祭礼が抱える諸問題を明らかにしようとしている。

その他、都市の祭礼を取り上げている研究としては、秋野淳一による神田祭に関する研究がある。新しい人々を既存の組織がどう受け入れるかということと同時に、アニメーションとのコラボレーションによって、新たに祭りがどのように変容していくのかに関しての研究を行っている。

また、これまであまり取り上げられなかった、祭りの政治的な側面（葛藤・緊張・対抗）に関する研究も行われている。和崎の大文字五山送り火の中で述べられていた、葛藤や対抗関係に関する論考である。有末賢は「都市祭礼の重層的構造―佃・月島の祭祀組織の事例研究」[有末：1983]において、地域の空洞化に際した東京都中央区の佃・月島地区で新しい結びつきによる祭りの継続が図られるとともに、佃・月島地区の様々な対抗関係について述べ、都市祭礼は重層的構造を持つことについて指摘した。一方、芦田徹郎は熊本市の「ボシタ祭り」の研究を行った。一般の参加者（団体）に焦点を当てて、この祭りの戦後のドラスティックな推移をたどり、社会全体のマクロな変動と祭りの変動との関連を探った。そこから祭りの開催が外部からの圧力によって翻弄され続けてきた事実を明らかにした。祭りを支えるグループは時代によって流動的であり、新しい社会集団が加わるときには必ず緊張が伴ったことを指摘した。祭りが地域おこしや、コミュニティの形成等に貢献するものとして歓迎ばかりはしておれず、外部との緊張の事実により目を向けた研究をすることの重要性を主張していている[芦田：2001]。

谷部真吾の「森の祭り」[谷部 2004]の研究は、こういった政治的な事象に目を向け、歴史的な変遷で行われた様々な葛藤がどのような意味を持つかに着目し、ここから社会環境の変動について見ていこうとするものである。中里亮平は、府中における「くらやみ祭り」[中里 2008、2009、2010a、2010b、2011、2013]などを研究対象として、「変更」や「もめごと」などからみる、祭りの中での政治的な動きに関する研究を行っている。また、竹元秀樹の『祭りと地方都市』[竹元 2014]におけるように、宮崎県都城市における祭りを分析し、各祭りの持つ機能を認識し、いかに地方都市を良くするかという提言を行う、実践的研究も生まれている。その他、観光学や歴史学においても、祭礼の研究は盛んである。当研究としては、これまで蓄積された祭り研究の中でも、特に松平の「合衆型」に関する研究や、森田のイベントと祭りについての言説が、非常に有用であると考える。

2.本研究の論点

まず明らかにすべき点は、いかにして当神事が生まれ、どのような歴史的変遷をたどっ

たのかである。これまで、報道が先行して、様々な場面で語られてきた神事だけに、実際どのような過程を経て創出されたのかを論ずることは意義があろう。

現在の神事において、上述の祭礼に関する先行研究にあてはめて考えてみると、この十日戎開門神事福男選びは、「選択縁」によって、日本全国から集まる「合衆型」のイベントであると言えるのではないか。本論考を進めていく中で、神事の参加者への質問紙調査を行い、彼らの属性および参加動機や感想などを収集していく。そこから、この推論が正しいのか否かについて考察を行う。同時に、森田三郎の言説では、アイデンティティを確認する場として祭りが存在するとあったが、このわずか 30 秒ほどのイベントが、はたして参加者にとって祭りと言えるのか。各参加者の語りや参与観察、質問紙の結果から考察を行いたい。

3 節　本研究の調査の概要・方法および本論の構成

1.調査の概要および方法

本研究の調査対象は、「西宮神社十日戎開門神事福男選び」である。具体的には、この神事に関わる神職、参加者、門開けを担当する「十日戎開門神事講社」のメンバー、ならびにその協力者である西宮神社周辺の人々（地元自治会・氏子青年会・神輿奉賛講社・露店組合）などである。具体的なフィールドとしては、この神社で行われる神事のみである。方法論として、まず行ったのが文献資料調査と同時に参与観察である。1997 年より、まずは単独で神事に参加した。翌 1998 年からは、赤門の最前列より走りだし、この神事に多くの人がひきつけられる魅力の身体的な理解に努めた。引き続き、開門神事の走りながらの参与観察は、2004 年の 1 月 10 日まで行った。その間に参加者たちとの関係が出来るというよりも、参加者の一人としてフィールドからは認識されていった。

同時に 2001 年からは、より多くの参加者の属性および参加動機、神事の感想、複数回参加の動機を探るため、質問紙調査を続けてきた。本論文の第 6 章にて提示する、属性および動機・感想の分析は、この時からの質問紙がもととなっている。

この調査の途中で、2004 年には開門神事福男選びを揺るがす「事件」が起きた。前年から集団で参加していた大阪市の消防士のグループが、出走の位置の確保のために彼らの非番を利用して、一週間も前から西宮神社赤門前の神苑でテントを張り、最前列のほとんどすべてを押さえてしまったのである。そしてその状態で、出走時の各参加者の位置決めも彼らのグループは自主的に行い、1 月 10 日の午前 6 時の開門時に他の有力な参加者をブロックし、1 名の人物のみを出走させるという作戦に出たのである。

当時すでに東京のキー局まで放映する程話題となっており、この映像が全国で流れることとなった。そのニュースや映像を見た視聴者が騒ぎだし、「2 ちゃんねる」に代表されるインターネットの掲示板に多くの人が書き散らす「お祭り」状態となってしまったのである。さらに神社や福男が勤務する消防局にも直接の苦情電話が来るなど批判が相次いだた

め、この「一番福」は、前代未聞の福男返上を行うに至ったのである。そこで浮き彫りになったことは、西宮神社側の開門神事そのものに対する対策の不足であった。この辺りの事象に関しては、歴史的な変遷として、1 章以降で詳しく述べるが、結果としては、この神事の実質的な運用を、調査者であった私が、他の熱心な参加者とともに任される契機となったのである。

そのため 2004 年のこの騒動後から現在までは、調査者でありながら、この神事の運営を担う一人として積極的にフィールドで動くこととなってしまった。本論においても、どのような現代的な変遷がそこであったのかという、当事者としての民俗誌を導入している。加えて、この神事で活躍した当時の「ヒーロー＝福男」のインタビューを行った。なぜならその当時の福男は、その時代の開門神事を象徴していると考えられるからである。具体的には、①開門行事創生期の「一番福」（大正・昭和初期）、②太平洋戦争中の「一番福」（1945 年）、③戦後の神社復興後の一番福（1960 年代）、④高度経済成長後の「一番福」（1970 年代後半～80 年代）、⑤陸上競技時代の「一番福」（1990 年代後期）、⑥門を開けることになった「福男」（1990 年～現在）の 6 名である。彼らの語りから、当時の開門神事の実態を明らかにするとともに、この神事が各時代に有していたメッセージと機能について考察する。特に⑥の人物は、現在、この神事の運営を担う中心人物でもあり、2004 年からの民族誌は彼を取り巻く物語でもある。

このように、方法としては、参与観察、文献資料調査、面接法、質問紙法などを用い、この神事の成り立ちから、現在までこの神事がたどってきた変遷、将来的な課題などについて、総合的な理解を進めてきた。開門神事講社が立ち上がってからは、もっぱら現場の運営側として動くことも多くなった。このことについては、調査者自身が地域の活性化に、民俗学的・人類学的知見を持ったうえで積極的に関わる、一事例になるのではないかと考えている。社会が求める新たな祝祭の形態について考えるとともに、その具現化の実践に向けて、神事の関係者とともにどのようなことを行い、どのようなことをこれから行っていくのか。本研究では、実践的研究者がこれまで被調査者およびフィールドと共に生きてきた証明を示しつつ、これからの将来における実践的研究の一事例として世に提示していきたい。

2.本論の構成

本論の構成としては、次のようなものを考えている。第 1 章においては、十日戎自体の歴史的変遷についてみていきたい。具体的にはまず、中世以降、どのようにして十日戎が成立したのかについてである。先述の柳田國男の論であるならば、物忌を行い神人共食をするような祭りだったものが、いかにして現在の十日戎の祭礼の形式へと変化したのかについて、文献資料や先行研究などから明らかにしていく。

第 1 章の 2 節では、明治維新以降の十日戎について、近代化の流れの中で、検討をしていきたい。特に鉄道および参詣電車としての性格を持ち合わせていた阪神電鉄が、この西

宮神社の祭礼にどのような影響を与えたのか、に注視したい。3 節では、この電鉄開業後、新暦の十日戎が新たに行われるようになり、2 つの祭事の中で、どのようなことが起きていたのか、当時の資料から明らかにしたい。

第 2 章では、「開門行事」の創出について、主に見ていきたい。大正から昭和に至る中で、どのような動きがあり、どのようにして開門神事が生み出されたのかを、社務日誌および当時の新聞から明らかにする。また、どのような人々がこの行事に関わり、行事を盛り上げていたのか。当時の社会情勢と関連させる形で探っていきたい。

第 3 章では、西宮空襲によって西宮神社は罹災したのだが、社殿が復旧し、塀が完成するまでには相当の時間がかかった。当然開門行事の復興までには時間を要すことに繋がったが、この中で行事自体が変容したのか否かを見ていく。同時に、高度経済成長によって十日戎、そして開門行事はどのように変容したのか。その後の変遷は、「昭和から平成へ」「阪神大震災」などの視点から概観していきたい。時代でいうと、平成以降は参加者も増加していく時代である。どのようなファクターが参加者の増加に影響を与えたのかについても考察も行う。

第 4 章からは、実際に本研究者が、フィールドに参与観察者として入ってからの民族誌・民俗誌である。1998 年から、現場ではどのようなことが起きていたのか。通算で 8 回、本調査者は開門神事の走り参りに参加した。神事の詳細なルポを記し、この神事に多くの人が集まる要因を考察したい。そして、2004 年の 1 月 10 日、この開門神事にとって最大の事件が起きた。この事件を検証するとともに、その後、この事件を教訓にどのような組織が生み出されたかについて、どういった働きかけがあったのかについて述べたい。5 節からは、1920 年代から現代に至るまでの 6 名の福男に焦点を当てる。各時代の福男は、その時代時代の開門神事を良く知るだけでなく、その時代の開門神事の性格を良く表しているからである。彼らの語りから、各時代の門開けがどのようなものであったかを探る。

第 5 章では、2005 年から現在までの動きについて述べる。参加者が、主催側の立場に加わると同時に、本調査者も主催者の一員となった。正式に講社化していく際の動きの詳細を追うとともに、福男の模倣イベントが各地で起きている現状についての報告を行う。

第 6 章では、2001 年から行っている質問紙の結果を提示する。具体的には、各年度の参加者の属性や参加動機、感想、ならびに複数回参加した参加者には複数回参加の動機について、クロス検定も行ったうえで、参加者の全体像の把握に努めたい。

結章では、これまでの歴史的変遷と祭礼の変化について、まとめの論述を行う。2 節においては、人々はこの神事に何を求めているのか、なぜ人々が集うのかについて、考察を行う。神事を通して、現代の都市民俗の在り方について考察を行いたい。

以降 3 節として本研究における成果と意義について述べた上で、第 4 節にてこれからの本研究者の動向、調査の展望、および課題についての論述を行いたい。この研究は、実践的な研究となっていく。そのため、どのようにこのフィールドに関わり続けていくのかについて、最後に提起したい。

第 1 章　十日戎の歴史的変遷

1 節　西宮神社の中世における展開

十日戎開門神事が行われるのは、毎年 1 月 10 日の午前 6 時である。関西地方を中心として、現在では 1 月 9 日から 11 までを十日戎として祝われている。9 日を「宵戎」、10 日を「本戎」、そして 11 日を「残り福」としており、兵庫県西宮市の西宮神社をはじめ、神戸市の柳原蛭子神社、大阪市の今宮戎神社、堀川戎神社、京都ゑびす神社①などに参詣客が多く訪れる。この十日戎が西宮ではどのようにして発生したのかについて、まずみていきたい。

吉井良隆によると、十日戎は、

> 松の内の明けた 1 月 9 日から 11 日までの 3 日間、主として関西地方以西のえびす社に於て執行せられる。とりわけ社頭の賑わいは、東京の「お酉さん（酉の市）」を凌ぐといわれ、官祭とは違った意味で古くから民間信仰と深く繋がる形態をもって神賑し、斎庭に神人合一の世界を展開せしめているのである。[吉井良隆 1990：40]

としている。

柳田國男によると、日本の祭礼が多いのは収穫祭の秋(旧暦 10 月)であり、その次に春の末から夏のかかり（旧暦 4 月）であるとしている[柳田 1942：168]。祈年祭を入れて考えても、十日戎の置かれている「1 月 9 日から 11 日」というのは年明けという盛大な行事の直後の祭りということで、時期としては異例な祭りである。

なぜこの日となったのかについて、文献史料から考察してみる。西宮神社編『西宮神社』には京都粟田口、玄永の経文奥書（建久 5 年、1194 年）を取り上げている。当時 5 月 9 日から 11 日までを「西宮参詣日」としていた[西宮神社 2003：106]ようであり、9 日から 11 日までが、現在でいうところの「縁日」であったことが窺い知れる。

この縁日にどのようなことを行っていたのか、次に挙げる摂津国住吉大社の『住吉太神宮諸神事次第』（鎌倉時代）の中に、正月十日の項がある。そこには

> 廣田御狩。先九日夜。於江比須社御前。酒肴。巫女舞。（中略）十日酉剋。御狩神事。（中略）次江比須御供備進。（中略）次於浜南北山御狩。（中略）浜御狩畢。[吉井良隆 1990：52]

とある。もともとは西宮神社（の一部である南宮社）やその北方に位置していた廣田神社で行われていた御狩神事が、同じく神功皇后との関係が深い住吉大社（太神宮）に残ったと考えられている。この御狩神事であるが、具体的にはどのようなものであったのだろうか。鎌倉後期から室町期に書かれたと推測される『住吉松葉大記』の中の「住吉社頭年中祭礼神事之次第」[吉井良隆 1990：58]には、

> 恵比須社　西峰見林云……正月十日于当社行廣田御狩神事、巫女為男形持出弓箭狩場之躰也、九日夜結鎮十番有之、観行此神事則廣田五社内別祭浜南宮之子細有之、於西宮者称諏訪明神号浜南宮……

とある。内容としては、正月十日に恵比須社で廣田御狩神事が行われ、その神事には巫女が男装して弓箭を持ち、すっかり狩り場におもむく服装をして奉仕したもので、これは神が顕現して狩を行ったことを表しているのであり、あくまでも狩猟行事としての神事の一端を示していると思われる。また、なぜ狩りの格好をしての神事であるのかについての説明であるが。同じ史料の中で、

毎年正月九日、信濃諏訪村民閉門戸止出入、号諏訪社御狩、望山林致狩猟、護猪鹿一則止殺生奉手向西宮南宮、礼奠于今断絶、……以上西峰言也　[吉井良隆 1990：60]

とある。西宮神社の中にある浜南宮社の中の一祭神が諏訪明神であり、そのため「狩」を行うのだとされている。

しかし、平地部である西宮で狩りが頻繁に行われていたとは考えにくく、時期も狩りが行われる頃としては不適当であることから、吉井良隆は「御狩」ではなく、柳田國男の述べる「ミカハリ」ではないかと考えている。

柳田國男は「日本の祭」[柳田 1942]の、「物忌と精進」という項で、各地の物忌について言及している。その中で、千葉県の事例を以下のように取り上げている。

千葉県の南部、上総の南の二郡から房州にかけて、舊十一月の下旬から長い処では十日又は一週間、神職の家は勿論だが、土地の普通の住民も固い家だけは、今でも同じような物忌をする。安房神社の信徒の間に最も強力に行はれて居るので、ここが中心のやうにも考えられるが、他の村々の御社にも、同じ季節に同じような慣行を守るものは多い。やはり（他の物忌の事例と同様）音を立てず、笑つたり高話したりせず、髪を結はず、機を織らず又針を執らず、外へ出て働かず外の人を入れず、以前は殊に武士の訪問を嫌つたといふ。しかし此地方ではイゴモリといふ名は無くて、一般にミカリまたはミカハリと呼んで居る。神様が此間に山に入つて猟をなさるので、お邪魔をしてはならぬからなとも謂ふが、それは恐らく名前から考えだした後の説で、本来は「身變り」即ち常の俗界の肉身を改めて、清い祭りの人になる準備期間の意であらう。[柳田 1942：222、カッコ内は荒川が加筆]

と記しており、その他の地方では「イゴモリ」と呼ぶものの、この地方では「ミカリ」「ミカハ（ワ）リ」と呼んでいるものであるとしている。神様がこの間に山に入って狩りをするので邪魔をしてはならないという説もあるようだが、この点について柳田は本来「身変わり」すなわち、常の俗界の肉身を改めて、清い祭りの人になる準備期間の意味であると述べている。さらに柳田は、その次の章で当調査対象の西宮神社の十日戎に関して、以下のような言及も行っている。

摂津の西宮の正月九日の忌籠りも、一に又ミカリと謂つたことが、西宮夷神研究に見えて居るが、是はどうやら神職の家だけの物忌になつて居るらしい。[柳田 1942：223]

柳田の祭りの言説として、「「籠る」ということが祭りの本体[柳田 1942：219]」であり、それは全国的に行われていたものであったとしている。各地によって呼称はさまざまであったが、その用語の中の一つとして「ミカリ」を使った地域があること、そして氏子中が

物忌を行っていた地域が、年代を経るに従って神職や祭りの頭屋のみが行う所が多くなっていることを主張している。付随する形で福神学研究を行った大江時雄が作成した、1998年発行の「えびす新聞」を挙げたい。この中では1899（明治32）年2月19日発行の毎日新聞の記事の解説をしている。以下に挙げる。（原文を大江が現代語訳）

> 摂津国武庫郡西宮町に鎮座せる西宮神社祭神は世に恵比須大神と称し、福徳を授けたもう神として古今、衆庶の尊敬厚く、全国いたるところ祭祀して神徳を仰がざるはなし。本日、大祭に相当するに因みてその由来をたずねて読者の一粲に供す。十日戎祭は、古く居籠もり祭りといっていたこともある。それは、毎年1月10日大祭の前夜、居籠もりといって氏子の人ら皆、年始に祝って立てた門松を逆さに釣り、門戸を閉じ、菰または莚を垂れて、終夜、外に出ず、声や響きを留めて忌籠もり、翌日未明、各々の戸を開き、争って社参する。世にこれを十日戎と称する。同社本記に「伝に曰く。邪神、この浦に住みて、年ごとの睦月 9 日というには生ける人を生け贄とす。然るより、この日にあたりて、所の人々泣き悲しむこと限り無し。蛭子神、この浦にとどまりたまいて、すなわち、教えて曰く。われ、この邪神を避くべし。然せんにはこの日に当たりて、往来の人々を留め、門を閉め、戸を閉じて人々ひそまりおるべし。また、松を伐りて、その門々に逆さに掛ければ、必ず、悪神、恐れて来たるまじ、と。諸人その教えの如くするに、災害を免れたるより、今において、その事、違えず、西宮居籠祭といい伝うるなり」。とあって、今もなお9日に門松を逆さに立てる家有り、古くには『重篇応仁記』（室町期）等から散見される。[大江 1994：2]

ここではほとんどの字が、「忌籠」ではなく、「居籠」となっており、逆さ門松などの西宮独自のものも見受けられるが、神事の形態を見てみると、日本で数多くの地域でみられる「物忌」の一種であることが分かる。「御狩」でなく「イゴモリ」とすると、物忌の行われる季節と合致する。柳田の物忌に関する主張をまとめると、

> ①この精進を守る「物忌」は西国では夏越の時期に行うことが多く、京畿や東国では冬春の境にやることが多いという。
>
> ②期間は古来、月の４分の１くらいをあてて行うことも多かったと述べているが、時代が経るに連れ近現代に近づくと仕事の関係上籠る期間が2、3日のみとなった地域もあるとしている[柳田 1942：220]。

吉井良隆もこの柳田の「ミカハリ」論を踏まえて、

> 厳重な忌籠りによって常人の状態と異なった神に近づく清浄な身体に身かわりをして、翌十日戎に参詣するに適した神人和合の境地をつくり出す精神的諸準備を行う神道的行事なのであって、これを身かわり（ミカワリ）即ちミカリの根本的意義であったと思う。[吉井良隆 1990：61]

と結論付けている。

この論に関しては、「ミカリ」の語が、西宮以外では関西地方の祭りで使われることはあまりないことや、廣田神社で行われていた御狩神事が、西宮地域で行われていた「モノイ

ミ」に載せる形で普及したなどの指摘もある。

私としては以下のような過程があったのではと推測したい。古来には、旧暦の正月、つまり農耕歴での冬から春の中間に行われていた西宮地方の人びとの習慣である「モノイミ」があった。そこに西宮南部の浜で信仰が始まった「蛭児」神の信仰が交じり合うことで、西宮独自の忌籠神事へと発展した。さらに、西宮北部の廣田神社の信仰や、一祭神でもあった諏訪明神の「御狩」の字が付けられると同時に、狩りの姿での巡行が行われていった。その後、鎌倉・室町期の傀儡子らによる宣伝もあり、漁業神の色合いが強かった「蛭児」神が農業・商業までも包括する「福神・戎神」としてその性格を変化させていく中で、多くの庶民の信仰を集め、関西地方の一行事として定着していったのではないか。

吉井良隆は「福神、商売神として多くの尊崇を集め民衆の生活に融合していったのが江戸時代であった」とし、「正月の年中行事も終わった直後、ここに改めて一年の招福を祈願することが最も適した日取り」だったと述べている。一大商業圏として発展していった時期に、イエの年中行事ともいえる正月行事の後で、仕事始めを行う上での同業集団の触れ合いの場（えびす講社）、つまり社会的イベントとして利用されたということも考えられる。

特にこの賑わいが顕著だったのは、大阪の南郊に西宮神社の戎神を勧請して成立した今宮神社である。商都大坂を控えた地理的環境によって、本社である西宮神社をも凌ぐ殷賑さを示した。『摂陽群談』の今宮村蛭児社の条には、

> 毎歳正月十日に貴賤群ヲ成シ商家ノ輩福徳ヲ祈リ世俗十日恵比須ト号祭ルノ処ナリ [吉井良隆 1990：64]

と記されており、当時の隆盛がしのばれる。西宮神社でも、神事本来の意味が変質していることが分かる。例えば 1817（文化 14）年の西宮神社の社務日誌では

> 一月九日忌籠、産子中、門戸背戸に筵をたれ、松をさかさまにつり候、古来より仕来りに候、古例の通相慎みこの夜社中諸灯明無之候、暮六つ限りに往来参詣等相止め門戸背戸閉ざし、時の太鼓、鐘等も六つより六つ迄（午後六時から午前六時まで）相止め厳しく相慎み候事云々

と書かれており、人びとや神職が「忌籠」をしている様子が表れている。

しかし、1796（寛政 8）年の『摂津名所図会』中では、また違った説明がなされている。以下に挙げる。

> 毎歳正月十日は居籠祭りとて九日の夜には此御神廣田社へ臨幸まします、神像の悪きにより人目をはづかはしくおもひ給ふ諺ありて、市中の民家ことごとく門戸をかたく閉莚簾など垂て門松を逆に立たり、門には遠近の親きやから知己の者多く来りて酒のみ（中略）、一夜禁足して物静に神祭をつとむ、早鶏鳴の頃より近隣の参詣あれば、社頭も賑しくなりて市中も門戸を開きみなみな本社へ詣す、社辺にはいろいろの物売市をなし放下師観物物芝居などありて群集する事稲麻の如し、これを十日蛭子という。[吉井良隆 1990：67]

なぜ、前日の晩に家の戸を閉めて「精進」しなければならないのかという点については、

神像の姿が醜いためなどと記されている。大江が挙げた、明治期の説明である「西宮の浦に邪神が来て、悪さをするので家内で謹慎するように蛭子神が説いたと」いうものでもない。神を迎えるために籠り、精進潔斎をする習俗は、全国的に存在している。西宮では、室町期、江戸期あたりで、その「古来の仕来り」であった習俗に様々な物語を込めることが、行われたと言えよう。同時にこの過程の中で、西宮独自の型として注目すべきことは、『摂津名所図会』の中にあるように神祭をつとめた後、「みなみな本社へ詣でた」ことであろう。謹慎状態が一斉に解き放たれて、祭りへと移行していく。戎（蛭児）神が庶民にとって親しみやすい神であり、多くの人が西宮神社に集うこととなった。その開放的なハレの気分を氏子中で共有し、新しい暦が始まることを社会の中で相互が確認し合う型が醸成された。その開放感を生み出すものとして、「忌籠」が大きな意味を持ったと言えるのではないか。

2 節　旧暦・新暦併記によって行われた十日戎

明治維新は西宮にも大きな変革をもたらした。例えば国家神道成立の過程では、近隣の廣田社は神功皇后との由緒から官幣大社となり、西宮神社は県社へと位置づけられた。さらには、1873（明治 6）年の太陽暦の採用である。公共機関などは採用と同時に変化していったが、神事・祭事に関しては旧暦で行う地方がほとんどであった。しかし都市部では、そこで生活する人びとの生活歴が新暦に変化したこともあり、祭礼も新暦で行うことが多くなった。

平山昇は、具体的には官庁などでの使用暦は、1873（明治 6）年の改暦の際に改められることとなったが、実際は農事暦でもある旧暦は社会の中で残ることとなり、公文書などでも併記されることとなっていた。その併記がなくなったのが、1910（明治 43）年の旧暦併記の廃止（もう一つの旧暦廃止）であると指摘する。[平山 2010：168]具体的な新聞資料から考察してみたい。

1883（明治 16）年の 1 月 10 日（新暦）の大阪朝日新聞においては、

> 昨日今日は例の十日戎にて難波警察署にて例の如く巡査甲乙両部共惣出戎橋南詰より人力車の通行を止め今宮迄の道路参詣下向の両道と立て五、六間おきに巡査を一名ずつ立番厚く往来人を保護

とある。改暦後 10 年で、大阪では新暦の祭事が根付いていることが分かる。1891（明治 24）年の 1 月 10 日の大阪朝日新聞では、

> 昨日は宵戎今日は十日戎に付日和さえ宜ければ例年の通り雑踏を極る事必定につき

とあり、臨時の警官の出張所を南新地の歌舞練場に設けたり、阪堺電車の駅近くに設けたりと非常な賑わいを持っていたことが窺い知れる。

1893（明治 26）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞の記事でも同様のことが書かれており、スリに気をつけるよう巡査や特務巡査まで動員している様子や、同じく戎神も祀る京都の建仁寺町の蛭子神社のことも取り上げて、

京都建仁寺町の蛭子神社は当地（大阪）今宮ほどには繁盛せずほい駕籠などの事もないけれど一昨日昨日は参詣人群集して相応に賑わひ其影響にて同社の裏通りなる宮川町は大繁盛

とある。大阪のみならず、京都の新暦での十日戎の報道がなされる中、西宮ではどうだったのか。大阪朝日新聞、および大阪朝日新聞神戸附録などの新聞資料からは、残念ながら明治 10 年代の中では記事を見つけられなかった。

しかし、1893（明治 26）年の 2 月 26 日の大阪朝日新聞の中には、以下のような記事があった。

本日は旧暦の正月十日なれば西の宮の戎神社へ参詣するもの多きにつき本日梅田神戸間臨汽車を出すことに為し（中略）又昨日より府下の宝恵立商人、のぞき、からくり、其他の見世物、古手商人等は続々店出に出張したり随分賑わふことならん

つまり、新暦での十日戎は都市部である大阪、京都、神戸（柳原）の神社で行われ、旧暦の十日戎は西宮神社で行われるという棲み分けがなされていたことが確認された。

ところが、この「新暦十日戎は大阪、京都そして神戸、旧暦の十日戎は西宮」との原則は、1905（明治 38）年 4 月の阪神電車の開通によって変化してしまう。特に阪神電車の敷設方針としては、旧来から存在する阪神間の街ごとに電車（電気軌道）を通す方針であったため、中世以来阪神間でも有数の門前町であった西宮神社近辺には戎停車場（現、阪神西宮駅）が設置されることとなり、大阪および神戸の人びとの参詣を容易にしたのである。

そのことは、1908（明治 41）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞神戸附録の中で書かれている。

西宮の十日戎は阪神電車の開通後毎年新旧両度に祭典を行うこととなり旧暦十日戎ほどの人出はあらざるも昨日は天気好く風はなし阪神其の他近郷よりの参詣人多く宵戎に２倍３倍の人出にて電車も終日客を満載し西宮署は総出にて雑踏を取り締まり沿道の警察署にても各停留所に一名又は二名の巡査を派出して雑踏を制して居たるが午後三時頃迄は差したる事故もなかりし由しにて境内道筋は更なり市中は一般に賑わいたり

ここから、新暦の戎も賑わうようになったことが窺える。同年 2 月 12 日の大阪朝日新聞神戸附録では、

官鉄の新駅「えびす」は（阪神）電鉄に対する大人気なき競争の結果なるも兎に角今年の蛭子祭は之が為一層の利便を得て一段参詣客を多からしめ京阪神は云うに及ばず東は滋賀、岐阜、愛知、西は播丹各地及び岡山あたり尚大阪商船の臨時便による阿波、淡路よりの参詣客も少なからず中には九日より泊込みて午前一時の開門と共に我第一の福を授からんと押し掛くるもありて十日（九日の誤りか）の宵戎は近来稀有の雑踏を極め雪崩をついて門内へくづれ込む人並みのすさまじさ（中略）午前四時過ぎ式事全く終りて門を開けば篝火華かなる祠前は忽ち人に埋められて一時は身動きもならぬ有様　（カッコ内は荒川が加筆）

と旧暦の十日戎が活況を呈していることを記しており、それと同時に官鉄（現 JR）が阪神

と対抗すべく新駅を作って集客に乗り出すなど、その後の阪急電鉄（神戸線開通が 1921 年）も含めた阪神間での乗客獲得競争を暗示するものとなっている。

この記事で一番注目したいのは、「午前一時の開門とともに」の段である。多くの人が夜明け前から門前に並び、早朝から境内に溢れるほどの参詣客がいるという非日常性の中で、室町期より戎信仰の中心となっていった「福」をその当時から真っ先に駆け込んで得ようとしていたのである。そしてもう一つは、「門」の役割が加わってきたことである。「開門神事」とも大いに関連する表大門（赤門）は、安土桃山期から江戸初期に豊臣秀頼からの寄進と伝えられるものであり、江戸期の十日戎ではもちろん開閉門の役割を担ってきたわけだが、事務的に開門をすることが求められる社務日誌を除いて、これまでの新聞紙上ではあまり書かれている例がない。忌籠の後に市中の家々の各戸が開け放たれたとの記載がなされているものは多いが、この時期にようやく門が新聞紙上で注目をされ始めたということに留意したい。

3 節　電鉄会社による新たな参詣形態の成立

前節で示した 1908（明治 41）年の大阪朝日新聞神戸附録では、「西宮の十日戎は阪神電車の開通後毎年新旧両度の祭典を行う事となり」とあり、そして「旧暦十日戎ほどの人出はあらざるも昨日は天気好く風はなし阪神其の他近郷より参詣人多く」とあった。そして 1909（明治 42）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞神戸附録では、「西宮の十日戎は陰暦を主祭とする」とある。西宮神社の吉井良英禰宜に聞いたところ、現在でも新暦、旧暦とも神事として行っているが、新旧ともに一般参詣を行った十日戎としては、1945（昭和 20）年までであったとのことである。

ここから考えられる仮説としては、西宮の大阪・神戸における郊外化が進むにつれ新暦での年中行事が身についてしまった人たちが増え、参詣者数や祭事を行う人員の数、実質的な意味での主祭と副祭が逆転したのではないかということである。この前提で史料を見ていきたい。

新聞資料と神社側の史料を比較しながら、新暦と旧暦の十日戎に関する主祭・副祭の逆転がどこで行われたのかということも考えた。まず新聞紙上においては、1912（明治 45）年 1 月 9 日の大阪朝日新聞神戸附録では、

> 九、十、十一の三日間執行する西宮の十日戎は毎年新旧両度宛行ひ来りしを旧暦廃止後は一月十日を初祭、二月十日を本戎又二十日を二十日戎と称へて同じ祭典を三度も繰り返すことになりし為一般参詣者は何時でも福徳は授かると思うようになり

とある。先ほどの平山昇のいう、公文書における旧暦の併記がなくなったことから、新たに旧暦の十日戎を「本戎」、新暦の十日戎を「初祭」として行っていた過渡期とかも考えられる。当時の新暦 2 月 10 日は、旧暦の 1 月 9 日であるために、ここでの本戎とは旧暦の三箇日（9、10、11 日）を指していたと捉えられる。

その後 1925（大正 14）年 2 月 3 日の同じ大阪朝日新聞神戸附録の記事に、

（大正 14 年 2 月）二日は旧暦十日戎に相当するので西宮の戎さんは新暦の十日戎にお参りの出来なんだものや田舎の人達の参詣で一日の宵戎から相当に賑わった三日は節分でもあり残り福なので一層人出が多かろう

と出ている。しかし、記事の扱いも小さく、その他の年度でも新暦の記事の書かれ方、記事の大きさを比べても、相対的に見て、この大正年間に参詣者から見る新暦と旧暦の立場が逆転したことが窺える。「田舎の人達」のいう記載から、「新暦を祝う都市住民」と「旧暦を祝う農村部からの住民」という棲み分けがなされてきたとも推察できる②。

新聞紙上では旧暦の方の参詣者数が書かれていないので、一概に比較はできないが、この大正 14 年の新暦の十日戎は「小雨があったため」少なかったとはいえ、3 日あわせて 19 万人が参詣に来ている（「警察方面」の集計）。阪神電車は「今十日の本戎に全線の急行を廃し各停留場停車の二両連絡を運転する筈」とあり、当時としては画期的な対応をしていたことが分かる。天気や祭神の性格上、景気によって人出の多い少ないがあるのは、現在の十日戎でも同じである。そして「恵方」によっても、大阪方面から参詣客がやってくる年と神戸方面からやってくる年というような違いが起きていたことが、大正時代から昭和初期にかけての記事から散見される。

そして新聞紙上から、明治 40 年代から大正年間にかけて、阪神間での阪神電車、鉄道（国鉄）、および阪急による輸送手段が確立していったことが分かる。輸送手段の確立により、それまでの西宮を中心とする祭礼から、阪神間全体での祭礼へと変容していった。

明治 40 年の社務日誌によると、阪神電鉄（社務日誌には「電鉄会社」と記載）による特別な祭典が新暦の十日戎にて執行されていることや、明治 40 年が大阪からの恵方にあたっていた事もあって、戎停車場に 2 棟の待合所を新設したのを皮切りに、数十におよぶ参道への電灯の設置や美観を供えたガス灯 6 基の設置を行っていることが分かる③。

新旧の祭を比べるにあたって、大正年間を過ぎた 1927（昭和 2）年の社務日誌の中での新旧の十日戎の比較を行った。参拝者の実数は旧暦の側ではカウントしておらず、新暦の十日戎に関しては、阪神電車の西宮・西宮東口の乗降者数合わせて 3 日間で 95,435 人（西宮 82,787 人、西宮東口 12,668 人）ということが分かっている。そして神社の授与した御影などの数量を記載した部分があり、それをまとめたものが表 1 と表 2 である。

表 1・昭和 2 年新暦十日戎に関する、各品の授与状況　（単位：個）

品目	出高	残高	差引
御影	40,000	11,740	28,260
大黒	10,000	6,100	3,900
箱札	6,000	919	5,081
船玉	500	450	50
木札	1,000	105	895

表 2・昭和 2 年旧暦十日戎に関する、各品の授与状況　（単位：個）

品目	出高	残高	差引
御影	12,000	3,852	8,148
大黒	3,500	3,192	*318*
箱札	1,000	69	931
船玉	500	321	179
木札	90	20	70

開運	11,000	1,250	9,750	開運	1,000	66	934
大金	500	195	305	大金	45	24	21
小金	1,000	417	583	小金	100	24	76
一神掛	30	29	1	一神掛	20	14	6
両神掛	20	15	5	両神掛	20	16	4

出高は、実際に社務所内の授与所にて準備した数で、残高は残った数、実際に授与されたのが差引の項の所となる。旧暦の「大黒（大国主)」の札に関しては、計算ミスが散見されるが、例えば、どちらの祭礼でも一番授与されている御影（戎様の神像が描かれたもの）の数量に着目していくと、景気・恵方・休日（この年の旧暦の十日戎は 2 月 11 日で紀元節である）や天候などの要因があるために一概にはいえないが、新暦の十日戎が旧暦の約 4 倍の規模にまでなっていることが、ここから考えられる。

昭和 10 年代になると、社務日誌では阪神電鉄、阪神電鉄の国道線、そして阪急電鉄の乗降者数の詳細なデータが毎年記載されることになる。電鉄の参詣客獲得競争の激しさが浮き彫りになってくる。

表 3　新暦十日戎時の各電鉄の利用者数　（単位：人）

電鉄＼年	昭和 11 年	昭和 12 年	昭和 13 年	昭和 14 年
阪神	159,600	225,600	232,000	289,400
阪国	50,400	53,700	52,800	60,300
阪急	17,156	12,955	調査せず	記載なし

各セルの数値は、乗降者数の 3 日間の合計。阪神とは阪神電車本線のこと。乗降者数は西宮（通称は戎)、西宮東口駅の合計。阪国とは阪神電鉄国道線のこと。乗降者数は戎停留所と札場筋停留所の合計。阪急とは阪急電鉄のことで、当時この期間だけ西宮北口駅と夙川駅との間に「西宮戎臨時駅」を設けており、その乗降者数である。阪急電車の昭和 13、14 年度と国鉄の乗降者数が不明なのが悔やまれるが、圧倒的に阪神電鉄（国道線は阪神国道、現在の国道 2 号線を運行していた路面電車）がこの祭の参詣客を運んでいたことが分かる④。

ここで、『阪神間モダニズム：六甲山麓に花開いた文化、明治末期-昭和 15 年の軌跡』内で示された年表から、明治維新以降の西宮を中心とした阪神間での出来事を年表の中で追ってみたい。[「阪神間モダニズム」展実行委員会 1997：240-241]

1874 年　官営鉄道東海道線開通。西宮駅設置。

1895 年　英国人グルームが六甲山を開く。

1900 年　村上龍平が御影町に土地取得。財界人の転入が阪神間で始まる。

1905 年　阪神電鉄の営業開始。阿部元太郎が住吉で住宅開発。阪神芦屋駅を中心に、阪神間の財界人の邸宅の建設が始まる

1907 年　香野蔵治と枦山慶次郎によって香枦園が開園。鳴尾に関西競馬倶楽部開設。阪神電鉄は香枦園浜海水浴場と芦屋遊園地を開設。

1908 年　阪神電鉄が『市外居住のすすめ』発行。

1909 年　阪神電鉄が西宮駅付近に貸家 30 戸を建築、箕面有馬電気鉄道『如何なる土地を選ぶべきか、如何なる家屋を選ぶべきか』を発行。

1910 年　箕面有馬電気鉄道（のちの阪急電鉄）が池田室町にて住宅の月賦販売開始。阪神電鉄、鳴尾村に文化住宅建設。

1911 年　中村伊三郎が苦楽園に温泉リゾート建設。阪神電鉄、御影に分譲住宅建設。阪急電鉄、宝塚新温泉パラダイスの営業開始。財界人子弟向けの私立の教育施設の整備がはじまる。

1914 年　芦屋郵便局にて電話交換業務開始。阪神電鉄『郊外生活』発行。鳴尾ゴルフ倶楽部開設。

1917 年　大神中央土地株式会社が香枦園の土地を買収して高級住宅地化。

1918 年　甲陽土地会社が、甲陽園を開発。

1919 年　都市計画法、市街地建築物法の公布。宝塚音楽学校設立。

1920 年　阪急神戸線開通。

1921 年　阪急電鉄が岡本で住宅地開発。阪急西宝線（現今津線）開通。灘神戸生協設立。

1922 年　阪神電鉄が甲子園を開発。

1923 年　阪急電鉄が甲東園で住宅開発。

1924 年　阪急電鉄が仁川で住宅地開発。阪急甲陽園線開通。国鉄芦屋駅北側に芦屋文化村建設。

1925 年　甲子園海水浴場開設。

1926 年　宝塚ホテル開業、阪急今津南線開通。

1927 年　阪神国道の開通、阪神国道電車の開通。

1928 年　阪神電鉄が甲子園で住宅開発。

1929 年　株式会社六麓荘設立、関西学院が神戸より甲東園に移転。

1930 年　阪急電鉄が西宮北口で住宅地開発、梅田に阪急百貨店開業。甲子園ホテル開業。

1934 年　西宮今津健康住宅地の開発、神戸女学院岡田山に移転、甲南病院開設。

1937 年　阪急電鉄が武庫之荘を開発、西宮球場開設。

以上から分かるように、明治維新以前は酒造業が盛んであったけれども、一農村地帯として考えても差し支えなかった西宮が、交通機関の発達とともに大阪と神戸の住宅地そして文化の発信地として開発されてきたことがみてとれる。同時に昭和期に入ってから、日本の第二次産業革命を牽引する阪神工業地帯ができ、その中で西宮という町が市となり、

人口流入が激しくなっていった。電鉄が乱立した結果、利便性が増し、外部からの移入者がたくさん集まった訳であった。その中で自分たちの生活スタイルにあった祭礼として、新暦の十日戎が都市で生活するものにとっては、受け入れられやすかったのではないだろうか。

これらの史料や年表から導き出せることは、交通機関（特に阪神電鉄）の発達で、西宮の郊外化・都市化は達成されたということである。それにより、新暦にて生活する参詣者が多く集うこととなり、新暦の十日戎は旧暦の祭の規模を追い越し、主祭副祭の立場を逆転させていったという仮説が証明される。新暦の十日戎が、西宮の都市化に伴う「阪神間の創造」の中で新しく生まれた祭礼であると私は結論付けたい。

この様に、新暦の祭事が大きく、そして実質的な「主祭」となったことには、電鉄会社の経営努力の賜物とも考えられる。しかし一体なぜ、これだけ多くの人がこの祭に集うようになったのか。この辺りについては、考察のところで詳しく述べていきたい。次の項目では、1937（昭和 12）年から新聞紙上をにぎわせ、現在まで西宮神社の注目されるべきイベントとなった「新暦の」十日戎の「開門」がいかにして誕生したのかについて、新聞記事を提示ながら、その成り立ちを探ってみたい。

---

① 関西ではそれ以外にも多くのえびすを祭る神社がある。祭神としては、「蛭児大神」（現在の総本社は西宮神社）と「事代主命」（総本社は島根県美保神社）に大別される。明治になって祭神が変化する事例もあり、各神社の由緒は多様である。それだけ、庶民に近い祭神であったということも言えるだろう。だからこそ庶民参詣が隆盛したとも言える。

② 平山昇は、「明治・大阪期の西宮神社十日戎」［平山 2010］の中で、官鉄が開通以降、西宮神社の旧暦の十日戎に多くの参詣客を運んだ事実を社務日誌と新聞資料から明らかにしたが、明治 32 年の大阪毎日新聞記事の中では、都市部からの参詣客を「普通の参詣人」、農漁村部からの参詣客を「講中」と呼んで区別していることを指摘。普通の参詣人は行楽として（旧暦・新暦関係なく）参詣し、農漁村部は旧暦の日取りと恵方を重視して参詣しているとある。また、西宮神社はこの「普通の参詣人」の増加のために、広報活動にかなり力を入れていたことを資料から提示している。

③ 電灯の設置には電力会社でもあった、阪神電鉄の力は欠かせなかった。平山も指摘するが 1899（明治 42）年には、境内に設置した電灯も「「電鉄会社ヨリノ交渉ニ寄リ」（社務日誌より）、午後 11 時まで点灯とある［平山 2010：158］。電鉄側と他では類を見ない神社側の積極的な集客努力の賜物として、新暦の十日戎が軌道に乗り出して言った様子が分かる。

④ 岩澤光城は阪神電車（および阪神国道バス）と阪急電車との参詣客の取り合いが、宝塚（清荒神）・西宮で起こっていたことを述べている。例えば、門戸厄神大祭では、「阪神系の西宝バスが阪神西宮駅から宝塚南口まで走っていたが、厄神祭の日は門戸と西宮間をピストン運転して大阪からの連絡切符も発売して阪急に対抗した。阪急の門戸厄神駅から厄神さんまでおよそ七百メートルの参道は参詣客でごったがえすのであるが、このあたり一帯の電灯は阪神が供給していたので、夕闇が迫ると電気を切って暗くする。お客は足もとが暗くなって危険だというので、門前まで通っているバスを利用する」とし、そして十日戎では次のように書いている、「西宮の戎さんの祭日、特に正月十日の参詣客はたいへんな人出である。阪急は荒神さんや厄神さんのときのしっぺがえしを、この戌（戎の誤植）さんの祭日に展開した。西宮北口と夙川との中間に仮駅を設置し、そこから戌（戎）さんまでバスを通すことにした」とある。［岩澤 1980：125］

第 2 章　十日戎での開門行事の創出

1 節　新暦による「門開け」の発生

私が調べた新聞資料の中で、最も古い新暦の十日戎における「門を開けてさっと本殿まで駆け込む」という記載のある記事は、1913（大正 2）年 1 月 10 日の大阪朝日新聞神戸附録である。そこには、以下のような記述がある。

> 例年の如く昨夜八時より九時までの間には境内の参詣人は勿論、出店の者までも残らず追出して深夜の神事を行ひ今暁五時を期して例の「門開け」を為すのであるがこの門明（ママ）に先登第一の魁けをして神殿へ駆けつけ誰よりも先に鈴の紐に執りついたものは偉大の福運を授かるといふので暁寒を冒して門前へ押しよせるものが多い、併し雨が降つてはどうであらうか

とある。「例の」とあるところから、これより以前から常態化していたことが分かる。いつの頃からか定かではないものの、新暦でも十日戎の中で門を開けることが恒例行事となっており、一番初めに鈴の紐にたどり着いたものが「偉大な福運」を授かるという形になっている。1908（明治 41）年 2 月 12 日の大阪朝日新聞神戸附録の中には、「中には九日より泊込みて午前一時の開門と共に我第一の福を授からんと押し掛くるもあり」とあったが、それが見事に新暦の十日戎へと引き継がれている。それと同時に新聞紙上において神社の行う忌籠りの祭が、旧暦で行っていたものと同じものが行われ、その神事の間には参詣人や出店の者までが境内から門の外へ出ていることがうかがえる。

ただ、ここから江戸期の忌籠り祭のように、西宮神社の氏子中が忌籠りに入っているのではない。この頃には神社境内、つまり「門の中」でのみ忌籠りを行っており、午前 5 時の開門によって、その忌籠りの状態から解き放たれた境内を参加者が「福を求め」に駆けるというものに変化していることが分かる。

この記事の翌日 1 月 11 日の同じ大阪朝日新聞神戸附録の記事には 10 日午前 5 時の様子が次のように書かれている。

> さて昨暁に於ける「門開け」は例年の如くに午前五時を期して行はれ扉をサツと押明ける（ママ）と門前に松脂（てぐすね）引いて待かまへた信心の凝りはドツと一度に込み入つて源平時代に於ける先陣争いもかくやと想はれた。神殿にては先登者に対して夫々優遇を為し神符を与へたれば先登者は欣々然として下向した。これが中々の壮観である。引続き近郷近在をはじめ阪神両地より電車に乗って来る者引きもきらず阪神電車は恵美須、香枦園および東口の各停留所に前夜より電灯を設置したので夜を籠めて来る客も足元険なからず午前九時には街の街道傍に前日来場取りをしていた諸商人はここを先途と声を嗄らして客を呼んだ。

「源平の先陣争いもかくや」というのはいささか言い過ぎであろうが、熱気がこちらまで伝わってくる。この記事で注目すべきことは、一番にたどり着いた人物に神社が特別の神符を与えていることである。

このことから、大正初年のあたりまでには、新暦の十日戎が行われる中で一番乗りの参

詣者は特別な存在であるという認識が、参拝客はもとより、神職にまで広まっていたことが読み取れる。

その同じ年の 2 月 16 日の同新聞神戸附録をみると、旧暦の十日戎にも触れられている。

> 一五日は西宮戎神社の陰暦十日戎にて神社にては一月の十日戎祭りと同様神々しく社殿を飾り境内を掃き清めて参詣客を待構えたれば陰暦墨守の村落の参詣者早朝より続々出掛け午前十時過ぎよりは上り下りの阪神電車も満員となり、汽車よりする赤毛布（ケット）に鞄と風呂敷包とを打ち掛けにした遠来の参詣客も亦発着毎に道筋の雑踏を極めこれが為露店、出店等繁盛したり

とある。新暦の扱いに比べて小さく、実質 10 行ほどである。そしてつい 5 年ほど前まで旧暦の十日戎に記載のあった「我第一の福を授からんと押し掛くる」といった記述がない。赤毛布という表現に、地方からの参拝客という意味が込められている。

取り上げた新聞が、大阪朝日新聞という大阪の都市の民衆を読者と考えている新聞であり、神戸附録の方は在神戸読者向けの記事であるため、都市部での生活というものに紙面の大半が割かれるということは想像できる。そのため、新暦の十日戎では大阪朝日ならば以前は「今宮」、そして「堀川」（いずれも大阪市内の神社）でのことが大きく取り上げられ、神戸附録でもまず、「柳原蛭子神社」（現：神戸市兵庫区）の記事が出ている。それは、明治から大正に移ってもさほど変わりはないが、西宮についての記事の量は、この辺りを境に圧倒的に新暦の十日戎の方が多くなっていく。大正 2 年から時代が下るにつれその量は増大し、昭和期にはほぼ新暦の十日戎のみが報道されることとなる。

前章の「新たな参詣形態の成立」のところで、この変化については述べた。「阪神間」の創出によって西宮が都市化し、新暦の中で生活する住民の参詣が多くなった。祭り自体の規模も、旧暦で行われていた本来のものより新しい神事の方が大きくなり、「主祭」へと変化していったことの新聞紙上での証明になろう。

また、「門が開けられる」ことにも注目したい。前出の平山昇は、（阪神）電鉄による新しい参詣においては「参詣の側面と忌籠習俗の伝統との葛藤」が大きかったと指摘する[平山 2010：167-168]。それは、大正年間から昭和へと時期は前後するが、十日戎に関しては、阪神電鉄は終夜運転を行っており、大阪・神戸の都市部からのアクセスを容易にした。参詣客は増えたものの、「西宮神社の忌籠習俗の伝統に頓着しない者たちが 9 日夜間にも押し寄せる様になり、神社側はこの伝統を保持すべく電鉄側に協力を求めた」のである。この終日参詣客が境内にいる状態を作り出したもう一つの要因としては、発電も同時に行っていた電鉄会社によって、境内の電化が進んだことも挙げられるだろう。

事実、1918（大正 7）年には、忌籠を境内で行いたいとする神社が半ば強引に閉門をし、参詣客が境内に入られないという事案が発生することにも繋がった①。

12 時に「閉門をする」とする神社側の主張に対し、多くの参詣客を運びたい阪神電鉄側は、昭和 9（1934）年に新聞広告で「12 時まで開門」と言い換えをして「集客に努め」た。門の閉門と開門は、旧暦の十日戎でから引き継がれたということも言えるが、阪神電鉄の

開業によって、参詣客を境内に入れないために門を閉める必要性が生じ、また参詣を再開させるために門を開ける必要性がより明確化したのではないだろうか。

神社の動向として興味深いのは、旧暦から新暦へと十日戎を移した際に、同じように忌籠祭を「伝統」として移している点である。新聞では、明治 43 年以降の神社は新暦の十日戎を「初祭り」と称して正式にお祭りを行うことになったと書いている。しかし、その祭りを「初祭り」と呼んでいることから、神社からすると、あくまでこれは「創出された祭り」であろう。新聞紙上などで「主祭」と呼ばれた旧暦の十日戎でのみ行っても構わないわけであるが、ここに神社が電鉄会社との葛藤として現われることとなる「忌籠」の概念を同じように持ってきたことは、新暦であっても、忌籠あっての十日戎であると神社関係者は考えたのだろうか。

十日戎が西宮の地域の祭であった頃は、日が暮れると閉門し、そこから忌籠を地域全体で行い、神職は祭事を執り行っていた。そして夜明けと同時に開門され氏子は常時とは違う「ミカリ」の状態で参詣した。しかし、官鉄がひかれ、阪神電鉄が開通し、その後阪急電鉄が開通するようになると、地域全体の忌籠神事から、神社だけの忌籠へと急激な変化を遂げていったのである。

米山俊直は都市祭礼のチェックリストとして、「五つの要素、四つのニーズ、三つの社会関係、二つの時間区分、そして一つの目的」を挙げている [米山 1986：204]。西宮神社の十日戎においては、「2 つの時間区分」つまり日常と非日常（西宮でいうイゴモリ）を隔てる機能を持っていたものは、新聞紙上からも分かるように、旧暦においても門であった。

急激な社会変化の中、氏子地域が急激に産業都市として取り込まれていく過程で、自然と門の役割が時間の分節化という文脈により大きな役割を担うようになっていったのではないか。だからこそ、平山の挙げた閉門時間が「参詣の側面と忌籠習俗の伝統との葛藤」の象徴的な話題として、新聞紙上に挙がることとなったのであろう。

開門時間も 1908（明治 41）年 2 月 12 日の大阪朝日新聞神戸附録の旧暦十日戎の記事に

> 午前 4 時過ぎ式事全く終りて門を開けば篝火華かなる祠前は忽ち人に埋められて一時は身動きもならぬ有様。

とあるように、境内での神事を終えた段階で門を開くとしか書かれていない。それが新暦に「移入される」と、大正 3 年には午前 5 時に開門されてという様子が書かれ、大正 9 年には午前 6 時と定められるようになった。この時間が定められていく過程として、閉める時間の葛藤が繰り返されたため、開ける時間もそれに伴って推移することになったと考えられる。大正 10 年と 11 年に関しては、詳細な記録が残っている。ここでは、大阪朝日新聞に掲出された、開門に関する記載を表にしてみた。

年	新暦十日戎の開門に関する記事の内容
大正 10（1921）	夜の十時ごろに門が閉ざされる、午前五時に吉兆屋の入場が許され、六時に一番参拝の入場が許される。それまでにはすでに数千の参拝者が門前に押し掛けているのが恒例

大正 11 （1922）	欲の皮の厚い縁起家は午前三時頃から門前に詰め寄せ開門を報知する三番太鼓がドンと鳴つた午前六時には例年に劣らぬ二三百名が命懸けの雪崩を打つて馳込み・・

1921（大正 10）年の数千人が、いきなり「例年に劣らぬ二三百名」に激減しているところである 。1921 年の方が数十人の誤植かもしれない。もしくは、参拝者の総数は数千人であり、走り参りをしたのがその中の二三百人かもしれない。そのあたりは新聞の情報からのみでは断定できない。ともかく、この 2 つの記事の内容から言えることは、1920 年代までに時間は前後するとはいえ、閉門すること、そして午前 6 時になって開門することが定められたとともに、「恒例」「例年」という語で風物詩化し、開門と同時に、「馳込み」ながら一番参拝することが定着している様が分かる。

これらの新聞資料から言えるのは、近代化が新暦での十日戎を創出し、その中で、日常と非日常を隔てることのできる「門」という存在がクローズアップされ始めたということである。そしてまさに、分節化を感じ取ることのできる「開門」が、新暦の十日戎の中で重要な意味を持つことになることが改めて確認された。

もう一点挙げるとすれば、参詣に関する主目的ではなかったものの、参詣者たちが感じていた「門が開かれて参詣道を駆けて一番にたどり着いた者（鈴紐を取った者）に福がある」という考え方が、新暦の神事にも踏襲され、恒例の行事となっていったことである。西宮の氏子地域に住んでいなくとも参加できる参詣の形であり、なおかつ「福」の概念が分かりやすかったこともあり、参詣客に容易に受け入れられたのに加え、門から拝殿までの 200 メートル超という短すぎることも長すぎることもない距離が、この開門競争における参加者を増やしていったのではないだろうか。外的・社会的な要因とともに、この神社が元々内包していた特徴が、行事の隆盛を一層促したといえよう。

2 節　創り出された福男

現在でも使われている語句である「一番福」が初めて見受けられるのは、1914（大正 3）年の大阪朝日新聞神戸附録である。

> 十日の西宮は本戎に一番福を授からんと午前五時の開門を待って参詣者ドツと押し寄せ之に続いて午前八九時頃には境内一面人を以って集まった。

とある。開門時間は 1913（大正 2）年と同様、現在より 1 時間早い午前 5 時である。それが 3 年後の 1917（大正 6）年、同新聞の記事（1 月 11 日）では、

> 祭典は午前四時まだ暗い内に篝火を焚いて執行せられ夫れが終わった六時ごろに東西両門を開いた。

となる。午前 6 時ちょうどとなるのは、1920（大正 9）年の記事からである。遡って 1918（大正 7）年は、戦争成金が多く集う記事で埋められ、開門時間が書かれておらず、1919（大正 8）年でも見つけることができなかったが、1920（大正 9）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞にはこう書かれてあった。

今日は即ち本戎で未明から昔ながらの居籠祭と云ふのが行はれ六時開門と同時に一丁余も綱になって押しかけた参拝客が第一の福を授からんものと社前までのマラソン競争いつもの通り幸ひ怪我人のないのが不思議な様なり」

多くの人々が参加している様が窺えるだけでなく、「マラソン競争」との表現から参詣客集団の躍動感までもが伝わってくる。この年以降収集した新聞群では開門に関してはしばらく取り上げられておらず、15 年を経て、1935（昭和 10）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞阪神版に、以下のような記事が再び現れることとなった。以後、福男の実名はイニシャルに改変した上で提示する。

午前六時の開門には一番鈴の功名を争う人がぎっしりと詰めかけ開門とともに拝殿へ福争ひの競争

そして、1937（昭和 12）年 1 月 10 日の神戸新聞に初めて個人名が現れる。

けふの開門は朝の六時、門内に備へられた三本の鈴を真先に鳴らした参詣者のその一年の運勢は大々吉との云ひ慣はしから開門前から福運引當の競争者で黒山の人垣をつくることだらうが去年は社家町 K.H の長男 S 君がこの先陣を承り今年も第一番にならうとて手具脛（ママ）引いて意気込んでゐる。さて霧雨が晴れれば今日の人出は幾十萬に上ることぢやろ

同日の大阪朝日新聞阪神版には、

初物好きの阪神ッ児、一番福が転がり込むとあつては、未明から寒さくらゐ何んの、雨が降つてもものともしない意気も、さこそと思はれる次第、さてけふ誰が一番乗りの鈴にぶらさがるか？ここ数年間は西宮市久保町千足材木商店の T.T さんが、多年の修練と、健脚にものをいはせて、よく諸豪を抑へて一番乗りの覇権を維持してゐたが昨年は家事の都合で欠席、同市社家町 K.S.君に名をなさしめた、今年はこの両君もそろって出場するといふが、その他にも虎視眈々覇権を狙ふダーク・ホースも多いことゆゑ面白い場面が展開することであらう

ここで、史上初めてこの開門行事に一番乗りした個人名を出し、またその一番乗りの呼称として両新聞は、「第一番」や「一番鈴」「一番福」の語を与えている。

同年 1 月 11 日の大阪朝日新聞阪神版は、写真入りの記事であり、タイトルは「福を狙ふ凄い人並み」とある。

午前六時、大門が開くのを今やおそしと待ちかねた一番福を狙って大門外にワッショワッショと押し寄せた老若男女が三千人、太鼓の合図とともにドッとばかりになだれこみ、本殿の鈴をめがけて殺到、掃き清めた斎庭に、久保町千足材木店の T.T.さんが、とびこんでからは瞬く間に境内は参詣群でうまってしまった。（中略）今年の戎サンは一番乗りは誰だらう、一両日前から市民の興味はこの一点に集注されてゐたが、果然西宮市久保町千足材木店の T.T.さんだった。（中略）「勝つた！！一番だ、一番だ」と高らかに勝名乗りをあげる彼氏は二一歳の時に西宮へ来てから本年三七歳まで昨年を除いて十六回、覇権を獲得、めでたきレコードを樹立した　彼氏一番乗りの哲学は粛然

たるファインプレーに終始してゐる「欲からではない、達者でお参りできるだけで嬉しい、福は主人に持つて帰るのです、一番に参拝しないとどうも気分がわるくて(後略)

この T.T.氏については 1938（昭和 13 年）年 1 月 10 日の大阪朝日新聞阪神版の夕刊にも記載がある。

午前六時の開門と同時に数百の参詣人が例によって神前への一番乗りを争ったが二、三、四年続けてゐる西宮市久保町の千足材木店の T.T.さんと、氷上郡春日六村 O.S.さんの二人が同時にさっと神前の鈴の綱にとびついて結局二人が一番詣りと極つた。

明朝 1 月 11 日の朝刊には、

午前六時太鼓を合図に開門すれば、一番福を狙って門前に待機の善男善女三千人がどつとばかりなだれこみ、境内数ヶ所に燃えさかる篝火をたよりに本殿の鈴をめがけて殺到、いつもは閉ざされている唐門もサツと左右に開いて一番乗りを迎へ入れる、十六年間一番乗りの覇権を維持する西宮市久保町千足材木店の T.T.さんと丹波氷上郡春日部村の O.S.さんの２人が同時に掃き清めた斎庭にとびこんで目出度く凱歌をあげ

とある。

同じ年の社務日誌にも、「先登第一ハ例ノ千足材木店 T,T,」とはじめて一番乗りした個人名が出ている。現在の開門神事とは同列に比較できないが、昨今の一番福になることの難しさを考慮するならば、この十数回の一番福は凄い記録であると言わざるを得ない。この T.T.氏に関しては、「各時代における福男の語り」にて詳しく述べたい。

ここで、現在では「開門神事」と呼ばれているこの行事が当時何と呼ばれていたか、そして現在では「福男」もしくは「一番福」という呼称が一般的な「一番に拝殿にたどり着いた参詣者」を何と呼んでいたのか。

大阪朝日新聞・神戸新聞・大阪毎日新聞を 1 紙ずつ、いつ頃から用語が登場したのか、またどのような文脈でそれらの語が用いられているのかを確認したい。

新聞 阪神版
もの凄いダッシユ！
てけが目を鈴
一番乗り競走
けふ西宮夷神社の十日戎
朝六時に開門す
雨にめげぬ
特に反對せず

（図は 1937（昭和 12）年 1 月 10 日大阪朝日新聞より）

まず、表において大阪朝日新聞における呼称を見たい。

年	当時の「開門神事」・「福男」の呼称、具体的な記載内容
大正 2（1913）	門開け・（偉大な福運を授かる）先登者
大正 3（1914）	午前五時の開門・一番福
大正 4（1915）	（例年の通り）祭典の式・一番福

大正 6（1917）	本祭りの祭典を執行せり此時東門をサツと開くと
大正 9（1920）	昔ながらの居籠祭と云ふのが行はれ六時開門と同時に・参拝者が第一の福
大正 10（1921）	午前六時愈々宮門を左右に開かれて一般参拝、本戎の開門・鈴緒を逸早く手にしたものが其の年の第一の福徳者
大正 11（1922）	開門を報知する三番太鼓
昭和 10（1935）	午前六時の開門、福争ひの競争・一番鈴の功名
昭和 12（1937）	一番乗り競争・最初の福にありつかうと目ざす選手・一番乗り・一番福
昭和 13（1938）	唐門の一番乗・一番福（T.T.、O.S.）
昭和 14（1939）	一番乗り（T.K.）、二番乗り（T.E.）、第三位（T.T.）
昭和 15（1940）	争奪戦、一番福（T.K.）、一番乗り
昭和 17（1942）	一番福争い、一番詣り、門が一文字に開かれ、一番に中央鈴縄（Y.S.）
昭和 18（1943）	一番福（T.Y.）、二番福（U.H.）
昭和 19（1944）	午前六時開扉
昭和 20（1945）	恒例の拂暁一番参り（U.K.）

ここからまず分かるのは、現在使われている「開門神事」の語句がないことである。2015 年（平成 27 年）現在でもそうであるが、神社側からみた十日戎の本祭とは、午前 4 時に境内で神職のみで行われている「忌籠祭」を指す。もともとは氏子中すべてが忌籠であったものが、都市の発展と社会構造の変化によって、「門で閉ざされた」境内で行われるということが顕著になった。その中で門の役割が際立ってきたことはこれまで述べてきたが、この大阪朝日新聞 30 年分を見る限りにおいては、開門自体を神事であるとは述べていない。門を開いたことによって非日常の世界が境内で繰り広げられる様については書かれているが、門だけに限って見た場合、あくまで「門が開いた」事象のみを述べるにとどまっている。昭和 20 年の記述では、時局の影響からか「拂暁一番参り」とされている。現在福男と呼ばれる人物の呼称も大阪朝日では終戦まで「一番福」、「一番詣り」、「一番参り（昭和 20 年）」、「一番に中央鈴縄（をつかんだ者）」、「一番乗り」などの語句が使われており安定していない。

次に、神戸新聞ではどうだろうか。私が所蔵している資料の中では、神戸新聞に関しては、昭和 5 年の「福乞戎さんに人の渦巻き」との題で

宵戎に物凄い人出を見せた西宮戎神社では、
明けて十日、本戎の正門をさつと開けば我こ
そ今年の福を授からんと意気込んで

とある。以降の記述について見ていきたい。

（図は 1937（昭和 12）年 1 月 10 日神戸新聞より）

年	当時の「開門神事」・「福男」の呼称、具体的な記載内容
昭和 5（1930）	本戎の正門をさつと開けば・先を争って一番乗りの柏手
昭和 8（1933）	今年は午前四時開門、サツと流れ込む参詣人は我先きにと一番乗りを拝殿に争うのを魁に
昭和 12（1937）	「福運へ一番乗だ”三本の鈴”を覗ふ暁のラッシュ」門内に備へられた三本の鈴を真先に鳴らした参詣者のその一年の運勢は大々吉との云い慣はし、第一番にならうと
昭和 13（1938）	神前への一番乗り・一番詣で、結局二人（T、O 両氏）が一番参りと極った
昭和 14（1939）	恒例である一番福の争奪戦、縁起の一番福、拂暁六時の開門を前に一番乗りを待機する二百数十名の福貰ひ参詣人、神前の鈴縄タツクル戦、T.K.君が福神トライの喊聲をあげた
昭和 15（1940）	午前六時の赤門・正門の開かれるのを目指し参詣の先陣を争ふ賽客、一番詣りの競争、一番乗りの競争、福運掴み、一番乗り（T.K.君）、二番（K.Y.君）、三番（K.R.君）
昭和 16（1941）	早暁の午前六時のサイレンとゝもに開かれる門とゝもに恒例の一番福を目指して、一番詣り、一番福（H.S.君）、二番福（途中転んだ T.K.君）
昭和 17（1942）	一番詣りが争はれ
昭和 18（1943）	一番詣りの先陣争ひ、一番福（T.Y.君）、二番福をつかんだ（U.H.君）

この神戸新聞の記事から見えるのは、「二番福」という語を昭和 16 年ごろより使い出していることである。現在では一番福、二番福、三番福という名称を神社も使っているが、そのさきがけをこの新聞記事に見ることができる。大阪朝日新聞では、まず昭和 13 年に一度使ったのち、昭和 18 年くらいからよく現れるようになっている。大阪朝日でも「鈴」「鈴縄」に関する記載があったが、もう 1 つ大阪朝日で「唐門」（昭和 13 年）との記述もある。これは、当時の一番詣りの経路が現在のそれと違うことに由来する。

現在では門が開いたのち、参道を走り抜けて、拝殿の正面から本殿へと突き進み、そこで神職に抱きつく形を取っている 。ところが、この当時の経路は拝殿正面からではなく、特別に扉（唐門）が開かれた拝殿の東側から入っていた。そこで一番にたどり着いた者が鈴をつかんで、「戎様ただいま参りました」と参拝するのが一番詣りであった。鈴縄は合計で 3 本[②]であり、正面から見て真ん中の鈴紐にしがみついた者が、一番福とされた。実際にあったハプニングとして、初めて拝殿にたどり着いた参加者は、焦って一番初めに目に入った鈴紐を誤って抱えてしまい、一番になれなかったとのことである。この話は、阪神大震災で亡くなってしまった昭和 18 年の一番福 T.Y 氏のご遺族から聞いた。現在の経路に変更されるのは、テレビ放映が本格化する昭和 60 年代のことである。

大阪朝日新聞と共通することであるが、神戸新聞も昭和 12 年に突然取り上げられ方が大きくなっていることに注目したい。最後に、大阪毎日新聞の掲出は、次のとおりである。

年	当時の「開門神事」・「福男」の呼称、具体的な記載内容
昭和 7（1932）	早朝戎神社の開門を待つて一番詣りを目ざす参詣人は深夜から門前に詰めかけて先づ拂暁の神前をどつと賑はし
昭和 10（1935）	この（10 日）朝一番に拝殿の鈴紐を摑んだ参詣者は超特別の“福”がもらへるとあって折からの小雨にもめげず正門前に押しかけスクラム組んで待ちかまへてゐた求福の群は同六時發門と同時にサッと境内に流れ込み神鈴にタックルして福争ひを演じ早くも本戎の景気を煽つたが
昭和 12（1937）	同五時ごろ滞りなくこの尊厳な祭典（忌籠祭）を終了するが一方この朝第一番に本殿前の鈴紐を摑んだものには超特別の福が授かるとあつて午前二時ごろからぞくぞく正門前に押しかけ 太鼓の音を合図に西宮消防組員が内側からかんぬきを外すと朱塗りの正門からドッと境内になだれ込み本殿前に吊るされた三つの純白の鈴紐にモー然タックルして戎さんならではの景気よい福争ひ
昭和 14（1939）	吉例によつて一番福を授からうとする福男の争覇戦、福男・一着（T.K.君）、この一群には可憐なセーラー服の女學生も二、三人まじつてゐた
昭和 15（1940）	未明午前六時を期して國寳表大門が開かれたが一番乗りを目ざす二百余名が約五町ををへだてた拝殿前の鈴の緒めざして突進・開門を待つ名物”福男”（最近は婦人も加わる）、二千六百年の一番福の勇士（T.K.、昨年も一等）
昭和 16（1941）	一番福争奪レース・一番驅けの福男、福男（H.S.君）、第二位福男（T.K.君）、第三位の福男（U.S.君）
昭和 17（1942）	吉例の一番福争ひ、一番福争奪戦
昭和 18（1943）	一番福争ひ、吉例の一番福争奪戦、一番福（T.Y.君）、二番福（U.H.君）

福男は勇士の弟だ！
二年連勝の多司馬玖一君
西宮戎さん、えびす顔
切符賣上げ
皮肉！出札
大阪驛

3 紙に共通するのは、昭和 10 年代になると詳細な記述が多くなることであるが、大阪毎日新聞の開門神事の記事として特徴的なのは、「福男」の語を初めて出している点である。昭和 14 年から 16 年の 3 年間であるが、「福男」の語を「創り出し」た。例えば昭和 15 年の記事は以下のような記述である。

（左図は大阪毎日新聞阪神版　1640（昭和 15）年 1 月 11 日より）

（T.K.氏は）兄は福男の意気で戦線で活躍してゐる今年もお前の銃後の務の一つは福男を守ることだ、戦線で祈つてゐるからしつかりやれと聲援のたよりがありました

とある。他紙は終戦に至るまで、この語を出していない。

そのため、当時の参加者がその語を使っていたかどうかは不明な点が多いが、現在は開門神事自体のことを「福男（選びを敢えて除いて)」と呼ぶ地元氏子地域の人も多い。この記事以降、すぐにこの語が普及したとは考えにくいが、開門を待つ名物「福男」（昭和 15 年）と言う様に参詣客のことを指しているのか、あるいは現在の「開門神事」の語で語られるような、祭事自体を指しているのか判断しづらい使われ方もあり、直接の関係はないにせよ、後世に残る用語の創出がこの頃行われたと考えられる。

もう一つ、3 紙ともに戦争の拡大につれ、用語に「勇ましいもの」が付け加えられていることが分かる。「争奪戦」、「拂暁」、「勇士」、といったものが一番福、一番詣りという語に付随している。それと同時に「トライ」や「スクラム」、「タックル」、「レース」などの体育用語が多用されるようになっているところから、特に昭和 10 年代からは、スポーツ的なスピードの速さに大きな注目が集まっていたことがここからも読み取れる。いずれにせよ、個人名が現れ、地元の英雄として語られるようになった訳であり、走り参りの概念が新聞によって阪神間で普及され始めたと言えよう。

3 紙ともに共通する、昭和 12 年からの開門に関する報道の増加を、社会的な要因からも考えたい。まず考えられるのが、西宮市の産業都市化である。以下の表は、『西宮市勢要覧』をもとに出した、昭和 6（1931）年から昭和 13（1938）年までの西宮市の生産総額および人口の変化である 。

表：西宮市の生産総額の変遷（単位：円）

年度	農産	畜産	水産	工業	総額
昭和 6	44,634	32,720	199,210	13,317,430	13,513,994
昭和 7	49,588	35,537	180,152	16,714,567	16,979,844
昭和 8	300,068	495,904	227,567	41,869,634	42,893,173
昭和 9	309,422	740,775	212,814	47,870,887	49,133,898
昭和 10	323,652	1,025,039	291,711	57,900,754	59,541,156
昭和 11	349,361	1,005,892	450,889	67,143,496	68,952,867
昭和 12	310,448	1,277,771	71,441	72,778,251	74,449,573
昭和 13	323,128	1,761,443	70,224	73,371,344	75,531,084

表：西宮市の人口の変遷（単位：人）

年度	本籍人口	男性人口	女性人口	人口
昭和 6	24,282	21,527	22,023	43,550
昭和 7	25,078	22,100	22,627	44,727
昭和 8	40,955	40,185	41,432	81,517
昭和 9	32,256	40,917	42,616	83,533
昭和 10	32,584	44,008	46,673	90,681

昭和 11	43,838	45,814	48,595	94,409
昭和 12	45,341	47,635	50,534	98,169
昭和 13	47,655	49,374	52,385	101,759

2 つの表でまず人口増加、産業額の上昇が著しいのが昭和 7 年と 8 年の間ということになるだろう。これは昭和 8（1933）年 4 月 1 日に、隣接町村であった武庫郡今津町、大社村、芝村を合併したことによるものである。これらの地域は、合併前の西宮市と比べると農村地域であり、阪急電鉄による住宅地の開発も始まり、産業では農産分野の額が増えているのが分かる。沿岸地域に位置する今津地域などは工業地帯であったことから、工業生産額も飛躍的に伸びている。

その他に目を向けると、昭和 11（1936）年から昭和 12（1937）年にかけて水産業が激減している以外は、比較的コンスタントに上昇を続けていることが分かる。歴史的要因をこの時代に照らし合わせると、阪神電鉄や阪急電鉄による住宅地の開発や大阪梅田駅におけるターミナルマーケット（阪急百貨店など）の開設などがある 。昭和 9（1934）年から昭和 10（1935）年にかけては 7,000 人増加、昭和 13（1938）年には総人口が 10 万人を突破し、名実ともに阪神間の中心都市として成熟してきていた途上が、この昭和 12（1937）年と言うことができるだろう。工業の生産額を見ても、昭和 9（1934）年以降、着実に伸びてきていることが分かる。

同じ昭和 12（1937）年 1 月 10 日の神戸又新（ゆうしん）日報では、神戸の事例であるが、以下のような記述がある。

> この三月の卒業期を期してドツとばかりに浮世に押し流される若人の数は男、女、小、中学生を合して（神戸）市内で約一萬だが、就職地獄どこ吹く風と素晴らしい景気だ、中でも次の時代の工場第一線に立つべき幼年工候補である各高等小學校生は、まるで引つ張り凧の大人気電工業界川崎造船所を初め川西機械製作所、阪神鐵工所、神戸製鋼所では（1 月）十五日から二十日迄願書受付、また日本紡機、日本発動機、小泉製麻、山陽工作、川西航空と、何れも軍需景気を謳歌する軍工業界では二月上旬から三月上旬にかけて要請工の採用試験を開始し二千名近くを採用とあるがこれに反して卒業する高小生は僅かに千五百名で、目に見えた五百名の不足

とあり、この当時、阪神工業地帯は重化学工業を中心とする第二次産業革命の只中にあって、好景気であったことが読み取れる。そして、この好景気が軍需に支えられていたこと、つまり日本が次第に日中戦争（昭和 12(1938)年 7 月 7 日～）へと進んでいく過渡期であったことも忘れてはならない。面白いデータとしては、西宮市内の愛国婦人会の数の変遷がある。

表：西宮市内の愛国婦人会の会員数の変遷 （単位：人）

年度	有功章	特別会員	通常会員	賛助員	計
年度	4	73	535	2	614
昭和 6	16	133	854	4	1,007

昭和 7	20	133	854		1,007
昭和 8	40	182	1,604	8	1,834
昭和 9	61	382	1,451	11	1,905
昭和 10	61	382	1,451	11	1,905
昭和 11	183	533	4,136	4	4,856
昭和 12	193	503	3,885	4	4,586
昭和 13	222	738	4,637	4	5,061

昭和 7 年から 8 年にかけての合併による増加も大きいが、それよりも大きな増加は昭和 10 年から昭和 11 年にかけてである。爆発的な増加をしており、時局に社会がどう反応していたかを示している。先述した昭和 10 年から大阪朝日新聞などで開門に関する記事が出たこととの相関関係は直接ないだろうが、当時の風潮を読み取ることは可能であろう。

さらにこの軍需、軍国化に関して考えるならば、この 1 月 10 日が当時新兵の入営日に当たっていたこともある。十日戎の開門の記事の横には「西宮の壮丁晴れの入営」などといった語句が並ぶことが多い。電鉄・鉄道に関連していえば、初詣の後、十日戎と入営で輸送機関が大忙しといった論調が続いているのである。時局を反映し、入営日にも重なったこの行事を、開門そのものが生み出す非日常性から、門から拝殿にたどり着くスピードを重視したものへと、記者が読み手に合わせて焦点を変化させていった、そのことにより神事に関する参加者の意識も変化を始めていったということは考えられないだろうか。

写真左上：昭和 9 年までの拝殿
写真右上：新調された拝殿（1）
写真左下：新調された拝殿（2）開門行事では、この渡り廊下の下をくぐった先にある入口から鈴縄を掴みに行った。

昭和 9 年には、主催者である西宮神社にも大きな変化があった。それは拝殿の新調である。当時の好景気に支えられて、新調されたということもあるだろう。新

しくなった拝殿、戦時特需による好景気、そして戦争によってこれまでよりも「競争」という部分に焦点が置かれるようになってきたことが、この年の記事の大きさに反映したことが大いに考えられる。これらの記事に触発され、より多くの人が参詣に訪れるようになる。それまでの西宮の祭りから阪神間の祭りへと拡大していった転換点が、まさに 1937（昭和 12）年、そしてその後の福男の描かれ方につながっていったのではないだろうか。

3 節　移入者と青年団活動

新聞資料から見えることは、十数回一番福を繰り返した T.T.氏は青年団の活動を行っており、1939（昭和 14）年に二番福となった T.T.氏（その年の一番福の T.K.氏の実兄）は在郷軍西宮分会の役員であったことである。例えば、T.T.氏であれば、「颯爽たる青年団服を着て」とあり、青年団が十日戎で、競走以外にも様々な場面で、活躍していた。

十日戎
福男一番乗りも朗らかでした

1941（昭和 16）年の一番福であった H.S.氏に関しては、以下の様な記述が 1941（昭和 16）年 1 月 11 日の大阪毎日新聞阪神版にある。図は H.S.氏（大阪毎日新聞　1941（昭和 16）年 1 月 11 日より）

> 開門一瞬この群衆は怒涛のごとく約二百メートル距てた神前の鈴の緒をめがけて参道を爆走、中央鈴を最初に摑んだ幸運はつひに西宮市今在家町一六佐々木時計店員 H.S.君（二三）が獲得、（中略）福男 H 君は西宮市今在家町青年団のマラソンの選手、昨年 2 月から毎朝廣田神社までマラソンの練習をしてゐるといふ快足の主、同君は「朝の二時半に駆けつけました、前から三人目ぐらゐのところで待つてゐましたが、後から押されて身体が潰れるやうでした、扉があいてから鈴縄をつかむまで全く夢中でしたよ・・・」と語るのも福男らしくうれしさうだつた

同日の大阪朝日新聞阪神版にも、

> H.S.君は西宮市今在町一六に時計店を経営する元同市税務課長 S.S.氏方の店員で快活な青年、小学校の時から走るのが好きで常に学校の選手だつたが佐々木時計店へ来てからも忽ち町内青年団の選手になつた、一昨年 9 月市聯合青年団主催の神社訪問競争には見事二等を獲得、つひに聯合青年団代表として県下の大会にも出場した

とある。これらからも分かるように、産業都市化していく中で、担い手として他地域からやってきた人たちが「町内青年団」に所属することが起こった。もしくは、徴兵され帰還することで西宮市の在郷軍人となって新しい祭を盛り立てるメンバーとなったりする参加

者も出現したのだろう。産業化によって、それまでの氏子組織を形成する構成員でなかった人々もその中に取り込まれ、戦時中の十日戎に彩りを与えていたことは紛れもない事実である。（写真は1934（昭和 9）年、『廣西両宮社報附録』「西宮神社十日戎絵巻」より青年団テントの写真）

4 節　戦時下における十日戎

一番福 17 回の T.T.氏が、1938（昭和 13）年に丹波地方から来た O.S.氏との同時一番福と判定されてから、一番参りに関して信心という事項以外の「足の速さ」という側面が時局の変化に伴い、重要となってきたことは先述した。その後の報道では、足の速さに関する記事が多くなる。それと同時に戦争の影が付きまとう。そのことを 1939（昭和 14）年、1940（昭和 15）年の新聞資料と社務日誌の両面からたどり、どのような変遷をたどったのかを確認したい。

まず、1939（昭和 14）年 1 月 11 日の大阪朝日新聞阪神版の記事である。

> “今年は誰か”と街の興味を集めてゐた戎さんの一番乗りは過去十八年間のレコードホルダー西宮市久保町千足材木店の番頭 T.T.さん（三九歳）がつひに王座を譲って友僚の同市石在町七一田口商店員 T.K.（二五歳）に凱歌があがり、二番乗りは玖一君の実兄千足材木店員 E 君（二九歳）で T さんは惜しくも三位になった、T さんは数日前から不快で出場が気遣はれていたが颯爽たる青年団服を着て知人の前記 T 兄弟を介添役にして出場、午前一時頃から大門前にひしめきあふ人の群に加わって待つうち午前六時、内側から消防組二，三十人が太鼓の音を合図にサツと重い扉をあけると忽ちワーツと喚声をあげて決河の勢ひで突撃だ、スタートダツシユ物凄く韋駄天走りの十数名のうちさすがは T.T.さんだ、トツプを切って進んだが、二町あまりの境内を走るうちやや疲労の態、これを見た親友 T 君兄弟“覇権を他に渡してなるものか”とラスト・ヘビーをかけ、つひに最初の鈴を摑んで凱歌をあげ一番乗りの玖一君はご褒美の大鏡餅をいただいた。「T.T.さんが病気で身体が衰弱してゐるといふので手助けにでたまでですが T.T.さんが危なくなったのでやむを得ずみんなを出し抜いたわけです、決して T.T.さんのレコードを打ち破るつもりでは毛頭ありません」と交々語る T 兄弟はいづれも用海小学校時代ランニングの選手で鳴らした健脚家、一番乗りの弟 K 君は同市石在町田口樽丸商店に勤め、二番のりの兄 E 君は T さんと同じ千足材木店に勤める真面目な青年、E 君はすぐる上海事変に出動した工兵上等兵で現在在郷軍西宮中央分会の役員をしてゐる、病後の疲労から十九年目にをしくも覇権を逃した田中さんは「病気のあとで身体が弱ってゐたので一番乗りは難しいと思ってゐました、せつかく私が永年持ち

つゞけてきた一番乗りをせめては仲間のものに譲りたいと平素昵懇にしてゐる T 兄弟に出て貰ったわけで仲間のものが一番乗り出来てこんなに結構なことはありません」と満足げに語った

新聞記事としてはこの時に初めて、神社として、一参詣客であった人物を一番福として公に認定し、褒美を渡すようになったことが分かる。1937（昭和 12）年の記事に T.T.氏のコメントとして「福は主人に持つて帰る」あるので、具体的な副賞があったのかもしれないが、大鏡餅という形で記事に現れているのは、これが初出である。

そして、一年後の 15 年の 1 月 11 日の同新聞の記事である。

“今年の一番福は誰に”と話題になってゐた西宮の十日戎の一番参りはつひに昨年の覇者西宮市石在町七〇田口樽丸商店店員 T.K.君（二六歳）が連続覇権を握ったがその殊勲の裏に戦線から弟を励ます兄勇士の熱烈な真情と先輩の深い友情が秘められてゐる、（中略）E 氏は昨年八月名誉の召集を受けて中支戦線に出征、上等兵として活躍してゐるが戦線にあっても常に十日戎一番乗りのことを気にかけ先月十日占領した敵陣地の前で戦友達と一しよに撮影した写真に添へて“輝かしい興亜新春の一番乗りはきつとお前ががんばつてくれ”との手紙を航空便で送ってきた、しかもその激励の軍信を K 君はあたかも宵祭の九日手にして“兄が敵陣を占領したあの気持でかならずやらう”とかたく決意した、この軍国兄弟の気持ちに感激したのが十八年間連覇のレコードを持つ同市久保町千足材木店の番頭で E 上等兵と昵懇な友人 T.T.氏（四〇歳）で K 君の介添役として出場することになりこの朝四時ランニングシヤツに日の丸の鉢巻を締めた K 君は兄勇士の手紙と写真をしつかと内懐に秘めて六時の開門と同時に決勝の意気物凄くサツと飛び込んだ、最初のダツシユは数人が団子になって暁闇の中を走つたが南宮神社附近から早くも K 君はトツプを切つた後から“T 君頑張れ”と声援を続けるのは T 氏だ、つひに T 君は目出度く凱歌をあげた、本殿の鈴縄にすがりついた K 君は“兄さんやりましたよ”と思はず感激の叫びをあげ、吉井宮司から高々と一番名乗りを受け晴れのご褒美として御供米や、お箸と兄勇士のお守札をいただいた“今年はたいそう寒かつたが戦線の兄のことを思へばなんの寒いくらゐと一生懸命でした、早速お守りと一緒にこのことをいつて兄を安心させたいと思ひます”

ここから分かるように、福を掴む競争に軍国調が帯びてくるようになる。褒美[3]も「供米・箸」の他に「兄勇士のお守り」となっていった。

神社としてこのあと、戦時状況の悪化に伴う紙面の縮小とともに小さくなっていくものの、1945（昭和 20）年まで開門の記事はおおむね存在する。しかし、大阪朝日新聞において特に大きく報道されているのは、特にこの 1939（昭和 14）年、1940（昭和 15）年にかけてである。この背景には当時、川西航空機などの工場が存在し、西宮が阪神工業地帯の中心地として産業発展したことや、当時の日本が経済的に余裕のある時代だったこともあるだろう。そしてなにより、昭和 12 年 7 月から本格化した日中戦争は大きな影響を与えた。

これまでより膨大な量の紙面が、新聞の中で割かれている。それまでの十日戎が持って

いた「個人的な福を得る」という側面とともに、速さの部分が強調されるようになった。そして特筆すべき点は、戦時高揚としての意味合いが付加されていることであろう。以前の「一番福」とは異なった様相である。なぜこのような変容を遂げたのか、もしくは遂げることができたのかこの神事の持つ特徴も考察で述べてみたい。

最後に、昭和 20 年の一番福に関して言及したい。大阪朝日新聞阪神版では、昭和 20 年 1 月 11 日に出ている。開門神事が載っている同じ面には、「巨翼を切り裂く」と題し、B 29 に体当たり戦法で挑む日本軍機の紹介や、「空襲時、防火水槽に避難した人が水死しないために梯子を取り付けよ」などと言った提案などが載っており、まさに戦時色一辺倒である。十日戎の記事はタブロイド版であることもあり、最低限の情報を述べるにとどまっており、とても小さくなっている。以下の通りである。

> 十日戎　防空服装で戦勝祈願の決戦色氾濫　西宮神社の十日戎は早暁から戦勝を祈る参詣者がつめかけ、ぼゞ昨年に近い人出を見たがいづれも防空服装に身を固めて緊張、遠来のものは少く。また例年のごとく輸送陣を混乱させるやうなこともなかつた　境内には方面委員提唱の軍用機献納資金募集や西宮郵便局から出張した数班の弾丸切手賣場が時局色を濃くしともに非常な好成績ぶり、なほ恒例の拂暁一番参りは市内川西町の U.K.君が獲得した

この年の十日戎の後、西宮市は大空襲を受ける。その被害によって、西宮神社の拝殿、本殿共に南大門なども焼けてしまい、門を閉めきっての「忌籠」が出来ない状態であったため、ここから数年間は忌籠なしの十日戎が催行されることとなり、戦前の形へと復活するまでに、数年間を要することとなった。この昭和 20 年の一番福に関しては、1999 年にインタビューすることが出来た。第 4 章で挙げていきたい。次の章では、西宮の産業都市化、さらに時局によって隆盛することとなった新暦での開門の行事が、戦後どのように変化していったかのを見ていきたい。

---

①平山昇によると、「阪神電車の終夜運転こそ繰り返さなかったものの、九日のみならず十日夜までも深夜まで賑わう傾向が強まり、例えば翌八年の一〇日夜は「晩一二時ニ至ルモ尚陸続来参アリ。一時過門ヲ閉ス」」［平山 2010：166］とあり、「普通の参詣人」たちの夜を徹しての盛り上がりは覚めてはいなかったことが分かる。

② この「鈴紐三本」であるが、この鈴が 3 本だったから、一番福から三番福までとなったと考えられる。なぜ 3 本かというと、西宮神社の御祭神が「蛭児大神」（第一殿・東）「天照大御神・大国主大神」（第二殿・中）、「須佐之男大神」（第三殿・西）と 3 つの祠（三連春日造）に祀っており、それぞれへの鈴紐がつけられたためである。吉井良英禰宜によると、十日戎の時期は東にいる蛭児大神を中央に移し、参拝しやすいようにしているとのことである。だからこそ中央が「蛭児大神」の鈴縄となり、一番福となっていった訳である。

③ この「褒美」に関しては、「主人に福を持つて帰る」とした T.T,氏のような例外を除いて、当時の参加者は魅力に映ったようである。前述の昭和 18 年の T.Y.氏（のご遺族）や昭和 20 年の U.K.氏の中で「（一抱えもある）鏡餅」という語が、思っていたより小さく、もしくは外米が混入しており、落胆した話と共に出てきた。食糧難の時代だからこその福男の語りである。

第 3 章　戦後から現代に至る開門神事の変遷

1 節　終戦後の十日戎

1945 年 1 月 10 日に「防空服装で戦勝祈願の決戦色氾濫」した十日戎が催行された後、阪神工業地帯の中心都市でもあった西宮市は、米軍によって大きく分けて 5 回の空襲を受けた。第 1 回目は 1945 年 5 月 11 日、第 2 回目は同年 6 月 5 日、第 3 回目は 6 月 15 日、第 4 回は 7 月 24 日、そして第 5 回目は 8 月 5 日から翌 6 日にかけてである。B29 を主体とした爆撃機隊に対し、日本軍は海軍航空隊が伊丹の陸軍航空隊基地や鳴尾村の基地から迎撃を行っていたが、物量的に圧倒的優勢を誇るアメリカ軍に対しては、ほとんど戦果を挙げることができなかった。特に西宮神社は、終戦わずか 10 日前の第 5 回の空襲において、より甚大な被害を受けることとなった。『西宮市史第三巻』には、当時の空襲が次のように書かれている。

> まず 8 月 5 日午後 10 時ころ空襲警報が発令されたが、これはまもなく解除された。ところが午後 12 時前になってふたたび警戒警報がだされ、ついでに空襲警報が発令され数機編隊で波状攻撃が加えられ、文字どおり焼夷弾・爆弾の雨がふった。火柱は市中いたるところに立ちのぼり、猛烈な火炎が夜空をこがして、爆発音や対空砲火がとどろいた。警防団・隣組防空隊などの組織をとおして、市民は防火にめざましい活動を示したが、物量をほこる波状攻撃に対しては、ほとんど効果を挙げなかった。かくて恐怖の一夜が明けると、市の南部市街地はほとんど全滅するという悲惨な姿に変わっていった。[武藤・有坂 1967：516-518]

西宮神社の惨状は、以下の様であった。

> 西宮神社は 8 月 6 日の第 5 回空襲によって貴重な文化財を失った。すなわち境内 1 万余坪（約 330 ヘクタール）のうちに小型爆弾 2 発、焼夷弾 300 発以上が落下し、神社職員および付近住民が消火に尽力したが、国宝建造物に指定されていた三連春日造り本殿が全焼した。同じく国宝の大練塀も約 94 間（169.2 メートル）にわたって瓦屋根および棰（たるき）を消失したため、雨露にさらされて荒廃の危険が迫り、西宮神社の特色ある構築物だけに、心ある市民の憂慮をまねいた。[武藤・有坂 1967：519]

とある。西宮神社の社務日誌では、次のような記載である。

> 昭和二十年八月六日　五日夜十時前ヨリ警戒警報ニ入リ、最早例ノ如ク脱去ノコト考ヘラレシニ、形勢逆転、再ビ空襲トナリ、敵機当市上空ヲ中心トシテ百三十機。大凡焼夷弾ヲ以テ全市ニ亘リ攻撃セリ、時ハ午前一時乃至三時頃ナリ、境内一面熱火ノ巷トナリ、林間ニ篝火ヲ点セル如ク危険言フハカリナシ、御神体安全ヲ慥カメ各職員壕ニ避難、更ニ劫火ノ猛烈トナルニ及ンデ表門ニ避難ス、社掌以下水ヲ以テ消火セルモノ数個アリシモ、降下ノ数量何千発トイフニ至ツテハ遂ニ何ノ功ヲモ表ハスヲ得ズ、国宝本殿ヲ初メ拝殿、回廊、両渡廊、神饌所、社務所、儀式殿、大練塀上屋、沖戎社、南門等ヲ悉ク烏有ニ帰スルニ至リシハ、実ニ有史以来ノ一大事ナルト共ニ大敵米軍ノ

悪業憎ミテモ憎ミテモ尽クル所ヲ知ラザルナリ、消防隊モ来ラズ、劫火ハ次第々々ニ燃エサカル一方ナリ、斯クテハ手ノ施スベキヤウモナシ、社掌（吉井良尚）ハ突嗟ニ浜脇学校ニ走リ暁部隊ヲ依頼シ、武藤時宗見習士官指揮、南門消落後ノ火ノ手ガ西風ニ副ヒ練塀上屋ノ東ヲ伝ヒテ東大門（表大門のこと）ニ移ラントスル火ノ手ヲ防止スルニ至ラシメハ大功ナリ、全部鎮火ハ午前六～七時頃ニモ及ビツランカ

社掌（宮司）の吉井良尚が必死に消し止め、それでも間に合わず南にある浜脇小学校駐留の部隊に頼み込んで鎮火してもらい、そのこともあって、表大門がなんとか焼けずに残ったことがよく分かる。実際表大門のあと少しのところまで、火の手がきていたのを窺いが知ることができ、門まで焼け落ちてしまっていたら、今の十日戎開門神事の隆盛は果たしてあったであろうかとも考えてしまう。

本殿・拝殿の復旧は、1961（昭和 36）年までかかることとなる。太平洋戦争後の翌昭和 21 年からの昭和 20 年代は、本殿、拝殿ともに復旧していない状態で十日戎を迎えていたことになる。近代から行われてきた、神社内を「忌籠」の状態に置くことも、外側と境内を分ける役割を長年果たしてきた境内の周りを囲む形で存在した、大練塀が被災したことよって難しくなってしまったのである。

十日戎自体は、1946（昭和 21）年に新聞紙上には現われている。1946 年 1 月 9 日の神戸新聞には、初めて十日戎について言及した記事が出る。

十日ゑびす　臨時停留所を設置　福の神として例年一月九日から十一日まで三日間の十日戎祭に多数の参詣客を集めて賑はふ西宮神社は今年も従来通り祭礼を執行することになつたが復興は笑顔でと福運を授からうとする人々の参詣は相当多数に上るものと予想されるので、阪神電車では期間中本線西宮駅に臨時乗降口を増設、国道線には西宮札場筋、夙川橋間に西宮戎臨時停留場①を設置して終戦後初の十日戎参拝者の輸送に万全を期する

とある。同じ記事内には、さつまいもの販売会の記事、国の力となるため炭鉱へ送ってくれと尼崎勤労署に訴え出る 16 歳の少年の姿など、時代の様相を感じさせられる情報が並んでいる。その中で、従来どおり西宮神社は十日戎の催行を行い、国鉄ほどでないにせよ、輸送需要が非常に高かったであろう電鉄会社もそれに伴って増便に応じているところは、この祭が復興のシンボルになるのではと考えてのことだったかもしれない。次の日には、こういった記事となる。（同じく神戸新聞）

進駐軍もチラホラ　西宮神社の戎祭　西宮神社の宵戎は珍しい温かな日和に恵まれて予想外に人出が多く参詣道の本町産所線道路なども相当な賑はひ、しかし例年に比すれば一割程度といふところ、自由市場の延長のやうに道筋には露店も出てゐるが縁起ものの吉兆屋は数軒に過ぎずそれも一斗樽大の酒樽をつるしたものは全く見られない淋しさ、進駐軍将兵たちの姿もこの店の珍しさにつられてチラホラ見られた

とある。この記事を見ていると、いかに戦前･戦時中の十日戎が壮大なものであったかを感じることができる。それは単に復興を願う人々の関心を集めたというだけでなく、戦前で

は十日戎の 3 日間（9･10･11 日）は西宮市では休日であったことも、多くの人が参拝しやすい状況を作り出していったのであろう。進駐軍がもの珍しさにチラホラという記事には、青年団の面々が声をからして場外整理をしていた戦前とは大違いの風景を生み出している。

1947（昭和 22）年 1 月 8 日の神戸新聞には、このような記事がある。

「えびすさん本殿へ遷御　今年は恒例の一番詣りありません　西宮神社の十日戎は仮本殿の建築完成とともに九、十、十一日の三日間にわたり復興の機運深まるうちに行われる、年末三十一日の大祓式にあたり仮殿からの木の香の新らしい仮本殿に遷された　仮本殿は工費三十万円で神戸の湊川、生田両神社と同じ型で建築された（中略）南門が破損しているので今年は恒例の一番詣りは行われず早朝から儀式だけが行われる」

御遷へ殿本んさすびえ
んせまりあり詣番一の例恒はしとこ
西宮神社の十日戎は仮本殿の建築完成と共に九、十、
十一日の三日間にわたり復興の機運深ま
を加える、南門が破損しているので今年は恒例の一番詣りは行われず早朝から儀式だけが行わ

図：仮本殿（1947 年 1 月 8 日神戸新聞）

とある。私は、西宮神社の吉井良英禰宜や吉井貞俊元西宮文化協会会長からも社殿の復興は 1961 年と聞いていたので、この記事を見た時には驚いた。現在の本殿とは形はかなり異なり、記事の中にも「生田・湊川と同じ」とある。あくまで仮本殿であるためだったことが考えられるが、この記事の中には「神社の民主化の一端」や「境内の開放を念頭とした中央商店街復興組合の働きかけ」であったとあり、時代を反映していると同時に、社会構造が変化していることの一端を感じさせる。

そして「一番詣り」に関しては、南門が破損したためにできないと書かれており、「早朝から儀式」とある。戦前にあった「忌籠」の語句は消え、ただ単に「儀式」となっているのである。統制経済の中で紙面の関係もあっただろうが、戦前・戦後を経ることで新聞社側の忌籠に対する意識のややもすれば意図的な希薄化が進んでいることが感じさせられる。

次の日の 1 月 10 日の神戸新聞の記事ではこう書かれている。

よいえびすにぎわう　西宮神社のよいえびすの九日は好天にも恵まれて思いがけないほど参拝人の出足が良く、にぎわいを呈した、境内参詣道には露店、サーカスなどが軒を並べているが吉兆屋は全く数軒に過ぎない寂しさである　この出足をねらって大阪勤労婦人連盟の若い会員が戎停留所で震災義金（昭和南海地震）の募集に声高らかに呼びかけている、往年の混雑もないと見て物々しい取り締まりもなくようやく復興調を取り戻した感が深い

とある。少しずつではあるが、西宮にも復興の兆しが訪れたという感じであろうか。参拝人の数はまだまだ少ないが、翌 1948（昭和 23）年に状況は一変する。1948（昭和 23）年

1 月 9 日の神戸新聞阪神版である。

> 福の神さんも大張切り　手ぐすね引く福あめや吉兆屋　（中略）一方西宮神社も本殿脇に社務所もささやかながら復興してはいるが境内周囲のヘイが破損したままなので恒例の十日戎の福つかみは今年は見込めない　しかし神戸からは恵方にあたつている②ので参拝は殺到するものと予想されるか両神社（ここでは神戸の柳原神社のこと）ともに正月三ゲ日の参拝人が昨年の倍以上あつたので昔から正月三ゲ日の人出で十日えびすの人出もわかるといわれているので昨年の倍の参拝人はあるものとみられ福あめ、吉兆屋などの露店掛小屋などの整理も進められており、十日えびすの前景気はなかなか活況を呈している。

そして、十日は「福に集るインフレ戎」（神戸新聞阪神版）とのタイトルで、「百円札も軽く飛び込み、男女学生、若い人たちの投げ込むのが目立つて多い」とある。次の日の 11 日の新聞では予想を超える昨年の 3 倍の人数（7、8 万人）が参拝に訪れており、戦前と同様の規模ではないにせよ、参拝者に関しては早い時期からの復興がなされていることがここから分かる。ただ、10 日の記事にはこのような記載もある。

> 制電が厳しくなって夜は境内燈や露店も電燈を点せないので足もとが暗く夜の参拝はまず懸念せねばならず、したがつて昼間だけに限られるから十日の本えびすの人出は混雑が予想される

とある。これに関して私は、門開けとの関連に思い及んだ。新聞紙上でも「一番詣り（ここでは「福つかみ」）」について言及しているだけあって、新聞読者、もしくは少しでも西宮神社の十日戎を知っている人たちなら、彼らの意識の中で西宮神社の十日戎といえば門開けの一番詣りがあるという事実はなくならなかったはずである。

確かに、神社内を締め切った形での完全な忌籠は出来ない。しかし、門を開けて参拝客を入れることに変わりはなく、初めてたどり着いた人は「一番福」だということは言えただろう。実際、戦前の一番福の歴史を作り上げた T.T.氏は、戦後は神戸市東灘区（当時は魚崎村）に自分の店を持ち、そこから西宮まで訪れて、門開けに参加していたとのことである。実際に彼の家族（娘婿）は、戦後何年かして一緒になって「走っていた」と話す。

> 当時は、電気が今と違って点いてないですからね。境内は明かりが無くて暗い。危ないんです。足元が見えないですから。私は走っている時に見えなくて、何かにけつまづいて、こけたことがあります。今のようにお酒や米俵がもらえると言うことはなかったですけど、（他の人も）走っていましたよ。私の場合は（義父と）一緒に走らされたと言うのが強いですけどね。（1997 年 12 月の荒川によるインタビューより）

とのことであった。時期としては、昭和 20 年代半ばであり、この昭和 23 年からは数年後だと推測されるが、状況は変わらないだろう。神社側としては、忌籠りが出来ないという物理的な事情と安全面の双方から、「一番詣りは、やらない」と通達していたのではとも考えられる。

その後、開門に関する記事は、1953（昭和 28）年まで見当たらない。だがインタビュー

にもあるように、駆けっこをして参拝する人は相当数いたようである。その後昭和 24 年からは、これまで以上に多くの人が来ることとなる。年ごとに、特徴的な事象を次に述べたい。新聞ごとに記載に特徴があるので、新聞名も併記する。

1948（昭和 23）年 1 月 8 日（朝日新聞阪神版）

「おみくじも景品付今年は二十万のお参りが予想され」

同年 1 月 10 日（朝日新聞阪神版）

「取り戻した人出　西宮のよいえびす」

「境内には客呼びのジンタなどが聞え戦前のにぎわいを取り戻した」

同年 1 月 11 日（神戸新聞阪神版）

「世直しの“福の神”　西宮神社の物すごい人出」

「大黒の福の神みやげ五十円」

「おみくじを買うのは二十歳前後の若者が多く」

「一方で関東だき屋を筆頭に食い物店が子どもたちの人気を呼んでいた」

「阪神電車は五万の乗客をさばいた」

1949（昭和 24）年 1 月 9 日（神戸新聞阪神版）

「戦災のため福つかみの一番乗りは行われないが、いつもの通り百余軒の吉兆売り、露店も立ち並び、九日は日曜日になるので一番にぎわうだろう。」

同年 1 月 11 日（朝日新聞阪神版）

「境内数ヶ所に白衣の人たちがにぎやかな出店にはさまれながら傷病者更正資金募集に声をからしてはいたが、金づまりか無関心なのか見てみぬふりの人が多かった」

同年 1 月 11 日（神戸新聞阪神版）

「吉兆、福のお面、福飴などの露店が参拝道から境内まで三百数十軒ぎつしり立並び、バラツクのお粗末な本殿ながらも“どうぞ福を”とお祈りする人々の顔は真剣だ」

「十日に阪神電車の運んだ客は七万数千という記録を出した、同日の人出はざっと二十万人」

1950（昭和 25）年 1 月 8 日（朝日新聞阪神版）

「一方灘の銘酒タル詰め一斗以下からくじなしの福引も初登場、景品のエビスの面二万が福寄せの大役に早くも神社で待機、昔懐しい淡路の船頭衆が一家挙げての船参りも今年あたりボツボツ西宮港に現れようとヨイエビスを明日に控え前景気は上々」

同年 1 月 10 日（朝日新聞阪神版）

「神さまもお家がほしいと一枚百円のエビスくじを売出して社殿復興に大きな期待をかける一方、門前では“福アメ”ならぬ“首つなぎアメ”を労働者が売り出している

という一九五〇年のヨイエビスだった。」

同年１月 10 日（神戸新聞）

「さい銭もアメも千円時代　景気良く宝恵かご　暖かに福寄せにぎわう」

「吉兆屋、福あめなどの露店がいならぶのにまじり参議院議員補選各立候補者の選挙演説やそれをまぜかえすように昭和重機労組の首切り反対資金カンパのあめ売りの声などが参拝の人人に呼びかけ」

同年１月 11 日（夕刊神戸）

「本えびすの十日、西宮神社には朝来の雨もいとわず午前六時の開門を待ちかねてどっと人の波が押し出し」

「社殿復興にえびすさんが今度発行したお酒が当るという神殿復興くじもジャンジャン売れ、目標の百万円にもあと一息」

1951（昭和 26）年１月１１日（朝日新聞阪神版）

「西宮のエビスさんは、かんじんの十日が雨にたたられ、この日の人出は五十万の予想をぐっと下回ったが、それでも雨傘の行列が続き、神社側では十数万と見ている。

同年１月 11 日（夕刊神戸）

「沿道にカサの波　雨も物かわ二十五万人」

1952（昭和 27）年１月 10 日（夕刊神戸）

「西宮神社も早朝から人の行列がつづき阪神電鉄でも午前十一時ごろから臨時列車を運行、国電も急行を西宮駅に臨時停車させるなど輸送に大童、神社ではきょう一日の参拝人は四十万を越えるものとみ、戦後はじめての記録だという」

同年１月 11 日（朝日新聞阪神版）

「きのう十日はさすが本エビス。午後三時までに三十五万人」

「今年から本殿前のおサイ銭箱のほか、本殿石段下にも十石入りの酒ダルのおサイ銭入れがすえられた。(小学生がそれを盗もうとして逮捕)」

「正門前に浜脇中学の PTA がやっているうどん屋さん一パイ三十円のうどんが人気を呼んで大繁盛。父兄たちも先生もニコニコ顔で客の応接に大多忙」

図：ＰＴＡ食堂、貸し切りバス、演説代議士、雑踏（1952 年１月 11 日朝日新聞阪神版）

「解散気構えに備えてか、第二区選出の自由党 H 代議士[3]が参拝者をねらって、西宮電話局横で声をからし、一席ぶっていたが、通行者は無関心の面持ち」

「生野、姫路方面から団体参拝者を乗せ、この日大型バス三台がやつてきた。一人四百円の運賃という。」

「吉兆売れ過ぎ　尼崎エビス　（中略）神様の宣伝はすごいばかりで、初エビスの宣伝を阪神電鉄にかけ合って成功したり、某動物サーカスを頼み抜いて誘致、また某キャバレーとタイアップし、女給さん大勢の出演で「美人舞踊競演大会」を催すなど、客の集るすべはちゃんとつくしている」

このように、復興の過程において、戦前よりあった電鉄・国鉄が西宮において一大輸送手段として復活。1952（昭和 27）年 1 月 9 日の朝日新聞阪神版には

阪神電鉄にとっては甲子園球場とこのエビスさんが大きなドル箱だといわれているが、それだけに乗降客の処遇に大ハリキリ。現在の駅の西側に二ヵ所と東側に一ヵ所改札口を増設、キップ売り場も数ヵ所増設し、神社側と共に“三日間は雨よ降るな”と今から天に祈っている

とある。十日戎の本格的な復活は、戦前の参詣電車としての機能も持っていた阪神電車の復興でもあった訳である。西宮以外の戎神社も「えびす宮総本社」との差別化を図って大いに健闘している。昭和 27 年の尼崎エビスとは、阪神尼崎近辺にある尼崎倉持戎神社[4]のことである。キャバレーのダンサーたちを出演させての舞踏競演会を企画し、十日戎で集客を狙おうと考えているのは興味深い。

もう一つ、輸送機関で注目したいのは、以前は官鉄・国鉄が担ってきた遠来の参拝客を運ぶ役割を、貸し切りバスが担い始めたことである。1951（昭和 26）年に「一般乗客旅客自動車運送事業法」の改正（貸し切りバスの認可）があり、この形態が生まれたと考えられる。その後 1954（昭和 29）年には兵庫県中部にある西脇から千五百人をバス十五台で運んだり（昭和 29 年 1 月 9 日朝日新聞阪神版)、特別船でえびす信仰の厚い淡路や徳島からの参拝客を輸送するなど、戦前、特に昭和 10 年代に盛んだった輸送手段さえも復活し、輸送状態の安定化が進んだことが窺える。

面白いのは、現在の西宮の十日戎ではあまり知名度のない商品は「名物福アメ」ではないだろうか。当時の記事の中では前述の「首つなぎアメ」なども含め、かなりの頻度で記事となって現れている。現在でも露店で売っているだろうが、西宮の参詣客にとってはあまり知名度の高いものではないのであろう。俳句の歳時記の中に福飴は十日戎の中の子季語として入っており、それを商う屋台もあるだろうが、当時の記事にあるように何軒も軒を連ねている光景は見たことがない。下火になった原因としては、福飴に有毒色素を使っていたとされる報道（たとえば朝日新聞阪神版昭和 29 年 1 月 9 日には、「名物の福アメは既報の有害色素の使用にからんで西宮保険所が神社内に臨時詰所を設け、徹底的に検査」など）があり、そこから人気が下火になったことは考えられる。

このころの記事で私が興味をひかれたのは、福引やエビスくじ、賽銭の額もさることながら、「中学校の PTA」が境内に露店を出していることである。教員も親も一緒になって「一パイ三十円のうどん」を売っているところは、非常に興味深い。戦前は境内警備としては町の青年団などが活躍していたが、ここに登場する PTA はどのようなことを行っていたのだろうか。露店の場所割に入り込んで店を開店することが出来ていたことから、氏子組織の一翼を担っていたのではないか。

私の育ちは、西宮神社の氏子区域である。小学生のころ、母に連れられて町内会の子ども会で西宮神社まで御輿を担ぐという、いわゆる例大祭に加わっていた。現在でもその例大祭は「西宮まつり」という形で、2000 年にそれまでの陸渡御（時代行列と神輿巡行）に加えて船渡御も行う形へと変化した。その変化の中で神輿奉賛講社が発展して成立している。その他の氏子組織では、だんじり（地車）を曳く氏子の青年会である、若戎会が存在する。どちらの団体も幼少期からメンバーを募集しており、早期から団体に所属し、お神輿を担ぐ、またはだんじりを曳くというやり方を採っている。現在の彼らの紐帯としては、町単位というよりも、「神輿が好きで」または「だんじりが好きで」参加する「選択縁」としてのものが強いというのを感じる。ただ、入り口の部分としては、地域の子ども会での活動がきっかけになっている部分も多く、現在でも地域性は多少残っている⑤。

産業都市化して以降、西宮神社では青年団や在郷軍人会が祭礼を行うことが多くなっていた。それが戦前の福男たちの属性にも反映されていた。戦後になり、それらが全く無くなった訳でなく、新たに小学校や中学校の校区 PTA・子ども会が、戦前の組織の代わりとして機能していたのではないか。それが現在まで、多少なりとも引き継がれてはいる。

1953（昭和 28）年に、新聞紙上においては 8 年ぶりに一番福が現れた。T 氏のご遺族が話されるように、その間にも門を開けることは行われ、一番になる人はいたのだろう。忌籠する際に神社はすべての門を閉ざすが、その中で表大門（赤門）と同様に大きな意味を持つ南門は 1948（昭和 24）年に復旧している。しかし神社とそれ以外を区切る役割を持つ大練塀の復旧は 1951（昭和 26）年であり、新聞紙上で昭和 28 年以降に福男の名が出るようになるところを見ると、忌籠りを行うためには門のみの復旧よりも、塀の復旧までもが必要だったと考えられる。確かに 1952 年の記事は大勢の参拝客が、早朝より詰め掛けた旨が記されている。正式に新聞紙上に再び現れたのがこの年である。その記事は 1953（昭和 28）年の 1 月 10 日の夕刊神戸である。

> 百万人突破か　西宮えびす大にぎわい　曇天ながら異例の暖かさに恵まれた西宮神社十日えびすは午前六時の開門と同時に一番詣りを目指す参詣人約千人が正門から本殿まで百メートル競走さながらの激戦を展開、神戸市東灘区魚崎新堀町六九、I.Y.氏（二五）が栄冠を獲得、えびすさんの木像をうけてにっこり引き揚げたのを皮切りに

とある。同じ年の 1 月 11 日の朝日新聞夕刊には以下の記述がある。

> 西宮神社の「本えびす」は十日朝六時の“赤門あけ”に始った。終電車で泊り込んだ参拝客約百三十人がつめかけ、開門とともに拝殿までかけくらべを演じたが、一番乗

りの福男は神戸市東灘区魚崎町新堀、I.Y.さん（二五）と決り商品のえびすさんの木像を獲得した

とある。開門以外の記事の中には、境内に露店が約千軒出店するようになり、四国からの船参りも複数あり、混雑のためお参りにはたっぷり二時間かかることなどが書かれており、約 10 年たってようやく十日戎が復興した感がある。ただ記事としては、その前より大きく取り上げられていた「復興くじ」の項に多くが割かれている。朝日新聞では、走った「福男」として「福男」が使われているが、神戸新聞では翌 29 年にこの日本酒の福引の 1 等賞である四斗樽を引き当てた男性を「福男」と呼んでいる。

きのう一日で六百万円
▽……さすがに〝総本山〟西宮神社
一番福で特賞四斗ダルを引当てた福男

図：四斗樽を引き当てた「福男」（1954（昭和 29）年　神戸新聞阪神版）

紙面の扱いとしても、1955（昭和 30）年代に入る前までは、福引、賽銭、そして少なくなってくるが、福アメやなどがまずは前面に押し出されていた。

戦前･戦時中であるならば、再現されたとなれば真っ先に一面を飾ってもおかしくない内容である。現在の観点から考えるならばではあるが、どちらかと言うと動の部分が少ないこの祭に、生き生きとした躍動感を記事に与えることができる。そこに読者は目を奪われないかと私は感じる。しかし、開門での一番福を選ばなくなってから、新聞紙上に出なかった 10 年になにが起こっていたのか。これまで挙げた記事から考えると、まずは、子どもたちは「関東（かんと）炊きの屋台に人気（昭和 23（1948）年)」であり、福引の一等賞は四斗樽の清酒である。その文脈から「福アメ」が流行っていたことも推察される。傷痍軍人の人々、首つなぎ飴を売る労働者、バラックの本殿に集った人たちにとって、身近な「福」とは、まずは「食欲を満たすこと」であり、まずは暮らせることであった⑥。これらの記事が書かれている同じページには、計画停電（制電調整）のことも書かれている。その他配給の記事があり、シベリアの情報、満州からの引き揚げの停止などと、生きるか死ぬかの情報が多数書かれている。ある程度多くの人たちの生存権が確保されたのちに、駆け足詣りが新聞紙上でも「市民権」を得て登場したのである。それが昭和 30 年代だったと考えられる。昭和 20 年代にも、もちろん T.T.氏のような何名かのように一番福を追い求める人もいたであろう。しかし、社会の求めていたものは、まずは生きるための「福」であ

った。バラックの西宮神社はその「福」を提供していたし、各新聞もその福を授かろうと集う人々の報道を中心に行っていたといえる。

右上図：1955（昭和 30）年 1 月 11 日　朝日新聞阪神版（②の写真は、1952 年と同じ某代議士のスピーチ。彼は 1990 年代まで演説をし続けた。③の写真は市立西宮高校が図書館設立資金獲得のための売店を境内にて開くもの。十日戎はまさに様々な人を内包した。）

昭和 30 年代までの「開門」を新聞から見ていきたい。

1954（昭和 29）年朝日新聞阪神版

なお十日の朝六時開門と同時に、神殿への一番乗りを競う“一番福”は神戸市東灘区住吉町の T.M.さんだった

1955（昭和 30）年も同じくこの T.M.氏が一番福を取るが、このように書かれている。右下図：1955 年 1 月 11 日朝日新聞阪神版（四斗樽を引き当てた「福女」）

福男･福女　まず第一の福男は神戸市東灘区住吉町恋野一ノ四六、T.M.さん（二七）住吉中学の体操の先生で走るのが得意、正門から約三百メートルをイダテン走りで見事連続二番福でえびす面付“福みの”を獲得した。ついでの福男は姫路市千羽西新町一一〇、K.J.さん（六〇）はるばる姫路から来た

かいがあって午後一時すぎ、えびすくじで見事神戸新聞社寄贈の目の下二尺三寸の真綿製福ダイを引当てて大喜び。この日最大の幸運者は大阪市福島区海老江下二ノ一一、E.C.氏妻 M さん（四二）十日えびす呼びもの奉賛会のえびすくじで“えびす賞”四斗樽一丁をせしめた。M さんは生れてこの方“えべっさんとは関係がない方で”今まで参ったことが一度もなく、初めて幸運を引き当てたもの。

とある。まだ、「福男」の語が新聞紙上において「ただ幸運を受けたもの」でしかないことが分かる。そして注目は T.M.氏の職業である。次の年 1956（昭和 31）年では 2 着となり、そして 1957（昭和 32）年の記事（1 月 10 日神戸新聞夕刊）はこのようなものである。

本えびすの十日、福の神の総本家“西宮えびす”は恒例の門開き神事“福男競争”を行った（中略）一着は西宮市今津山中町、会社員 M.S.さん（二一）」二着神戸市東灘区住吉町堂の本六一 I.T.さん（一九）＝神戸商高三年、三着西宮市宮前町五〇会社員、F.T.さん（二〇）の順でゴール・イン、木彫りのえびす、大国像をもらった。（中略）昨年まで三年連続入賞の記録を持つ T.M.さん（二九）＝神戸市東灘区住吉町＝はこの日も住吉中学時代の教え子である I さんとともに健脚を競ったが、惜しくも等外に落ち、四年連続入賞を逃した。

図:1957（昭和 32）年 1 月 10 日神戸新聞夕刊

この後の紙面を見ていくと、神戸市東灘区住吉の近くの高校生くらいの年齢の男性が走っていることが多いのが分かる。教え子のつながりでT.M.氏が誘って参加させていた可能性が高い。参加者としては、戦前ならば地元の消防団や青年団もしくは青年学校、中学校などの組織から出場することも多かった。同様に、地域の学校の仲間と一緒に参加する形態が多かった。事例が戦前に遡るが、後述する、1999 年にインタビューを行った 1945（昭和 20）年の一番福の U.K.氏も、勤労動員の出勤途中に学校の友人と参加していたし、1943（昭和 18）年の一番福の T.Y.氏も小学校時代からマラソン選手であり、地元の小学校では知られた存在であった。U、T 氏同士既知の間柄で、戦前の参加者のほとんどは、見ず知らずの他人ではなく、近くの学校の先輩後輩、もしくは小学校が同じといった、「近代の地域的つながり」がそこには介在した。戦争を経て復活したこの「門開き神事福男競争」においても、戦前と同じような学校のつながりがあったのではないかと考えられる。興味深いのはこの記事にある、学校の先生が主導権をとって教え子と走るというくだりである。

先述したＰＴＡで一杯 30 円のうどん屋や、境内で図書館設立のための露店開きを生徒・

教諭が一緒になってやっていたことから、これらが当時の学校の教員の姿なのではないか。青年団活動に近い地域活動にも積極的に関わっていたのが、当時の主に初等・中等教育の教員だったのではないだろうか。

この戦後すぐの開門行事と戦前のそれとの相違点としては、まず戦後は物理的な要因から忌籠が出来ず、したがって戦前の文脈でいう「恒例の一番詣り」は行えなかったことがある。幸い表大門は焼けなかったために、門は開くようになっており、計画停電があったにせよ、暗闇の中を駆け抜けて、鈴縄を真っ先に鳴らし、参加者自身が一番詣りの名乗りを上げることは出来た。実際に、戦前の福男の記録保持者である T.T.氏などはご遺族の話からその「行事」に参加していたのである。だが、認定する側の神社は忌籠が出来ていない面からそれを認めなかった。

そしてもうひとつ大きな点は、やはり時勢の違いであろう。戦前･戦中は開門での一番乗りは「頑強な勇士」として、新聞紙上でも大きく取り上げられやすい。西宮神社でも武運長久の祈祷が行われている。それに対し、戦後では被災をした神社、そして食糧難の中での十日戎である。参拝に来る人たちは、勇士の姿を求めにくるのではなく、まず今日の食料、生きる糧を見つけることに必死であった。神社側の公式なメッセージはないにせよ、新聞社が一番乗り競争を積極的に取り上げることをしなかった訳がそこにあったのではないか。

ただ戦前も戦後もこの神事の参加者（門を開ける人たち、走る人たち）に関しては、さほど変化はないとみている。走る側には、戦前も戦後も同じような人々が関わっている。門を開けるという「走ってもらう側」にしても、戦前の青年団などと復興奉賛会の間には連関がある。ここから分かるように、戦後の門開け行事は、戦前同様比較的自由でありながら、青年団活動や学校といった戦前の 1930 年代にあったつながりを引き継いだまま行われていた。産業都市化がおこった戦前の変化に比べて、戦争が劇的に西宮の社会構造を変化させたとは考えにくい。

明治･大正期を経て、西宮神社の十日戎が、西宮（大正期の西宮町くらいの範囲だろうか）の祭から、大阪からも神戸からも、少し遠くは徳島くらいから参詣客が来る祭へと変化はした。ただそれは、以前からの西宮えびす神社の祭神が信仰されている地域であったことには変わりはない。一番福競争の要素もあるが、参加者たちはある程度「忌籠」の意味を知っていて、一番詣りに参加していたのではないか。なぜなら、多くの参加者が青年団活動や在郷軍人会、そして地域の学校教育活動の属性を抱えたまま参加しているからである。もちろん、1945（昭和 20）年の一番福である U 氏は、当時の様子を「開門までは（スタート位置で）ケンカでしたよ」とインタビューの中でコメントした。ここから、ある程度の押し合いがあったことは推測できる。しかし、それはあくまで拡大解釈した意味での「氏子区域」内でのものであると感じている。主に新聞紙上からの考察として、書かれ方が 1930 年代から 50 年代までのものと、2010 年代の「走りという側面のみで集っている」感の強い開門神事とでは異なっているという印象がある。

2 節　高度経済成長を経て

1953（昭和 28）年の門開けの正式な再開からは、徐々に参加する者も増えていく。参加人数の推移、またどういった人々が福男となっていたのかについて、属性、年齢などを 2001 年の論考にて調べた［荒川 2001］が、本論考では、その表を更新して巻末の資料にて提示した。参加人数は新聞社（神戸新聞、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞）によって多少のばらつきはあるが、この行事が正式に再開してからは、戦前までとはいかないまでも、堅調に福男競争が活発化してくる流れが見て取れる。しかしながら、この着実な復興を遂げつつあるまさにその時期に、最も大きな事件が発生した。それは「福男競争の中止」である。

1961（昭和 41）年 1 月 10 日付神戸新聞夕刊には、

> 午前六時開門した。戦後十三年間続けてきた呼びものの福男レースは、今年から危険防止などのため中止されたが、それでも四国方面からの団体客ら約百人が開門を待ちかねて参拝した。

同年 1 月 11 日神戸新聞阪神版には、

> 午前六時の開門を待ち切れず集まった参拝客は約百人。太鼓の合図とともに赤門が開かれると暗ヤミの中を足ばやに本殿目指していった。戦後続いた“福男”レースが今年は中止とあって、われ先に一番乗りを目ざす風景もなく、静かな“本えびす”の幕開けだった。

同年 1 月 11 日付読売新聞阪神版にも、

> 昨年までは赤門から拝殿までこの一年の福男のタイトルをかけ競争する「福男行事」が行われていたが、危険防止のため今年から廃止され殺気だった例年とは違った静かな門開け神事だった

などとある。新しく作られた行事であるとはいえ、50 年近くも続けられ、神社が福男の認定を始めた 1940 年から見ても 25 年の歴史があったこの競争が終わってしまったのである。

どのような要因がそうさせたのであろうか。中止される 5 年前の 1961（昭和 36）年に、次のような事件が門開けの行事の直前で起こっていた。

1961（昭和 36）年 1 月 10 日付神戸新聞夕刊

> サイ銭箱のフタでなぐり合い　開門のことからケンカ　十日午前四時五十分ごろ西宮神社の表門（赤門）の外側で“福男一番あらそい”の開門を持っていた群集の中で、男二人（うち一人は中学生）と自家用車で乗りつけてきた男とが開門の時間のことからケンカ、自動車の部品とサイ銭箱のフタでなぐり合いとなり、西宮署員に現行犯でつかまえられるという一幕もあった。

さらにこの事件については、毎日新聞の同年 1 月 10 日付夕刊が詳しい。（原文は氏名が実名。アルファベットに改変して提示）

> 鉄棒振り回す福男志願者　西宮署は十日午前四時五十分ごろ同市社家町、西宮神社赤門前で、西宮市の飲料水製造業Ａ（二八）、尼崎市白タク運転手Ｂ（二三）、芦屋市同

運転助手C（二一）を暴行現行犯で逮捕した。BとCの二人は西宮神社の本えびす行事として同朝午前六時から行われた福男一番乗りレースに参加するため白タクを運転して赤門前に駆けつけ門前で開門を待っている人たちに「開門は何時や」と尋ねたところAが「八時や」と偽りの時間を教えたため口論になり、二人は自動車から長さ六十センチと三十センチくらいの鉄棒を持ち出しAの頭をなぐりつけた。Aと同人の弟中学三年D（一五）の二人もそばにあったさい銭箱のふたで相手の顔や背中をなぐるなど互いになぐり合ったもの。

この 5 年前の事件が、直接の原因になったとは考えにくいが、中止の遠因としてこの行事が、無規範の状態で行われていることが読み取れ、5 年後の文章にもある「危険」防止のために中止へとつながっているのではないか。

注目したいのは、これまでの門開け行事関連の新聞記事では出てこなかった交通機関として、「自家用車（毎日新聞では白タクだが）」の存在がこの 2 つの記事には現われている。この自家用車の存在が、公共交通機関の発達以上に、より広範囲での門開け行事の参加を促すこととなり、「福男レース」以外の門開け行事が持つ意味の希薄化が同時に進むこととなったのではないか。

大阪と神戸を結ぶ阪神国道（国道 2 号線）は 1920 年代に完成⑦していたが、平行線である第二阪神国道（国道 43 号線）が一級国道へと昇格するのが 1959 年である。1964 年に名神高速道路の西宮 IC が出来、1970 年には西宮神社から 200m も離れていないところに阪神高速道路の西宮入口が出来るなど、高度経済成長に伴って阪神間にモータリゼーションが本格的に到来した。新聞紙上からみると、昭和 20 年代後半よりバスで遠方の観光客も参拝に来ていたようだが、それと同時に終電を気にしなくてよいマイカーでの参詣者、そしてそれらの人々による福男レースへの参加も目立つこととなった。

高度経済成長によるモータリゼーションが要因となって、より広範な地域からの参詣が可能となった。それはえびす信仰の総本社として西宮神社の十日戎が関西地方にて認知されることとなった。しかし、それと同時に門開けの行事に関しては、これまで西宮神社の氏子地域が守ってきたイゴモリの習慣をほとんど知らない人々が多く参詣することとなり、希薄化させることに拍車をかけ、より「福男競争」としての側面のみの認知にもつながったのではないか。

それは、この行事があくまで祭事としてもともとの氏子が守りつづけてきたものではなく、公共交通機関の発達に伴い発達を遂げた「新暦の十日戎の門開け行事」であったため、戦前であっても新しく移入してきた「新住民」が比較的自由に参加できたことが関係する。この自由度が、「忌籠を原点とする西宮ならではの十日戎の門開け」の持つ意味を急速に希薄化させていった。このように大正期から戦前にかけて出来た行事ではあるが、この時期に至るまでは「モノイミ・ミカリ」といった十日戎本来の祭事形態を守り続けていた人々は、これまでの調査からも多くいたと推察される。

彼らがこの昭和 40 年代の急激な変化に対応しうることは出来なかったのか。新聞を見る

中では、昭和 40 年代から 50 年代にかけての門開け行事の記事はあまりにも少ない。この急激な変化に拍車をかけたのは、この行事を参加によって守り続けた人がこの時期参拝者の総数に比して少なかったからではないだろうか。

戦中戦後にこの行事を支えた主催者としては、青年会や消防団組織があったと述べた。先ほどの殴り合いの事件を考える時、昭和 30 年代にはこれらの地域由来の組織の関与が従来よりも欠如していたのではないだろうか。1963（昭和 38）年 1 月 11 日神戸新聞阪神版で昭和 30 年代に門を開けていた露天商組合の方の取材記事があるので、ここで紹介したい。

図：1963 年 1 月 11 日付神戸新聞、左下写真が T 氏

人出45万を記録

西宮神社 にぎわったえべっさん

小、中、高校の先生に仕事着のお年玉

本殿でお祝いを受ける福男、中央が一番の平井行雄君（西宮市千歳町28）左が二番森岡利郎君（同市用海町33）右が三番上田武則君（同市武庫町1）

“えべっさんの総本家”西宮神社の十日えびすの圧巻はなんといっても十日早暁の恒例“福男選び”。この日も午前六時かっきりに、赤門が開くと、徹夜で待機していた青年たちはいっせいに本殿へ走り出し、およそ八十人の中から三人の福男が選ばれた。この神事に奉仕すること二十年、ことしもまた赤門の内側で忙しく立ち働いている老人の姿が、参詣人の目をひいていた。この老人は西宮市浜脇町一七、T.H.さん（七四）で、四十年前から同神社の祭礼には露店を出しているコンブ商。二十数年前当時同神社のいっさいを切り回していた地元消防団が手を引いてしまった⑧。福男選びは室町時代からおよそ四百年もつづいている神事だけに廃止することもできず、神社側は露天商で作っている戎商業協同組合の T.H.組合長に白羽の矢を立てた。門あけ神事だからといって簡単に赤門のカンヌキを抜けばよいというわけではない。門の外にいるのは寒風に吹かれながら待ち構えている血気さかりの青年ばかり、中には酔っぱらいもいる。開門の時間が近づくと少しでもスタートがいいようにして先を争って力いっぱい門を押してくる。だから内側には十数人で人ガキを築かなくてはならない。しかも、タイコの合図です早くカンヌキをはずすと同時に散らなくては踏みつぶされてしまう。このほか、抜けがけを防ぐため十日は夜遅くまでかかって境内の露店を回り、寝ている人たちを調べなくてはならない。こんなふうに竹中さんの仕事は神事をスムーズに進行するための指揮者というわけ。この朝も、高張りチョウチンを片手に喜寿に近い高齢者とは思えぬ元気さでさい配を振っていたが「戦争直後は本殿は戦災で焼けてしまい、参拝人も少なくさびしかった。ここ数年の間にやっと戦前のような活気を取り戻した。祭りの期間中は毎日 2,3 時間しか眠らないが、えべっさんになると元気が出てくるから不思議だ。といっても、この年だからことしだけでもうだめだと毎年

思いながらここまできてしまった」と感慨深そうに話していた。

とある。「えべっさんになると元気が出てくる」という神事としての非日常性を感じながら、一生懸命奉仕する T.H.氏の姿が目に浮かぶ。一方でこの記事からは、氏子地域、神社の中で祭の主体がどこにあるのかということの議論があまりなされてこなかったことも読み取れる。明治以前からの伝統の祭とは異なりながらも、公共交通機関の発達に伴い、新たな住民を含めた「新しい地縁」でこの行事を行うことが出来ていた社会構造が、この高度経済成長に伴うモータリゼーションによって、そういった地縁が相対的に希薄化し、無秩序な状態の中でこの行事が行われるといった形に大きく変わってしまったと言えるのではないだろうか。

つまり、新しい変革に祭りの主催者がついて行けず、また社会の多くの人が十日戎の原点が居籠にあることに気付かないために、この祭事の「危険性」「無法性」のみがクローズアップされるようになってきたのではないか。

中止前年の 1965（昭和 40）年 1 月 11 日付の神戸新聞阪神版の「ひとこと」には

> なだれ込む人波に押し倒される人も出て大混雑。幸いケガ人は出なかったからよかったが、警備を担当する警察側は毎年のことながら心配顔だった。去年も今年も警備上困ると神社側に警告したというが、人気のある行事だけに強引に中止させるわけにもいかぬ。

とある。神社側、警察側としても、かなり葛藤があったことが感じられる。ただ、添付資料で挙げた歴代の福男および参加者数のデータを見ても分かるように、この後も数年間は減っているが、走る人は存在し、参加人数自体は増えている。しかし、新聞記事としては、総体としての参詣者数の報道に終始し、大きく取り上げられることは少なかった。

3 節　周縁から中心へ十日戎に関する気づき

昭和 40 年代以降、新聞で目に付くようになるのは、昭和 41 年の福男競走の中止を報じた新聞にも「それでも四国方面からの団体客ら約百人が開門を待ちかねて参拝した。」とあるように、漁業関係者の参加である。以下に列挙する。

1968（昭和 43）年 1 月 10 日付神戸新聞夕刊

> 中でも祈祷所は大繁盛で和歌山県のある漁協組の百人をはじめ団体が目立ち、四人の神主さんが手ぎわよくさばいていた

1969（昭和 44）年 1 月 10 日付神戸新聞夕刊

> 赤門が開かれると同時に、寒さにふるえながら待っていた参拝客の一団が本殿へ向かって小走り、参拝客の列は切れる間もない。午前中は淡路、四国、山陰地方から観光バスに乗った漁業関係者の参拝客が目立ち

1970（昭和 45）年 1 月 10 日付神戸新聞夕刊

> H.Y.さんが一番乗り。今日が本番だけに、京阪神のほか四国、山陰地方の漁業関係者もバスを連ねて参拝

1972（昭和 47）年 1 月 11 日付神戸新聞阪神版

本殿には神戸市の漁業関係者から奉納された四十八キロもある南洋産マグロ 2 尾⑨が“鎮座”「エンギがええ」と参拝客の人気をひとりじめ

1973（昭和 48）年 1 月 11 日付神戸新聞阪神版

十日午前六時、忌籠神事のため閉じられていた各門が一斉に開かれると、県北の城崎郡香住町からやってきた漁師さんら約百六十人の参拝客が拝殿に殺到、一番福をきそった。

1976（昭和 51）年 1 月 11 日神戸新聞阪神版）

前夜から来ていたという兵庫県城崎郡香住町香住の商業、H.M.さん（二七）（中略）ら三人が“福男”となり「縁起」がいいと大喜び

このように氏子地域以外でえびす信仰の強い地域、とくに漁業にかかわる職種の参詣者が、観光バスを乗り継いで「一番福」の栄誉に浴しようと一番参拝（祈祷殿に昇殿しての参拝）を行い、そのうちの脚自慢の者が、同時間に行われていた、門開け行事を盛り上げることに貢献するようになったのである。

この漁業関係者らによる積極的な門開け行事への参加が、モータリゼーションを含めた高度経済成長によって変容を余儀なくされた新暦の十日戎におけるこの行事の価値を、西宮神社周辺の社会が再評価することに繋がったのではないかと考えられる。

4 節　創られた「開門神事福男選び」

いったいこの門開けを「神事」と呼称するようになったのは、いつ頃であり何が要因なのだろうか。1961（昭和 38）年 1 月 10 日付の神戸新聞夕刊に「門開け神事」という言葉が初めて現れる。それまでは「開門福争い」「恒例の福男レース」「福男一番争い」などとなっていた。一時中断する直前の 1965（昭和 40）年の記事「ひとこと」には、「四百年の伝統を誇る「福男」の神事がある」と出てくる。1965 年（昭和 40 年）から先は、中止もあり、新聞紙面自体も縮小され、阪神版でも今宮戎神社や柳原神社のことを載せるようになっている時期が散見される。1975 年になり、前節で述べた漁業関係者の多数の参加もあって、再び写真入りで報道されるようになってからは、神戸新聞では「「福男一番」を決める競争」という言い方が昭和 60 年代まで定着する。

「福男選び」という語が登場するのは平成になってからである。西宮神社の吉井良英禰宜は、1989（平成元）年の門開け行事が、昭和天皇崩御の 3 日後であったことも大きかったという。事実この年は、福男による鏡割りは行われておらず、自粛した行事が他にも多い。それまで使用されていた「福男一番競争」「一番争い」といった表現よりも「神事」「福男選び」とした方が自粛ムードに適していたのだと考えられる。実際、当時は十日戎自体の自粛や取り止めまで、検討されていたようである。

1989（平成元）年 1 月 8 日付けの朝日新聞阪神版を紹介したい。

〈初もうで〉　西宮市社家町の西宮　　神社では元日に三十四万六千人、三が日で計

約五十二万二千人（同神社調べ）が初もうでに訪れ、予想の四十五万人を一六％も上回った。総務担当の西井璋（あきら）さんは「えびす様は商売繁盛、家内安全、大漁祈願と身の回りの生活に密着した神様ですから、自粛ムードの影響を受けなかったのではないでしょうか」という。平均株価が三万円を超える好景気に「今年もたのんます」と手を合わせる参拝客でごった返した。

昭和最後のお正月は…

郵便局 年明けは大忙し

好景気に「今年もたのんます」

図：1989 年 1 月 8 日朝日新聞阪神版

とある。三が日は昭和天皇崩御の前であるが、軒並み自粛ムードが漂っていた時期ではある。しかし実際には神社の予想を超える人が初詣に訪れていたという事実は興味深い。1 月 7 日の昭和天皇の崩御後、行政を中心に服喪の対応に苦慮しているのを筆頭に、コンサートの中止、阪神パーク・宝塚ファミリーランドといった遊園地でも、大型遊具の営業は取りやめるなど自粛ムードが漂っている。だからこそ、この西宮神社の「初もうではいつも以上の参詣客でした」というコメントは異彩を放っている。そして、1 月 9 日の朝日新聞阪神版には「商売繁盛を頼んまっせ きょう宵えびす」と題して、以下の記事が掲載されている。

> 十日は午前六時の大太鼓を合図に開門する。開門時には初参りの縁起をかついで参拝者が一斉に本殿へ走り、到着順に一番福、二番福、三番福の福男三人を決める神事があり、三人には御神像や景品が授けられる。服喪期間中のため、お神楽は中止するが、ほかは例年通りで「商売繁盛ササもってこい」のにぎわいとなりそうだ

とある。軒並み自粛ムードの中、「ほとんどいつもと変わらない十日戎」を選択した西宮神社の姿勢が興味深い。

朝日新聞においては、福男競争を「神事」とこの時点で初めて呼称している。朝日、読売、神戸、毎日と見ると、この行事を「神事」と呼び始めたのは神戸新聞を除くと他は全てこの 1989 年以降である。神戸新聞は、1986 年 1 月 10 日夕刊では、「恒例の「福男一番」」、1987 年 1 月 10 日夕刊には「本えびす参拝競争」とあり、忌籠りの「神事」の後に行われると明記されている。そして 1988 年 1 月 11 日朝刊になってはじめて、「今年も「福男」を選ぶ神事から」と表現されている。忌籠神事がこの競争にまでかかる形で用いられた。1989 年 1 月 10 日の朝日新聞と神戸新聞の記事を提示する。（図：1989 年 1 月 10 日神戸新聞夕刊）

神戸新聞

平成元年 一番福だ

西宮神社

〝えびす顔〟の300人競う

神戸新聞

平成元年一番福だ西宮神社“えびす顔”の三百人競う　本えびすの十日、西宮神社（西宮市社家町）で恒例の開門の神事「福男選び」が行われた。福男三人による鏡開きや参拝者への振る舞いは中止されたものの、例年通り午前六時の開門と同時に、平成元年の一番福を目指して三百人が勢いよく境内を駆け抜けた。

朝日新聞

西宮市社家町の西宮神社では、午前六時に開門。約三百人の参拝客らが境内に入った。本殿までの約二百メートルを福男を決める開門神事では（中略）本殿前で福男が行う鏡開きとふるまい酒は中止された。

朝日新聞は「選び」の語を使っておらず、新聞上での初出は平成 5 年（1 月 11 日朝刊阪神版）である。しかしこの 1989（平成元）年のどちらの記事にも「神事」として、載っている所に、語の創出が窺える。これは毎日新聞（1 月 11 日朝刊阪神北西版）、読売新聞（1 月 11 日朝刊阪神版）でも同じであった。この両紙に関しては、たとえば読売新聞では「参詣一番乗りを競い一番福をあてる神事「福男選び」」としており、前年までなかった「神事」「選び」という言葉を組み込んでいる。

読売新聞（1989（平成元）年 1 月 10 日読売新聞朝刊阪神版）では、その創出と関連して以下の記事があった。

例年通り大祭神楽は中止　宵えびすの西宮市社家町、西宮神社では九日、天皇崩御の影響で参拝者の出足は鈍かったが、午後になって平成元年の福を求める人たちが詰めかけ、賑わいを取り戻した。神社側では「神社大祭」は神事にあたるとして例年通り開催。ただ参拝者の求めに応じて行う神楽は中止し、境内や神社周辺の露店には、派手な客の呼び込みを控えるように申し入れた。午前中は、毎年、「一番福」を求めて開門の午前六時前から訪れる和歌山県白浜町の堅田漁協の一行が喪に服して参拝を中止するなど、四万平方メートルの広大な境内に人影もまばら。しかし、子供たちが始業式を終えて学校から帰宅した午後からは、親子連れが増えるなど活気づいた。宝塚市内の喫茶店主（四二）は「新しい時代の商売繁盛をえべっさんにお願いしましたわ」とにっこり。

ここから読み取れるのは、服喪を行う団体[10]もあるが、従来と変わらず参拝に訪れる多くの人々の姿である。そして最も注目すべき点は、「神社大祭は神事」であるために行うとした神社の方針ではないだろうか。先述の通り、「えびす様は商売繁盛、家内安全、大漁祈願と身の回りの生活に密着した神様」であり、神社にとってはその一番の祭事である十日戎の開催は必要と考えた。「信仰・神事」の側面を前面に押し出すことが、自粛ムード一色の中での敢行を可能としたのではないだろうか。

だからこそ、同じように催行を決めた福男競争が「開門（の）神事」という呼称へと変化したのだといえる。先述の 1988 年の神戸新聞の記事は、忌籠神事のあとの競争までを神事と捉え報道しているのが興味深いが、この神事の拡大解釈を翌年神社が自粛ムード打開のために意識的に行ったともいえる。

ちなみに、大阪の今宮戎神社では風物詩の宝恵かごを自粛してしまい、さびしい本えびすとなってしまったことが記されている。(1989（平成元）年 1 月 10 日神戸新聞夕刊）便宜上作り出された言葉であったかも知れないが、この後新聞紙上では急速にこの神事という語で定着をしていく。

5 節　マスメディアによる報道の増加

「神事」「選び」の語が定着した原因は何であったのか。これまでの聞き取りなどの結果、定着させた主体としての神社の広報の姿勢が大きいと考える。朝日新聞を例にとると、1980 年代以降は十日戎の報道のされ方として、阪神版であっても「今宮戎神社が主、西宮神社が従」という書かれ方が多くなっていった。これは、阪神間が「大阪・神戸双方の郊外」という性格を持つ以上、大阪の文化が入り込みやすいこともある。十日戎自体の規模も、露店数や参拝者の数ではやはり今宮戎神社に軍配が上がっていた。その中で、西宮神社は広報によって、この開門神事を使って多くの人に認知させていこうと取り組んだのである。

1992（平成 4）年より西宮神社が、広報活動の方針として打ち出したのが「(西宮で行われる）十日戎の社会的認知を高める」ことであった。関西で当時認知度の高かった十日戎の行事と言えば今宮戎神社の福娘であった。そこで行われる、「ミス福娘コンテスト」が有名になっていた。西宮神社も「えべっさん」に似た人を「ミスターえびす」として、表彰することも行っていたが、西宮神社の十日戎に関する関西一円の認知度がそこまで高まったとは言えなかった。そこでこの「福娘」に対抗しうるものとして、「福男」があるのではと考えたのである。この経緯で、「開門神事福男選び」の広報強化が決定されたのである。

具体的には、1993（平成 5）年の十日戎開門神事より（1）参加者への景品の授与（当初は 300 名のちに 1000 名を対象に）(2）神事の由緒を記した看板の設置（3）福男への景品の授与（初年度は書面では検討中となっているが、その後認定証・御神像、協賛商品（酒・米・焼き鯛）が正式に決定)。1994（平成 6）年からは（4）報道機関・出版等を通じての広報活動が加わった。1995（平成 7）年からは（5）福男による協賛企業からの賞品の福引（ディズニーランドペアチケット）も加わることとなった。賞品は協賛企業から集まりだし、私が初めて参加した 1997（平成 9）年には景品は大きな「福袋」となっていた。

この結果､参加人数は 1988 年の 200 名から 1999 年で 2000 名と 10 倍にも増加した。走り参りに参加する人々以外に、福袋を目的として集まる人々の増加にも繋がり、結果として多くの人が訪れ、新聞・ラジオ・テレビといった在阪のメディアも、これまで以上に取り上げることとなっていった。

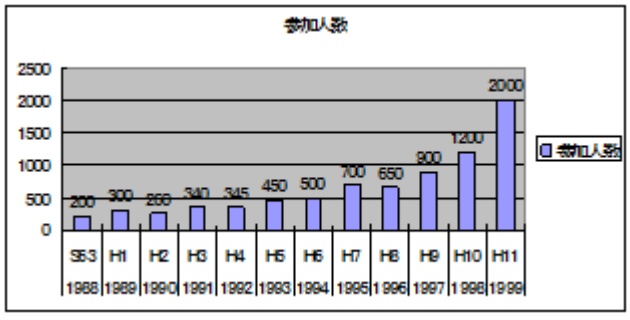


表 : 1988 年～1999 年までの年次別開門神事参加者数
（新聞資料からのデータより荒川作成）

神社側の動きによって、「神事・福男選び」の語が生み出され、その広報によって、認知度が高まっていったのは確かだろう。その中でも興味深いのが、その後も説得性を持って「神事・福男選び」と 20 数年経っても使われ続けているところである。

競争するのではなく、「選ばれる」のである。この語の創出と神社の積極的な広報によって 1998（平成 10）年から神戸新聞では「開門神事福男選び」の語が定着する。忌籠が神事で、その後門を開けて参拝者が入ってくる。彼らが一番を競ってただレースを行うという見解ではなく、神社側も福男が「選ばれる」神事なのだという認識を持ち、それがマスメディアによって流布することとなった。まさに、「創られた伝統」ならぬ「創られた十日戎開門「神事」福男「選び」」である。

禰宜の吉井良英は、参加者が増えていったこの期間でもっとも大きな出来事は、1995（平成 7）年 1 月 17 日の「阪神淡路大震災」であったという。西宮神社自体も被災し、絵馬堂の全壊をはじめ、大練塀、本殿と多数の箇所で被害を受けた。西宮神社の氏子地域は被災地区となってしまったが、反面、その後の復興していく地区として取り上げられることにもつながったのである。そのこともあってか、次年度 1996（平成 8）年 1 月 10 日の新聞（夕刊）では、「復興」のシンボルとして一面に載せる新聞社が現れた。これまでの新聞紙上では、開門神事の扱いは、10 日が平日であるならば当日の夕刊の 3 面、日祝日であるならば次の日の朝刊の阪神（地方）面であった。

先ほどの指摘のとおり、西宮神社による積極的な広報がある前は、その記事さえも他（主に大阪の今宮戎神社や神戸の柳原蛭子神社）の十日戎の話題が大きく取り上げられ、西宮の十日戎に対する報道は小さくなったり、なくなったりすることもあった。だからこそ、一面で取り上げるということは、メディアにとって「震災と西宮神社」という復興への道しるべとしての組み合わせが生まれたことによる特例であったかもしれない。

ダッシュでつかめ 一番福

震災・1年

図：1996（平成 8）年 1 月 10 日朝日新聞夕刊一面

記事の内容は以下に記す。

> ダッシュでつかめ　一番福　肌を刺す寒さとなった十日早朝、「本えびす」を迎えた兵庫県西宮市のえべっさんの総本社、西宮神社で、一番福をめざして若者たちが境内を疾走する「走り参り」があった。江戸時代から伝わる神事。今年は「震災を乗り越え

よう」という願いがこもった。午前六時、震災被害の修復を終え、朱を塗り直された表大門の扉が開いた。徹夜で待ち受けた約六五〇人の若者らが一斉に走り出し、約二百メートルの参道を駆け抜けた。（後略）

ここで読み取れることは、西宮神社が「総本社」であることを、阪神間のみならず大阪本社版が配布される全域（近畿圏・中国・四国）に知らしめる結果となっていることである。これまでの新聞資料よりも開門神事自体の説明が丁寧であり、明らかに阪神間以外の読者を対象にしている。もともと戎信仰の強い地域は、九州を含めた西日本である。例えば九州では佐賀市内に、江戸期からのエビス像が 300 体近くあることが知られている。西部本社があるため九州地域にまでは広報出来ないながらも、元来戎信仰の強い地域に「えびすの宮総本社、西宮神社」の存在を知らしめることに繋がったと考えられよう。

もうひとつ、同日（1996 年 1 月 10 日）の神戸新聞の記事も取り上げる。

本えびすを迎えた西宮市社家町の西宮神社で十日早朝、恒例の「福男選び」が行われ、待ち構えていた約六百五十人の参拝者が一番福を目指して競った。見事に福をつかんだ上位三人は、全員が今年、成人式を迎える若者。しかし、震災ではそれぞれ自宅が全半壊する被害を受けており、「早く町が復興しますように」と願いをかけた

図：1996（平成 8）年 1 月 10 日神戸新聞夕刊

とある。福男（一番福は大阪体育大学学生、二番福は陸上部出身の会社員、三番福は明石高専 5 年生）全員の家（西宮市、芦屋市）で被害が出ている現状で、復興を願ってというメッセージが何より伝わる紙面となっている。

書かれ方として注目したいのは、「福をつかんだ」とはあるが、これまでの変遷で神社側の主張でもあった「福男選び」という語がまず先に来ていること。そして、震災によって復興という広範囲な対象へその「福」の概念が広がっていることである。

より踏み込んで言及するならば、自らの脚力を競うために参加し、福をつかみ取るところから、「復興」という概念がメディアによってさらに付与されることにより、「地域のために参加する神事」という新たな意味づけが始まる端緒となったのではないか。

震災がもたらしたものとしては、この 1996（平成 8）年の十日戎に関して、テレビでの報道でも変化があったと吉井良英は話す。新聞社と同時に、これまでも在阪のテレビ局（主に ABC・MBS・関西テレビ・読売テレビ・NHK 神戸放送局・サンテレビ・テレビ大阪）

が来て取材を行い、平日ならば夕方のニュース番組の中で取り上げることも多かった。しかし、1996 年には「毎日放送（MBS）のキー局」となる東京放送（TBS）が、この神事を 1 月 11 日 22:00 からオンエアされた「ブロードキャスター」に取り上げたのである。

高度経済成長期に確立されたＴＶネットワークによって、日本全国で「十日戎開門神事福男選び」が流れることとなった。吉井によると、1996 年は「関西のとある神社」としか報道されなかったらしいのだが、この報道が好評だったこともあり、次年の 1997 年は TBS が取材クルーを前日より派遣させて、独自で取材・編集して開門神事に関してドキュメントとして報道をすることとなった。また準キー局の大阪毎日放送（MBS）でも、午前 6 時から「史上初の」生放送として全国放映を打った。毎日放送社報の内容が詳しい。映像技術部の山田耕児氏による生中継体験記である。

毎日放送社報　平成9年2月1日

『おはようクジラ』
西宮戎開門神事生中継

1月10日

記事：1997 年 2 月 1 日毎日放送社報
下写真の右側が権禰宜広報担当（当時）の吉井良英

その仕事は『おはようクジラ』“西宮戎　開門神事　生中継”。今までニュースでの ENG 取材はあったが、生中継をするのは、鎌倉時代から始まった開門神事史上初のことであろう。下見をしながらカメラ台数、カメラ位置などいろいろなことを考えたが、全長 200m、20 秒あまりで終わってしまう出来事なので、あまり台数を増やしたり凝ったことをしても生かしきれないとスイッチャーの長谷川氏と相談し、4 台のカメラに絞った。西宮神社の宮司さんやディレクターとの当日までの打ち合わせも厳密さを要した。何しろ早朝の番組である。OA は 6 時ジャストからなので、それより 1 秒でも早くスタートしてもらっても 10 秒以上遅れてしまっても困る。（中略）そして当日、優秀なスタッフのおかげで準備はスムーズに進み、『朝イチバン』の中での前振り、5 時 59 分からの TBS ローカル番組から 6 時の本番へとなだれ込み、順調にこなしていく。6 時ジャスト。打ち合わせどおりに太鼓が鳴り、門が開く。一斉に飛び出す人の波。来栖アナウンサーの実況とともにあっという間にゴール。その間わずかに 27 秒。今年も去年に引き続き大阪体育大学の Z さんが一番福に輝いた。この 2 分足らずの中継でわれわれは燃え尽きた。西宮戎初の開門神事中継は大成功に終わりました。MBS 関係者の方々に、今年多くの福が訪れることを願います。

この報道に関しては、関東地方でも高い視聴率を生み出した。このことにより全国的な認知度が高まり、信仰や物忌・忌籠といった源流があってから出来上がってきた「開門神事」という歴史的側面よりも、「スピードのある走り参り」という側面がより広範囲に伝わることとなった。同時に現在では年中行事として行われているテレビ局による生中継が、1997 年にはじめて行われたことが明らかになった。着目点としては、「打ち合わせも厳密を要し

た」「打ち合わせ通りに太鼓が鳴り、門が開く。」という箇所である。マスメディア、特にテレビが生中継として入り込むことで、これまで以上に時間が厳密に守られるようになった。電鉄が閉門時間を決め、そして「次に開ける時間」を夜明けという漠然としたものから、午前 6 時開門と定めた大正期のような動きが、マスメディアの提起によって、放送時間の関係上より厳密化されたという点で実に興味深い。さらに、この生中継による競争が常態化することによって、実際に走る福男たち、とくに「走る速さ」にこれまで以上に焦点が当たることとなった。読売新聞は次の年の開門神事が行われる直前の 1997 年 12 月 27 日に、「若者」との表題でM氏とZ氏という好敵手を取り上げ、これまでさほど留意されていなかった「27 秒」という完走時間まで記事に書くようになっている。

若者
西宮のえべっさん 一番福争い
27秒にかける好敵手2人
30メートル四方 紙片が「御利益あった」
会社員 森本晋由さん 22
4勝目へ執念
大阪体育大4年 善斎健二さん 22
3連覇目指す
開門神事・福男選び

記事:1997 年 12 月 27 日読売新聞

以上の流れから、「開門神事」「福男選び」の語については西宮神社が主体的に語句を選び、1995 年の阪神淡路大震災からの復興のシンボルとして新聞、テレビといったメディアが報道を一気に加速させたために、語句としては「十日戎開門神事福男選び」がこれまで認知されていた範囲以外の人たちにまで急速に広まることとなっていったと結論付ける。その過程で広まった神事ではあったが、神事の特性上、「速さ」の面ばかりがクローズアップされることとなり、「忌籠」などといった詳しい内容については広まることはなく、「走りのイベント」として広まることにも繋がったと考えられる。

この章では、開門の行事が生まれてから現代まで続く流れを、主に文献資料を中心として、適宜当事者のコメントを加えた上で追ってきた。次章においては、私が調査を始めた 1997 年から現在に至る流れで、この神事が実際どのように行われてきたのかについて、参与観察とインタビューから明らかにしていきたい。

---

① 現在、この阪神国道線は、阪神バスの路線となっており、現在では「西宮戎」という停留所がある。戦前に関しても、「西宮戎」停留場があったため、なぜ戦後になって臨時の停留場を置いたのかが分からないが、戦後しばらくは、間引いた運行形態が採られていたかもしれない。ただ、市の中心部であり、他のバス路線との接続停留所でもあるため外してはならない停留所にも思えるのだが、この経緯は不明である。

② 恵方に関しては、戦前の記事、特に明治から大正にかけてはたくさん見られる。戦後でも恵方に従って、十日戎へ出かけている人が多いのは興味深い。

③ 彼は、1990 年代でも同じ場所で演説を続けた。「神を恐れる H.K.」と題打って演説会を催すのが、選挙前の土下座行脚と共に名物であった。淡路島の津名に強力な地盤を持ち、明石架橋を推進していた人物である。淡路島という、えびす信仰との関連がある地

域だったからこそ、この神社の前で辻立ちしていたのかもしれない。
④ 尼崎の倉持戎神社は、当時様々な企画を練って、西宮神社の十日戎の人気に相乗して盛り上げていた。阪神阪急とも参詣電車としての意味合いも持っていた。そのため、西宮神社沿線のその他の十日戎も賑わうこととなった。倉持戎の「キャバレーのダンサーたちを出演させる」というやり方は、決して突拍子もない構想ではない。成恵珍の「今宮戎神社「十日戎」における宝恵駕行列と福笹を巡って」の中で、芸妓の乗る宝恵駕行列を戦後復活させようとするも、事故で断念せざるを得なくなり、華やかさの演出のために、1950 年に一度創っていた福娘を、1953 年から改めて創り直し、募集を始めたという［成 2009：142-143］。十日戎と芸妓というのは密接な関係であり、キャバレーの女給を使った演出も、今宮の事例からヒントを得ていたのかもしれない。
⑤ この「入り口としては地域社会（地縁）」があるけれど、何らかの理由でそこから離れてしまい、青年期になってだんじりを曳きたくて若戎会に入る動きは、中野紀和の「若者の成長過程の一時に訪れるエアポケットのような空白を埋め、浮遊する彼らを受け止めている」ような「有志チーム」的［中野 2007：103-114］なものと類似している。
⑥ 逆に戦前と変わらない記事は「雑踏」、「迷子」、「スリの検挙」、「賽銭泥棒」などであり、違った意味での「ハレ」の場が繰り広げられていた。戦後すぐでは、時勢を反映してか「奇術師がヒロポンを隠れて打っていたのを検挙」されたり、「見世物小屋でストリップが登場し、その前で PTA が店を出す」姿などが取り上げられている。
⑦ この阪神国道から西へ延びる国道 2 号線は、もともとの西国街道である。この西宮は江戸期に西国街道と大阪への分かれ道として発展し、そのランドマークとして西宮神社があったこと、街道自体が年を経て西宮神社を通るように付け変わった歴史を考えると、高度成長期の変容も含め、西宮神社がしたたかにこういった歴史の流れにうまく対応した、と言えるのではないか。
⑧ この「地元消防団が手を引いてしまった」時期を考えると、これは 1930 年代後半から 1940 年代であろう。戦中・戦後期に何があったのか。当事者はほとんどいない状態で、文献としても残っていない。結果として、門開けと同時に門前での秩序維持を務めるに適当な消防団や青年団が手を引いてしまったことが、1966 年、2004 年の事件になったとも言えるだろう。本来、祭りとはアノミーの状態で行うものかもしれないが、秩序を内から、または神社側から作られなかったために、結果として 2008 年の行政の介入にまでつながったとも言える。
⑨ 現在では、マグロに硬貨を貼り付けることが行われている。漁業神である戎神のため魚類の奉納も多い。現在の三番福の副賞は、焼鯛である。
⑩ ここで注目したいのは、服喪している団体として、昭和 50 年代の福男競走を盛り上げた、漁業関係の団体である。平山［平山 2010：154］の論考の中での「普通の参詣人」と「講中」という分類が、昭和が終わっても有効である所が興味深い。

第 4 章　参与観察、インタビューから

1 節　参与観察に入るまで

私がこの神事のことを知ったのは、1996 年の 1 月であった。私は 1994 年 8 月から 1995 年 6 月まで交換留学生としてアメリカに派遣され約 1 年間ホームステイをさせてもらいながら現地の高等学校に通学する機会に恵まれた。一般にバイブルベルトと呼ばれる深南部のアメリカジョージア州の白人家庭でのホームステイは、自身の人生にとって刺激的であった。その留学のさなかの 1995 年 1 月 17 日に、阪神大震災が起こったのである。西宮市の自宅は全壊し、幸いに家族は無事であったが、友人を数名亡くしてしまうという悲劇に見舞われた。被災した友人を助けに行こうとも、物理的に難しい状況下に置かれ、また友人の死という重い現実の際に、アメリカにいる友人たちは、キリスト教的な教義によって、私の精神的な混乱を和らげてくれようとした。この時おそらく初めて宗教に実体験として触れた経験が、日本における宗教や背景となる文化をさらに調べ、深めていこうとする強力な原動力となっていった。帰国後、進路を考える際に、このような問題意識から、大学に進学できるなら文化人類学を専攻しようと心に決めていた。その矢先に夕方のニュース映像にて目にしたのがこの「開門神事」の映像であった。

西宮神社に関しては、実家が氏子の区域に含まれており、七五三の時から、十日戎、初詣とお参りしている神社であった。小学生時代は私立の小学校に通っていたが、地元の子ども会に所属していたこともあり、子どもみこしを担いで例大祭にも関わっていたため、私にとって一番身近な存在の神社であった。にもかかわらず、この「開門神事福男選び」に関しては、18 歳まで知らなかった。まず自分が全く知らない神事が、西宮で行われていることにまず驚いた。そして、画面から伝わる走り参りの迫力に目を奪われた。最後の拝殿では転ぶ者もいて、何より境内を疾走するスピードが、陸上競技会を思わせるように速い。何という驚くべき、そして激しい神事が、それも私の地元であったのだろうか。

翌年、社会学科の大学生となり、後期には面接を受けて文化人類学のゼミナールに所属することが内定した。その 1997 年 1 月 10 日の午前 5 時ごろ、私はこの地元の神事を体験するために西宮神社の表大門へと向かった。自宅から徒歩 15 分ほどのところにある神社であり、去年の放映もあり、文化・祭礼のことを研究したいとの意味から自然と足が向かったのである。到着したのは 5 時半前であったが、すでに門前は人で溢れかえっていた。私は先頭から 20 列目くらいの場所で待つこととなった。その間にも、メディアがたくさんやってきた。1 人のリポーターは、走るといって割り込む。その他のリポーターが、最前列の参加者に大声でインタビューする。光量の強いライトが照らされ、まさに昼のような明るさの中、テレビカメラが記録していく。普段知っている西宮神社ではない。「ハレの西宮神社」がメディアによって創り出されていた。そして開門。ニュース映像としてあるような、太鼓とともに開くのではなく、門は突然開いた。混乱のうちに、周りの参加者とともに走りきった。しかし初めての参加では、具体的に参加者にインタビューするには時間も取れ

ず、参与観察と言っても、あくまで祭りの雰囲気を味わえただけであった。

2 年次になり、文化人類学のゼミナールのプロジェクト課題として、阪神間の文化に関して各学生が調査し、「阪神文化事典」を作ることが決まった。迷わず、私はこの西宮神社の十日戎開門神事福男選びを主題に取り上げることとした。歴史的な変遷を調べ、福男へのインタビューを試み、そして実際に最前列で走るという「参与観察」を行ってみて、なぜ多くの人がこの神事に参加しているのかを明らかにしたいと考えたのである。

2 節　はじめての参与観察

1998 年 1 月 9 日、私は最前列から参加することを考えて、夕方のうちに西宮神社の表大門に訪れた①。その際に、先客が 1 名いた。それが、この章の後半でインタビュー結果の提示を行う予定の、「えびす様に好かれた福男」H.R.氏である。その際には現在まで続く付き合いになるとは思いもよらなかったが、当時は調査者として H.R.氏に対して軽くインタビューをした。その後、数年来のタイトルホルダーである福男などが午後 7 時を過ぎるあたりまでには現れた。十日戎の参詣客の邪魔にならない場所で、10 数名が待機し、その中で主に在阪のメディア数社がインタビューを行っていた。参加者たちは、メディアに「キャラクターを作られる」「テレビ（局）が勝手にシナリオを作ってくる」などと漏らしていた。が、心底拒否をしている態ではない。10 日の午前 0 時になると、「忌籠のため」と称して表大門が閉められた。門の内側から報道陣がカメラを向け、一斉にフラッシュが焚かれた。しかしこれは、仮の閉門であった。この後、境内に何百軒と出店される、縁日露店のための清掃車や関係車両が通るため再び開けられることとなり、その都度門前に並び直さなければならなかった。最終的に閉門したのが午前 3 時。それから開門までの 3 時間は、参加者のウォーミングアップや参加者同士の交流の時間であった。そこで感じたことは、様々なところから来ているのに関わらず、そして走り参りであり競争という文脈から考えるとお互いがライバルであるのにも関わらず、「奇妙な連帯感が生まれている」ことであった。

午前 6 時に近づくと、500 名近くの参加者による押し合いが始まった。普通の祭りなら、この混乱を統率する氏子青年会なりがいるはずであるが、それがない。最前列にいる参加者が、悲鳴のように「押すなっ！」と叫ぶ。一旦は収束するも、すぐに繰り返される。全くの無秩序であった②。混乱の中で、開門の時を迎えた。開いた瞬間、私の記憶が無くなっている。時間にして 1 秒もないとは思うが、ふと気付いたら参道を他の参加者とともに駆けていた。コーナーに差し掛かると、自然と声まで挙げはじめていた。参与観察者として参加しているだけに過ぎなかったはずが、祭りの高揚感なのだろうか、自然とこの高揚感に酔っていた。30 秒を過ぎて、拝殿まで走り切った後は福男にはなれなかったが、何とも清々しい気持ちになった。

ただ走ってお参りをするという実に単純な行事である。イベントと断じる研究者やマスメディアの関係者もいる。しかし、歴史や文献を調査する中で、そこには柳田国男のイミ・ミカリという祭礼の形式を色濃く残す「忌籠」が、神社の祭り、すなわち十日戎の軸とし

て存在していることを確認した。つまり、ここには現代の祭礼の在り方が詰まっているのではないか。同時に、氏子でありながら 18 歳まで地元の神事であることを認識していなかったということも本研究の動機である。また、初めて参加した際に祭事の実行者が見えづらかったことから、当調査対象の神事が、伝統的な民俗学や人類学の祭礼研究からは外れたところに位置するのではないかという仮説を立てた。だからこそ、現代社会における祭事を考察する事例となりうるのではないか、とも考えたのである。

これまで語られることの少なかった、この十日戎開門神事の歴史的変遷を明らかにすること、そして現在参加している参加者の定量調査と各参加者へのインタビュー、さらには参与観察することで現在の姿を明らかにしていき、なぜこの祭事に人々が集い、発展を続けているのか。歴史的、社会学、人類学そして民俗学的アプローチを行うことによって、この神事の全体的な把握をすることが出来るのではないか。そこから、現代社会における祭礼の在り方について考察をしてみたい。

3 節　1998 年の参与観察の詳細と 2004 年までの十日戎開門神事

この節では、あらためて 1998（平成 10）年の参与観察の内容の詳細を記して、それ以外に関しては年度ごとにどのようなことがあったかについて短くまとめたい。1998 年の参与観察記録を提示したのは、それがはじめて最前列から参加した神事であり、だからこその気づきが一番多かったためである。具体的に①参加者の顔ぶれ、②マスコミの取材状況、③スタート位置の決め方、さらには④開門まで参加者たちはどのように過ごし、⑤開門の瞬間でどのような身体的な気付きがあり、⑥開門神事全体に関してどのような感想があったのかの 6 点について述べたい。

①参加者の顔ぶれ

本論考でも、震災以降特に走りの速さに注目されるようになったと指摘したが、実際に 18 年前にも同じような予測を立てていた。私は前日 1 月 9 日の午後 5 時頃西宮神社の表大門に到着したのだが、前年二番福だった H.R.氏はすでに門前に到着し読書をしていた。その後午後 8 時から 9 時頃までの間に、前列で走るメンバーが揃うこととなった。私を除く周りの先頭集団のほとんど全てが、現役の陸上選手、あるいはその経験者であった。自称での最速は、この 1998 年（平成 9 年）の開門神事で一番福となった Y.K.氏（当時 19 歳）であった。100 メートル 10 秒 56 が自己ベストであると話していた。そして周りのほとんどの参加者が、100 メートルを 11 秒台で走ることができた。つまりこの福男選びは、「陸上競技会」と化していたのである。先述の H.R.氏（当時 21 歳）などは、この開門神事を「陸上の近畿大会みたいな高レベルの争い」と話していた。

②マスコミの取材状況（特にテレビ局の取材に関して）

1997 年は、キー局である TBS が取材に来ており、他の局も生放送していた。1998 年に関

しては、走る前の門前での取材は、UHF 局（テレビ大阪）一局であった。そのプロデューサーのアイディアで、いわばこの開門神事を「一番福レース」の形にして、ゲストに勝者を当てさせるという番組形式を考えていたらしい。これだけは誰が一番福になるのかが分からないので、タレントのベイブルース高山氏が門前に集う参加者の中から一応めぼしい走者にインタビューをしていた③。

③スタート位置の決め方

実際の場所決めは、参拝客の減る、午後 11 時半から 12 時頃になるということが、数年参加している参加者に聞くと、数年来の暗黙の了解となっていた。去年の一番福 Z 氏（22 歳）が、午後 7 時頃に登場した。これまでの活躍から大いにメディアに取り上げられ、参加者にも一目置かれる存在になっていた。H.R.氏は彼のことを「師匠」と呼んでいた。場所取りの開始を行動で示したのも、彼であった。

場所取りで必要な物は、マジックと段ボールを座布団 1 枚から 2 枚程度の大きさにした物、そしてガムテープであった。Z 氏の行動に促されて、みんなが場所取りをすることになるのだが、この順序は、門の前に来た先着順であった。このポジショニングに関しても、やはり「常連」は自分にとっての最良のスタート位置を心得ているようで、素早く自分の場所を設定していたのが印象的であった。去年の一番福 Z 氏は門中央よりも左に、去年の二番福 H.R.氏はそれよりやや中央寄り、私はその隣に。結果としてこの年の一番を取ることとなった Y.K.氏は、中央に陣取った。

④開門までの参加者の過ごし方

それから開門までの間、清掃等のために何度かの開閉があったが、午前 3 時ごろには完全に門は閉められることとなった。門前は、寝袋を持参する者、折りたたみの椅子に座る者と色々いた。私の隣にいた前年の一番・二番福は、前回の開門神事のことを語り合っていた。（二番福の H.R.氏は、去年三番福になった、「元一番福」の M 氏を妨害したとして、「ブロードキャスター」で報道され気が滅入っていた。よって、その報道についての批判が多かった。）話しながらも、参加者は気持ちが高ぶりつつあるようであった。午前 3 時頃よりいくらかの参加者がウォーミングアップをし始め、大半が門前に戻ってきたのは午前 4 時半頃であった。

午前 5 時にもなると、参加者はかなりの人数となっていた。目測で 300 名くらいいただろうか。参加者たちは走る準備をし始め、福袋目当ての近所の人たちも神社関係者から福引券をもらった上で並び出した。

この際に当初決めていた場所は、様々な要因で少しずつ動くこととなり、混乱が生じた。幾名かは、決めていたポジションが他人に奪われることとなり、いくらかの先頭に位置取りをしていた走者はまだ別の離れた場所でウォームアップなどをしていたため、本来の位置に戻ることが出来ないという事態が起こってしまったのである。

その最中にニュースのテレビカメラが来たため、参加者たちは色めき立ち、総立ちとなった。

インタビュアーが門前にまで入り込み取材を始めたため、テレビカメラに映りたい参加者によって押し合いとなった。このことによって、更に参加者の決めていた位置はかなり変更されてしまった。そして、その荒れたポジショニングが最終のものとなったのである。この混乱に前年の一番福である Z 氏は、精神的ダメージを受けていた。

この結果、逆にいい場所に陣取ることの出来た「運の良い人々」は、口では譲らなければいけないなどと話してはいたが、体がもう言うことをきかない。本音の部分では、いい位置から一番福を狙いたいというのが、大方の気持ちであったのではないか。

私も良い場所からのスタートとなり、あくまで体験ルポながら、「ひょっとして」という淡い期待を抱き始めていた。冷静を装ってはいたが、平常時とは全く違う状態で、午前 6 時を迎えた。

⑤開門の瞬間の身体的気づき

テレビで見た映像では、「太鼓が鳴った後」に門が開いている印象があるが、前年の 1997 年に走った際、それは本殿で鳴っている映像を繋ぎ合わせたものであり、実際は鳴らないことを学習した。そのため突然の開門にはさほど驚かなかった。にもかかわらず、門が開いた瞬間の私の記憶は飛んでしまっている。気付くと 30 メートルぐらい先の 1 つ目のカーブに差し掛かる直線上にいた。前に 5 人程が走っていた。時間としては一瞬である。

30 秒ほどして拝殿にたどり着き、三番福までが本殿にあがり、副賞をもらい、祈祷を受け、鏡割りをして、終了。後ろから、参拝客が福袋を引き替える為にぞろぞろとやってきたのが、現実に引き戻されたようで記憶に残っている。

<第三種郵便物認可> 平成10年(1998年)1月10日 土曜日 夕刊 産経新聞

えべっさんも注目 つわもの1200人 境内疾走

福男は新人

大体大・吉田さん「一番福」とった！

西宮神社

本えびすの十日、商売繁盛の神様「えべっさん」の総本社、兵庫県西宮市の西宮神社（吉井良隆宮司）で、伝統の「開門神事福男選び」が行われ、徹夜で待った約一千二百人が夜明け前の午前六時の開門と同時に境内をダッシュ。「一番福」は注目された〝あの二人〟ではなく、初挑戦の大阪府泉佐野市の大体大一回生、吉田光一郎さん（二）に輝いた。

同神社の表大門前には宵えびすの九日夕方から、トレーニングウエア姿の若者らが姿を見せ始め、厳しい冷え込みのなか、昨年を三百人も上回る〝つわもの〟が詰めかけた。

この日午前六時、表大門が開かれると、一斉に境内へ。本殿まで約二百㍍の石畳を駆け抜ける「走り参り」は例年にない熱戦に。三連覇を目指した大阪府熊取町の大体大四回生、善斉健二さん（三）は惜しくも四位。また平成七年まで三連覇したライバルの横浜市の会社員、森本晋由さん（三）は関東地方を襲った大雪のため参加できなかった。

福男として祝福される上位三人のうち、一、三位は〝新人〟が奪取。

「自分の分までがんばって大学の陸上部の後輩に一みごと一番福になった吉田さんは「一年の初めに幸せをつかめてうれしい」と笑顔をみせた。

てほしい」と欠場した森本さんから前日、電話で激励を受けたという善斉さんは、「くやしいけれど、同

▶▶善斉さんV3ならず／宿敵・森本さん大雪で参加できず

「開門神事福男選び」で本殿を目指しスタートを切る参加者（右）。初挑戦で一番福に輝いた吉田光一郎さん（左）＝兵庫県西宮市の西宮神社

産経新聞 1998 年（平成 10 年）1 月 10 日夕刊 白い法被姿が筆者

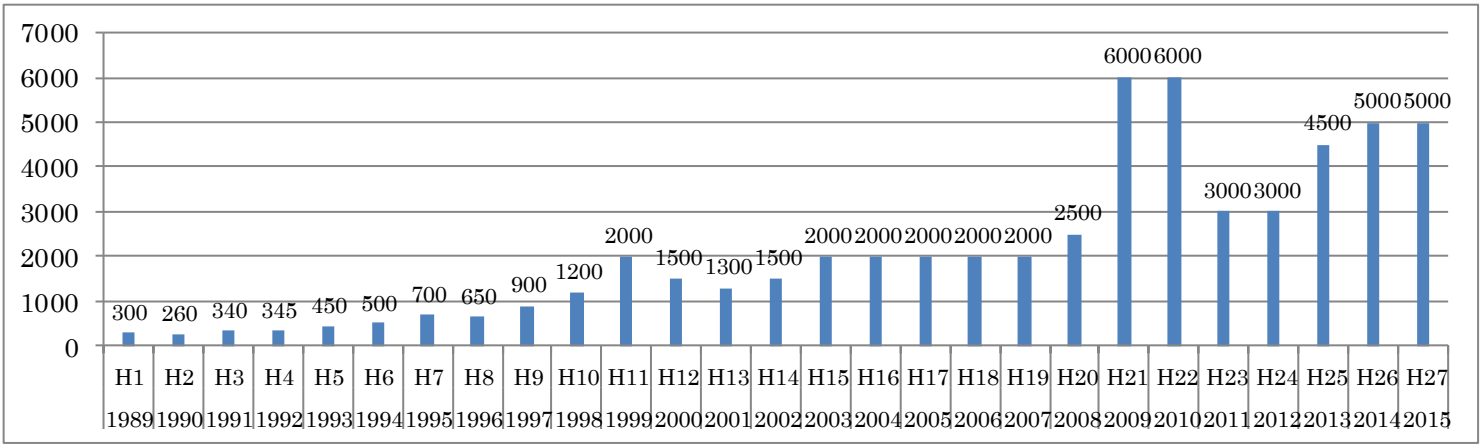
⑥開門神事全体を通しての感想

一番を狙うため走ろうとする人、テレビに映りたいがため目立とうとする人、「福袋」を求めて来る人、信仰のために参詣する人、あらゆる人々が、この 1 月 10 日午前 6 時に「門」を通ったわけである。自身としては、2 回目、最前列からの参加は初めてとなるこの神事であったが、「様々な人が、各自思い思いに走る」、そんな祭なのであると体感した。

「一般人参加型」とでも言おうか。そのために、各人の紐帯は弱いものではあるが、それぞれのグループがこの神事を機会に固まりだすところなど、この神事が人々のネットワークづくりに役立っているのではないかといったようなことも窺えた。そしてなにより驚いたのは、「開門」の後に「記憶」を失ったことである。それまで、「忌籠り」「ミカリ」「イミ」のような用語で謹慎状態が十日戎に入る前には必須であったことを知識として知ってはいたが、実際の祭りの盛り上がりに自分自身が冷静でなくなってしまう、つまり非日常の状態になることを経験した。これは、厳重な忌籠りという謹慎のプロセスはないものの、「常人の状態と異なった神に近づく清浄な身体に身かわりをして、翌十日戎に参詣するに適した神人和合の境地」［吉井良隆 1990：61］の疑似体験だと感じた。

私は、この時の神事に参加する前までは、1998 年のみの一度だけ最前列での参与観察を行おうと考えていた。ところが、この一度目の経験が強烈過ぎて、2004 年まで走り続けたと言っても過言ではない。私の脚力ではとても福男にはなれない。しかし、門が開くことで、とてつもないエネルギーがそこに集中し、解き放たれる。その開放・解放感にかつて得たことのない快感を味わった。7 回その場で参与観察を続けるうち、参加者へのインタビューの中でこの感覚を持つ参加者が少なからず存在こと も分かった。調査をしながら社会的には穏やかな紐帯を保ちつつ、神人和合といった十日戎で語られてきた常人の状態とは異なった状態の断片を味わえる、この神事を広く世間に周知させる必要性も認識するようになった。

私が最前列で参与観察を行った 1999 年から 2004 年までは、参加人数が前章で述べた報道などが奏効したこともあり、参加人数が 1000 人を上回ることとなる時期である。



表：1989 年～2015 年までの参加者数の推移（単位は縦が人数、横が開催年）

（新聞資料からのデータより著者作成）

ではこれ以降、具体的にはどのようなことがあったのか。各年度の神事を簡潔に述べる。2004年に関しては項を改めて述べるので、2003年度までの変遷を述べたい。

1998年度

それまで、神事の福男のための鈴紐が3本であったものが、1本に統一。神社側に確認すると、これは視覚的に見やすいことを狙っての変更。ちなみにテレビ収録が本格的に行われだした1980年代に、走るルート自体の変更（拝殿の側面から入るものから正面から入る形への変更）は行われている。一番福に「新人」Y.K.氏。陸上の国体選手であり、脚力のある人物。

1999年度

二番福2回のH.R.氏が最前列真ん中からのスタート。その真後ろに、私がいた。彼の鉢巻をきつく結いなおし、直前に「一番福になったら胴上げします」と話した。しかし拝殿直前にH.R.氏は転倒。転倒がセンセーショナルに取り上げられたこともあり、在京のメディアにも注目され、H.R.氏はその後の番組で「不幸男」として取り上げられた④。大阪体育大学の陸上選手で、前年度一番福のY.K.氏もよく知るS.S.氏が一番福に。

2000年度

H.R.氏が年末の交通事故のため不参加となり、友人がその志を継ぎ参加。一昨年度に引き続き、Y.K.氏が一番福。1997年の一番福、Z氏が二番福。一番福が東海地方出身であったため、中日新聞などこれまで報道のなかった新聞社も加わる。スポーツ新聞も、1999年度よりスポーツ報知が報道開始、他社も追って記事を出すようになる。Y.K.氏は、前年の1月10日が安息日にあたるとして、前年不参加の上で一番福返り咲き。

中日新聞　2000年（平成12年）1月

イエスの導き？福男

クリスチャン、一宮の21歳男性

兵庫・西宮　えべっさん競走　1番

商売繁盛の神様として知られる「えべっさん」をまつる兵庫県西宮市の西宮神社で十日早朝、本殿の参拝一番乗りを目指す恒例の「福男選び」が行われ、壮絶な競走が繰り広げられた。

同日午前六時、大太鼓の音を合図に表大門が開く と、徹夜組約七十人を含む約千五百人の参拝客が一斉に全力疾走。約二百㍍先の本殿を目指し、雨上がりの参道を駆け抜けた。

一昨年も一番福の吉田さんは、クリスチャンのため十日が安息日だった昨年は不参加。「今年から宣教師として派遣される。幸福を与えられるような人間になりたい」と話していた。

「一番福」をつかみ、贈られた酒だるを手にする吉田光一郎さん＝10日、兵庫県西宮市の西宮神社で

図：中日新聞2000（平成8）年1月11日

2001年度

昨年二番福のZ氏が一番福に返り咲き。高校生が多数参加しており、二番福に立命館宇治高校の陸上部S氏、三番福に県立西宮高校のサッカー部N氏。陸上部以外の選手が健闘した。また、「開門神事」そのものを目的として活動する福男サークルが神戸大学を中心に誕生した。福袋欲しさに来る人よりも、走ることに重きを置く参加者が増えてきたとも感じた。テレビを中心とする報道も昨年同様に多い。1999年に拝殿直前で転倒したH.R.氏は、ギプスを付けて登場。周囲からは、危険であるため出るべきではないとの声もあったが、無事に参加した。

2002 年度

報道が激化。順番をお互いで決めているのに、直前に飛び込んで前に陣取る若者[5]が数名出現。門の前での統制が取れなくなり、開門直前まで怒号が飛び交う。終了後、神戸大学の福男サークルのメンバーや H.R.氏らと、門の前の規律の保持について話をするようになる。表大門に来た順番で場所取りが出来る暗黙のルールがあったために、参加者によってはテントを持ち込んで、表大門横の神苑にて早くから泊り込む者も散見されるようになった。

2003 年度

更なる開門前の場所取り争いが激化。3 日位前よりテントにて泊り込む団体[6]が増えた。その中で、一番初めに来た消防士らで構成する団体が開門時の混乱をなくすため、リーダーシップをとって場所決めを行う。結果として、そのグループから三番福が生まれたが、何日間も門前で泊まるため、火の使用などで問題が起きるようになってきた。昨年度より非公式に会合を持つようになっていた参加者の有志が、神事後に主催者の西宮神社と何度か話し合いを持ち、「福男向上委員会」という名称で組織を作ることが出来ないかとの要望を出した。

以上のように、報道が過熱し、好奇心からの参加者は急増した。その結果、もともと決まりごとがなく、場所決めなどが暗黙の了解によって成り立っていたことが明確となった。同時に門を開ける人はいるが、直前の混乱を収拾する役割を担う人はなく、あくまで参加者の良識に任されているという実態が経年調査を行うことで明らかになった。

4 節　2004 年 1 月 10 日

平成となり、神社としての積極的な広報活動の成果も功を奏し、神事自体に参加する人数は飛躍的に伸び、先ほど挙げた表で分かる通り、1999（平成 11）年には 2000 名を超えた。曜日の関係もあって、2000 年、2001 年は新聞の調査では各々1500 名と 1300 名となっているが、この数字として 1989 年の 300 人から考えると 5 倍の数字となっている。

しかしながら、参加者が急増したのちも、開門前の門前の状況は、1975（昭和 50）年あたりからさほど変わっていなかったと考えられる。私が最前列での調査を開始した 1998 年、門の前に並び始めようとする人は夕方くらいから集まりだし、晩の 8 時頃から、前回の一番福だった人物が「そろそろ（場所を）決めよう」というような、「暗黙の了解」で物事が動いていた。暗黙の了解とは、「最初に来た者から、開門時のスタート位置を決めることができる」ということであった。その時間も極端に早いものではなく（それでも開門の 12 時間以上前ではあったが）、1 月 9 日の宵戎であった。

この「暗黙のルール」は受け継がれたが、人数の増加は先頭グループの混乱にもつながった。質問紙調査を始めた 2001 年は、その過渡期に当たったのである。この「早く来た者からスタート位置を決められる」という暗黙のルールを知り早々に陣取る参加者が、多数現れることになったのである。1998 年には前日の午前中に、1999 年には前日の早朝に、そして 2000 年にはサークル単位で参加をしていた団体がテントを張って一日以上前から並び始めた。2001 年

から 2003 年にかけては同様の行為がエスカレートし、3 日前から集まる団体も現れた。2004 年にはより長期間寝泊りをして「順番待ち」をする団体が複数現れ、門前の神苑の場所はさながらテント村か、キャンプ場かといった様相であった。

参加者が早く来ようとするのには、門自体の構造上の問題が一因でもある。一列に並ぶことができる人数は 12 から 13 名であり、門扉は中心から開く。よって、早く来て、良い場所を確保しなければ、いくら足が速くても福男にはなれないということが参加者の中での共通認識となり、またテントを使うなどといった団体が現れたことによって、時間に余裕のある大学生を中心にその方法が広まりだしたのである。また団体での参加が多くなったのも、この年度あたりであった。神戸大学には福男サークルができ、集団で参加していたのは 3 節の経年調査内での 2001 年の項でも述べた。

神戸大学生 福男サークル

に疾走する男たちを見て、「これや」と思った。

福男サークルを作り、01年から仲間と参加した。自宅周辺の路地を、境内に見立てて練習を積んだ。気持ちを鍛えようと、大阪―和歌山・潮岬や京都・福知山―日本海といった長距離も走り込んだ。サークルは現在12人。これまでメンバーの最高位は4番。糸川さんら4年生7人にとっては、本気で「福男」を狙える最後のチャンスだった。

門前の最前列中央の好位置から飛び出した糸川さんは途中まで2番手争いに絡んだが、4番に終わった。今春、東京で就職する。有終の報をとって来年も参加するという。

「練習量も減るから、今年ほどの結果は望めないかも。でも、一番福がとれなくても、違う形で周りを幸せにできる人間になりたい」

住宅地の路地で練習する神戸大福男サークルのメンバー。右から

（図：朝日新聞（2003 年 1 月 11 日）

このように、集団で参加するグループが増加したこと、また一晩のみを過ごすのではなく、門の外で数日間過ごすなど、それらの混乱が生じるのを避けるために、参加者自体が整理券の配布⑦を行うようになったのもこの時期である。また、最初に来たグループが音頭を取って走る位置を決めるのが定着したのも、この 4 年間であった。

その中で、「事件」が起きた。これも 3 節で述べたが、2003 年、2004 年において一番早く来て位置決めをした団体は、大阪市の消防士たちの団体であった。（右図： 2003 年 1 月 12 日神戸新聞）

福男めざダッシュ

開門神事福男選び

健脚自慢の2000人

ワイド写真帳

彼らは非番を利用したため、早くからの泊まり込みが可能となり、2004 年 1 月 10 日には、最前列をこの団体が占めたのである。2003 年度も同様のやり方で、真ん中の 1 名の人物が独走するも、最後に転倒し三番福になった。そして 2004 年はより強化し、他の参加者に対するブロックをも行った。その結果、見事に一番福となったのだが、その映像を見ていた全国の視聴者から「アシストを行っていたのでは」との疑問が呈され、インターネット掲示板ではその書き込みが集中する騒ぎとなった。

事実、参与観察をし、それまでこの神事に関する研究を続けていた私にも取材の申し込みが来た。私は、「これまでも、地元の中学校などの先生が生徒を複数名走らせるというやり方で（ブロックはしていないが前列を独占して）勝ったこともある。つまり純粋な陸上競技ではないので、考えられない戦術ではない。この勝ち方が良いか悪いかは、私が言えることではない」と話したのだが、それが次の日に以下のような記事として掲出された。

2004年(平成16年)1月11日(日曜日) 読売新聞 朝刊

えべっさん 西宮神社 苦笑い

「一番福」仲間がアシスト!?

トップを切って走る消防士の後ろで、同じ上着姿の一団が後続をブロックしているようにも見える（10日午前6時、兵庫県西宮市の西宮神社で）

えべっさんの総本社、兵庫県西宮市の西宮神社で行われた十日えびす恒例の「福男選び」で、トップで本殿に駆け込み「一番福」と認定された大阪市消防局の消防士22を助け、他の参加者を妨害した仲間がいるとして、十日、市消防局などに抗議の電話が相次いだ。参加者には「競技でないのだから、大目に見ても」との声もあるが、同局は「騒ぎになった以上、事実を確かめたい」と、消防士から事情を聴く考えだ。この行事は、神社表大門から本殿までの約二百メートルを走って参拝、到着順三位までが、その年の「一番福」を巡る参拝客の競り合いは

「スタート妨害」抗議殺到

考えだ。（中略）一位の「一番福」を巡る参拝客の競り合いは年々加熱。今年は六日夜から表大門付近に場所取りの人が集まり始め、この日には約二千人が参加した。大阪市消防局によると、この日の夜、ニュースで見たという市民らから「二番手以下の前に立って妨害している人がいた。トップの人を助けたのでは」などの電話が五件あった。また消防士が住む市の消防本部にも同様の抗議電話が十件以上、寄せられたという。参加した神戸市内の会社員（二四）も「前の人にブロックされ思うように進めなかった」と言い、初参加した兵庫県内の男性は「スタートと同時に（消防士の）仲間が腕を組みようにして進路を阻んだ」と話していた。消防士は「確かに仲間らと一緒に走ったが、妨害行為は一切ない。ねたみの声があるのでしょう」としている。福男に関する著作があり、毎年参加している西宮市の高校教諭は「（妨害は）よくあること。周りに『ブロックがすごかった』との声もあったが、福男選びは陸上競技ではない。チームプレーで勝つのもありだ」と話している」（上図 2004 年 1 月 11 日読売新聞）

この報道が、インターネット版のニュースに欄も掲示され、Yahoo! JAPAN のニュースサイトにも掲載された。この年は連休だったこともあり、多くの人がこのサイトを見て、また「2 ちゃんねる」などの掲示板ではいわゆる「祭り」状態となってしまった⑧。この結果を受けて、一番福はこの開門競争が始まって以来の福男返上を 12 日夜に行った⑨のであった。

神戸新聞

『一番福』スピード返上 西宮神社

商売繁盛の神様「えべっさん」の総本社として知られる西宮神社（西宮市）の「福男選び」で、「一番福」と認定された大阪市消防局の男性消防士三人を助け、ほかの走者を妨害した人がいると抗議電話が同市消防局に相次いだ問題で、この消防士が十二日夜、西宮神社を訪れ「一番福」の認定証を返上した。

消防士は「職場に抗議の電話が殺到したことなどで、精神的に疲れた」

妨害疑惑の大阪市消防士

「抗議殺到、疲れた」

と話している。

西宮神社によると、いったん認定された「一番福」が返上されたのは初めてだが、新たに「一番福」を選び直すことはしない。神社側は「本人の意思を尊重した。理由は聞いていない」と話している。

十日早朝行われた福男選びは、正門から本殿までの約二百メートルを走って参拝、到着順三位までがその年の福男と認定される。

図：神戸新聞（2004 年 1 月 13 日）

この事件によって、門を開ける・福男を認定する主催者の神社の存在はあるものの、急激に増加した参加者に氏子・神社が対応できていなかった実態が明らかになった。図らずも、この事件があったために、参加者と神社が一緒になってこの神事を運営していこうという機運が生まれることとなった。

5 節　各時代における福男の語りから

1.開門行事創生期の福男 T.T.氏

福競い参拝が常態化していく中で、新聞紙上で何度も一番に参詣する人物として歴史上はじめて名前が挙がったのが、この T.T.氏である。1937（昭和 12）年に「16 年間一番福」だった人物として挙げられ、一番福 17 回、三番福 1 回を獲得した。以下は、1997 年にご遺族へのインタビューを行った内容である。

彼は兵庫県多紀郡丹南町の出身で、1900（明治 33）年に生まれた。新聞紙上からの逆算では 1921（大正 10）年には西宮に在住していたと推測されるが、それよりも前に阪神間に来て製材関係の仕事に就いていたとのことである。

生前の彼はとても信心深かった。毎月初めには伏見稲荷に、21 日には甲山大師にお参りに行く、「神仏熱心な人物」だった。あまりにも熱心であり、他所の墓参りに行くほどであったという。そしてこの信心深さが最も発揮されたのが、西宮神社であった。365 日欠かさずお参りをしていたとのことである。戦後は一時神戸市東灘区に引っ越していたものの、新たに構えた製材店は西宮神社の辺りとした。そのこともあり、神社の周りの道を毎朝清掃していた。そのため戦後建設省近畿局（当時）から表彰されたこともある。

昭和 14 年 1 月 11 日大阪朝日新聞阪神版の中で T.T.氏は、「数日前から不快で出場が気遣はれていたが颯爽たる青年団服を着て登場」とあり、新住民として、十日戎の時期には大きく活躍していたことが推察される。彼が合計 17 回もの間一番福になれた要因は、この戎様に対する「ひたむきさ」だった。遺族が指摘するように、小回りが利く体型だったこともあるだろう。同時に、旧来からの氏子や参詣者たちに彼の信心深さが認められていたからこそ「一番福」だったのではないか⑩。（右記事は昭和 14 年 1 月 11 日の大阪毎日新聞、丸で囲まれた各個人写真の上から 3 番目が T.T.氏。）

彼の戎に対する思いは戦中戦後を挟んでも、変わることはなく、家が西宮市外にあった時にでも毎朝西宮神社

にお参りをし、1 月 10 日の早朝参詣にも毎年参加していた。後には氏子青年会組織である「若戎会」などの立ち上げにも関わった。1991 年に亡くなられたが、本人は晩年、「この長寿は戎様の御利益」であると話していたとのことである。まさに黎明期の福男、彼が報道媒体に載ることで知名度が増し、門開けの型が出来たと言えるだろう。

2.戦時中の福男 U.K.氏

ここでは昭和 20 年の一番福に関して述べたい。第 2 章で当時の時局色が濃い新聞の提示を行った。この福男競走の後、西宮空襲を受け、拝殿が焼失するとともに、境内の忌籠を行う上で重要な南門や大練塀までが焼失してしまったことも述べた。

つまり、この U.K.氏が戦前の忌籠を行った形での最後の一番福である。当時彼は、関西学院中学（現関西学院高等部）の 5 年生であった。彼はこの時はじめての挑戦ではなく、その 2 年前（昭和 18 年）に三番福、1 年前（昭和 19 年）に二番福を取っていた。ちなみに昭和 18 年の一番福の T.Y.氏（1995 年 1 月 17 日震災にて死去）とは、小学校時代、先輩、後輩の間柄であったこともあり、参加する数年前よりこの開門行事に関しては知っていたとのことであった。氏が初めて十日戎に訪れたのは、小学生の時であり、親に連れて行ってもらったとのことである。境内で開催していた「木下サーカス」を観た記憶があり、当時の大排気量のモーターバイク「インディアン」を使ってのバイクサーカスが催されていたことなどから、通常とは違う「お祭りの時間」がそこにはあったとのことである。

写真：U.K.氏（1999 年筆者撮影）

中学生（現在の高校生）となった彼を、強く印象づけさせるようになったのは、「一番参り競争」でもらうことのできる商品の多さだった。中でも、特に「米俵一俵」は魅力的であったとのことである 。第六高等学校などの旧制高等学校への進学を考えていたというように、経済的には厳しい環境になく比較的恵まれていたが、都市部で食料統制を受けていたために、「米俵」というのは魅力的に映ったとのことである。それから、毎年 1 月 10 日には表大門の開門を待つようになった。当日は午前 3 時頃には起き出して、門前に並び、走っていた。そして昭和 18 年が 3 位、19 年が 2 位という結果であった。

U.K.氏は、昭和 18 年の旧制中学 3 年生の終わりから、学徒動員で、今津の川崎製鉄に「出勤」していた。この昭和 20 年 1 月 10 日も出勤日となっており、「出勤途中」にこの一番福競走に出ようと思ったとのことである。その為、友達と一緒にその日は午前 4 時頃から門の前で待っていた。

U.K.氏が参加した昭和 18 年から 20 年の開門に関しては、各人のスタート位置などはまだ決まっていなかった 。いわば喧嘩をして、良いスタート地点をとっていたのである 。そのため「腕力」が必要だった。この神事では何度も指摘したように、走る速さと共に、「いかに自分のスタート位置が門の中央にあるか」で決着が付いてしまうので、このポジショニングに関しては各人が特に必死になって行っていたようである。「まるで喧嘩でしたよ」とのことであった。

U.K.氏は前年、前々年も、好成績を収めていたため、どの位置から出走して、どのようなコース取りで走るのかなど、かなり要領を得ていた。出走前に彼が行った秘策は、次のようなものであった。自分の体が門の中央に来ると、みんなが押し合いへし合いしているのに関わらず、「座った（屈み込んだ)」のである。U.K.氏いわく、「これが勝った原因だった」。つまり、座ったことで周りの圧力に押し流されることなく、低い位置で「真ん中の最良の位置」を守りきった。また、現在の開門神事と違い門の敷居が高かったこともあって、始めの出だしで転ぶことも多く、その対策も兼ねていた。つまり門が開くとすぐに「カエルのように飛び出して、その後突進する」ことができるようにしたのである。

結果としては、この研究され尽くしたポジショニングとコース取りで、彼は見事「一番福」を獲得した。一番福の副賞 は、戦時色濃い時期で米俵はなかったが、2 つ重ねの直径 30ｃｍ以上の鏡餅、福笹、お札、落雁などであった。餅は、外米が混入していたものの、家人にはかなり重宝がられたとのことである。翌日の新聞にも載ることで、親戚からも戦時末期であるのに関わらず電話がかかってくる位「人気者」にもなったとのことである。様々な意味で名誉的なことであったと語られた。

彼が一番福を取った後、西宮神社は拝殿、本殿ともに焼け、この神事自体の復活には数年待たなければならなかった。復活の数年後、彼は大学に進学した。西宮市にある同じ学園の関西学院大学であるために走ることは物理的には可能だったが、その後一度も走ることはなかった。

なぜ、彼は走らなかったのか。関西学院大学に入学し、体育会拳闘部でキャプテンとして、日本拳闘界で大活躍し、時間が取れなかったことをまず挙げた。しかし、より重要な理由付けとして、自分が「戦争で拝殿が焼ける前の最後の一番福」とのプライドがあったためであると主張された。

つまり、拝殿が焼けたことで昔からの「えべっさんではなくなり」、昭和 20 年の 1 月 10 日に U.K.氏がその年にはじめてお参りした戎様と、復活後の戎様とは「違うもの」として考えたいということである 。

いくら足の速い選手がいても、時間までは乗り越えることは出来ない。再生産できない「最後の一番福」であるとの思い出を心に納めておきたい、と考えたのではないだろうか。

昭和 20 年、西宮には大空襲があったと先述した。その時、U.K.氏の住んでいた川西町（香枦園）も焼夷弾による空襲を受け、火の渦に巻き込まれた。ところが、運がいいことに、彼の家を含めて彼の家の周り 5 軒のみが焼け残ったということである。戦時中はそのこと

を言うのが憚られる風潮があったようだが、終戦以降、近所の焼け残った家の住人からは、「一番福がいたおかげで焼けずに済んだ」と感謝されたとのことである。その後、大学拳闘界で大活躍し、社会に出てからも大成功をおさめ、会社社長を勤め上げた。

当人の U.K.氏はインタビューの時には、これらのことを「一番福のご利益」とは決して話さなかった。もちろんこれまでの人生で「神懸かり」的な部分もあったとのこと。しかし、より強調されたのは、その一番福になるために努力した探究心と、失敗を恐れず問題解決の糸口を探り一番福にたどり着いた経験が、将来の教訓となり、かつ自信となって、自身の人生を築いていったとのことである。

「一番福競争」での競争意識が、自発的な向上心を産み出す元となっていった。U.K.氏の座右の銘であった「失敗を恐れるな！しかし同じ失敗を二度三度するな！」というのは、まさに、この神事に挑戦したことが起点となっている。

特筆すべきことは、一番福になって以降、社会人となり家庭を持ってからもインタビュー当時まで、十日戎の 3 日（宵戎、本戎、残り福）は全てお参りを続けたことである。U.K.氏はインタビューの最後にこう言われた。

「もちろん正月も祝います。だけど、やはり十日戎へ行かないと年が明けた気がしない。だからこそ、3 日（9、10、11）はどの日も十日戎に行くのです。」

昭和 20 年からは走らなかったものの、脈々と波打つ「一番福」の血が、U.K.氏の体を駆けめぐっていた。はじめての開門神事の動機としては、普段ではなかなか手に入らない米俵などの副賞であった。だが、それだけで走ったのだろうか。さらには、一番福になって副賞を得てからも、なぜ亡くなるまで毎年の十日戎の 3 日とも参詣していたのであろうか。それは彼の中の「年中行事」として、確実に新暦の十日戎が入り込んでいたからではなかろうか。青年時、門が開いた時に感じた高揚感と同質な西宮神社の十日戎ならではの非日常性が彼自身の生活における「ハレ」をも作り出していた。もちろん、小学生の時から地元の神社としてお参りに行っていたにせよ、戦時中の「開門」神事への参加が、その後の彼自身にとってのその後の年中行事化十日戎の「入り口」だったと言えるだろう。

3.戦後復興期の福男 Y.H.氏

1962 年（昭和 37 年）の一番福は、Y.H.氏である。残念なことに Y.H.氏はすでに故人となっているが、私の幼馴染の N.Y.氏が甥であることが判明⑪、彼から詳細を聞くことが出来たので、そのインタビューをここで紹介したい。1962（昭和 37）年というのは、日本がオリンピックへと突入する高度経済成長まっただ中の時期である。そのような流れの中で、Y.H.氏にとってはどのような神事であったのか、彼自身、どのような人物であったのかについて聞いた。

写真：左上が Y.H.氏（卒業アルバムより）

Y 家は、兵庫県西宮市の苦楽園口にある旧家であった。Y.H.氏の祖母は浄土宗の熱心な信者であり、西宮市の浄土宗の寺院の檀家総代をつとめていた。仏縁あって、真言宗で学ぶこととなり、僧籍を取り、西宮市内にて高野山派の寺院を建立するに至った。Y.H.氏は長男であったが、祖母が弟を後継者に指名したために、彼自身は違う道へと進むことと家を出て仕事をすることを運命付けられていたとのことである。

甲南中学へと進学し、陸上部へ入った。Y.H.氏は長距離専門の選手だったらしく、「陸上部のエース」であり、脚には自信があった。昭和 30 年代、阪神間の中学・高校の陸上部の中では福男競争は有名であり、各学校の陸上部が「エースを勝たせてやりたい」と集団で参加し、他の学校の選手を妨害するチームプレーめいたことも行っていたと聞いた⑫そうである。当時の阪神間にあった学校同士の対抗戦さながらの部分があることも良く知ってはいたが、彼自身はチームプレーで行うのではなく、「まずは試しに走ってやろう」という気持ちで参加してみたとのこと。彼自身や周りの参加者たちは、この行事を指す時には「神事」とは言わなかったとのことであるが、「福男」の語は定着していた。ちなみに当時の神戸新聞 1962（昭和 37）年 1 月 10 日付の夕刊では次のような記述である。

> 午前六時かっきり打ち鳴らす一番太鼓を合図に正面赤門が開くや、徹夜の学生もまじえトレーニングパンツ、運動グツの軽装で待ち構えていた約五十人がどっと殺到、約二百メートルの参道をまっしぐら。決勝点の拝殿の鈴の緒へ。一番乗りは西宮市菊谷町一一二十四甲南高一年 Y.H.君（一六）二番は同市今津山中町一八、運転手 M.S.さん（二五)、三番は灘高二年 H.Y.君（一七）の三人が今年の福男になりそろって昇殿、参拝、同神社から記念の白木のえびす像が贈られた。福男一番の Y 君は中学二年からの陸上選手で初参加。二番の M さんは去年も二番で、その前は四年連続トップだったが「百メートル以上になると足がいうことを聞きません」と残念そう

とある。ここから、阪神間の恒例行事に組み込まれていたこと、戦前と同じく「地元の常連」が走っていたことなどが見て取れる。時代的には自動車で多くの人がやって来る時代ではあったものの、門開け行事に走る参加者に関しては、戦前戦後であまり変化が無いこともここから読み取れる⑬。彼自身は、次年度以降この行事には参加せず、陸上部の選手やそして学年のリーダー的存在として自治会総務（生徒会）活動を行っていた。甥の N.Y.氏から見ても、「努力家」であったとのことである。（右写真：2005 年の Y.H.氏）

西宮神社で「福男」に
吉井弘氏
住友軽金属工業常務
国的にも有名
社でこの時期
る本えびすで
争い」早朝の
時に拝殿へ一
観う恒例行事
よって緩さが
じ、メーカー志向のな
かでアルミの会社へ就
職を決めた。
酒田時代には住軽ア

甲南大学を出た後、住友軽金属工業に入社。山形県酒田市、町田市、横浜市と転勤を繰り返し、まさしく前述の命運通り、実家を出て働き、会社の常務にまでなり、2 人の娘に恵まれた。甥の N.Y.氏よりいただいた 2005 年の日刊産業新聞にコメントが出ているが、一番福のことは 60 歳になるまであまり話をしなかったようである。記事の中では、「これまで隠していたわけではないが、自慢することでもないので」とインタビューに答えている。

このインタビューから感じたこととしては、新聞から読み取ったことと同じく、昭和 30 年代の高度経済成長の初期においては、依然、西宮神社の氏子区域よりは広範囲ではあるが、戦前に築かれた電鉄を主とした公共交通機関の範囲、阪神間での陸上競技会的な福男競争となっていることが改めて確認された。これは昭和 20 年の福男であった U.K.氏の事例と似ている。つまり、門開け行事においては参加者の属性は戦前戦後で大きな変容はなかったとも言えるだろう。

4.高度経済成長後の福男 N.K.氏

高度経済成長およびモータリゼーションによって、西宮神社における十日戎の参拝者数は飛躍的に増えたことは先述した。関西圏での「えびすの宮総本社」としての認知度は高まったが、開門の報道は減っていった。1966（昭和 41）年には兵庫県警が走り参りによる危険性を指摘し、2 年間福男自体が選ばれなくなる事態も起きていた。

そのような状況の下、新たな参加者がこのモータリゼーションによって現れることになった。それは、兵庫県北部などの漁村部の参詣客であり、昭和 40 年代後半から昭和 50 年代前半にかけて、福男としても名前が残るようになった。その中の 1 人が、N.K.氏である。1979・1980（昭和 54・55）年と連続で一番福となった N.K.氏は、現在兵庫県の香住（現：美方町香住区）に在住である。創業大正 6 年の水産加工業会社を経営している。

N.K.氏は地元の高等学校の水産科を出た後、兵庫県川西市の東洋工業短期大学へ進学し、卒業して、実家の香住に戻って以降にこの行事に参加した。きっかけは、水産加工業協同組合の「えびす講」であった。約 80 軒が同組合に参加しており、毎年くじ引きなどで決められた 8 名から 10 名が、代参ということで十日戎の行われている西宮神社に参拝に行くのが取り決めであった。その参拝で最大のものは、「1 月 10 日の一番祈祷を行ってもらい、お札をいただく」というものであり、現在でも 1 月 9 日の夕刻にまず参拝して、一番祈祷の予約をするそうである[14]。（写真は 1979（昭和 54）年 1 月 10 日付神戸新聞夕刊より。左から 2 人目が N.K.氏。）

昭和 54 年に誰を行かせるのかの話し合いになった際に、N.K.氏の父が当選した。その父は、短大を卒業して 1 年目の N.K.氏に代わりに行かせることにしたのである。9 日に到着し西宮の宿舎で少し休んだ後、午前 5 時に赤門前に到着して、開門を待った。当時の午前 5 時には人はほとんどおらず[15]、午前 6 時でも 300 人もいただろうか、とのことであった。走る前までは、どのようなものか分かっていなかったが、走るからには「一番になろう」と

意気込んでいたという。走った際には、周りは何も見えずに一心であった。一番になって昼夕のテレビに取り上げられ、とても驚いたとのことである。「まさかそんな大事になろうとは」というのが率直な感想であった。

1980（昭和 55）年の 2 回目は組合からではなく、個人として参加をした。前回が代参をさせていただいた組合とえびす講社へ持ち帰る福、そして今回は家へ持ち帰る福と考えたためでもある。2 回目はルートや雰囲気が分かっていたのと、なによりも福男という立場が周りからも一目おかれる存在となっていた。早起きの先輩に頼んで午前 4 時ごろに場所を取ってもらい、午前 5 時半に場所に到着した。2 回目は、余裕もあって一番福になれたとのこと。（写真は、昭和 55 年 1 月 10 日付神戸新聞夕刊より。一番左が N.K.氏。）

このように N.K.氏は運良く 2 回も一番になることが出来たが、その後、N.K.氏は福男の競争には参加しなかった。その理由は、父からの忠告であったという。「組合に福を 1 つ、そして個人で福を 1 つずつ取った。これほど幸せな福男はいない。次も取れるかもしれないが、その福は人に分けてやるべきである。不幸が無い限りはお参りだけするのが正しいのでは」という訳である。N.K.氏はその後走らなくなったが、現在でも、十日戎には西宮神社を参詣することが多々あるという。福男となって良かったのは、川西から帰ってきて香住で商売を行う頃でもあり、福男になったことで、多くの同業者から早くに顔を覚えてもらうことに繋がった点である。これはまさに福であると話された。生憎残念なことは、自分が 2 回福男になったことを、今は自分の子どもを含めて誰も信じてくれないことである。

現在でも、昭和 55 年の一番福のときにいただいた神像は大切に持っている。父は他界したが、自分が亡くなった時にはお棺にこの神像を一緒に入れて欲しいと話している。自分にとって福男選びはとても大切な思い出であると話された。

（写真は 2012 年 9 月の N.K.氏。福男の記念品の戎像と共に。著者撮影）

昭和 50 年代の N.K.氏は遠方ということもあり、組織の一員として参加し、香住水産加工業協同組合としての福をまず持ち帰ろうとしたこと、これまでの阪神間のアスリートが集うような競技会的な意味合いとは違う、えびす信仰あってのお参りだったという側面が非常に強い。

例えば、N.K.氏が走る 10 年以上前、高度経済成長によってモータリゼーションが到来し

た 1968 年（昭和 43 年）1 月 11 日付の朝日新聞阪神版を見てみたい。

また祈とう所も大繁盛前日から予約していた城崎郡香住町の海産物業者が一番祈とうを受けたのをはじめ、全国各地の漁協組合や会社など団体がつめかけた

とあり、香住のこの組合が「一番祈祷」を行ってもらうことに重きを置いていることは興味深い。つまり、漁業神として各漁村に存在していたえびす信仰の形と、電鉄などによって生み出された新暦の西宮神社での十日戎で生まれた概念である「一番」とが重層的に存在しているところである。旧来のえびす信仰を行っている、あるいは祭に対して明確にハレとケの感覚を持っている人々が、モータリゼーションによって西宮神社に容易に行きやすくなったこと。その人たちが福男になり、実際に祭事に参加することで、社会構造の変革によって「イゴモリ」の意味に気付かなくなった西宮近辺の人たちに対して、「門が開いて走って一番になること、とにかく周りが見えずに一心になって走ることが十日戎の原点であり、まさに神人和合の境地に達するのだ」というような、「ただの福男競争ではない」「神事」としての門開け行事の姿を再評価させることに繋がったのではないか。これは N.K. 氏とのインタビューの中で感じたえびす信仰であり、講や家族といった人の繋がりの深さであった。祈祷のための参詣を行う彼らの姿が、福男競走を主な目的として来ていた他の参加者、そしてそれを取材する報道陣の目にいかに映ったのだろうか。

5.1990 年代最後の福男 S.S.氏

プロフィール：栃木県出身。大阪体育大学の陸上部時代から現在に至るまでも短距離の選手。現在は栃木県の教育研究機関で教職に就いており、後進の陸上選手の指導に当たっている。開門神事には 1999 年に 1 回参加したのみで、以後は参加せず、このインタビューをした 2004 年に「久しぶりに」戻ってきて開門神事に参加した。

彼はインタビューをした当時でも現役の陸上競技の選手であり、1999 年に一番福になった時には門から拝殿までの距離（230m）に近い 200m専門のランナーであった。

近年の福男ならば、一番福を取った次の年も現れる人が多いのだが、彼は来なかった。その訳を彼に尋ねると、テレビ局および番組製作会社の、「速さのみを競わせること」を対象にした番組編成、陸上競技に対する無知⑯（ウォーミングアップしていないのに厳寒の境内を突っ走れといったような注文）にうんざりしたとのこと。実際次年は参加しようとも考えていたが、マスコミなどからの電話が殺到し、興味本位での報道や報道前の約束を守らないことに嫌気がさした。さらには、学内（大阪体育大学）など身近な周囲からもねたみの声が多かった。例えば「開門神事で一番になって、いい気になるな。実際の競技会でいい成績あげてみろ。」などの陰口があったそうである。以上のことから参加を見送ったのだと明かしてくれた。つまりは、走りを専門としていたが為に、無知とねたみが彼の連続出場を阻んでしまった。

では、なぜ今回は参加したのか。その訳は、実家のある栃木県に帰ることになる前に、自分が走っている姿、神事での真剣な姿を、関西にて指導している生徒に見せたかったの

だと言う。良くも悪くも、この年の神事が S.S.氏にとっては参加する最後にするとのこと。そのために、「恥ずかしくない走りが出来たらいい」との内なる想いも話されていた。

6、えびすさまに好かれた福男 H.R.氏

平成になり、「開門神事福男選び」の語が神社によって創出され、マスメディアも盛んにその参加者の速さを報道するようになった。その中で現れたのが、H.R.氏であった。

彼は 1997 年の大学 2 年次の時、初参加で二番福を取り、次の年も二番福に輝いた。3 度目の 1999 年には門前に一番早く陣取り、門の開く中央から出走し、独走態勢に入るも拝殿の上り坂で転倒してしまい、一番福は取れずに終わった。その年の 12 月には名神高速道路でバイク事故に遭い、10 トントラックに轢かれたこともあり、一時は片足を切断するかもというような大怪我を負う。そこから長期の入院を余儀なくされた。

その事故の為、2000 年は不参加に終わったが、2001 年には入院中ながらギプスを付けて神事に参加。その後も走力は落ちたが、毎年神事には参加し続け、2003 年には開門神事の抱える諸問題に立ち向かおうと「福男向上委員会」なるサークルを発足させ神社などへの提言を行っていた。同時に、神事をよりよく多くの人に知ってもらおうと、ホームページも立ち上げていた。

私が彼と初めて出会ったのは、参与観察の項で先述したように、1998 年の 1 月 9 日であった。こちらが話しかけても必要以上のことは返さない、一番に拝殿に乗り込むことのみを思い詰めて来ているという感じの漂う参加者の一人であった。1998 年の十日戎前に、私が福男の調査をしていることが朝日新聞の阪神版に掲載されたこともあり、初対面の時には既に私のことは知っており、そのこともあって「必要以上のことを話すと何か不本意なことを書かれてしまうかもしれない。」と警戒されていたようである。

2004 年のインタビューにてこのことを聞くと、1999 年の事故の前と後とで開門神事に関わる考え方が変わったとのこと。1999 年までは、ただ一番を取るために走っていたに過ぎなかった、その頃は、正直後列で走る人の気持ちはよく分からなかったとのことである。しかし約 2 年が過ぎ、ギプスを付けて走るようになってみると、ひとつのことに気が付いた。それは「門が開くときの高揚感は、最前列にいなくても味わえるのだ」ということであった。また違った意味で開門神事に参加し続けようとの思いを強めたそうである。私は、彼が復活してからも事故前同様に一緒に走った。2001 年は、彼はまだ本当にこわごわ走っている感じで、実際にはドクターストップがかかっている状態であった。2002 年には走りたい思いがさらに高まり、特別の器具をつけて参加した。福男にはなれなかったが、走り終えてからは止めどもなく号泣していた[17]。この時に、この場所にずっと立ち続けたい、この場所を守りたい、との思いが強くなったということである。

その思いがホームページを立ち上げ、独自に広報活動を行うことに繋がり、「福男向上委員会」の立ち上げの力にもなった。彼自身、「開門神事とは、アイデンティティの一部である。そこ（西宮神社）に門がある限り参加する。」という表現をしている。

2004 年「事件」は発生した。このことをマスメディアが大きく取り上げ、「2 ちゃんねる」を中心としたインターネットの掲示板でもいわゆる「お祭り状態」となってしまった。平成になってから参加者が急増したものの、祭事を行う主体が曖昧で制御されていない状態だったことが、この事件を引き起こしたわけであるが、この渦中で中心的に動き、神事を積極的に運営する方に回ったのが H.R.氏であった。2005 年からは氏子青年会の一員として活動し、現在は開門前の整理から開門の合図までを彼が取り仕切り、積極的に西宮神社の他の祭事にも参加して新たな伝統を生み出している。この詳細については、次章以降で論述していきたい。（写真は、2011 年 1 月 10 日開門直前に鈴木義哉氏撮影。右端で開門者に握手をするのが H.R.氏）

6 節　第 4 章のまとめ

本論考では、まず調査者自身が参与観察の手法によって、なぜこの神事に多くの人が参加するのかについて考察した。歴史的な考察によってこの神事が創出されものであることが分かったが、創出されたものであるのにも関わらず非日常を味わえるものであることが、確認された。同時に、創られた神事であるために、開門前までの出走位置の決め方やその取り仕切りに関しては、全くと言っていいほど対策が施されてこなかったことも分かった。神社とすれば、大正時代の頃と同様に、参詣客をイゴモリの間は境内から出して、日の出とともに入場させるというやり方を採っていたと言えるだろう。しかし、この神事が、神社側のメディアなどへの働きかけ、そして視聴者のある一定の盛り上がりを背景に、メディア側も進んで報道を行ったために、結果としては参加者が急増した。参加人数と注目度が高まる一方で、諸対策は後手に回った。そのことが、2004 年の事件を生み出したと言えるだろう。

その上で、各時代を象徴する 6 名の福男の語りを紹介した。新住民として新しい祭りとなっていった「新暦の十日戎」に真摯に取り組み、何度も一番福となった T.T.氏・速さを競うイベントとして「喧嘩」をして、一番となりながらも、亡くなるまで 3 日間十日戎に通い続けた U.K.氏。地元の陸上競技会的な意味合いからも出場した Y.H.氏。自身は足が速かったものの、それ以上の福は他人に分け与えるべきではとの父の忠告で 3 回目以降は競争には出なかった N.K.氏。1990 年代のメディアにおいて盛んに速さの部分が取り上げられたことで陸上競技会的な雰囲気の中参加した、アスリートの S.S.氏。そして、初めは一番になることしか見えていなかったものの、自身の交通事故後「門を開くときの高揚感は最前

列にいなくても味わえる」と感じ、自身の交通事故後も参加し続けた H.R.氏。

これらの福男の語りからでは、一番に福をつかむという競争的な意味合いで参加したということが時代を問わず言えるだろう。しかし時代、背景は違えども、自然発生的に成立した参詣のイベントであるのに関わらず、参加者である福男たちの語りの中の多くに、漠然とではあるが、「えびす」に対する信仰が垣間見える。それが行事に参加した中で得たものなのか、福男として生きていく中で付与された考えなのか。参加者それぞれであろうが、いずれにせよ各人が自らのアイデンティティの確認のために走ったといえるのではないか。

この章では、より個人に的を絞った調査の報告を行ったが、次々章である第 6 章においては、定量的な調査をもとに、参加者の属性と動機、そして感想を調べていきたい。

---

① この参与観察を行う時、森田ゼミでは、映像クルーを仕立てて、記録映像を残すことも行った。この年の 4 月から大手前女子大学（現大手前大学）で米山俊直が学長に就任するのを機にえびす信仰を人類学者・民俗学者・歴史学者・社会学者・宗教学者などが集まって調査する「えびす信仰共同研究会」を立ち上がる計画であった。この映像記録化はそのための予備調査でもあった。この時に作った映像作品は鈴木岳海の「福」である。そして私の友人で当時甲南大留学生であった、文化人類学をイリノイ大学で学んでいたアメリカ人がいた。日本文化を体感したいという彼は、この神事に参加することを望み、前列のグループで上半身裸になって駆けた。他の参加者からも受け入れられ、「シカゴから福を求めてやってきた」と神社の広報に取り上げられることになった。誰でも受け入れが可能な神事であることを、彼の身を持って証明した訳である。

② この際、門の内側（境内側）からは、「お前ら押すな! 開けられへんやろ!」と言われ、最前列で押されている参加者の足を、レンガか何かで軽く叩くということが行われていた。後ろからは、何百人という圧力があり、前からはレンガで叩かれるという何とも情けない状態であった。門前での整理がないために無秩序な状態となっており、今から考えるといつ怪我が起こってもおかしくない状態ではあった。当時は警察や警備員は門前にほとんど割り振られていなかったことは確かである。

③ 実際、ベイブルース高山氏は野球部出身ということを生かして、一緒に走って取材をするという方法を試みた。カメラが小型化していく中で、テレビ放映の中で、走るテレビ関係の人は多かった。嚆矢はフリーアナウンサーの桑原征平であった。その他で印象深かったのは 2003 年には私の隣から、ねこひろし氏が出走したことであろうか。2012 年では、陸上界の大物であったベン・ジョンソン氏がやってきたが、くじ引きの壁に阻まれ C ブロックからの出走となった。マスメディアによって興味本位で、かけっこ競争としての側面のみ報道されるわけであるが、彼ら芸能人が開門時どのような気持ちで出走したのか興味はある。いつかは聞き取り調査をしてみたい。

④ 番組の中で、コメンテーターであった所ジョージ氏が冗談で「一週間も前から参加者は門前に並んでいて、参加者は少しずつ真ん中へ寄っていく」と述べた。実際は 1 日もこの場に待機しておらず、門前自体に並びだしたのは数時間前であったが、このコメントが「早めに並ぶといい場所が取れる」という発想を生み出し、以降学生を中心とする団体がテントを張って門前に待機するようになったことは否めない事実である。

⑤ 1998 年の参与観察でも述べたが、当時門前にて警備をする警察官、警備員は少ない現状であった。また、出走位置は、参加者独自で決めているだけのものであり、そういうコンテキストが通じない外部者が来た際には対応が出来なかった。門前は外部者がある程度は入りづらい作りをしているが、抜け穴はあり、柵を乗り越えて 5：30 くらいの直前に外部者 5 名ほどがそれまで並んでいた参加者の中に割り込んできて騒然

となった。走り参りをすることよりも、賑やかしが目的でもあり参加者からすると、彼らは追い出してしかるべき存在と考えるものが多かった。しかし、門前は狭く、非常に混乱した状態で午前 6 時を迎える、最悪の開門となってしまったのである。神戸大学の福男サークルや、それ以外の参加者とは来年以降の対策を早急に神社側と練ることを決めたが、同時に出走を妨害された消防士が、次の年から「秩序だって出走する」ことを独自で考えたのである。そのことが 2003 年と 2004 年の事件へとつながっていく訳である。

⑥ 前年の事件を踏まえて、消防士が数人で前列を押さえるために 3 日前より並んだ訳である。9 日の早朝に私は、神戸大の福男サークルの代表を務めていた I 氏から連絡を受け、赤門に急行した。この状態を聞いて、西宮神社の関係者に「あまりにも早くから並ぶことに関しては神事の趣旨からは外れているのでは」と話した。しかし神社とすれば基本姿勢は、「来るものは拒まず」であり、結果としては彼らの先頭集団確保が決定した。ただ、この消防士グループであるが、開門までの順番決めや、秩序立たせて出走する点では、これまでにない整然とした神事の催行をもたらした。もちろんその最大の目的が、1 人の消防士を一番福にするためではあったが、2004 年にしても出走直前までは 2002 年のような混乱は起こらず、運営面としては上手であった。団体でもって、出走位置を決め、開門まで混乱状態に置かない手法は、後の講社化していく中で学ぶものは多かった。

⑦ この整理券を配る前までは、1998 年の参与観察で述べた「ベテランの参加者が立ち上がって、段ボールを置いて決める」というやり方であった。当時は人数も少なく、多くても 20 名ほどが、場所決めをする程度であった。整理券を配り始めたのは昭和 60 年から 63 年までに 3 回福男となった、E.T.氏であったと記憶している。何回も参加し、なにより「福男」経験者であることから、参加者の中でリーダーシップを発揮したのである。現在の開門神事講社でも理事を務めている。東灘区の神社の氏子青年会の会長を務めていた時期もあり、西宮の氏子青年会との橋渡しという部分でも大きく動けたことが、後の組織化の中で大きな役割を果たした。

⑧ 「チームプレーを容認した教師」として、私の名前が特定され、当時開設していたホームページ内の掲示板が誹謗中傷によって一杯になった。H.R.氏は名前が、消防士に似ていたこともあり間違われて、ホームページ内の掲示板が荒らされるという被害に遭った。この時に匿名性のインターネットの怖さと同時に、メディアに対する対応を間違えてはいけないと、痛感した。

⑨ この論考の巻末には、彼も 2003 年の三番福、2004 年の一番福としてリストに入れてある。福男の返上はしたが、忌籠が終わって、その年の拝殿に一番乗りしたのは、彼が初めてということは事実であるためである。

⑩ 速さと同時にこの信仰に対するひたむきさ、そして青年団活動を行い新しく西宮に来た人物でありながら、熱心に氏子に溶け込み、町のために一生懸命活動していた姿が、彼が 17 回も一番福になりえた原因ではないか。だからこそ 1938（昭和 13）年の丹波出身の人物と一緒に「一番福」になり、「純粋な競争」へと変化していく昭和 14 年以降も一番福の介添役などの対場で登場し、福男のオーセンティシティの体現者であったとも言えよう。

⑪ 自身が生まれ育った阪神間だからこそ、起こりえた事例である。私としても 1997 年の時点で 1962 年の福男が Y.H.氏であり、私の母校出身であることは認識していた。住所は私のこの幼馴染（幼稚園から大学まで一緒）の同じ町内であるから、もう少し知恵を働かせるべきではあったが、まさかこんなに近い関係であったことに驚きであった。この事実が分かる前までは、大学の同窓会経由で接触することも考えていたが、その調査の際には亡くなられていた。さらに多くのことを聞くことが出来た、それも先輩後輩という関係において聞くことが出来たと思うと悔やまれる。

⑫ 2004 年の事件の際は、Y.H.氏はご存命であり、妨害まではなかったものの、集団で参加して、他の学校のメンバーを威圧することは「多々あった。」と話していたとのことである。2004 年当時の一番福バッシングに関して、元参加者の立場から異論があったとのことである。また、昭和 20 年の一番福 U.K.氏が話していたように、「喧嘩して走る順番を決めた」という感覚に近いものがあったとも話されていたとのことである。
⑬ しかし同時に第 3 章で述べた、「ウソの開門時間を教えて喧嘩となった事件」が発生したのが、この前年の 1961 年であることも忘れてはならない。阪神間の地域の教育機関をベースとした参加者の集まりに、少し違うメンバーが乱入して起こってしまった事案なのかもしれない。
⑭ 2013 年の開門神事の参与観察の直後、午前 7 時くらいに社務所にて、この香住地域の加工業組合の講社が祈祷待ちしている所に出会い、N.K.氏はいなかったが、他のメンバーの方と言葉を交わした。継続して参拝を続ける姿に福男選びにも影響しながら、連綿と歴史が紡がれていることを感じた。
⑮ この 6 年後の 1985（昭和 60）年三番福となったのが先述の E.T.氏である。氏も同じく、午前 5 時でも門前に参加者の姿はなく、露天商組合の方のテントに呼ばれ、一時間ほど暖を採らせてもらったとのことである。現在とは隔世の感がある。
⑯ この不満の詳細は聞けなかったが、例えば彼が出演した番組は、「その年に転倒した（不幸男）H.R.氏」と一緒に同じコースを走って、「福男である S.S.氏」が勝つというものであった。その中で、マスメディアに消費される存在として扱われることに憤慨したのかもしれない。
⑰ 現在の開門神事講社では、彼が門を開ける合図をするために門の内側にいる人であり、私は、門が開いた後に安全かどうかの確認を門前で行う門の外側にいる人である。現在でも開門直後には、毎回感極まって H.R.氏は号泣する。そして、一緒に「門を開けている」私も感極まって一緒に涙するのである。

第 5 章　開門神事の現在

1 節　2004 年から 2008 年にかけての動き

2004 年の事件のあと、先述の「えびすに愛された福男」と評した H.R.氏、と西宮神社が中心となって、次の年からの福男選びをどう立て直すのかについて話し合われることとなった。その他に集まったメンバーは、1997 年から参加し 1998 年次にも私と一緒に走り、2004 年までの間連続で出場していた S 氏、神戸大学を中心として福男サークルを立ち上げていた I 氏、そして 2004 年までの 4,5 年間で福男（一から三番福）となった参加者の方々であった。参与観察として深く関わってきた私も、その場に呼ばれた。何度か話し合いが持たれる中で、開門神事自体を取り止める（1966 年の様に福男の認定を神社として行わない）構想まで持ち出された。話し合いのメンバーであったそれまでの開門神事の参加者達は、何とかして残す方向に持っていかなければならないとの強い要望を出すに至ったのである。しかし何も変わらないままだと、2004 年のような事件になることも考えられる。よって、従来の参加者がこれまで通り、参加を続けるわけにはいかない。つまり、参加者と主催者とは分けなければならない。本来なら、神社が氏子青年会なりに頼む形で、地元の一年間行事として組み入れることが考えられるだろう。実際に、氏子青年会「若戎会」は、開門神事の前に参道を掃き清める奉仕を含め、十日戎での奉仕を熱心に行っていた。しかし、若戎会だけですべてのことを取り仕切るには、この神事の規模はこの 5 年ほどで大きくなりすぎていた。規模だけでなく、マスメディアを含めて世間の注目も集まっていた。

参加者たちが、開門の位置決めなどを取り仕切る主催者側に入り、これまでの経験から得た知見を若戎会と共有して、当初は乗り切っていくべきではないかという意見が出ることとなった。

それまで、別個の存在であった開門神事福男選びに出場していたベテラン参加者と氏子青年会との間に、初めて意見交換の場が持たれた。神社、氏子青年会、そして参加者の有志がさらに話し合って生まれたのが、「西宮神社開門神事保存会」である。

この保存会は、主体は参加者有志であったが、まずは氏子青年会である「若戎会」の下部組織として成立することとなった。ここで初めて、実行主体の中に元参加者が加わるとともに、西宮神社の関係組織が神事に関わることになったのである。

そして神社側との話し合いにより、2004 年の事件をきっかけにして、順番に関しての意見提言と当日の順番決めの執行をこの保存会が任されることとなった。元参加者たちは、何時から場所決めを行うのかについて、前日の午前、あるいは午後かといった提案を出していた。しかし、神社としては、原則に立ち返ると、10 日の午前 0 時に閉門し、午前 6 時に開門するのが正式ではある。つまり、前日に神社の関連団体が場所決めをするというのはおかしいのではないかとの見解であった。神社としては、門を開けること、3 番までに拝殿に入った者に対して福男として認める、というスタンスは守っていたのである。極論では、門の前に並んでもら

うと「危険である」ため、門には午前 0 時までは並ばせず、午前 0 時の時点で、来た者から一斉に並ばせるという意見さえ出た。

その中で辿り着いた結論が、現在まで続く「くじ引き」による場所決めである。くじ引きの導入に関しては、話し合いに呼ばれていた神事の参加者の中で大きく議論となった①が、これからも開門神事福男選びを存続させることを念頭において考えた時、この形でいくしかないだろうとの結論に達した。2005 年に導入して初めて開催されたが、マスメディアの立ち入りも許可された状態で、境内で行われていた。当初は 500 名くらいがくじ引きに参加しており、当たりくじを引いた参加者、特に若い番号を引いた参加者にテレビカメラや取材陣が殺到②し、それにつられて他の参加者も大きく動くという悪循環が生じ、深夜の境内が大騒ぎとなった。このため、くじ引き自体の場所について、表大門近くから神社会館へと移り、そして現在の境内より外に位置する南門付近へと移動するという試行錯誤があった。

また、2005 年の神事では、門を開ける主体に関しても問題となった。門を開けていたのは露天商を束ねている組合であったのだが、組合からこれも保存会がやるべきであるとの要請が出た。それを受けて、2005 年には氏子青年会のメンバーが門の半分を開けることになった③が、その年を除いては保存会としては、安全性への危惧があり、長年露天商組合が門を開けていたことから、直接は関わらないこととした。

2005 年の開門神事では、前年に福男神事が全国的に普及するきかっけを作ったインターネット掲示板「2 ちゃんねる」において、そのユーザーたちが積極的な神事への参加を促したために、コスプレ的な格好で神事に参加する一団も現れた。この年から私は、走る側から、門前での参加者の対応にあたるが、これまでの陸上競技会的な意味合いで来る一団とは一線を画した参加者の対応にも追われることになった。事実、開門時に、巫女の格好をして走った女性が転倒し、大事には至らなかったものの、出血する事態も起こった④。

この様な教訓から、2006 年からは、コスプレの禁止、走り参りに自信のない参加者に関しては辞退させるように説得させること、女性に対してはこれまで怪我のあった事例について話し、それでも走る意志があるのかを確認することになった。参与観察する上において、明らかに 2004 年までとは異なる像の参加者が増えたことが感覚としてあった。そのような状況下で、ベテラン参加者や調査者である私が開門神事の手伝いをすることになったのである。

2 節　福男が立ち上がる時、保存会の講社化

2008 年になり、兵庫県警察が「参詣客保護」の観点から動き出した。全国的にも、雑踏対策において、行政側が主導する事例が増えていた。兵庫県下では、2001 年 7 月に明石市の花火大会で将棋倒しになり死者を出す事件があったため、雑踏対策の文脈から、西宮神社へ対策の要請があったのである。具体的には、「より神事との関係が深い保存会を神社の監督下に置いて、開門も含めて催行するように」との要望であった。つまり、それまで行ってきた門開けと、拝殿にたどり着いた参加者のうち三番目までを福男として認定することだけでなく、門前に並ばせる段取り決め、門を開けること、門が開いた後にいかに参詣客を誘導するのかという

所まで、神社が主体的に関わることが明確となった。もちろんこれまでも、神社が雑踏の警備や開門後の警備員の配置に関しては、神社が主体となって行ってきたわけであるが、開門神事自体の一連の運営を神社が行うこと、その執行団体として保存会を神社の公認組織として認可し協働した上で、事故なく催行させることが決まった訳である。

そのことによって、神社としても保存会があいまいな状態で神事に関わるのではなく、正式な神社の団体として行動してもらうことを求めだした。この保存会の間でも、参加者としての思いを断ち切れず、具体的には、くじ引きには参加して、外れたと同時に保存会の活動にシフトしようとするメンバーがいた。そういった、「マージナルなメンバー」が神事の催行専従スタッフとして活動するのか、参加者として、走ることのみに集中するという択一を迫られることとなった⑤。

この動きの中で、氏子青年会である若戎会以外の地元の人々とも意見交換をする機会が増えることとなった。地元自治会、露天商組合、神輿奉賛講社、吉兆福栄会の方々との協議の場が持たれるようになったのである。これは、便宜的に氏子青年会に籍を置くだけでなく、神社の一組織として十日戎開門神事という一行事の催行という関わりに留まらず、西宮神社のその他の祭礼などにも関わることにつながった。

自治会や神輿奉賛講社の方々に一から説明し、地元ではないが、神事に対する想いを H.R.氏が中心となって話した。地域の住民ではなく、神事に参加していてもほとんど接点がなかったこと、また、開門神事の前の順番待ちやくじ引きの際などにも近隣の住民への迷惑になっていたこともあり、初めのうちは、神社の働きかけがあったにもかかわらず、設立に関して否定的な意見も散見されたが、2008 年 12 月に各団体の協力の下で正式に開門神事講社として成立することとなった。H.R.氏は講長として、その他、開門神事の参加者で福男となった経験や、保存会にて実績のあった人物が副講長や監事などに就任した。調査者でありながら深く関与していた私は理事に任命され、その後の神事の運営に引き続き関わることとなった。開門に関しては、2005 年を除いて露天商組合が担当していたことは先述したが、この一連の動きの中で、神事に関わる全てを開門神事講社が行って欲しいとの行政側からの強い要望⑥もあり、2009 年 1 月より正式に開門神事講社が門を開けることも決まったのである。（写真は 2008 年 12 月撮影）

3 節　参加者が主催者となった神事

2 節から分かるように、これまでは一参加者にしか過ぎず、そのほとんどが参詣客とカテゴライズされる地元とはゆかりのない元福男をはじめとした団体が、まず神事の保存を訴え、それが神社を巻き込んだ運動に発展した。2009 年以降は行政側の指導もあって、正式

な講社として位置付けるという、伝統的な祭事を起源に持つ祭事の中では、異質な発展を遂げた組織化であったと言えよう。2009 年 1 月以降は、くじ引き、開門に加え、その後の安全催行までをと組織の受け持ちも拡大した。講社として、また他の祭事にも参加する団体として、さまざまな参加者を内包しながら活動を行っている。講社化された後の、一年間の動きと、十日戎当日の動きを次に記す。

1.現在の講社の一年間の動き

1 月正月過ぎの日曜日　西宮神社への公式参拝、参拝後の最終打ち合わせ

9 日～10 日十日戎開門神事

2 月初旬　氏子青年会若戎会主催の餅つきへの参加。餅は節分時に神社から参詣客に配布される「福餅」と呼ばれる。

2 月～4 月　1 月の十日戎の総括（兵庫県警・警備会社・神社・諸団体と）・総会（役員の改選、予算の審議）

6 月　おこしや祭りへの参加

7 月　氏子青年会若戎会主催のだんじりへの参加

9 月　「西宮まつり」への参加

10 月　来年 1 月開催に関する打ち合わせ

12 月　兵庫県警・警備会社・神社・関係諸団体との来年 1 月開催に関する打ち合わせ

年間の流れとしては、以上の通りである。興味深いことは、2009 年までとは違い、積極的に地域の祭事に各メンバーが協力していることである。おこしや祭りについては、古来よりこの祭り以降に浴衣を着ることになるという、季節の変わり目の祭りであるが、ここに福男を参加させるものへと変化した。一方「西宮まつり」は秋の例大祭であり、阪神大震災以降、規模が縮小していた祭事であったが、2000 年に船渡御を入れる形で復活したものである。大手前大学や、夙川短期大学、神戸女学院大学、関西学院大学など地域の大学の学生が協力しているところにも特徴がある祭りである。その祭りにも、2009 年より福男が加わることになった。神輿・時代行列に「福男」が加わり、船渡御にも参加する。その後の直会では、

地域の人々の中で、福男が紹介されまさに地元のヒーローとして認識される接点の場になっている。（前頁上は、1 月の会合、中は西宮祭りでの福男、下は直会における福男紹介。）

2.十日戎当日の開門神事講社の動き

現在、どのように神事は行われているのか。2009 年から 2015 年までで、変更された点なども含めたうえで、写真と併せて記載したい。

・1 月 9 日午前より、境内において、チャリティーグッズの販売（9～11 日）

これは 2012 年から副次的に行われることになったものである。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の被災地へ「福」を届けるとの H.R.氏の思いから、チャリティーグッズの販売を行うこととなった。

・9 日午後 6 時講員集合（南門神苑テントにて）

当日のタイムスケジュールや役割分担の確認を行う。同時に、くじ引きに使う割り箸の本数と、くじ、場所決めの際の用紙の用意など。

・9 日午後 7 時半（南門神苑テントにて）

神社・兵庫県警・警備ならびに奉仕してもらう他団体の方々との打ち合わせ。講員内各部署のリーダー紹介。具体的なこれからの流れに関する説明確認。

・9 日午後 9 時ごろ（神社西隣西宮成田山駐車場）

先着 1500 名の待機場所である、成田山駐車場の現場確認。机などの用具の移動。マスコミへの最終的な事前説明など。

・9 日午後 10 時（神社西隣西宮成田山の駐車場）

講員総出で、県警・警備員・諸団体の協力のもと、くじ引きを引く先着 1500 名を駐車場内に誘導していく。その際に、講員による「服装チェック」が実施される。項目は、「走られる靴か（運動靴）」「走られる格好か（コスプレの禁止）」「走る体力があるか」などである。3 名ほどがこの係にあたり、参加の可否を見極める。そして、不備があった際には、中に入れずに靴などは履きかえさせる。チェックが済むと、参加承諾書用紙を渡して、郵便番号や名前を記載してもらった上で並んでもらう。この承諾書が、くじ引きを引くための引換券となる。

・9 日午後 11 時半ごろ

全ての参加希望者の駐車場内への誘導が終了。2014 年と 2015 年に関しては、参加希望者が多かったため､先着の 1500 名で締め切った。終了後、机などを移動し、南門前にくじ引きの形に仕上げる。

・10 日午前 0 時

くじ引き開始。午後 10 時から配布をした参加承諾書と引き換えに、くじ引きをする。アタリの色は赤と青の 2 色。赤の場合は A（前方）ブロックとなる。A ブロックの当選者は、全員が引き終わるまで神苑内に待機。各当たりくじには番号が振ってあり、その番号順でスタート位置を決める。青の場合は B（後方）ブロック。番号が振ってあり、午前 3 時から赤門前にて、番号順に好きな場所に順次座っていってもらう。無地のくじははずれくじであり、C ブロックよりのスタートとなる。門から離れた位置からのスタートとなるにも関わらず、2015 年度には 5000 人近い人たちが並んだ。全員がくじを引き終わるのが午前 1 時ごろ。終了後 A ブロック当選者への場所決めを行う。番号の若い順から、好きな場所を紙の上で選んでいく。ちなみに、1 列 12 名、9 列あるので、最大 108 名が A ブロックには並ぶことになる。当神事の簡単な歴史的変遷と意義を講長らが参加者に話した上で、4 時まで解散させる。

・10 日午前 3 時

B ブロック当選者を集合させる。B ブロック当選者は、当選札（A,B ともに当たりくじと交換の上、配布）、そして当たった際の受付での署名をもとに確認している。番号順に好きな場所を選んで座れるというやり方を採っている。B ブロックの入場が終わると、講員がチョークにて、A ブロックの座る位置のマス目を書いていく。

・10 日午前 4 時

A ブロック当選者入場。A ブロック当選者は、ハンコを手に押されており、それと当選券、当選受付時の署名をもとに確認している。右写真で副講長と警備員が立っているところが、A ブロックと B ブロックとの境目。ここで、講長、副講長からのこれからのタイムスケジュール、由来などについての話。2012 年からは、参加者に「黄色い手袋」をはめてもらって、それがメディアに映ることで震災復興への応援をしていきたいとの話も行った。この後、ウォーミングアップもあるために、一旦解散。参加者は待機したままでも良いし、ウォーミングアップに行くのも構わない自由な時間となる。境内では、精進潔斎をした神職によって「忌籠祭」が執り行

われている。C ブロックは門前より曲がったところに待機。数の上で一番多いのが、このブロックである。講員や各団体の協力者とともに、警備員・県警⑦も多く張り付いている。

・10 日午前 5 時ごろ

ウォーミングアップを終えた参加者達が戻ってきて、再度の集合。そして 5 時半より、神社側からの安全を祈念してのお祓い⑧が行われる。門の裏側では、開門担当の講員によって、シミュレーションが行われる。設立当初は講員のみが開けていたが、数年が経って、元福男も含めて開けてもらうことになった。境内には、各報道機関のカメラが設置されている。

・10 日午前 6 時

開門。かんぬきは、半分ほど抜いておく。H.R.氏の「開門」の発声で、門を押さえていた講員と元福男たちは、一斉に「逃げる」。門は、外からの圧力によって、すぐに開く。この引継ぎは、以前門を開けていた露天商組合の方から教えてもらったことである。脚力のある人物（元福男がなることが多い）が真ん中を押さえ、一番長い距離を逃げるようにしている。A と B の間には講員と協力者によって「人の鎖」が作られる。開門と同時に将棋倒しにならないように、スピードを落としながら、進めていく。AB ブロックが無事に門を通過し約 50 メートル先の第 1 コーナーあたりにまで差し掛かっていることが確認できると、その旨を C ブロックに伝える⑨。すると警備員に誘導され、C ブロックが入場。5000 名から 6000 名という大人数であるため、この人数がすべて門を通過するまでには 5 分近くかかる。C ブロックでも、門を見た瞬間に表情が一変

し、駆け出す人も多くいる。そして、初めに拝殿にたどり着いた 3 名を神職が抱きかかえる。これまでの歴史的変遷で見てきたが、初めのころは拝殿の右側から走りこんで、鈴紐をつかむ形であり、真ん中の紐をとったものが「一番福」であった。それが、昭和 60 年代に真ん中から入る形に変更。紐は 3 本だったが、1998 年に鈴縄も 1 つに統一された。現在では縄を廃止し、神職が一番から三番を抱きかかえられる（選ぶ）形へと変化を遂げていった。そして昇殿し、3 名は正式に福男として認められる。

・10 日午前 6 時 15 分ごろ

境内に置かれている救護所に連絡。各方面からのけが人の有無などの確認。ちなみに、2015 年では 0 名であった。その後社務所に入り、各協力者へのお礼と同時に総括を行う。

・10 日午前 8 時ごろ

南門神苑のテント内の私物の撤収などを行う。引き続き講長は、11 日までチャリティーグッズの販売を行う。グッズ販売の売り上げは、神戸新聞厚生事業団を通じて、東北地方の震災復興に使われる。

1 年間の流れと同時に、開門神事の 1 日の動静について、説明をした。2005 年に初めて行ったころと比べると、行政の指導があったことも大きいが、様々な組織からの支援を得られることとなり、10 年前よりもスムースな運営が可能となっている。地元の方々や氏子青年会、神職との関係が生まれたことも、大いに意義があった。神事以外では接点のなかった一参加者同士が、神事の主催者として協働して機能するようになる興味深い事例となっている。

4 節　東北へ。拡がる福男選び

3 節で述べたように、2012 年からは、講長となった H.R.氏の提案で、東日本大震災の被災者を勇気付けたいとの思いから、「黄色い手袋」を参加者に装着してもらう運動や、チャリティーグッズを販売する運動[10]を行っており、開門神事を軸としたボランティア活動の側面も併せ持つようになった。このように、神事の執行のみにとらわれず、様々なメッセージ性を織り込んでいこうと試みている。1995 年 1 月 17 日、阪神淡路大震災が起こった当時、この西宮神社も被災した。拝殿、大練塀、絵馬堂など多数が倒壊し、完全な復旧までには多くの時間を要した。これは西宮神社に限ったことではなく、西宮市全体がそうであった。その際には、全国からたくさんのボランティアが訪れ、義援金も集まった。

この講長 H.R.氏は、1997 年の初参加の時より門を開けている現在まで、一貫して「ガッツ

や KOBE」と描かれた阪神・淡路大震災復興支援のトレーナーを着用して参加している。開門神事自体は第 3 章でも述べたように、震災復興の象徴として 1996 年には新聞紙上に取り上げられたこともある。つまりは、その復興のイメージをその後の東日本大震災へも繋いでいこうとしているのである。幸い、彼やその他のメンバーが 15 年間参加し続けることによって、そのメッセージ性も保持され続けて、今に受け継がれてきた。講長のこのチャリティー提案時には異論もあったものの、結果的には多くのメンバーが了承した背景には、震災に対する共通共有する思いが底流にあったからではないだろうか。

西宮神社としても、被災した東北地方の神社への支援を行っていたこともあり、この働きかけに了承した。現在でも、これらの副次的なイベントが続いている。そしてこの試みとともに、東北地方では興味深い事例も起こっている。それは、福男選びに類似したイベントが、震災復興の文脈で複数誕生したことである。1 つは宮城県の女川町の「女川復幸（ふっこう）祭」における、「津波伝承　女川復幸男」である。2013 年に地元の若者たちが集い、その中で西宮神社の開門神事福男選びを参考にして生まれたイベントである。詳細としては、津波が女川に到達した時刻に港から約 350 メートル先の高台にある女川小学校までを走るというものである。そこで一番になった人物には、震災後に発見され「きぼうのかね」として存在する鐘を鳴らすことが出来る権利が与えられ、津波が来たら高台に逃げよという教えを継承するイベントである。復興の願いとともに、津波の怖さを後世に伝えるメッセージも含まれている。2015 年には駅舎が復興し、鉄道線の再開イベントも併催され、女川の一大イベントとして成立している感がある。

福男競走に類似しているものはその他にも存在するが、「参考にさせて欲しい」と西宮神社に直接の申し出があったのは、このイベントが初めてであった。そのこともあり、申し出を受け 2014 年以降は、H.R.氏と 2014 年の福男が女川を訪れ、このイベントの開催に加わると同時に、西宮神社として「公認の行事」と決定したのである。彼らが訪れた際には、競争の合図である「逃げろ!」の発声を H.R.氏が行った。そして 2015 年 1 月には、2 年連続「復幸男」となった S 氏が遂に西宮神社に来て、開門を手伝った。同じく 3 月には H.R.氏らが再度女川に行き、このイベント開催に協力するなど、交流が続いている。

2015 年には、2 例目の「西宮神社公認イベント」が誕生した。それは、2 月に日蓮宗日

澤山仙寿院と釜石市出身の有志「釜石応援団」らが行う「新春韋駄天競走」である⑪。市街地から 290 メートル先の高台にある、仙寿院を目指すというもので、女川と同じく津波被害から逃げよとのメッセージをこれからも継承していくこと、そして復興の祈念が目的である。こちらは、男性、女性、親子部門と 3 部門に分かれて競争をしている。2015 年にはこちらのイベントにも H.R.氏が参加し、部門の 1 つのスタートの合図である銅鑼を鳴らした。西宮神社の十日戎開門神事福男選びで福男に授与される戎の神像を渡すなど、公認性を出した交流となっている。両イベントを通じて H.R.氏、「阪神大震災での支援に感謝する。阪神の復興とともに歩んだ福男選びが神社や寺院の垣根を超え、釜石や女川で命を守る行事につながったことがうれしい」と話す。

これらのイベントに関しては、速さや、躍動感といった部分から、マスメディアとしても取り上げられやすく、また、津波からの避難の伝承という優位性や分かりやすさという部分からも、津波被害の大きかった地域では、イベントとして受け入れられやすい環境であったと考えられる。そしてそれらのイベントを西宮神社が「公認」するという流れも、開門神事自体が 1996 年以降阪神大震災からの復興というメッセージ性を持っていたところも大きかったのではないか。またその「公認」を受け入れられる社会的な認知度が、この 20 年の間で高まったということも同時に言えるだろう。走り、福を獲得するというイベントは、構造的に非常にシンプルであり、また様々なメッセージを込めることが出来る。他にも類似イベントはいくらか存在するが、この津波避難のイベントに関しては、西宮神社が創り出す「正統性」とイベントを開催する側の思惑が合致したともいえる。西宮神社の開門神事が持つ震災復興という側面から、さらに「公認」される流れが続くとも考えられる。「イミ・ミカリ」という部分が欠落した上での広がりではあるが、認知度の高さ、映像から見られる「イベントのわかりやすさ」から、誰もが参加できる「合衆性」がよさこい系イベントよりもはるかに高いために、これから先の更なる広がりがあるのではないか。

---

① 具体的に懸念されたのは、くじ引きによって自由に出走が出来なくなることであった。福男には陸上出身者が多く、自分の好きな位置からスタートできる今のやり方が、ベストとは言わないが、くじ引きよりは、はるかに良いという意見であった。しかし、何日もそのために待たなければならないこと、今回のような事件が再発しないためには、変革が必要であることも感じていた。

② 2004 年の事件の後であり、在阪局はもとより、在京局でもこれまであまり来なかった、ワイドショーを主とする番組のマスメディアまでが大勢押し寄せた。この大挙に対する対策がとられていなかった。

③ 当初は露天商組合がすべて開けることになっていたが、開門の 2 時間前ほどに、偶然に警備の手薄となっていた門前で、2002 年の様に乱入者が入り、大きく騒いだのである。

門の中にいた露天商組合の数人がこれをすぐに抑えたが、このことが問題になり、門を開ける所に氏子青年会のメンバーが加わったのである。2005 年は忌籠が行われていても、そのことにあまり気を留めないマスメディアの数名が、境内に入り込んだりする事案も多発し、くじ引きでも境内でも大いに騒ぐことにも繋がり、境内の治安も担当する露天商組合側の神経を逆なでしていたと考えられる。

④ この女性は、「2 ちゃんねる」などの掲示板を見て初参加した参加者であった。主催者側となった我々も、この神事の危険性について告知はしたが、結果としては流血の惨事となってしまった。この件でも、開門を担当する露天商組合側から改善の声が挙がった。現在では、走る格好をしている参加者の限定をし、そして女性や高齢者がくじ引きで若い番号が当たった場合、危険度が高い神事であることを認識してもらった上で参加する方式を厳重に採っており、その契機となった。

⑤ 現在でも、この「マージナルなメンバー」は存在する。くじ引きに関しては、一切関わらせないことを行っている。つまり、くじ引きを引きたいメンバーは、くじ引きで外れた場合にのみ手伝い（開門、誘導など）が出来るという形を採っている。くじ引きをしたい多くが、足に自信がある元福男であることが多く、彼らは危険度が高い開門の仕事に就くことが多い。福男が門を開けるという、福男選びのオーセンティシティの上でも彼らの存在は必要不可欠である。

⑥ この「強い要望」の意味としては、開門神事講社が神事に関する一切を行うことによって、行政と神社からの明確な意思が、着実にそして均一に伝わることを意図したものであるとも言えよう。

⑦ 神事に関する警備員の増強は 2005 年以降、神社側によって着実に進められてきたが、兵庫県警も 2008 年の行政指導以降は、雑踏対策の警視が直接指揮を執る体制になっており、警察官も多数配置されるようになった。

⑧ 参加者の安全を祈念してのお祓いは、2005 年以前はなかったものである。いわば創られた伝統であるともいえるが、このお祓いが行われることによって、福つかみ競争といった雰囲気が感覚的に少し弱まった。

⑨ この A・B ブロックの動向を見極めて、C ブロックにスタートの指示を出すのが、私の任された役目である。施行当初は C の出発するタイミングが早かったり、人の鎖となる警備員が押し倒されそうになったりと危険も多かった。現在 10 年近くこの体制で行うことによって、スムースに催行することが出来るようになった。ただ、現在（2005 年以降）の問題としては A・B ブロックに当選した参加者が、あらかじめ境内の参道を走ったことがないことも多く、転倒することも多い。見極めの難しい部署である。

⑩ 具体的には、開門神事をモチーフにした携帯ストラップや福男に授与されるハッピと同じ柄の手ぬぐいなどを販売している。収益金はすべて神戸新聞厚生事業団に寄付し、東北の復興へと役立てられるようになっている。

⑪ 釜石の韋駄天競走を着想したきっかけの一つに、関西在住の釜石出身者の存在があった。それは現在、天理大学にて考古学を教えている橋本英将氏である。彼が関西でこの神事を見出し、東京などの各地にいる仲間に復興のイベントとして参考にしたらということを伝え、また西宮神社にその旨を申し出たこともあり、実施と西宮神社による公認の流れへと進んでいった。人のつながり、学術のつながりなどが合わさって、祭りが伝播していく興味深い事例となっている。

第 6 章　質問紙調査からみえること

1 節　定量調査の手法とそこに至った動機

1997 年から調査手法としては、新聞資料・社務日誌などの文献調査、そして参与観察とインタビューという対面での調査を主に行ってきた。参加人数については新聞資料からも得られ、動機などについても参加者からの語りによって、ある程度把握が出来た。しかし、より多くの参加者の属性や動機、そして感想を知ることが出来れば、この神事の全体像の把握が可能になると考えた。そのために、定量調査を行いやすい質問紙調査を行うことを、2000 年あたりから構想し始めていた。

ただ、質問紙調査を行うに当たっては、物理的な問題が生じてくる。1 月 9 日 10 日の十日戎当日は、調査者自身が参与観察を続けており、その合間に各参加者に対してインタビューを行うというやり方であった。そのため、なかなか質問紙にまでは手が回らずにいた。それでも、参加者の属性分析を行いたいとの思いから、2001 年度から、質問紙を参加者に配り始めた。ランダムに配布するという手法は取れずに、まずは門前にいる参加者に手渡しで直にお願いをするやり方であった。幸い、参加者が集い出すのが 9 日の夕刻以降であり、10 日午前 6 時の開門までには時間があったこともあり、一定数の質問紙の回収が可能となった。このような調査を、まずは 2004 年までは続けることとした。

第 4 章で述べたように、2004 年の 1 月 10 日には「事件」が起きたために、次の年からは、一参加者としてではなく、開門前までに出走位置を決める主催者として行動することとなった。この開門に関しての奉仕活動は、2015 年現在まで続いている。10 年以上この体制で実行しているが、講社が発足した当初から紆余曲折があり、神事の催行に人手が足りない年もあれば、イレギュラーに事件が発生してアンケートまで手が回らなかった年もあった。そのため、データとしてランダムに選び、そこから全体像を把握するといった統計社会学的なデータとしての使用は出来ない。ただ、2001 年から 2015 年まで、どのような参加者が門前に集い、どのような動機で参加していたのか、そして複数回参加した参加者に感想を聞くことで、この神事の魅力と、なぜもう一度走ろうと思ったのかに関して、多くの声を拾うことが出来た。その意味では、貴重なデータであると言えよう。

まず、15 年分の総データからの属性を、その後 2004 年までのデータとそれ以降のデータで見比べてみたい。なぜならば、2004 年を境として神事の方式が変化し、参加する際に並ぶ時間がそれ以前より大幅に減ったことによって、参加者層の変化が予測できるからである。

具体的には、2004 年までは暗黙のルールとして、「早く門前に来た者からスタート位置を決めることが出来る」というものがあった。歴史的な変遷でも述べたが、その位置決めの方法が変更されぬままで、しかも参加者同士の取り決めでしかなかったために、一夜を徹するだけでは収まらず、3 日前から、2004 年においては早くも正月過ぎから門前にテントを張って集団で並ぶグループが現れた。このように、最低でも 9 日の夕方には「走る意志

のある参加者」はほとんどが揃っている状態であった。つまり、参加には長い待機時間が必要であった。しかし、2005 年以降は 10 日の 0 時以降にくじ引きで出走位置決めする方式に変更し、並ぶ時間が短縮された。そのことによって、それまで参加が難しかった層が多数参加することに繋がったのではないかと予測している①。今回のデータから、そのことが明らかになる。またくじ引きに変わったことによって、参加動機や、感想、そして再度参加する際の動機に何か変化が起きてないだろうか。その辺りも解析をしていく中で明らかにしていきたい。

1.年度別の被調査者数

2001年度から2015年度までの質問紙調査は、総数で812人に行っている。参加年度の表を見て分かるように、当初は20人に満たない数しか、質問紙調査が出来なかった。神事の主催者として加わりだした2005年以降も、年によっては20人の年（2008年）、35人の年（2011年）が存在する。2009年に正式に開門神事講社として成立してから後は、奉仕者も増加したことによって、安定した人数の調査が少しは可能となった。2004年までは、参与観察者であった私は傍から見ると参加者であり、「同じ」参加者に手渡しで配布し、2005年から2008年までは、くじ引きで外れて不利な出走位置になってもなお走りたい人を中心に行い、時間があればくじ引きにあたった（Aブロック）に入っている人たちにも声をかけて回答をしてもらっていた。

2009年以降は調査者自身が、Aブロックの受付を行うこととなり、時間的にくじに外れた参加者には、接する時間が取れづらいために、基本的にはAブロック当選者を中心に質問紙を配布することにしている。

門前に集えるAブロックは1列に12名が並ぶことが出来、9列までであるため、最大108名の参加者への質問紙の配布が可能となった。2009年より2011年まではAブロック当選者全員を対象には行っていなかったが、2012年度より原則Aブロック当選人物全員を対象として質問紙を配布し、待ち時間を利用して回答してもらうやり方が確立した。そのために、表を見ていただくと分かるように、以降の回答者数にはかなりばらつきがあるが、100人を超える年も出てきている。

参加年度

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2001年度	19	2.3	2.3	2.3
	2002年度	34	4.2	4.2	6.5
	2003年度	35	4.3	4.3	10.8
	2004年度	34	4.2	4.2	15
	2005年度	46	5.7	5.7	20.7
	2006年度	39	4.8	4.8	25.5
	2007年度	26	3.2	3.2	28.7
	2008年度	20	2.5	2.5	31.2
	2009年度	87	10.7	10.7	41.9
	2010年度	54	6.7	6.7	48.5
	2011年度	35	4.3	4.3	52.8
	2012年度	86	10.6	10.6	63.4
	2013年度	101	12.4	12.4	75.9
	2014年度	97	11.9	11.9	87.8
	2015年度	99	12.2	12.2	100
	合計	812	100	100	

2.質問紙の内容

質問紙の内容は、次の項目である。「年齢」、「性別」、「出生地」、「幼少期に過ごした場所」、「小学生の時期に過ごした場所」、「青年期に過ごした場所」、「職業」、「十日戎に関していつ知ったのか」、「十日戎に関して誰（またはどのような媒体）から知ったのか」、「開門神事に関していつ知ったのか」、「開門神事に関して誰（またはどのような媒体）から知ったのか」、「出場回数」、「体育系クラブ活動の有無」、「種目」などの属性に関するもの、そして「参加動機」、複数回参加者には「感想」と「複数回参加動機」である。比較的質問項目は多い。感想・動機に関しては、様々なものがあることを考え、自由回答にした。多くの意見を幅広く拾うことによって、この神事についてより深く考察できると考えたからである。反面、自由回答を行ってもらうためには、より多くの時間が必要となる。そのため、回答率が下がってしまうことも予想されたが、白紙回答は 1 パーセント程度と少なく、多くの参加者が真摯に回答してくれている。この点は、参加者に感謝しなければならない。この節では、まず全体の属性を見ていきたい。

3.全体の性別・スポーツ経験

性別に関して15年間全体では、96.4%が男性と回答した。「福男選び」と称しているため参加は男性限定と思われがちであるが、戦前でも女性の参加があったことが、新聞紙上からも散見される。当初から女性の参加も自由であったが、圧倒的に男性が多かった。

性別

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男性	783	96.4	96.4	96.4
	女性	27	3.3	3.3	99.8
	不明	1	0.1	0.1	99.9
	N/A	1	0.1	0.1	100
	合計	812	100	100	

性別と、体育系活動の経験（現在・過去）でのクロス検定を行ってみると、次のような結果となった。現在は男性、女性とも半数以上が体育系活動に加わっていないものの、過去には圧倒的多くが、両性とも体育会活動の経験があることが明らかになった。

性別 と 体育系活動の有無（現在） のクロス表

		体育系活動の有無（現在）			合計
		はい	いいえ	N/A	
性別	男性	310	460	13	783
	女性	11	16	0	27
	不明	1	0	0	1
	N/A	0	1	0	1
合計		322	477	13	812

性別 と 体育系活動の有無（過去） のクロス表

		体育系活動の有無（過去）			合計
		はい	いいえ	N/A	
性別	男性	521	67	17	605
	女性	14	7	0	21
	不明	1	0	0	1
	N/A	0	0	1	1
合計		536	74	18	628

クロス検定に関しては、種目が多岐に渡っていたために、多いものだけ挙げると、現在行っている・または所属している競技としては、男性が、①陸上（69名）、②野球（53名）、③サッカー（27名）、④テニス（12名）、④ラグビー（12名）、⑥バスケットボール（10名）、⑦アメリカンフットボール（9名）、⑦ラクロス（9名）、⑦フィットネスクラブ（9

名）、⑩空手道（5名）と続く。種目は不明だが、「学校のクラブ」（12名）、「職員・社会人クラブ」（8名）と回答した参加者もいた。男性の約20%が陸上をやっていたことが分かる。より面白かったのは、女性である。現在クラブなどの競技活動に参加していると回答した参加者のうち、7名が陸上を行っている。

過去においては、男性が①陸上（106名）、②野球（83名）、③サッカー（80名）、④バスケットボール（38名）、⑤テニス（24名）、⑥ラグビー（20名）、⑦柔道（16名）、⑧バレーボール（15名）、⑨剣道（10名）などと続く。競技人口にもある程度比例するが、走ることに関連が深いスポーツがやはり多い。女性に関しては、14名中半数の7名が陸上で、これも面白い結果となった。この神事の特性から、速く走ることが求められるわけであるが、こと女性に関しては「走りのスペシャリスト」とも言える人が参加していることが分かる。

4.職業・年齢

職業と年齢に関しては、夜を徹するということから、時間に余裕があり体力もある学生が多いことが分かる。

実際には、小中学生、高校生、高専生、専門学校生、大学生、大学院生を入れると5割近くであろうか。非学生の比率も案外高いことが分かる。これについては、2004年までの参加者とは変化があったものと思われる。並ぶ時間が2004年までに比べ以降ではかなり変化があるので、次の節で改めて変化を見てみたい。

職業

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	8	1	1	1
	高校生	74	9.1	9.1	10.1
	短大・大学・大学院生	288	35.5	35.5	45.6
	小・中学生	8	1	1	46.6
	大学受験生	6	0.7	0.7	47.3
	フリーター	27	3.3	3.3	50.6
	販売・営業	106	13.1	13.1	63.7
	企画・マーケティング	5	0.6	0.6	64.3
	エンジニア	51	6.3	6.3	70.6
	宣伝・広告	8	1	1	71.6
	各種研究開発職	10	1.2	1.2	72.8
	公務員	48	5.9	5.9	78.7
	教員	15	1.8	1.8	80.5
	自営業	41	5	5	85.6
	その他	103	12.7	12.7	98.3
	専門学校生	10	1.2	1.2	99.5
	高専生	4	0.5	0.5	100
	合計	812	100	100	

年齢層に関しては、次のようなデータとなった。10代前半から60代半ばとかなり幅広い層が参加している。やはり多いのは、大学生相当の18歳から22歳であろうか。ここだけで41.2%である。10代から25歳までで65%を上回っていることを考えると、やはり多い。仮説として、2004年より前までは、10代から20代前半および学生の比率がくじ引き導入後より高いのではないかと考えているが、後の解析結果を待ちたい。

年齢

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	5	0.6	0.6	0.6
	13	1	0.1	0.1	0.7
	14	1	0.1	0.1	0.9
	15	6	0.7	0.7	1.6
	16	14	1.7	1.7	3.3
	17	35	4.3	4.3	7.6
	18	48	5.9	5.9	13.5
	19	59	7.3	7.3	20.8
	20	62	7.6	7.6	28.4
	21	88	10.8	10.8	39.3
	22	77	9.5	9.5	48.8
	23	53	6.5	6.5	55.3
	24	54	6.7	6.7	61.9
	25	35	4.3	4.3	66.3
	26	24	3	3	69.2
	27	24	3	3	72.2
	28	29	3.6	3.6	75.7
	29	20	2.5	2.5	78.2
	30	28	3.4	3.4	81.7
	31	14	1.7	1.7	83.4
	32	17	2.1	2.1	85.5
	33	14	1.7	1.7	87.2
	34	14	1.7	1.7	88.9
	35	19	2.3	2.3	91.3
	36	12	1.5	1.5	92.7
	37	10	1.2	1.2	94
	38	5	0.6	0.6	94.6
	39	1	0.1	0.1	94.7
	40	7	0.9	0.9	95.6
	41	7	0.9	0.9	96.4
	42	7	0.9	0.9	97.3
	43	4	0.5	0.5	97.8
	44	3	0.4	0.4	98.2
	45	1	0.1	0.1	98.3
	46	1	0.1	0.1	98.4
	47	1	0.1	0.1	98.5
	48	1	0.1	0.1	98.6
	49	4	0.5	0.5	99.1
	50	3	0.4	0.4	99.5
	55	1	0.1	0.1	99.6
	56	1	0.1	0.1	99.8
	61	1	0.1	0.1	99.9
	64	1	0.1	0.1	100
	合計	812	100	100	

5.出身地の属性

この項目に関しては、出生地、幼少期に過ごした場所、小学生時に過ごした場所、青年期に過ごした場所に分け、都道府県・市町村単位で聞いた。どの項目も兵庫県と大阪府が多かったため、兵庫県に関しては①兵庫県とのみ回答、②西宮市、③兵庫県旧摂津地域、④兵庫県のそれ以外、大阪府に関しても①大阪府とのみ回答、②大阪府旧摂津地域、③大

阪府のそれ以外という形で市町村を分類②した。文化的なつながりを考えた際、兵庫県・大阪府は旧国で分けた方が、有意差が出やすいと判断したためである。特に摂津地域は、大阪府と兵庫県にまたがる地域であり、旧国で解体した方が良いと考えたのである。

5-1　出生地

出生地に関しては、次の通りとなった。西宮市が95名であり、全体の11.7%である。西宮と大阪・兵庫の旧摂津地域を含めると、41.6%にあたる338名である。兵庫県全域で考えると251名（30.9%）、大阪府全域では170名（20.9%）であり、関西2府4県（兵庫・大阪・京都・滋賀・奈良・和歌山）では578名(71.2%)である。その他、東京、福岡、愛知、神奈川なども多いが、人口の多い出生地であることに留意する必要がある。

出生地

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	兵庫県のみ回答	2	0.2	0.2	0.2
	西宮市	95	11.7	11.7	11.9
	兵庫・旧摂津	154	19	19	30.9
	兵庫旧摂津以外	77	9.5	9.5	40.4
	大阪府のみ回答	11	1.4	1.4	41.7
	大阪・旧摂津	89	11	11	52.7
	大阪旧摂津以外	70	8.6	8.6	61.3
	京都府	38	4.7	4.7	66
	滋賀県	15	1.8	1.8	67.9
	奈良県	14	1.7	1.7	69.6
	和歌山県	13	1.6	1.6	71.2
	広島県	11	1.4	1.4	72.5
	神奈川県	10	1.2	1.2	73.8
	北海道	8	1	1	74.8
	東京都	22	2.7	2.7	77.5
	福井県	5	0.6	0.6	78.1
	宮崎県	2	0.2	0.2	78.3
	福岡県	18	2.2	2.2	80.5
	愛媛県	12	1.5	1.5	82
	石川県	11	1.4	1.4	83.4
	島根県	4	0.5	0.5	83.9
	愛知県	22	2.7	2.7	86.6
	岡山県	17	2.1	2.1	88.7
	静岡県	4	0.5	0.5	89.2
	山口県	6	0.7	0.7	89.9
	佐賀県	4	0.5	0.5	90.4
	栃木県	2	0.2	0.2	90.6
	香川県	9	1.1	1.1	91.7
	鳥取県	5	0.6	0.6	92.4
	大分県	4	0.5	0.5	92.9
	群馬県	2	0.2	0.2	93.1
	埼玉県	6	0.7	0.7	93.8
	岐阜県	7	0.9	0.9	94.7
	高知県	1	0.1	0.1	94.8
	宮城県	2	0.2	0.2	95.1
	千葉県	7	0.9	0.9	95.9
	青森県	1	0.1	0.1	96.1
	鹿児島県	5	0.6	0.6	96.7
	三重県	9	1.1	1.1	97.8
	熊本県	4	0.5	0.5	98.3
	福島県	2	0.2	0.2	98.5
	沖縄県	1	0.1	0.1	98.6
	茨城県	1	0.1	0.1	98.8
	アメリカ	1	0.1	0.1	98.9
	新潟県	2	0.2	0.2	99.1
	富山県	1	0.1	0.1	99.3
	徳島県	4	0.5	0.5	99.8
	シンガポール	1	0.1	0.1	99.9
	海外	1	0.1	0.1	100
	合計	812	100	100	

5-2　幼少期に過ごした場所

幼少期に過ごした場所に関しては、次の通りとなった。西宮市が90名であり、全体の11.1%である。西宮と大阪・兵庫の旧摂津地域を含めると、41.4%にあたる336名である。兵庫県全域で考えると330名（40.6%）、大阪府全域では165名（20.3%）であり、関西2府4県（兵庫・大阪・京都・滋賀・奈良・和歌山）では570名(70.2%)である。出生地についても同様に言えたことだが、海外も含め、様々なところで過した参加者が参加していることが分かる。

幼少期に過ごした場所

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	兵庫県のみ回答	2	0.2	0.2	0.2
	西宮市	90	11.1	11.1	11.3
	兵庫・旧摂津	157	19.3	19.3	30.7
	兵庫旧摂津以外	81	10	10	40.6
	大阪府のみ回答	7	0.9	0.9	41.5
	大阪・旧摂津	89	11	11	52.5
	大阪旧摂津以外	69	8.5	8.5	61
	京都府	36	4.4	4.4	65.4
	滋賀県	14	1.7	1.7	67.1
	奈良県	14	1.7	1.7	68.8
	和歌山県	11	1.4	1.4	70.2
	広島県	9	1.1	1.1	71.3
	神奈川県	13	1.6	1.6	72.9
	北海道	4	0.5	0.5	73.4
	東京都	20	2.5	2.5	75.9
	福井県	8	1	1	76.8
	宮崎県	2	0.2	0.2	77.1
	福岡県	16	2	2	79.1
	愛媛県	13	1.6	1.6	80.7
	石川県	9	1.1	1.1	81.8
	島根県	4	0.5	0.5	82.3
	愛知県	22	2.7	2.7	85
	岡山県	14	1.7	1.7	86.7
	静岡県	7	0.9	0.9	87.6
	山口県	4	0.5	0.5	88.1
	佐賀県	4	0.5	0.5	88.5
	栃木県	4	0.5	0.5	89
	香川県	11	1.4	1.4	90.4
	鳥取県	6	0.7	0.7	91.1
	大分県	3	0.4	0.4	91.5
	群馬県	3	0.4	0.4	91.9
	埼玉県	11	1.4	1.4	93.2
	岐阜県	8	1	1	94.2
	高知県	1	0.1	0.1	94.3
	宮城県	2	0.2	0.2	94.6
	千葉県	7	0.9	0.9	95.4
	青森県	1	0.1	0.1	95.6
	鹿児島県	7	0.9	0.9	96.4
	三重県	9	1.1	1.1	97.5
	熊本県	5	0.6	0.6	98.2
	福島県	2	0.2	0.2	98.4
	茨城県	2	0.2	0.2	98.6
	アメリカ	3	0.4	0.4	99
	新潟県	1	0.1	0.1	99.1
	徳島県	4	0.5	0.5	99.6
	シンガポール	1	0.1	0.1	99.8
	海外	1	0.1	0.1	99.9
	ドイツ	1	0.1	0.1	100
	合計	812	100	100	

5-3　小学生の時期に過ごした場所

小学生時に過ごした場所に関しては、次の通りとなった。西宮市が89名であり、全体の11.0%である。西宮と大阪・兵庫の旧摂津地域を含めると41.7%にあたる339名となる。兵庫県全域で考えると337名（41.5%）、大阪府全域では168名（20.6%）であり、関西2府4県（兵庫・大阪・京都・滋賀・奈良・和歌山）では583名(71.7%)である。その他の地域も多少の数の変動はあるものの、大きな変化とまでは言えない。7割が関西、3割がそれ以外の日本全国からであろうか。

小学生の時に過ごした場所

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	兵庫県のみ回答	2	0.2	0.2	0.2
	西宮市	89	11	11	11.2
	兵庫・旧摂津	161	19.8	19.8	31
	兵庫旧摂津以外	85	10.5	10.5	41.5
	大阪府のみ回答	8	1	1	42.5
	大阪・旧摂津	89	11	11	53.4
	大阪旧摂津以外	71	8.7	8.7	62.2
	京都府	38	4.7	4.7	66.9
	滋賀県	14	1.7	1.7	68.6
	奈良県	15	1.8	1.8	70.4
	和歌山県	11	1.4	1.4	71.8
	広島県	12	1.5	1.5	73.3
	神奈川県	19	2.3	2.3	75.6
	北海道	4	0.5	0.5	76.1
	東京都	11	1.4	1.4	77.5
	福井県	6	0.7	0.7	78.2
	宮崎県	3	0.4	0.4	78.6
	福岡県	15	1.8	1.8	80.4
	愛媛県	12	1.5	1.5	81.9
	石川県	9	1.1	1.1	83
	島根県	4	0.5	0.5	83.5
	愛知県	20	2.5	2.5	86
	岡山県	13	1.6	1.6	87.6
	静岡県	5	0.6	0.6	88.2
	山口県	3	0.4	0.4	88.5
	佐賀県	3	0.4	0.4	88.9
	栃木県	4	0.5	0.5	89.4
	香川県	11	1.4	1.4	90.8
	鳥取県	7	0.9	0.9	91.6
	大分県	3	0.4	0.4	92
	群馬県	3	0.4	0.4	92.4
	埼玉県	11	1.4	1.4	93.7
	岐阜県	8	1	1	94.7
	高知県	1	0.1	0.1	94.8
	宮城県	2	0.2	0.2	95.1
	千葉県	7	0.9	0.9	95.9
	青森県	1	0.1	0.1	96.1
	鹿児島県	6	0.7	0.7	96.8
	三重県	9	1.1	1.1	97.9
	熊本県	3	0.4	0.4	98.3
	福島県	1	0.1	0.1	98.4
	茨城県	2	0.2	0.2	98.6
	アメリカ	1	0.1	0.1	98.8
	新潟県	1	0.1	0.1	98.9
	徳島県	4	0.5	0.5	99.4
	秋田県	1	0.1	0.1	99.5
	サウジアラビア	2	0.2	0.2	99.8
	海外	1	0.1	0.1	99.9
	ドイツ	1	0.1	0.1	100
	合計	812	100	100	

5-4　青年期から（現在にかけて）時期に過ごした（ている）場所

青年期に過ごした場所に関しては、次の通りとなった。参加者の大半が20代であることを考えると、現在の居住地に近い。西宮市が109名であり、全体の13.4%である。西宮と大阪・兵庫の旧摂津地域を含めると、44.5%にあたる362名である。兵庫県全域で考えると355名（43.7%）、大阪府全域では173名（21.3%）であり、関西2府4県（兵庫・大阪・京都・滋賀・奈良・和歌山）では612名(75.4%)である。西宮市で青年期を過ごした、または現在住んでいる人たちが、小学生の時よりも増えている。それ以外の地域は、海外はなくなったが、それでも北海道・東北・関東・中国・四国・九州からと多彩な地域から来ていることが分かる。

ここまでで、青年期になるに従って、旧摂津地域に住む人が多くなることが分かった。特にデータが変動したのは、小学生の時に住んでいた場所から青年期に住んでいた（または住んでいる）場所においての「西宮市」である。20 名が増加している。これは、現在住んでいるところが西宮であるが、何らかの移動で青年期から現在にかけて西宮に移住してきた人を示す。と言うことは、西宮に来た新しい住民を受け入れてい

青年期（から現在にかけて）過ごした（または過ごしている）場所

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	兵庫県のみ回答	2	0.2	0.2	0.2
	西宮市	109	13.4	13.4	13.7
	兵庫・旧摂津	163	20.1	20.1	33.7
	兵庫旧摂津以外	81	10	10	43.7
	大阪府のみ回答	7	0.9	0.9	44.6
	大阪・旧摂津	90	11.1	11.1	55.7
	大阪旧摂津以外	76	9.4	9.4	65
	京都府	41	5	5	70.1
	滋賀県	17	2.1	2.1	72.2
	奈良県	17	2.1	2.1	74.3
	和歌山県	9	1.1	1.1	75.4
	広島県	11	1.4	1.4	76.7
	神奈川県	19	2.3	2.3	79.1
	北海道	4	0.5	0.5	79.6
	東京都	18	2.2	2.2	81.8
	福井県	3	0.4	0.4	82.1
	宮崎県	3	0.4	0.4	82.5
	福岡県	10	1.2	1.2	83.7
	愛媛県	10	1.2	1.2	85
	石川県	9	1.1	1.1	86.1
	島根県	3	0.4	0.4	86.5
	愛知県	26	3.2	3.2	89.7
	岡山県	10	1.2	1.2	90.9
	静岡県	4	0.5	0.5	91.4
	山口県	2	0.2	0.2	91.6
	佐賀県	1	0.1	0.1	91.7
	栃木県	3	0.4	0.4	92.1
	香川県	9	1.1	1.1	93.2
	鳥取県	3	0.4	0.4	93.6
	大分県	2	0.2	0.2	93.8
	群馬県	5	0.6	0.6	94.5
	埼玉県	6	0.7	0.7	95.2
	岐阜県	7	0.9	0.9	96.1
	高知県	1	0.1	0.1	96.2
	宮城県	2	0.2	0.2	96.4
	千葉県	7	0.9	0.9	97.3
	青森県	1	0.1	0.1	97.4
	鹿児島県	4	0.5	0.5	97.9
	三重県	9	1.1	1.1	99
	熊本県	1	0.1	0.1	99.1
	福島県	1	0.1	0.1	99.3
	茨城県	2	0.2	0.2	99.5
	新潟県	1	0.1	0.1	99.6
	徳島県	2	0.2	0.2	99.9
	秋田県	1	0.1	0.1	100
	合計	812	100	100	

る神事であるとも考えられる。歴史的な変遷から、地元の神事から関西一円の神事へと変貌していったと考えていたが、夜を徹する神事でもあるので、居住地からのアクセスも考えると、神社に近い西宮市や旧摂津地域からの参加者がやはり多いことも明らかになった。

西宮（旧鳴尾村・旧山口村なども含むが）から 13%、旧摂津地域全体でみると 45%程度、そして関西全体を合わせると 75%程度であり、関西一円ということが出来るが、その関西全体の中で実に 65%を「兵庫県（43.7%）」と「大阪府（21.3%）」で占めている。実際の県別の居住人口を考えると、この兵庫と大阪は京都を除くと圧倒的に多い。京都は、列車などを使うと移動時間としては短いが、青年期で 40 名程度（5%）と京都府の総人口から考えるとあまり多いとは言えない。同時に 25%が関西圏以外からで、九州から北海道まで幅広い地域から参加していることが、改めて明らかになった。

この出身地のデータ解析で明らかになったように、大阪府と兵庫県からの出身者が多いが、2004 年までと 2005 年から 2015 年までには、何か変化があるのではないかと考える。参与観察としてであるが、2004 年までの参加の場合、物理的な制限もあり、参加できる地域もかなり制限されていたと推測される。物理的な参加が簡易となった 2005 年以降により広範囲からの参加となっているのではないか。2001 年から 2004 年までのデータとそれ以降の出身地のデータを見比べることで、具体的にどの地方からの参加者が増えたのか、ということを見ていきたい③。

2 節　2001 年から 2004 年までの参加者の属性

1.性別

2001 年から 2004 年までの性別をみると、男性が 9 割以上を占めている。また特徴的なことは、競技種目においてクロス検定をしてみると、男性の現在行っている体育系競技は、競技者 61 名のうち陸上 21 名で、以下野球（4 名）、サッカー（4 名）、トライアスロン（4 名）、ラクロス（4 名）であり、3 分の 1 の参加者が陸上部に所属していることである。過去の活動経験であるならば、陸上（17 名）、サッカー（8 名）、野球（6

性別

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男性	113	92.6	92.6	92.6
	女性	8	6.6	6.6	99.2
	不明	1	0.8	0.8	100
	合計	122	100	100	

性別 と 体育系活動の有無（現在） のクロス表

度数

		体育系活動の有無（現在）		合計
		はい	いいえ	
性別	男性	61	52	113
	女性	3	5	8
	不明	1	0	1
合計		65	57	122

性別 と 体育系活動の有無（過去） のクロス表

度数

		体育系活動の有無（過去）			合計
		はい	いいえ	N/A	
性別	男性	65	8	1	74
	女性	5	2	0	7
	不明	1	0	0	1
合計		71	10	1	82

名)、ラグビー（5 名)、バスケットボール（4 名）と続くが、こちらも陸上経験者が 4 分の 1 以上を占めていることが分かる。

女性はより顕著である。現在クラブ活動を行っていると答えた回答者の 3 名全員が、陸上の経験者であった。過去に関しても 5 名が体育系の活動をしていたと答えたが、そのうちの 4 名までが陸上の経験者であった。2004 年まで、参加する時点で半数以上がなにがしかの体育系の競技を行っていることが分かったと同時に、ほとんどが過去に何かの体育競技を行っていた経験があると答えている。

2.職業・年齢

職業・年齢に関しては、長時間を門前で過ごさなければならなかったため、比較的自由な時間が取れる生徒・学生（高校生から大学院生まで）が大半であろうと予想していたが、事実 7 割が生徒・学生であるとの結果が出た。そしてそれに呼応する形で、年齢層も 10 代後半から 20 代前半が非常に多い。これには体力的な要因とともに時間的な自由がある程度効く世代・職業であることも大きいと言えよう。

職業

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	1	0.8	0.8	0.8
	高校生	14	11.5	11.5	12.3
	短大・大学・大学院生	68	55.7	55.7	68
	フリーター	4	3.3	3.3	71.3
	販売・営業	5	4.1	4.1	75.4
	エンジニア	5	4.1	4.1	79.5
	公務員	10	8.2	8.2	87.7
	教員	2	1.6	1.6	89.3
	自営業	3	2.5	2.5	91.8
	その他	6	4.9	4.9	96.7
	専門学校生	3	2.5	2.5	99.2
	高専生	1	0.8	0.8	100
	合計	122	100	100	

年齢

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	16	1	0.8	0.8	0.8
	17	7	5.7	5.7	6.6
	18	12	9.8	9.8	16.4
	19	16	13.1	13.1	29.5
	20	17	13.9	13.9	43.4
	21	19	15.6	15.6	59
	22	13	10.7	10.7	69.7
	23	9	7.4	7.4	77
	24	5	4.1	4.1	81.1
	25	4	3.3	3.3	84.4
	26	1	0.8	0.8	85.2
	27	2	1.6	1.6	86.9
	28	3	2.5	2.5	89.3
	29	2	1.6	1.6	91
	30	3	2.5	2.5	93.4
	31	1	0.8	0.8	94.3
	32	3	2.5	2.5	96.7
	33	2	1.6	1.6	98.4
	35	1	0.8	0.8	99.2
	50	1	0.8	0.8	100
	合計	122	100	100	

3.出身（青年期に住んでいた場所）

先述した、青年期または現在住んでいる場所についてである。2001 年から 2004 年までのデータを見てみると、西宮市が 26 名（21.3%）、旧摂津地域で 66 名（54.0%）、兵庫県全体で 61 名（50.0%）、大阪府全体で 20 名（16.3%）となっている。2001 年から 2015 年まで通しで見た際よりも、比率としては西宮、もう少し広げて旧摂津地域からのパーセンテージが 10 パーセントほど高くなっている。関西全体からは 78.6%となり、この数字は 2001 年から 2015 年まで通した数字とさほど変わらない（75.4%）ことが明らかになった。テレビ放映の影響もあり、全国から集まり出してはいるが、2015 年のデータの方がより広範囲から来ていることが分かる。2005 年から 2015 年までのデータと事項にて見比べてみたい。

青年期（2001-2004）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	兵庫県のみ回答	1	0.8	0.8	0.8
	西宮市	26	21.3	21.3	22.1
	兵庫・旧摂津	28	23	23	45.1
	兵庫旧摂津以外	6	4.9	4.9	50
	大阪府のみ回答	1	0.8	0.8	50.8
	大阪・旧摂津	12	9.8	9.8	60.7
	大阪旧摂津以外	7	5.7	5.7	66.4
	京都府	9	7.4	7.4	73.8
	滋賀県	4	3.3	3.3	77
	奈良県	2	1.6	1.6	78.7
	広島県	1	0.8	0.8	79.5
	神奈川県	3	2.5	2.5	82
	北海道	2	1.6	1.6	83.6
	東京都	5	4.1	4.1	87.7
	福井県	1	0.8	0.8	88.5
	宮崎県	1	0.8	0.8	89.3
	福岡県	1	0.8	0.8	90.2
	愛媛県	1	0.8	0.8	91
	石川県	2	1.6	1.6	92.6
	島根県	1	0.8	0.8	93.4
	愛知県	2	1.6	1.6	95.1
	岡山県	1	0.8	0.8	95.9
	栃木県	1	0.8	0.8	96.7
	香川県	2	1.6	1.6	98.4
	大分県	1	0.8	0.8	99.2
	群馬県	1	0.8	0.8	100
	合計	122	100	100	

3 節　2005 年以降の参加者の属性

1.性別

女性参加者の比率が、2004 年までと比べると 6.6%から 2.8%に下がっている。これは

性別 (2005-2015)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男性	670	97.1	97.1	97.1
	女性	19	2.8	2.8	99.9
	N/A	1	0.1	0.1	100
	合計	690	100	100	

意外であった。神事に関しての広報でも、「福男」選びという名称ではあるけれど、性別に関しては関係なく参加できることを打ち出している。講社メンバーにも女性はたくさんいるが、いざ走るとなると少なくなるのであろうか。

性別 と 体育系活動の有無（現在） のクロス表(2005-2015)

度数

		体育系活動の有無（現在）			合計
		はい	いいえ	N/A	
性別	男性	249	408	13	670
	女性	8	11	0	19
	N/A	0	1	0	1
合計		257	420	13	690

くじ引きの方式になり、全体的に待つ時間は減ることになり、女性も参加しやすくなったと思っていた。しかし、2004 年前にせよ、全員が全員夜を徹して参加していたわけでなく、逆に 2005 年以降で、くじ引きをするときに待つ時間が増えることなどから、女性が減っているのかもしれない。何より「福男」という名称ゆえに、マスメディアの媒体によりこの神事を知った人たちには、男性のみの神事として映ってしまうのかもしれない。実際、開門時には安全上の理由から、A ブロックに当選した女性参加者へは、転倒の危険性も含め、かなり詳しく講社のメンバーが説明をすることにしている。ほとんどの女性参加者は、その危険性を納得した上で参加している。開門神事「福男」選びが大きく報道されたことで生まれた弊害であるのかもしれない④。

体育系競技に関しては、2004 年までに比べて現在行っている人の比率は男性については下がっている。また現在やっている種目もクロス検定をかけてみると陸上の割合が 20%（48 名）を切っており、代わりに野球が 49 名と躍進、サッカー23 名、テニス 12 名、ラグビー10 名、アメフト 9 名、バスケット 9 名と続き、必ずしも陸上部に偏らなくなってきた。以前に比べて、陸上部の短距離の選手が主に参加するという構図ではなくなっていることが分かる。過去の体育系競技経験を見てみても、陸上 89 名、野球 77 名、サッカー72 名、バスケットボール 34 名となっており、陸上経験者は多いものの、半数以上を占める形ではなくなっている。足の速さは必要条件ではあるが、走りのスペシャリストが集っていた 1990 年代後半から 2004 年までとは違った動きになってきていることが明らかになった。しかし、女性については、現在も体育系競技を行っていると回答した 8 名のうち 4 名が陸上部、過去に関しても 9 名の回答者のうち 3 名が陸上経験者と、依然陸上経験者の割合が多い。男性に比べて、門戸の狭さをおそらく感じている女性については、より専門性がある競技経験者が神事に参加しているのである。

性別 と 体育系活動の有無（過去） のクロス表(2005-2015)

度数

		体育系活動の有無（過去）			合計
		はい	いいえ	N/A	
性別	男性	456	59	16	531
	女性	9	5	0	14
	N/A	0	0	1	1
合計		465	64	17	546

2.職業・年齢

職業・年齢に関しては、2005 年以降、くじ引きになったことで、生徒・学生の比率は下がったのではないかと予想していたが、結果は依然生徒・学生は多いものの、その比率は 45%程度であり、2004 年前からすると大幅に比率が低くなったと言える。その分、社会人が入り込んだ。待ち時間が減ったために、様々な人々の参加を可能にしたと言えるだろう。年齢に関しても同様で、依然として 20 代が多いが、社会人の 30 代も比較的多い。私も参与観察をしていて、年齢層が以前よりも高くなったことを実感していたが、実態として明らかになった。年齢層も、2004 年までのデータから比べると高くなっている。クロス検定にて参加年度と職業・年齢の分析を行ったが、2004 年まで見えなかった一団（20 代から 30 代で社会人の集団）が現れる結果となった。以前から、中高年の参加者はいたが、後方から参加することが多かった。くじ引きにより、最前列に行くことが可能とはなっているのだが、最前列を選択するか否かは本人にかかっている。2013 年の福男（三番福）は 48 歳の方ある。彼は陸上が専門の高等学校の体育科教諭であり、現在でもトレーニングを続けている。これまでの福男に持たれてきたイメージ⑤が、少しずつ変容を始めている。

職業 (2005–2015)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	7	1	1	1
	高校生	60	8.7	8.7	9.7
	短大・大学・大学院生	220	31.9	31.9	41.6
	小・中学生	8	1.2	1.2	42.8
	大学受験生	6	0.9	0.9	43.6
	フリーター	23	3.3	3.3	47
	販売・営業	101	14.6	14.6	61.6
	企画・マーケティング	5	0.7	0.7	62.3
	エンジニア	46	6.7	6.7	69
	宣伝・広告	8	1.2	1.2	70.1
	各種研究開発職	10	1.4	1.4	71.6
	公務員	38	5.5	5.5	77.1
	教員	13	1.9	1.9	79
	自営業	38	5.5	5.5	84.5
	その他	97	14.1	14.1	98.6
	専門学校生	7	1	1	99.6
	高専生	3	0.4	0.4	100
	合計	690	100	100	

年齢 (2005–2015)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	5	0.7	0.7	0.7
	13	1	0.1	0.1	0.9
	14	1	0.1	0.1	1
	15	6	0.9	0.9	1.9
	16	13	1.9	1.9	3.8
	17	28	4.1	4.1	7.8
	18	36	5.2	5.2	13
	19	43	6.2	6.2	19.3
	20	45	6.5	6.5	25.8
	21	69	10	10	35.8
	22	64	9.3	9.3	45.1
	23	44	6.4	6.4	51.4
	24	49	7.1	7.1	58.6
	25	31	4.5	4.5	63
	26	23	3.3	3.3	66.4
	27	22	3.2	3.2	69.6
	28	26	3.8	3.8	73.3
	29	18	2.6	2.6	75.9
	30	25	3.6	3.6	79.6
	31	13	1.9	1.9	81.4
	32	14	2	2	83.5
	33	12	1.7	1.7	85.2
	34	14	2	2	87.2
	35	18	2.6	2.6	89.9
	36	12	1.7	1.7	91.6
	37	10	1.4	1.4	93
	38	5	0.7	0.7	93.8
	39	1	0.1	0.1	93.9
	40	7	1	1	94.9
	41	7	1	1	95.9
	42	7	1	1	97
	43	4	0.6	0.6	97.5
	44	3	0.4	0.4	98
	45	1	0.1	0.1	98.1
	46	1	0.1	0.1	98.3
	47	1	0.1	0.1	98.4
	48	1	0.1	0.1	98.6
	49	4	0.6	0.6	99.1
	50	2	0.3	0.3	99.4
	55	1	0.1	0.1	99.6
	56	1	0.1	0.1	99.7
	61	1	0.1	0.1	99.9
	64	1	0.1	0.1	100
	合計	690	100	100	

3.出身（青年期に住んでいた場所）

この項目は、かなり変容したと言えよう。2004 年より前のデータと見比べてみたい。西宮市が 83 名（21.3→12.0%）、旧摂津地域で 296 名（54.0→44.8%）、兵庫県全体で 294 名（50.0→42.6%）、大阪府全体で 153 名（16.3→22.1%）となり、関西全体では 525 名（78.6→74.7%）となっている。比率で見てみると、西宮地域や旧摂津地域、そして兵庫県全体からの参加者が減っており、その部分が大阪の摂津以外の地域（旧河内・旧和泉）からの参加者や他の関西の参加者にとってかわったとも言える。そしてこの 10 年で、日本各地から参加者が集い始めたことを改めて感じる。

青年期（2005-2015）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	兵庫県のみ回答	1	0.1	0.1	0.1
	西宮市	83	12	12	12.2
	兵庫・旧摂津	135	19.6	19.6	31.7
	兵庫旧摂津以外	75	10.9	10.9	42.6
	大阪府のみ回答	6	0.9	0.9	43.5
	大阪・旧摂津	78	11.3	11.3	54.8
	大阪旧摂津以外	69	10	10	64.8
	京都府	32	4.6	4.6	69.4
	滋賀県	13	1.9	1.9	71.3
	奈良県	15	2.2	2.2	73.5
	和歌山県	9	1.3	1.3	74.8
	広島県	10	1.4	1.4	76.2
	神奈川県	16	2.3	2.3	78.6
	北海道	2	0.3	0.3	78.8
	東京都	13	1.9	1.9	80.7
	福井県	2	0.3	0.3	81
	宮崎県	2	0.3	0.3	81.3
	福岡県	9	1.3	1.3	82.6
	愛媛県	9	1.3	1.3	83.9
	石川県	7	1	1	84.9
	島根県	2	0.3	0.3	85.2
	愛知県	24	3.5	3.5	88.7
	岡山県	9	1.3	1.3	90
	静岡県	4	0.6	0.6	90.6
	山口県	2	0.3	0.3	90.9
	佐賀県	1	0.1	0.1	91
	栃木県	2	0.3	0.3	91.3
	香川県	7	1	1	92.3
	鳥取県	3	0.4	0.4	92.8
	大分県	1	0.1	0.1	92.9
	群馬県	4	0.6	0.6	93.5
	埼玉県	6	0.9	0.9	94.3
	岐阜県	7	1	1	95.4
	高知県	1	0.1	0.1	95.5
	宮城県	2	0.3	0.3	95.8
	千葉県	7	1	1	96.8
	青森県	1	0.1	0.1	97
	鹿児島県	4	0.6	0.6	97.5
	三重県	9	1.3	1.3	98.8
	熊本県	1	0.1	0.1	99
	福島県	1	0.1	0.1	99.1
	茨城県	2	0.3	0.3	99.4
	新潟県	1	0.1	0.1	99.6
	徳島県	2	0.3	0.3	99.9
	秋田県	1	0.1	0.1	100
	合計	690	100	100	

4 節　参加動機・感想などから

この節では、参加の動機やどこから開門神事や十日戎全体を知ったのか、そして複数回参加者には参加した時の感想となぜもう一回以上参加しようと思ったのかについての質問紙における回答を提示したい。「参加動機」、「開門時の感想」、「複数回参加の動機」については、自由回答の欄を設けた。そのため、アンケートの調査としては項目が多くなっている。多くのコメントを拾う方が全体像の把握が可能になると考えたためである。伴って、クロス検定に関してはセルが多くなりすぎているために、巻末に添付をしている。

1.いつ、誰から開門神事を知ったか

開門神事に関して（2001-2004）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	1	0.8	0.8	0.8
	幼少期から	6	4.9	4.9	5.7
	小学生のころ	19	15.6	15.6	21.3
	中学・高校生の頃	47	38.5	38.5	59.8
	それ以降	49	40.2	40.2	100
	合計	122	100	100	

誰から（開門）（2001-2004）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	親兄弟から	11	9	9	9
	親戚から	3	2.5	2.5	11.5
	近所の人から	5	4.1	4.1	15.6
	同僚から	5	4.1	4.1	19.7
	学校の友人から	24	19.7	19.7	39.3
	新聞	1	0.8	0.8	40.2
	テレビ	68	55.7	55.7	95.9
	ラジオ	1	0.8	0.8	96.7
	インターネット	2	1.6	1.6	98.4
	その他	1	0.8	0.8	99.2
	今日知った	1	0.8	0.8	100
	合計	122	100	100	

まず、いつからと誰から開門神事を知ったのかについて2001年から2004年までと、2005年から2015年までとに分けて、分析を行った。

2001 年から 2004 年までと 2005 年から 2015 年までとを比べてみると、いつから知ったかについては、より低年齢で知ったという方向に動いている。2000 年を過ぎたあたりから、開門神事が近畿圏はもとより全国的にマスメディアを通じて広く知られることになった表れであろう。いずれの期間においても、媒体としてはテレビがその開門神事を知るきかっけの半数以上を占めていることが興味深い。

開門神事に関して(2005-2015)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	7	1	1	1
	幼少期から	48	7	7	8
	小学生のころ	131	19	19	27
	中学・高校生の頃	240	34.8	34.8	61.7
	それ以降	263	38.1	38.1	99.9
	今日知った	1	0.1	0.1	100
	合計	690	100	100	

誰から（開門）(2005-2015)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	14	2	2	2
	親兄弟から	63	9.1	9.1	11.2
	親戚から	15	2.2	2.2	13.3
	近所の人から	19	2.8	2.8	16.1
	同僚から	65	9.4	9.4	25.5
	学校の友人から	80	11.6	11.6	37.1
	新聞	8	1.2	1.2	38.3
	テレビ	395	57.2	57.2	95.5
	ラジオ	1	0.1	0.1	95.7
	インターネット	16	2.3	2.3	98
	その他	14	2	2	100
	合計	690	100	100	

2.いつ、誰から（西宮神社の）十日戎自体を知ったか

では、神事の本体ともいえる十日戎については、いつ知ったのであろうか。私が調べるきっかけの一つとなった「（地元である）西宮神社の十日戎自体は何度も参詣していたが、開門神事は知らなかった」と同じような状況なのだろうか。結果としては、2001年から2004年までの結果と2005年から2015年までの結果とでは、あまり差異がみられなかった。どちらかと言うと十日戎の方を開門神事よりも先に知っていたという数字が出ている。知る媒体としてもテレビが約半数で、このあたりも開門神事と変わらない。もう少し有意差があるのではと思っていたが、西宮市や旧摂津地域、または場所こそ違え、十日戎を良く知る関西出身の参加者が多いので、そこまでの差異が出なかったことが考えられる。しかしこれに関しては、地域差があるように感じられる。出身とのクロス検定を、次節にて行うことにしたい。

十日戎に関して（2001-2004）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	幼少期から	13	10.7	10.7	10.7
	小学生のころ	22	18	18	28.7
	中学・高校生の頃	48	39.3	39.3	68
	それ以降	39	32	32	100
	合計	122	100	100	

誰から（十日戎）（2001-2004）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	親兄弟から	17	13.9	13.9	13.9
	親戚から	5	4.1	4.1	18
	近所の人から	5	4.1	4.1	22.1
	同僚から	5	4.1	4.1	26.2
	学校の友人から	22	18	18	44.3
	新聞	1	0.8	0.8	45.1
	テレビ	65	53.3	53.3	98.4
	インターネット	1	0.8	0.8	99.2
	その他	1	0.8	0.8	100
	合計	122	100	100	

十日戎自体に関して(2005-2015)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	2	0.3	0.3	0.3
	幼少期から	79	11.4	11.4	11.7
	小学生のころ	147	21.3	21.3	33
	中学・高校生の頃	229	33.2	33.2	66.2
	それ以降	233	33.8	33.8	100
	合計	690	100	100	

誰から（十日戎）(2005-2015)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	N/A	3	0.4	0.4	0.4
	親兄弟から	85	12.3	12.3	12.8
	親戚から	15	2.2	2.2	14.9
	近所の人から	22	3.2	3.2	18.1
	同僚から	62	9	9	27.1
	学校の友人から	93	13.5	13.5	40.6
	新聞	12	1.7	1.7	42.3
	テレビ	369	53.5	53.5	95.8
	インターネット	12	1.7	1.7	97.5
	その他	17	2.5	2.5	100
	合計	690	100	100	

3.参加動機

参加動機に関しては、自由回答で調査したために多岐にわたっている。2001 年から 2004 年までの回答と 2005 年から 2015 年までの回答を見比べてみる、注目したいのが、「友人・先輩・後輩・同僚からの誘い」が 1 割以上占めて 1 位であることである。

2004 年までと 2005 年以降では、あまり大きく異ならない。多い項目を挙げると 2001 年から 2004 年まででは、②「好奇心」③「福男になりたい」④「福にあやかりたい・つかみたい」④「記念に・思い出づくり」と続き、2005 年からでは、②「記念に・思い出づくり」③「福男になりたい」④「福にあやかりたい・つかみたい」⑤「好奇心」と続く。

参加動機（2001-2004）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	友人・先輩・後輩・同僚から誘い	23	18.9	18.9	18.9
	好奇心	12	9.8	9.8	28.7
	友人に会えるから	3	2.5	2.5	31.1
	記念に・思い出づくり	8	6.6	6.6	37.7
	挑戦	7	5.7	5.7	43.4
	平等に参加できるから	1	0.8	0.8	44.3
	参加が夢だったから	1	0.8	0.8	45.1
	メディアに出たいから	5	4.1	4.1	49.2
	福にあやかりたい・つかみたい	8	6.6	6.6	55.7
	気合を入れたい	4	3.3	3.3	59
	歴史に名を残したい	1	0.8	0.8	59.8
	恒例行事だから	2	1.6	1.6	61.5
	伝統行事に関わってみたかった	3	2.5	2.5	63.9
	厄年だから	1	0.8	0.8	64.8
	テレビを見て	4	3.3	3.3	68
	賞品に惹かれて	1	0.8	0.8	68.9
	時間に余裕が出来たため	1	0.8	0.8	69.7
	関東にはないから	1	0.8	0.8	70.5
	クラブ・サークル活動の一環	4	3.3	3.3	73.8
	ボーイスカウト活動の一環として	5	4.1	4.1	77.9
	目立ちたい	2	1.6	1.6	79.5
	熱いものを感じたい	5	4.1	4.1	83.6
	福男になりたい	9	7.4	7.4	91
	名誉のため	1	0.8	0.8	91.8
	上司の指示	2	1.6	1.6	93.4
	人に福をあげたい・分け合いたい	1	0.8	0.8	94.3
	ノリ・気まぐれ・なんとなく	4	3.3	3.3	97.5
	特になし	1	0.8	0.8	98.4
	N/A	2	1.6	1.6	100
	合計	122	100	100	

参加動機（2005-2015）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	友人・先輩・後輩・同僚から誘い	86	12.5	12.5	12.5
	好奇心	36	5.2	5.2	17.7
	友人に会えるから	4	.6	.6	18.3
	記念に・思い出づくり	80	11.6	11.6	29.9
	挑戦	42	6.1	6.1	35.9
	平等に参加できるから	1	.1	.1	36.1
	参加が夢だったから	9	1.3	1.3	37.4
	メディアに出たいから	6	.9	.9	38.3
	福にあやかりたい・つかみたい	60	8.7	8.7	47.0
	気合を入れたい	4	.6	.6	47.5
	歴史に名を残したい	2	.3	.3	47.8
	恒例行事だから	11	1.6	1.6	49.4
	伝統行事に関わってみたかった	11	1.6	1.6	51.0
	厄年だから	4	.6	.6	51.6
	テレビを見て	17	2.5	2.5	54.1
	賞品に惹かれて	2	.3	.3	54.3
	時間に余裕が出来たため	3	.4	.4	54.8
	クラブ・サークル活動の一環	3	.4	.4	55.2
	目立ちたい	3	.4	.4	55.7
	熱いものを感じたい	4	.6	.6	56.2
	福男になりたい	74	10.7	10.7	67.0
	名誉のため	1	.1	.1	67.1
	上司の指示	4	.6	.6	67.7
	人に福をあげたい・分け合いたい	10	1.4	1.4	69.1
	ノリ・気まぐれ・なんとなく	20	2.9	2.9	72.0
	ご縁・宿命	1	.1	.1	72.2
	仕事で	6	.9	.9	73.0
	男だから	3	.4	.4	73.5
	数回出て楽しいから	4	.6	.6	74.1
	西宮に転居したため	6	.9	.9	74.9

	祭りが好きだから	1	.1	.1	75.1
	ひやかし	1	.1	.1	75.2
	前から行きたかったため	2	.3	.3	75.5
	人生のステップアップのため	1	.1	.1	75.7
	近所だから	7	1.0	1.0	76.7
	西宮に生まれ育ったため	4	.6	.6	77.2
	「ふく」の下関に住んでいるから	1	.1	.1	77.4
	野球の対戦相手が福男になったから	1	.1	.1	77.5
	家族のため	3	.4	.4	78.0
	子どもが生まれるため	7	1.0	1.0	79.0
	一度目で怪我をして悔しかったから	1	.1	.1	79.1
	モテたいから	1	.1	.1	79.3
	兵庫県に在住のため	6	.9	.9	80.1
	くじ引きになったから	2	.3	.3	80.4
	列に並ぶのが好きだから	1	.1	.1	80.6
	恰好いいので	1	.1	.1	80.7
	運だめし	26	3.8	3.8	84.5
	主張で近くまで来ていたため	1	.1	.1	84.6
	親戚の家に近い	2	.3	.3	84.9
	転職のため	5	.7	.7	85.7
	楽しいから	3	.4	.4	86.1
	人生の経験として	4	.6	.6	86.7
	神様に見て欲しいから	1	.1	.1	86.8
	一年を飾るスタートとして	2	.3	.3	87.1
	知り合いに福男がいるから	2	.3	.3	87.4
	話題作り	2	.3	.3	87.7
	休日が重なったため	1	.1	.1	87.8
	神社めぐりが高じて	1	.1	.1	88.0
	初の福女になりたい	1	.1	.1	88.1
	福男と友だちになりたい	1	.1	.1	88.3

今年は受験の年だから	2	.3	.3	88.6
特になし	1	.1	.1	88.7
N/A	78	11.3	11.3	100.0
合計	690	100.0	100.0	

4.感想

感想に関しても、2001年から2004年までのデータと、2005年から2015年までのデータで、そこまでの差異は見られなかった。どちらも開門時に「興奮」「緊張」し「頭の中が真っ白になる」や、「気持ちいい」「開放感でいっぱい」などというコメントが並ぶ。もちろん福男に選ばれに行くために競争をしているわけであり、勝ちに行くというコメントも当然あるが、門を開いた時の非日常性について語られているコメントが多いことは特筆に値する。2004年に論考（荒川：2004）を出した際に、「頭の中が真っ白になった」といったコメントから、競走をしに来たとは思えないと述べたが、今回継続した調査でも、門が開く瞬間の一点では、普段運動をしており競走に慣れている参加者が多い中、開門神事については非日常性を語っているところが、この開門神事が多くの参加者にとって「神事であるところ」なのかと考えさせられる。

感想 (2001-2004)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	興奮した	5	4.1	10.2	10.2
	びっくりした	3	2.5	6.1	16.3
	緊張した	6	4.9	12.2	28.6
	恐ろしい	3	2.5	6.1	34.7
	開放感で一杯	4	3.3	8.2	42.9
	まるで白銀の世界	1	0.8	2	44.9
	スローモーションのように感じた	1	0.8	2	46.9
	頭の中が真っ白になった	7	5.7	14.3	61.2
	感動した	2	1.6	4.1	65.3
	やっと開いた	2	1.6	4.1	69.4
	絶対勝つの気持ちになった	3	2.5	6.1	75.5
	苦しかった	1	0.8	2	77.6
	妨害された	1	0.8	2	79.6
	勝てないと思った	1	0.8	2	81.6
	ラッキーだった	2	1.6	4.1	85.7
	むちゃくちゃだった	1	0.8	2	87.8
	悔しかった	1	0.8	2	89.8
	特になし	1	0.8	2	91.8
	N/A	4	3.3	8.2	100
	合計	49	40.2	100	
欠損値	システム欠損値	73	59.8		
合計		122	100		

感想(2005-2015)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	興奮した	28	4.1	15.8	15.8
	びっくりした	1	.1	.6	16.4
	緊張した	12	1.7	6.8	23.2
	恐ろしい	6	.9	3.4	26.6
	開放感で一杯	6	.9	3.4	29.9
	まるで白銀の世界	2	.3	1.1	31.1
	頭の中が真っ白になった	6	.9	3.4	34.5
	感動した	6	.9	3.4	37.9
	やっと開いた	3	.4	1.7	39.5
	絶対勝つの気持ちになった	5	.7	2.8	42.4
	妨害された	2	.3	1.1	43.5
	ラッキーだった	3	.4	1.7	45.2
	むちゃくちゃだった	1	.1	.6	45.8
	悔しかった	2	.3	1.1	46.9
	気持ちいい	6	.9	3.4	50.3
	後光が差していた	2	.3	1.1	51.4
	例えられない	1	.1	.6	52.0
	戦争	1	.1	.6	52.5
	頑張る気がいっぱい	2	.3	1.1	53.7
	不思議な気持ち・神がかり	2	.3	1.1	54.8
	テレビに映るかなと考えた	1	.1	.6	55.4
	迫力を感じた	1	.1	.6	55.9
	心が洗われた・清々しい	3	.4	1.7	57.6
	痛かった	1	.1	.6	58.2
	恒例の行事である	1	.1	.6	58.8
	一年が始まった気分	4	.6	2.3	61.0
	混乱した	3	.4	1.7	62.7
	立てなかった	1	.1	.6	63.3
	今年の祈願	1	.1	.6	63.8
	怪我の無いように	2	.3	1.1	65.0

	嬉しかった・楽しかった	5	.7	2.8	67.8
	行くぞ！の気持ち	4	.6	2.3	70.1
	日本人でよかった	1	.1	.6	70.6
	覚えていない	1	.1	.6	71.2
	これまで辞退してきた	1	.1	.6	71.8
	実感がわかない	8	1.2	4.5	76.3
	特になし	4	.6	2.3	78.5
	N/A	38	5.5	21.5	100.0
	合計	177	25.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	513	74.3		
合計		690	100.0		

5.複数回の参加動機

4.感想において述べた興味深い点は、複数回の参加動機の中にも引き継がれている。もちろん多くある感想としては、「リベンジ」「勝ちたいため」というものである。しかし、競走であるのに「楽しかったから」「恒例行事だから」「最高のお祭りだから」などとコメントをしている参加者も少なからずいる。私が参与観察で感じた「非日常」感覚、強烈に感じる時間の分節化を、アンケートで自由論述していた参加者もいる。自由論述の中では、複数回参加した理由として「昨年度、参加することで神事に携わる人たちの思いを知り、そのことに感動して再度参加しようと思った」方や初参加の理由の中で、「1995年の阪神大震災の時、復興のためのボランティアとして西宮に来ており、その時、逆に多くの人にお世話にな

複数回参加動機 (2001-2004)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	友人・先輩・後輩の誘い	4	3.3	8.2	8.2
	門に吸い寄せられた	2	1.6	4.1	12.2
	去年より良い順位になるため	12	9.8	24.5	36.7
	メディアに出たい	1	0.8	2	38.8
	熱くなる体験をもう一度したい	1	0.8	2	40.8
	友人に会いたい	5	4.1	10.2	51
	去年楽しかったから	2	1.6	4.1	55.1
	参加することこそ意義がある	1	0.8	2	57.1
	今年こそ完走したいから	2	1.6	4.1	61.2
	勝ちたい・福男になりたい	15	12.3	30.6	91.8
	上司の指示・アドバイス	1	0.8	2	93.9
	恒例行事だから	2	1.6	4.1	98
	リベンジのため	1	0.8	2	100
	合計	49	40.2	100	
欠損値	システム欠損値	73	59.8		
合計		122	100		

った。その思いを込めて久々に西宮神社に来て、記念・祈念のために走ろうと思った」参加者や、「新しい家族が今年増えるので、そのために福にあやかろうということで走ろうと思った」方など、社会や個人の福のために走ろうと意図している人も多いことに改めて気づかされた。

近年は、アンケートの配布から回収まででに最長で1時間ほどの時間が取れるようになったために、項目に答えるだけでなく、様々な思いを書き記す参加者が増えた。そのため、カテゴリーに分類するのが難しかったが、先ほど挙げたような意見が、この神事の現代的な様相を良く表しているだろう。まとめの中で考察していきたい。

複数回参加動機（2005-2015）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	友人・先輩・後輩の誘い	2	.3	1.1	1.1
	門に吸い寄せられた	4	.6	2.3	3.4
	去年より良い順位になるため	2	.3	1.1	4.5
	メディアに出たい	2	.3	1.1	5.7
	熱くなる体験をもう一度したい	6	.9	3.4	9.1
	去年楽しかったから	14	2.0	8.0	17.0
	勝ちたい・福男になりたい	24	3.5	13.6	30.7
	上司の指示・アドバイス	1	.1	.6	31.3
	恒例行事だから	17	2.5	9.7	40.9
	目立ちたいから	1	.1	.6	41.5
	リベンジのため	12	1.7	6.8	48.3
	最高の祭りだから	1	.1	.6	48.9
	男だから	3	.4	1.7	50.6
	勝って、引退したいから	1	.1	.6	51.1
	興奮したいため	1	.1	.6	51.7
	健康だから	1	.1	.6	52.3
	時間が取れたから	4	.6	2.3	54.5
	清々しいから	3	.4	1.7	56.3
	福にあやかりたいから	8	1.2	4.5	60.8
	職場の応援があって	1	.1	.6	61.4
	くじで当たることを祈念して	8	1.2	4.5	65.9

	去年女性で一番だったので	1	.1	.6	66.5
	ただ、走りたいから	3	.4	1.7	68.2
	思い出を作るため	2	.3	1.1	69.3
	神事に関わる人々の気持ちを知って	1	.1	.6	69.9
	健康のため	1	.1	.6	70.5
	意地	1	.1	.6	71.0
	家族のため	4	.6	2.3	73.3
	最後のチャンスと思い	2	.3	1.1	74.4
	仕事で	1	.1	.6	75.0
	近所だから	2	.3	1.1	76.1
	日本が好きだから	1	.1	.6	76.7
	なんとなく	1	.1	.6	77.3
	学生時代の集大成として	1	.1	.6	77.8
	人生の転機と思い	1	.1	.6	78.4
	特になし	1	.1	.6	79.0
	N/A	37	5.4	21.0	100.0
	合計	176	25.5	100.0	
欠損値	システム欠損値	514	74.5		
合計		690	100.0		

6.クロス検定（巻末資料参照）

これまでいくつか、クロス検定での分析結果を提示したが、最後に「参加年度」と「年齢」「職業」のクロス検定、「開門神事をいつから知ったのか」「開門神事をどこ・誰から知ったのか」「十日戎自体をいつから知ったのか」「十日戎自体をどこ・誰から知ったのか」という4項目と「青年期から現在にかけて住んでいるところ」とのクロス検定、「出場回数」と「参加動機」「感想」「複数回参加動機」についての分析結果について提示したい。年齢・職業については、先ほど見たように、くじ引きが2005年より行われるようになって参加自由度が高まったことにより、社会人の参加、特に30代の参加が増えていると述べた。果たしてそうなのか、その詳細を提示したい。十日戎と開門神事の認知度に関しては、地域差があると考えている。出身地（在住地）とのクロス検定で、これをさらに明らかにしたい。そして、出場回数と動機・感想・複数回参加の動機については、仮説では出場回数が増えると、福男になる以外の理由を述べる人が増えるのではないかと考えたためである。以上3つの点を明らかにしたい。

6-1「参加年度」と「年齢」「職業」のクロス検定

質問紙の配布方法がランダムでなかったために、参加者全体について述べることはできないが、2005 年以降から学生以外の参加者の比率が高まっている。注意すべき点は、「その他」と回答する参加者が多かったことである。それは、その他と書いて「会社員」や「職人」などと書く人が多かったためである。販売・営業やエンジニアなどの項目があったのだが、より平板な項目で質問する必要があった。その「その他」や「販売・営業」「宣伝・広告」などの社会人の項目に回答する人が、年を経るごとに増えてきている。同時に年齢層が上がっていることを確認した。

6-2「出場回数」と「参加動機」「感想」「複数回参加動機」とのクロス検定

出場回数については、最多が 20 回である。「青年期」とのクロス検定を行うと、西宮、兵庫県・大阪府という、地理的に近く物理的にも持続的な参加が可能な地域の参加者がやはり多くなっている。

「出場回数」と「門が開いた時の感想」の相関関係を見てみたが、感想などの項目も含め各回答の数が少ないため、有意差を見出すことはできなかった。「興奮」や「緊張」に関しては、初回だけなのかと思っていたが、何回も参加している参加者でも、この感情が強いことを改めて確認した。「一年が始まった気分である」と回答した参加者もあり、複数回参加していく中で、年中行事として捉えている参加者がいることも分かった。

「出場回数」と「参加動機」および「複数回参加しようと思った動機」とのクロス検定については、重複する箇所もある。初回参加の要因としては、「友人たちの誘い」「記念・思い出づくり」「挑戦」「好奇心」「テレビを見て」などが挙げられる。このうち 2 回目以降で激減したのは、「記念・思い出づくり」であった。初回の神事にて何がしろかの楽しさを得た人たちが参加する、もしくは、相応に脚力があり、現実的に福男を目指そうと考える 2 つのグループへと分かれる。いずれにせよ、何度も参加するうちに「楽しくなり」「年中行事化」していっているようである。複数回参加した動機では、当然「リベンジ」（13 名）「勝ちたい・福男になりたい」（39 名）「去年より良い順位になる」（14 名）などが多いが、2 回以上参加する人の中では、「恒例行事だから」（19 名）、「去年楽しかったから」（16 名）、「門に吸い寄せられた」（6 名）などといった声もある。入り口としては挑戦や思い出づくりの為に参加した人々が、オリジナルの目的を見つけ、回数を重ね参加している実情が分かった。

6-3「十日戎と開門神事をいつ・どこで知ったのか」と「青年期」とのクロス検定

青年期または現在居住しているところと「いつ・どこで知ったか」とのクロス検定で見えたのが、関西以外の地域からの参加者は、開門神事・十日戎とも関西からの参加者に比べて情報を知った時期が遅く、また「本体」の十日戎を開門神事と同時期もしくは遅れて知ることが多い。このタイムラグについては、マスメディアによって全国に知らしめた神

事であるため、当然であろう。

興味深いのは、関西地域においての「十日戎」と「開門神事」の認知度の温度差である。西宮では十日戎本体については家族からの情報で知ることが多く、開門神事はテレビの方が強い。一方、特に参加者が 2005 年から増えることとなった大阪地域（旧摂津地域も含めて）では、知るようになった媒体はほとんどがテレビであること、また、開門神事・十日戎とも西宮では幼少期から知っている人が多いが、それ以外の地域では中学生・高校生の頃が多いことも確認できている。つまり、ここから、直接西宮の伝統的な祭事には関わりの少なかった大阪を中心とする参加者たちが、テレビを見て、交通至便で、アクセスも容易であったこと、加えて何より以前よりも待機時間が短縮され楽になったことから参加するようになり、「えびす信仰」に関しては、全く異なる文化ではないその近似性が参加を促し現在の隆盛につながった[6]のではないだろうか。

5 節　第 6 章まとめ、定量調査からみえたこと

当章では、2001 年より 2015 年まで行った、参加者へのアンケートによる属性と動機、そして神事参加の感想に関する分析の結果を提示した。この質問紙分析からまず初めに分かったことは、男性が多いこと（女性は約 5%）と、運動部などのスポーツ経験者が多いことであった。これらは、深夜から朝方まで参加することが強いられ、230 メートルを疾走するという神事の特性からも類推できるだろう。くじ引き制度が導入される以前は、時間的な拘束も長かったため、10 代後半から 20 代前半、職業では中高生から大学生までが圧倒的に多かったが、くじ引きが導入されてからは、依然として同じ層が多いものの、20 代から 30 代の社会人の参加が増えたことも明らかになった。

属性で一番興味深い結果となったのは、2004 年以前と以後で、参加している地域が変容したことであった。2004 年より前のデータと 2005 年以降での比率を比較すると、2005 年以降では西宮地域や旧摂津地域、兵庫県全体からの参加者が減っており、その部分が大阪の摂津以外の地域（旧河内・旧和泉）からの参加者や他の関西からの参加者にとってかわった。そしてこの 10 年で、東京はもとより、九州や東北などより広範囲から参加者が来ることになったことも注目に値する。日本全国に認知度が広まると同時に、もともとえびす信仰が強い地域であるが、参拝する神社が異なっていた（今宮戎神社など）大阪の南部・東部の人たちが新規参加することに繋がったのではないか。西宮の伝統的な祭事には直接関わりの少なかった、大阪を中心とする参加者たちが、テレビを見て、住んでいる地域と西宮神社が「実は」交通至便でアクセスも容易であったこと、そしてなにより「えびす信仰」に関する同質な文化的背景を持っていたために、多く参加するようになったのではと結論付けた。

参加動機に関しては、友人・先輩・後輩・同僚からの誘いが 1 割以上を占め、1 位であった。その他多い項目を挙げると、2001 年から 2004 年までは、②「好奇心」、③「福男になりたい」、④「福にあやかりたい・つかみたい」⑤「記念に・思い出づくり」と続いた。2005

年からは、②「記念に・思い出づくり」、③「福男になりたい」、④「福にあやかりたい・つかみたい」、⑤「好奇心」と続いている。

感想の中で注目したのは、開門時（複数回参加者への質問）に関してのものであった。開門時に「興奮」「緊張」し、「頭の中が真っ白になる」や「気持ちいい」「開放感でいっぱい」などといったコメントが、2001 年から 2015 年まで変わらず続く。「勝ちに行く」というコメントもあるが、門を開いた時の非日常性についてクローズアップしているコメントが多いのは実に興味深い。普段運動をしており、競走の側面で慣れている参加者が多い中、開門神事に関しては非日常性を語っているところが、この開門神事を多くの参加者が「イベントでなく神事」として捉えている所以ではないかと考える。つまり、速さ、競走の部分が強調され、きっかけとしてはそれが動機となり友人などを誘って参加するが、実際に参加してみると、それ以外の部分をより体感するということではないか。

複数回参加者の回答には、「楽しかったから」「恒例行事だから」「最高のお祭りだから」などとコメントをしている者も少なからずいる。私が参与観察で感じた「非日常」感覚と強烈に感じるハレとケの分節化を、アンケートの中で自由論述していた参加者もいる。その他、「昨年度参加したことで神事に携わる人たちの思いを知り、感動して再度参加を決意した」方や、初参加の理由の中として、「1995 年の阪神大震災の時、ボランティアとして西宮に来ており、その際、逆に多くの人にお世話になった。その恩返しの思いを込めて、記念・祈念のために走ろうと思った」とした参加者や、「新しい家族が今年増えるので、そのために福にあやかろうということで走ろうと思った」方など、自らのアイデンティティの確認ために参加している人たちの生の声を拾い、それを裏付けた。結章では、ここでの結果を踏まえて、参加者の文脈からこの神事をさらに読み解いていきたい。

---

① 参与観察、そして実際に神事に携わっていく中で、参加属性が変化したことを感じてはいる。以前よりも高年齢化、そして職業が多様化していると感じている。

② 分類に関しては、厳密には播磨と摂津にまたがる神戸市や、西宮市の中でも戦後に合併をした旧山口村など西宮神社の氏子地域とは言い難い地域も内包している。しかし、文化的な差が大きい兵庫県の旧国（摂津・播磨・丹波・但馬・淡路）、大阪の摂津とそれ以外（和泉・河内）を分けることは、文化的にも言語的にもよく似た地域と言われる大阪・兵庫の摂津地域だけを取り出すことになり、この地域が西宮神社の古来からの参詣客の多い地域、いわば信仰されている地域と考えられるために、有効な分類法と考えられる。

③ これまでで述べてきたように、全国ネットでの放送の始まりは 1996 年。生中継などを含め、全国に知名度が上昇し出したのが 2000 年あたりと考えられる。タイムラグを考えても質問紙調査を始めた 2001 年くらいからは、すでに全国的に知名度は高まっていたとは考えられる。ただ、実際に現地に行ってみるという行動を起こすとなるモチベーションの部分としては、マスメディアで放映されてもすぐに高まるということはないだろう。

④ H.R.氏が主張している「門の後ろからでも福は来る」という概念は、参加したことのある私や講社のメンバーなら納得は出来るが、初参加者の多くにとっては、まずは競走である。入り口として競争が設定され、その後に違った感覚が去来すると考えると、230 メートルをまずは一生懸命走ることが課せられてしまう。結果として、足が速い人が多く参加するであろう。タイム的に考えてみると、どうしても男性が多く集まってしまう

のは仕方がない。
⑤ 陸上をやっているという意味では、福男のイメージは踏襲しているとはいえる。ちなみに私が調べた中で、最年長の一番福は 1938（昭和 13）年の 38 歳（満 37 歳）これまでで述べた、一番福のタイトルホルダーT.T.氏（製材店勤務）である。二番福では昭和 47 年の喫茶店経営の 42 歳の方。三番福では、この 48 歳の体育科教諭 I 氏となる。素晴らしい記録保持者である。
⑥ 吉井良英禰宜の話では、もともと大阪府の旧河内の国に含まれる東大阪辺りは大阪市内の各えびす神社に流れることもあるが、もともと参詣客は多い所であったという。しかし、今宮戎神社に多くが通っていた、大阪南部の旧和泉国の人々がこの 10 年で来るようになったことは興味深いと述べている。高度成長の際には、モータリゼーションもあって西宮神社がえびすの宮総本社であるとする知名度の上昇があった。現在の開門神事福男選びに対する知名度の上昇、関西地域での年中行事化の動きが、それまで生活圏外だった人々を参詣にさせる契機となり、実際にそう遠くはない（所要時間が短い）という現実を知り、多く来ることに繋がったのではないか。

結章　まとめと課題

1節　歴史的変遷と祭礼の変化

これまでの歴史的な論考をまとめるならば、室町期辺りから行われて来たイゴモリ・イミの祭りその謹慎状態が解けて人々が「神人和合」の境地に達する状態が、十日戎の原型「御狩り（ミカリ＝ミガワリ）神事」であるとするのが、吉井良隆氏[吉井 1990：57-64]の言説である。西宮の場合は、そのミカリの状態を作り出す装置として、表大門・赤門が近世以降大きな役割を果たしてきた。だからこそ、鉄道や電鉄が出来、多数の参詣客が来るようになっても、西宮の忌籠に基づいた祭礼のスタイルを容易に曲げずに済んだのであろう。そのようにして新暦による新しい祭りが、大阪神戸といった都市住民の参詣客の増加により旧暦のそれを凌駕していったが、その過程で旧暦にて行われてきた「イゴモリ祭り」が、そのまま赤門を介して同じく行われることとなった。参詣電鉄として機能していた阪神電鉄が、新暦の十日戎においても終夜運転を行い、大阪・神戸からの乗客を「えびす総本社」である西宮にもたらした。ところが、新暦の 9 日深夜から 10 日の日の出までにおいても、「忌籠」をやろうとする神社側と少しでも長く参拝したい氏子地域外からの参詣客との間にいざこざが起こった。この辺りは平山昇が指摘したとおり[平山 2010：165-169]である。このやり取りの中で、「門を閉める正確な時間」と「門を開ける正確な時間」の取り決めがなされたのではないか。

結果としては、この閉門時間と開門時間が決まったことにより、明け方の午前 6 時という時間が固定化されたのである。同様に旧暦でも門を閉めており、十日戎の大祭になって門が開く際に駆けて参詣するのが大正初期の記事にも散見される。その旧暦の開門での駆け足参拝が新暦にも移入されたである。

その過程で、これまで伝統的な祭事に関われなかった新参の住民が、この行事に参加し、新暦の祭事を盛り上げていくようになる。T.T.氏のような青年団や在郷軍人などという近代の市民としての「一番福・福男」が生まれてくることとなった。当初は、熱心に毎日参拝している T.T.氏が一番福であったものの、次第に他の俊足の人との競争となってくる。そこから、走り参りをレースとして捉える動きが生まれだした。

戦時中は、その競争という側面から時局の流れに乗せられることもあったが、昭和 20 年の一番福 U.K.氏のインタビューでは、「ただ、賞品である大きな鏡餅が欲しかった」というコメントがあり、またこの行事は足自慢の阪神間の中学生（現高校生）が集まってのレースであったというコメントなどから、戦時中であった昭和 20 年においてさえ、純粋に競走的な側面があったことが確認された。

戦後になって、神社自身の民主化の動きなどもあったが、再開された十日戎には、西宮空襲をかろうじてくぐり抜けた赤門を使っての門開け行事が付随してきた。戦前時局に対応する報道にて語られることもあった行事であるが、中止には至らなかったのである。つまり、戦後において「門開けの行事」は戦前からの諸報道もあって、すでに「恒例化」し

ており、純粋に走り参りとして社会に受け入れられていたと言えよう。門を開ける主体は、戦前に青年団から露天商組合に変化をしていたが、それでも地元のかけっこ競争として昭和 40 年ごろまで続いていたと考えられるだろう。その中で、順番を巡る争いが生じ、警察が出動する騒ぎも起きていた。同時に、実際に門から飛び出す際に転ぶ参加者が続出し、兵庫県警の指導により 1966（昭和 41）年より 2 年間はこの門開け行事の取りやめ（神社として福男認定しない）が決められた。この当時から、神事の抱える問題点が露呈していたともいえるだろう。神社としては、門を開け先着 3 名を「福男」として認定するのみであり、開門前の場所決めや治安維持にまでは手をかけてはいなかった①。

そして、この祭事が最大の危機的状況を迎えたのが、この 2 年間の福男を選ばない時期に到来した高度経済成長期である。十日戎自体への参詣客は交通機関の更なる発達で増えることとなったが、それは新たに地方から人が多数やってくることにも繋がった。十日戎自体が西宮の氏子地域のみの祭からより広範囲な近畿圏一体の祭りへと変化し、同時に西宮神社が「えびすの総本社」という認識を広めることにもなった。しかし皮肉なことに、このことは相対的に門開け行事の報道の減少を招いたのである。この要因としては、出走位置を巡る事件や開門時の事故の報道もあったためにネガティブなイメージが流布してしまい、以降の報道に取り上げられる機会も少なかったのだろうが、阪神間以外の人たちにとってこの行事自体の興味が希薄だったことも大きいだろう。高度経済成長によって、十日戎が、商売の神様えびす総本社への参詣であるという意識は生まれたが、それまで西宮神社が地域社会の中で持っていた「モノイミ」としての「イゴモリ神事」の考え方は、まさに近畿圏での一大参詣イベント化ですることによって、さらに見えづらくなってしまったのではないか。

それを打開したのは、同じく交通機関の発達によって参加が可能となった、漁業神としてのエビスを信仰する漁業関係の参詣者②であった。彼らの信仰の厚さ、西宮では少なくなってしまった「地縁」ともいえる講の繋がりなどが、元々込められた意味性が薄まり、衰退していた門開け行事を再興させると同時に、西宮から離れた地に住んでいる人たちがこの神事を再評価しているというサインを多くの人々に送ることにもなった。実に彼らがいたからこそ、西宮、阪神間にいる住民たちは西宮神社の持つ元来の文化資源に気付くことができたのである。

その後昭和天皇が崩御し、西宮神社にて新たな語が生み出されることになった。それは、「開門「神事」福男「選び」」である。それまでは、福男レースや福男競走と呼ばれていたが、自粛ムードの中、競い争うのではなく「（戎様によって）福男が選ばれる神事」ということにして行事の存続を神社側が画策したのである。まさに「創られた伝統」である[ホブズボウム 1992]。

これは神社側からの発信であったにせよ、参加者には「神事、福男選び」という創造された語は受け入れられた。それは、前述の漁業関係者たちの信仰心がもたらした気付きという土壌があったからかもしれない。そしてこのことが、「十日戎に行われる開門神事」と

してのオーセンティシティを生み出し、停滞気味だった開門神事に参加者が戻ってくる一つの契機になったのではないだろうか。

1990 年代には西宮神社の広報的な努力もあり、テレビを中心とした様々なメディアで取り上げられるようになる。速さのある映像を見て、参加者が増加し始めるのが 1990 年代後半である。参加者の多くは興味本位で走って一番になることだけを目指していたが、そのうちの幾人かはアンケートの回答でもあったように、「頭の中が真っ白になる」経験を神事に参加する中で味わったのである。参加自由度の高さの他に、現代社会における生活ではなかなか感じられない、非日常性を味わえる機会イコール「神事」として、この神事が巨大化していく素地はあった。

しかし、人がたくさん集まったのは良いが、それを統率する神社の中の組織がなかったことが、2004 年の事件を生み出したと言えよう。

2004 年の事件は否定的に語られることが多いが、長期的にみると西宮神社にはプラスに働いたと言えよう。この事件によって報道による露出が増え、社会的な注目度は増し、関西一円で知られた神社から、関東・九州・北海道と広範囲で「福男選びの西宮神社」という認知がされるようになった訳である。実際に、アンケートにて 2005 年からの参加者の属性、動機分析を行ったが、属性に関しては、それまで参加していた西宮や旧摂津地域の参加者とともに、これまで文化的にも少し距離のあった大阪府の旧河内・旧和泉の参加者たちが訪れてきたことが分かった。開門神事の認知自体はされていただろうが、実際に来て参加するまでにはなかなか至らないものである。もちろん、くじ引きが導入されて参加しやすくなった部分があるだろうが、この神事のあり方が彼らに魅力を感じさせたという所は興味深い。より合衆型の祭礼として整ったために、参加に至るようになったと言えるのではないだろうか。

現在は、調査者であった私を含めて、かつての参加者が門前の整列をさせ、門を開ける。松平誠の言う「選択縁」[松平 1990：2]で集まった人たちが、ただ参加するだけでなく、主催者になった事例はまだ少ない。雑踏対策の一環として、行政からの働きかけで急遽動かなければならなかった西宮神社側の事情もあるだろう。もちろん、見ず知らずの参加者ではなく、以前より開門神事そのものに関して提言なりを行ってきたメンバーであったために主催者になり得た訳であるが、この事例は新しい祭りの形を考える上においては先進の事例と言えるのではないか。

講社化に関しては、また別の見方も存在するであろう。川村邦光は明治期に民間の祭礼が国家の祭礼へと変化していく中で、「地域自治体の若者組の“力”に対して、治安と統治の公権力が取って代わった」[川村 1999：59]と述べ、多くの祭礼が国家の力に屈服し、統制下に置かれるようになった事例を紹介している。この西宮神社の開門神事講社化の事例においては、それまで開門を担ってきた露天商組合側から開門を開門神事講社に任せたいとの要望があったにせよ、行政側が、この過程で神社の影響下に置くことが容易な講社側に神社をして委ねるようにしたことは、地域社会との関わりは少なかった祭礼ではある

が、平成版の国家の祭礼統制として受け取ることも出来るだろう。その意味でも「創られた神事」であると言えよう。1966 年の時には福男競走を 2 年間中止しただけであったが、2008 年では、「選択縁」を利用し、それを行政が統制できる祭礼へと発展させたとも言える。この新たな民俗文化に対する国家のアプローチという点でも、先進的で興味深い事例となりうるのではないか。この視点も含めて、他の元参加者達と引き続き行動を続けていくことで、更なる発見があるものと期待している。

2 節　考察：人々は十日戎開門神事に何を求めているのか

人々がなぜこの開門神事福男選びに集うのかというという問いに関しては、アンケートの回答と語りから考えられるのは、やはり福男になるという目的が明確であるからと、参加が比較的容易であるからだろう。もちろん、容易であるだけでは人は集まらない。アンケート回答の中の感想にあるように、参加者が門が開いて走り出す際に、「緊張」、「興奮」、「頭の中が真っ白になる」経験をするからである。吉井良隆や柳田國男が述べた、「ミカリ」や「神人合一」に似た表現となってアンケートの回答として語られるのも、祭事としてのオーセンティシティを参加者達が神事の中で感じ取っているからではないか。また地縁などの縛りがなくて、祭事に参加できるという点は、中野紀和の小倉祇園の中で示された「従来の地縁や血縁を中心とした町内単位のチームよりも許容範囲が広く、それまでのチーム構成からは漏れてしまう人々を受け入れている」［中野 2007：109］有志チームと同じような、「非日常を体感できるような祭礼に参加したいけども、地縁・血縁が無くて出来ない人々を受け入れる」受け皿としての特性を、開門神事が持っているのではないか③。

地縁から生産共同がない都市においては、人々は祭礼に関わることがやはり少ない。今後、地縁がないが、神事に参加してみたいという層は、これまで以上に現れるはずである。その需要にいち早く応えたと言えるこの開門神事は、先駆的な事例として取り上げられる可能性がある。質問紙調査によると、参加者には福を求めている人が多かった。一回目に参加した人は動機に「記念として」と回答している人も多かったが、同時に「伝統行事に関わってみたいから」という人も少なからずいた(14 名)。この神事はそういった参加者の神事という伝統行事参加への欲求を満たすことも果たしている。

3 節　本研究の成果と意義

当初の研究目的であった、「いかにして、当神事が生まれ、そしてどのような歴史的変遷をたどったのか」については、1 節で述べたように、新暦の祭りが行われ、その中で忌籠の風習であった「境内だけでも門を閉ざす風習」が新暦の祭りにも移入されたがために、開門の行事が副次的に生まれた。そして結果的に、その赤門が祭礼での条件となる時間の分節化を行う道具として機能しだしたことが、歴史的変遷の中で明らかになった。その他、福男の誕生に関して、太平洋戦争、高度経済成長を経て、その時々で変容を遂げながら現在の形へと「進化」していったところを明らかにしたのである。

アンケート調査の結果、参加者は若年層が多いものの、様々な地域、多様な属性の人たちが来ていることが判明した。まさに、「選択縁」で「合衆型」の祭礼・イベントである。複数回参加者への動機に関する質問では、「自分の中での恒例行事になっている」と回答する者や「アイデンティティ確認のために参加する」というものが多かった。これは実に森田三郎の提示した祭礼として存在するための要件である。このことから、この神事はイベントではなく祭りとして定義できると結論付けた。アンケート以外にも、昭和 20 年に福男となった U.K.氏の「十日戎は 3 日ともお詣りします。行かないと、年が明けた気がしない」という語りが表している。つまり、初めて参加した目的は個人的な競争での勝利であったが、参加する中で、年中行事化していったと言えよう。

より極端な事例で言うと、福男のインタビューで介した現在開門神事講社の講長である H.R.氏が挙げられる。事故により障害を負いながらも、彼はこの赤門に戻ってきた。神事に参加し門を開け続けることが、彼にとって一番のアイデンティティの確認なのである。

様々な人々が選択縁によって集まり、そして集合的沸騰が行える場としてこの神事が存在する。これはもう「祭礼」と呼んで差支えないだろう。文献調査・面接調査・質問紙調査、自らをその場に置いた参与観察によって、この祭りの総合的な理解が出来たと考える。

2004 年の事件後、H.R.氏と私が神社にて今後の展望の議論を重ねる中で、神社側から開門神事自体を取りやめるとの話も出た。その際に、参加者と調査者の我々2 人は、「涙ながらに存続を訴えた」のである。調査者である私が、なぜそこまでし得たのか。ここに、「祭り」を見ることはできまいか。

社会的意義としては、この祭礼は見る側としても分かりやすいために、模倣したものが多数創られていくことであろう。矢島妙子の指摘したよさこい系イベントの様に、「協調的連帯と競争的連帯」［矢島 2006：193］でもって全国的に広がりを持ち、交流を通して選択縁が深まっていく形態よりは、紐帯は弱いかもしれない。しかしながら 2014 年からの類似系イベントに対する西宮神社の公認の流れは興味深い。基本手法は模倣しつつも、各地方の色に染めて独自に発展させていきやすいやすいだけに、更なる拡がりをもって普及していく可能性を秘めている。

4 節　今後の課題

今後の課題としては､持続可能な祭事の運営のための人材の確保であろう｡ところが 2005 年にくじ引きが導入され、門前出走位置決めの秩序が生まれた反面、門前で待機する時間が少なくなり参加者同士の関係が希薄になった。その問題解決の糸口が、学校ではないかと感じている。現在、開門神事当日には、私の勤務する、北九州工業高等専門学校の卒業生で関西に就職した者や、姉妹校である明石工業高等専門学校の学生たちが神事の運営に携わっている。実践人類学のなかで、学生と地域社会を結ぶ一事例として醸成しかけてはいる。学生たちは、十日戎のみならず、他の祭礼にも頻繁に顔を出し、手伝っている。そこには「選択縁」が介在している。あくまで「福男と関わりたくて、これまでの生活で接

点のなかった、伝統文化に触れられるのがうれしいから」参加してくれている。今の開門神事講社のメンバーは、かつて門前で数時間話す中で、「選択縁」を強い紐帯にしていった。

選択縁だからこその「思い入れの強さ」、そして育まれた紐帯が、2004 年の事件際に立ち上がれる力に繋がったのである。いかに、このような選択縁を増やしていけるか。例えば学校組織を利用した伝統文化の継承については、中野紀和の調査した、小倉工業高等学校の生徒が小倉祇園太鼓においておみこしを担ぐ事例［中野 2007：84-86］など様々なものがある。私としては、より多くの興味を持った方々が、選択縁で集まってきてもらえるような組織づくりの提案を行っていきたい。「合衆性」の祭礼研究をある程度行ってきた人物が、その祭事を推進していくことは、フィールドにできる恩返しなのかもしれない。実践研究者という立場として、これからも働きかけを続けていきたい。

私としては、より多くの興味を持った方々が、選択縁で来てもらえるような組織づくりの提案をやっていきたい。「合衆型」の祭礼研究をある程度は行った人物が、その合衆性のイベントを行い続けることは、フィールドにできる恩返しなのかもしれない。

まだ、課題は残っている。地元の方々との更なる関係の構築、より多くの参加者の生の声を拾うこと、神事の良さの共有、持続可能性など、一つ一つの問題を講社の同志たちと一緒に解決して、私にとっても生きがいとなるべき「選択縁」を大切にしていきたい。フィールドで動いていける実践研究者という立場として、これからも働きかけを続けていきたいと思っている。

---

① 行政も 2008 年の事例の様に、雑踏対策の文脈で積極的に祭りの主催者側に入り込んで指導を行うという手法は取っていない。あくまで、危なければ禁止（西宮神社の場合は 2 年間の福男認定の禁止）を言い渡すのみである。結果としては、対処療法として機能したに過ぎず、2004 年あたりの事件につながったとも考えられる。

② 1979 年 80 年福男 N.K.氏の出身であった香住であるが、この地の漁業関係者は、西宮神社以外にも「もう一人のえびす様」である島根県の美保神社にも船の絵や玉垣などの寄進を歴史的に行っている。漁民としてえびす講が盛んだったことが分かる。先述したとおり、西宮神社においては N.K.氏の所属する講社は、現在でも 1 月 10 日に門が開いてすぐに社務所に行って、一番に特別祈祷を頼む伝統を続けている。そういった彼らだからこそ、西宮神社に諸国から集うという、えびす信仰の大切さを氏子に気付かせたのではないか。この熱心さが、存在価値が忘れかかっていた福男競走にオーセンティシティを与えることに繋がったと考える。

③ 松平誠は『祭りのゆくえ』の中で、「よさこい系の中で都市マツリの「遠心力」に惹かれて、気に入ったオドリに出会い、そこに群れる」という「渡り鳥」や、「著名なマツリの御輿を担ぎたくて集まった」「担ぎ屋」の存在を指摘している［松平 2008：185-187］。我々の講社にもこのような祭りが好きで、掛け持ちしている講員がいる。主催者としてこのような人たちを内包できる、懐の広さがこの神事の場にはあるのではないか

謝辞

私が、西宮神社十日戎開門神事福男選びの調査を行うことになった始まりは、1997 年のことであった。当時私は甲南大学文学部社会学科の 2 年生で、この年から学科内のシステムが変更され、2 年生からゼミに入ることになり、私は文化人類学を専攻したいとの思いから、森田三郎先生のゼミを志望した。前年度の秋に所属ゼミの選抜面接が行われたが、どうしても日程が合わずに、当時導入されて間もない「電子メール」を使って、直接森田先生の面接のアポイントを取って臨んだ。初めて入った教員室には 1985 年の阪神タイガース優勝のポスターが大きく貼られており、私は当時阪神タイガースの応援サークルを運営していることを熱く語り、「阪神」文化や「日本の宗教文化」を調べてみたいという思いを熱くぶつけた。そのことが奏功したのか、特例ながら内定をいただくこととなったのである。祭礼研究を始めていく中で、これほど恵まれたことはあるだろうか。

ゼミが始まり、森田ゼミで卒業論文の研究とは別に「阪神文化事典」を作る動きとなった。私は、自身の氏子地域でもあり、その年の 1 月に参加したばかりの西宮神社の「十日戎開門神事福男選び」を取り上げることにした。1 年生の時より民俗学の授業にて他の神社の調査をしてはいたものの、どのような調査ができるのか不安があった。初めて社務所に通された時の緊張感は、今でも覚えている。初めに、当時権宮司であった吉井貞俊先生が出てこられ、氏子組織などの西宮神社の祭礼に関する質問を行った記憶がある。20 歳前の大学生を相手に真摯に答えて下さったのみならず、民俗学的な調査の手法についてご講義をその時からいただいた。後に、西宮文化協会関連のイベントや、1 年後に始まった「えびす信仰研究会」のメンバーに加えていただくきっかけを、吉井先生が森田先生、米山俊直先生と一緒になって与えて下さったことは、様々な視点から西宮神社を考察する糸口になった。大学院の修士課程を修了し、大阪の金蘭会高等学校・中学校の教員となり、職務が忙しい時でも、このような場に引き続きいることが出来たのは、ひとえに諸先生方のお蔭である。改めて御礼を申し上げたい。

総合研究大学院大学の大森康宏先生や海技大学校の松村勝二郎先生にも、たいへんお世話になった。両名とも私の学部時代に非常勤で甲南に来られていた先生である。中高の教員時代にも映像作品を作り、それを社会に発信していく機会を与えて下さった大森先生、企業の経営者や他分野の研究者の中で発表する機会をたくさん下さり、様々な考え方を持つ人たちの中でどのような研究をしていくべきなのかを、考えさせていただいた松村先生の助けが、研究をすることの意味を身体的に理解することに繋がったと言えよう。文系の研究者が就職することも難しい中、希望を捨てずに叱咤してくださった先生方に出会えたことは、まさに天恵である。

6 年の大阪での教員生活の後、北九州高専の教員となり、多少なりとも研究ができる環境に身を置くことが出来るようになった。その中で、川村邦光先生をはじめとした大阪大学日本学の先生方のご指導を仰げることになったことは、本当にありがたいことである。川村先生との初めての出会いは、北九州市立大学の漆原朗子先生、重信幸彦先生からのご紹介であった。2010 年の夏に北九州市立大学で国際日本学研究会が開かれる運びとなり、その中で福男に関する研究発表をさせていただく機会を得た。修士課程ののち、研究は独自に細々と続けてはいたが、民俗学・宗教学を主に研究されている方々の前で、久々に発表

をしたわけである。批判覚悟で発表を行ったが、川村先生をはじめ、学生の皆さんの温かさに感動した。と同時に、その中で真摯に研究を行い、実社会への還元と啓発を行っている姿に感銘を受け、このような環境で、私自身も研究を続けることが出来ればと強く思った。それを可能としてくださった川村先生、杉原達先生、北原恵先生、宇野田尚哉先生に深く感謝申し上げたい。

実際のフィールドでは、吉井貞俊先生、吉井良昭宮司の他、当時権禰宜であった吉井良英氏には非常にお世話になった。開門神事が現在よりも知られていない時に、広報を担当されていた吉井氏から様々な話を聞き、私も様々な話をした。20 年近くのお付き合いになるが、初めてお会いした当時には思いもよらなかったことである。この間、社務日誌など実に様々な資料の提供をいただいた。そして開門神事が正式な講社として成り立っていく過程で、主催者としての神社の関係者、調査者としての私という間柄を越えてお付き合いを続けさせていただいたことは、この論文を書く上での熱い思い入れとなった。

さらには、インタビューを受けて下さった多くの福男の方々、そのご家族、参加者の方々。インタビュー調査を何のためにやるのかということを、皆さんに学ばせていただいた。1999 年夏に昭和 20 年の一番福の U.K.氏と出会い、本格的にお話をお聞きした時である。当時の十日戎における開門行事のことを話されている中で、言外に「自らの歴史として後世に伝えて欲しい」という気持ちで話されていることをひしひしと感じた。講義では、インタビューの手法、そして心構えを勉強した訳であり、学部の 4 年生となり多くのインフォーマントに対してインタビューをしていたが、その大切さに改めて気づかされた瞬間であった。インタビュー後も幾度か連絡を取っていたが、中高の教員となった後、訃報に接した。その中に奥様が、「インタビューされたことは主人にとってどれだけ嬉しかったか」との旨が書かれていた。この論文には、そのような語りがたくさん詰まっている。この場で謝辞を伝えたくても伝えきれないことは、残念である。福男、参加者、神社。様々な方々が伝えてきたこの神事を記録して発信することが、私ができる最大の謝辞である。これからも、これまでに参加した人たちの気持ちを背負いながら、この神事に関わっていきたい。

職場の北九州高専の皆様にもお世話になった。私の拙い十日戎に関する研究報告を査読して下さり、様々なご指導をしてくださった、生産デザイン工学科一般科目の安部力先生をはじめとした多くの先生方、職員の方々にも、御礼を申し上げなければならない。職場の理解がなければ、到底書けなかった論文である。「ものの見方」という部分では、教員という職業が非常に役に立った。私が関わった金蘭会中高の教諭時代の生徒たち、現在の北九州高専の学生たちにも感謝しなければなるまい。「打てば響く」彼らがいたからこそ、更なる研究をしようと考えることが出来た。これからも、学生とともに成長していく。研究者がインフォーマント、フィールドとともに生きるという私の考えは、この教員経験から来ているのである。

最後になるが、家族には、感謝しすぎても足りない。亡くなるまで一生懸命に育ててくれた祖母冨士子、いつも見守ってくれている母紀代子。本当にありがとう。父裕章にも感謝しなければならないだろう。そして今回、この論文の添削、推敲を大いに手伝ってくれた妻葉子。ありがとう。これからは、私が恩返しをしていく番である。

参考文献

青木重明

2014「地域コミュニティ形成のための祭りの本質と機能」『政経研究』103、pp.57-69

秋野淳一

2010「里芋祭の儀礼構成にみる再生のドラマ―千葉県館山市茂名十二所神社の祭礼」2、pp.109-119

2011「祭のドラマからみた同一神社の複数の祭祀・祭礼の意味--千葉県館山市洲宮神社の「神狩」・「御田」・「お浜入り」・「安房国司祭」」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』1、pp.19-39

2012「千葉県館山市・洲宮神社の祭礼からみた現代社会と祭り：虐待からの再生のストーリーとしての宗教」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』4、pp.35-50

2013「「元祖女みこし」の変遷にみる地域社会の変容と神田祭」『国学院大学大学院紀要』pp.111-131

2013「都市祭礼研究の課題に関する予備的考察」『神道宗教』232、pp.142-144

2014a「「元祖女みこし」の現状にみる参加者の実態と神田祭の変化」『神道宗教』236、pp.133-135

2014b「観客の見えない都市の祭り　―神田祭・蔭祭、将門塚保存会大神輿の巡幸―」『都市民俗研究』19、pp.51-59

2014c「祭りと共に渋谷中央街を生きる」『都市民俗研究』19、pp.126-153

2015「「元祖女みこし」の街の神田祭：平成二五年の実際」『都市民俗研究』20、pp.13-46

浅賀ひろみ

2008「秩父の祭りにおける屋台囃子保存会の機能的分析」『人間の福祉：立正大学社会福祉学部紀要』22、pp.189-196

芦田徹郎

1998「現代都市祭礼のアイロニー―祭りの不可避性と不可能性をめぐって―」『宗教と社会』別冊、pp.99-106

2001『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社

厚香苗

2008「香具師系露店商の民俗学的研究」博士論文（未刊行）、総合研究大学院大学

2012『テキヤ稼業のフォークロア』青弓社

2014『テキヤはどこからやってくるのか?』光文社

阿南透

1986「『歴史を再現する』祭礼」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』26、pp.23－32

1997「伝統的祭りの変貌と新たな祭りの創造」小松和彦編『祭りとイベント』小学館、pp.67－110

2000「青森ねぶたとカラスハネト」『祝祭の 100 年』ドメス出版、pp.175－198

2003「青森ねぶたの現代的変容」2003、『国立歴史民俗博物館研究報告』

2004「新しい祭りの創出―八雲山車行列の 20 年」『江戸川大学紀要』14、pp.25-46

2005「都市祭礼の空気は自由にする?―青森ねぶた祭における騒動と統制」『三田社会学』10、pp.46-56

2007「昭和初期の「新しい祭り」--京阪神の事例から」『江戸川大学紀要』17、pp.53-66

2009「都市祭礼「仙台七夕まつり」の成立と変容」『江戸川大学紀要』19、pp.37-51

2011a「「東北三大祭」の成立と観光化」『観光研究』22(2)、pp.51-60

2011b「青森ねぶた祭におけるねぶた題材の変遷」『江戸川大学紀要』21、pp.161-174

2014「「となみ夜高まつり」の成立」『江戸川大学紀要』24、pp.81-93

2015a「祭礼における「暴力」の発生と解決の民俗学的研究　―報告書―」（代表：平成 23～26 年度科学研究費補助金　基盤研究(C)　報告書）、江戸川大学

2015b「条例制定とその後の青森ねぶた祭」『江戸川大学紀要』25、pp.1-12
荒川裕紀
2001「十日戎開門神事考」『―えびす信仰研究会報告―えびす信仰の謎をめぐって』えびす信仰研究会、pp.35－70
2004「十日戎開門神事再考」『文明・宗教・民間信仰―民間信仰共同研究会報告―』民間信仰共同研究会、pp.101－122
2010「西宮神社十日戎開門神事の歴史的変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』43、pp.105－114
2011「西宮神社十日戎開門神事の 1930 年 40 年の変遷」『北九州工業高等専門学校研究報告』44、pp.111－122
2012「太平洋戦争後の十日戎開門神事」『北九州工業高等専門学校研究報告』45、pp.103－112
2013「十日戎開門「神事」の創造－「門開け」から「神事」へ　高度経済成長以降の日本文化のあり方に関する一考察－」『北九州工業高等専門学校研究報告』46、pp.57－66
2014「昭和晩期以降における十日戎開門神事の変遷 －新聞資料 、インタビュー、参与観察 を通じて―」『北九州工業高等専門学校研究報告』47、pp.71－80
2015「西宮神社十日戎開門神事における参加者について（Ⅰ）－2001 年から 4 年間の質問紙調査と参与観察から－」『北九州工業高等専門学校研究報告』48、pp.109－118
有末賢
1983「都市祭礼の重層的構造―佃・月島の祭祀組織の事例研究」『社会学評論』132、pp.37－62
1999『現代大都市の重層的構造―都市化社会における伝統と変容―』ミネルヴァ書房
2000「現代の都市空間におけるメディアと祝祭」『生活学』24、ドメス出版、pp.226－282
有末賢、内田忠賢、 倉石忠彦、 小林忠雄 編
2009『都市民俗研究の方法』岩田書院
アンダーソン、ベネディクト
1997『想像の共同体　ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆訳）NTT 出版
安藤直子
2001「観光人類学におけるホスト側の『オーセンティシティー』の多様性について―岩手県盛岡市の『チャグチャグ馬コ』と『さんさ踊り』を事例として」『民俗学研究』66(3)、pp.344－365
2002「地方都市における観光化に伴う『祭礼群』の再構成―盛岡市の六つの祭礼の意味づけをめぐる葛藤とその解消」『日本民俗学』231 号、pp.1 - 31
2003「東北地方における祭りの観光化と担い手の主体性　―盛岡市の「チャグチャグ馬コ」と「さんさ踊り」を事例として―」博士論文（未刊行）、お茶の水女子大学
2004「「地域文化」の「商品化」と地域振興―盛岡市の祭りを事例として」『日本民俗学』237、pp.153-155
飯田剛史
2002『在日コリアンの宗教と祭り』、博士論文、世界思想社
2006「在日コリアンと大阪文化--民族祭りの展開」『フォーラム現代社会学』5、pp.43-56
飯塚好
2005「佐原祭礼の変遷と周辺の都市祭礼」『国立歴史民俗博物館研究報告』124、pp.13-32
五十嵐 真子
2007「祭礼調査からみる大学と地域、そして人類学の役割は?―明石市稲爪神社の秋祭り調査を事例に」『文化人類学』72(2)、pp.221-240

池田一城
2013「聖地と地域文化の創出にみる観光・信仰 : 高野山「ろうそく祭り」を中心として」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』28、pp.189-192
石井研士
1997「非聖化する家族と儀礼文化の衰退」小松和彦編『祭りとイベント』小学館、pp.39-66
石田信博
2013「文化の伝承 : 祭り (5) 岸和田だんじり祭 : けんか祭りから都市祭礼への脱皮」『Fiber』69 (8)、pp.273－277
市川寛也
2014「鵺ばらい祭り考　温泉観光地における民衆文化の創造」『文化資源学』12、pp.31-46
伊藤亜人
1987「よさこい祭り,中国・韓国の祭りとの比較」『季刊人類学』18(3)、pp.37-47
2007『文化人類学で読む日本の民俗社会』有斐閣
2009「韓国における祝祭」『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶應義塾大学東アジア研究所、pp.93-125
伊藤幹治
1984『宴と日本文化』中央公論社
伊藤裕久
2013「神田祭の変遷とコミュニティ」『都市問題』9、pp.10-16
伊藤昌亮
2010「フラッシュモブズ　儀礼と運動の交わるところ」博士論文（未刊行)、東京大学
2011『フラッシュモブズ』NTT 出版
2013「若者たちの新しい祭り?: デモからフラッシュモブへ」『都市問題』9、pp.26-30
井上邦子
2003「モンゴル国・ナーダム祭における「伝統の創造」と基層文化に関する研究」博士論文（未刊行)、日本体育大学
井上俊編
1984『地域文化の社会学』世界思想社
1987『風俗の社会学』世界思想社
岩城卓二
2013「西摂津社会の中の西宮・広田神社」『ヒストリア』236、pp.79-101
岩澤光城
1980「阪急電車　―あの日のことども―」『大阪春秋』27、新風社、pp.124－127
上野千鶴子
1984「祭りと共同体」井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社、pp.45-78
魚澄惣五郎編
1959『西宮市史』1 巻、西宮市役所
1960『西宮市史』2 巻、西宮市役所
内田忠賢
1992「都市と祭り―高知『よさこい祭り』へのアプローチ（1)」『高知大学教育学部研究報告』第 2 部 45、pp.1-15

1994a「地域イベントの社会と空間―高知『よさこい祭り』へのアプローチ（2）―」『高知大学教育学部研究報告』第 2 部 47、pp.1-14
1994b「社会地理学とその周辺―10―地域イベントの展開―高知『よさこい祭り』を事例として」『地理』39(5)、pp.92-97
1999「都市の新しい祭りと民俗学―高知『よさこい祭り』を手掛かりに」『日本民俗学』220、pp.33-42
2000「変化しつづける都市祝祭―高知『よさこい祭り』」『生活学』24、ドメス出版、pp.130－147
2001「民俗世界の地理学(8)よさこい祭り(前)」『地理』46(12)、pp.90-95
2002「民俗世界の地理学(9)都市の伝統と現在--よさこい祭りの伝播(後)」『地理』47(1)、pp.76-81
2003a『都市祝祭の伝播に関する文化地理学的研究』お茶の水女子大学
2003b「都市民俗生活誌の可能性」『国立歴史民俗博物館研究報告』103、pp.349-357
2009「都市祝祭の変貌」鈴木正崇 編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶應義塾大学出版会 pp.67-89
2013「よさこいが生み出すコミュニティ」『都市問題』104、pp.22-25
宇野功一
1998「都市祭礼の起源説話の生成と祭礼の「不変性」の確立--幕末以降の博多祇園山笠における革新と伝統」『西日本宗教学雑誌』20、pp.37-58
1999「近世博多松囃子における儀礼の政治性」『日本民俗学』219 号、pp.31－64
2005「近代都市祭礼における神輿巡行と山車巡行の分離過程―千葉県佐原市新宿の諏訪祭礼を例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』124、pp.101-161
2006「近代博多における個別町の社会構造と祇園山笠経営―昭和 10 年代の西町流古溪町を例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』125、pp.1-46
2007a「儀礼、歴史、起源伝承--博多祇園山笠にかんする一考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』136、pp.39-113
2007b「都市と祭礼の宗教社会史的研究　―博多の祇園山笠と松囃子を例に―」博士論文（未刊行）、総合研究大学院大学
2008a「祭礼観光経済序説--近世・近代における都市祭礼の経済構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』145、pp.275-315
2008b「都市祭礼における起源伝承の創出と活用―近現代の博多祇園山笠を例に」『国文学 ： 解釈と鑑賞』73(8)、pp.36-43
宇野正人
1982a「新しい祭の成立と展開―大社ご縁祭り」『国學院大學日本文化研究所紀要』49、pp.30-126
1982b「祭の構成と変化--気多若宮神社例大祭と飛騨古川祭」『国學院大學日本文化研究所紀要』50、pp.94-127
2002『祭りと日本人』青春出版社
海野拓司
2013「文化の伝承 ： 祭り(1)神戸東灘のだんじり祭り」『Fiber』69(4)、pp.125-127
及川祥平
2015「祭礼的なる場における歴史表象と偉人表象：山梨県下の祭礼・イベントにおける状況を中心に」『信濃』67(1)、pp.1-18
大江時雄
1985『ゑびすの旅』海鳴社

1994「ゑびす新聞」第 6 号
大阪府伝統文化総合支援研究委員会
2003『大阪府の「十日えびす」』平成 14 年度ふるさと文化再興事業伝統文化支援研究委嘱事業調査報告書.
大島建彦
1997a「奈良北市の十日戎」『西郊民俗』161、pp.27-30
1997b「堀川戎神社の十日戎」『西郊民俗』159、pp.1-9
2008『疫神と福神』三弥井書店
大槻恵美
1982「変容する都市近郊村の祭り―その過程とリアリティ」『季刊人類学』13(4)、pp.214-249
大西達也
2014「地域の新たな文化を創出する市民参加プロジェクト：YOSAKOI させぼ祭り」『地域開発』593、pp.48-51
大森重宜
2012「七尾祇園祭にみる能登の民族スポーツ「キリコ祭り」」『金沢星稜大学人間科学研究』6(1)、pp.45-50
岡田米夫.
1974「西宮神社と海神信仰」『神道史研究』22(5・6)、pp.290-305
尾崎耕司
2008「昭和初期の神戸における青年団運動について」『阪神文化論』思文閣出版、pp.207-249
オルトナスト（烏日図那蘇図)、ボルジキン
2007「オボー祭祀　―ウジムチン地域の祭祀文化に関する文化人類学的研究―」博士論文（未刊行)、千葉大学
樫村賢二
2006「周期際の民俗学的研究　―西金砂神社と東金砂神社の周期祭とその特質―」博士論文（未刊行)、神奈川大学
金子毅
2000「祭りをはぐくむ葛藤と調和--戸畑「提灯山笠」にみる地域社会の変質」『文化人類学研究』1、pp.39-61
川村邦光
1998「戦争と民俗」『日本民俗学』pp.34-48
2000『<民俗の知>の系譜』昭和堂
2003a「戦争と民俗学―柳田国男と中山太郎の実践をめぐって」『比較日本文化研究』7、pp.7-35
2003b『近代日本における宗教とナショナリズム・国家をめぐる総合的研究』大阪大学
2003c『戦死者のゆくえ　語りと表象から』青弓社
2007「断髪と頭脳」鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』慶應義塾大学出版会、pp.237-281
2012a「日本人の信仰の歴史」『大法輪』79(1)、pp.56-60
2012b「日本人の宗教観を問う 祈りの光景から」『大法輪』79(10)、pp.84-88
岸川雅範
2013「江戸天下祭の歴史的展開に関する研究」博士論文（未刊行)、國學院大學
北見俊夫
1991『恵比寿信仰』雄山閣

木村葉子
2005「ノッティングヒル・カーニバル―ロンドンのカリビアン・ストリート・フェスティバル―」『ヨーロッパ基層文化研究』No.1、ヨーロッパ基層文化研究会、pp.59－74
2010「ノッティングヒル・カーニバルの都市人類学的研究　―仮装パレード、スティールパン音楽、カプリソを中心として―」博士論文（未刊行)、名古屋大学
許文卿
2012「地域祭り「なら燈花会」の現代的形式と市民社会の役割」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』27、pp.257-260
近畿民俗叢書刊行会
2011『大阪府の漁撈習俗とエビス神信仰』平成二十二年度文化庁「地域伝統文化総合活性化事業」実施報告書
金相圭
2001「韓国の門中と地域社会　書院祭を中心として」博士論文（未刊行)、神戸大学
久保田収
1974「伯家と西宮」『神道史研究』22(5・6)、pp.269-289
倉石忠彦
1981「マチの民俗と民俗学―都市民俗学成立の可能性―」『日本民俗学』134 号、pp.17－22
1990『都市民俗学序説』雄山閣
1997『民俗都市の人びと』吉川弘文館
桑江 友博 .
2009「都市祝祭祭礼研究・再考」『武蔵大学総合研究所紀要』19、pp.95-115
桑原秀夫
1974「西宮神社と算額について」『神道史研究』22(5・6)、pp.326-337
小西賢吾
2007「興奮を生み出し制御する　―秋田県角館、曳山行事のメカニズム」『文化人類学』72-3、pp.303-325
小林忠雄
1990『都市民俗学―都市のフォークソサエティ』名著出版
小松和彦・香川洋一郎編
1997『現代の世相⑤　祭りとイベント』小学館
小松秀雄
1995「生田祭の社会学的研究-2-三宮地区の地域特性と祭りの実践方法」『神戸女学院大学論集』42(1)、pp.17-36
1999「都市祭礼の文化的再生産」『宗教と社会』別冊、pp.94－99
小村純江
2015「祭礼民俗誌における妙見信仰：千葉神社・寒川神社の事例を中心に」『日本民俗学』282、pp.43-64
桜井徳太郎
1966『民間信仰』塙書房
1987『祭りと信仰』講談社学術文庫

崔杉昌
2007「日本と韓国における地域祭祀の民族的構造　―「当屋祭祀」と「洞祭」を中心に―」博士論文（未刊行）、佛教大学
坂西哲
2010「検証　十日戎の合戦」『歴史研究』586、pp.15-17
作美陽一
1996『大江戸の天下祭り』河出書房出版社
作道洋太郎
1998『阪神地域経済史の研究』御茶の水書房
塩月亮子
2000「沖縄における尾類馬行列の歴史社会学的考察」『生活学』24、ドメス出版、pp.102-128
2013「沖縄の祭りとコミュニティ」『都市問題』9、pp.17-21
島田潔
2013「祭りにおける「形」と「意味」--諏訪大社御柱祭にみる「意味」の拒絶」『國學院雑誌』104(11)、pp.92-104
清水純
2010「神田祭―大都市の祭礼における現代的変容」『日本大学中国・アジア研究センターworking paper series』24、pp.1-30
2012「神田祭―担ぎ手の動員をめぐる町会と神輿同好会の関係―」『日本民俗学』271、pp.1-32
志村洋
2012「摂津西宮神社における神職論争と支配」『部落問題研究』202、pp.47-71
章潔
2012「祭りによるまちづくり　―長崎くんちとランタンフェスティバルを事例として―」博士論文（未刊行）、長崎国際大学
真野俊和
2001『日本の祭りを読み解く』吉川弘文館
鈴木岳海
2005「映像人類学的アプローチの意義を考える　―祭り研究ビデオ資料の視聴覚分析を材料として―」博士論文（未刊行）、甲南大学
蘇紋槿
2013「現代社会における「祭り」の創出と地域文化 : 台湾の「高雄内門宋江陣」を例として.」『現代台湾研究』43、pp.73-97
薗田稔
1990『祭りの現象学』弘文堂
成惠珍
2009「祭りを支える女性たち―「十日戎」祭りにおける福娘をめぐって」『Cultures/critiques』1、pp.55-68
2010「今宮戎神社「十日戎」における宝恵駕行列と福笹をめぐって」『大阪大学日本学報』29、pp.133-149
高木栄
2014「祭りの組織進化の研究：盛岡さんさ踊りを事例として」『地域デザイン』3、pp.103-125
滝川（瀧川）政次郎
1974「傀儡戯・傀儡子族と百太夫信仰」『神道史研究』22(5・6)、pp.214-268

竹沢尚一郎
1998a「博多祇園山笠」『季刊民族学』84 号、千里文化財団、pp.3－45
1998b「祭りの変容」島薗進・他編『情報社会の文化４　心情の変容』東京大学出版会、pp.49－77
1998「祭礼における親和と支配」『九州の祭り』第１巻（博多の祭り）九州大学宗教学研究室、pp.85－105
竹中宏子
2000「祝祭組織の構成原理から見た都市社会―スペイン・ウエスカのペーニャの結成と変遷―」『生活学論叢』第 5 号、日本生活学会、pp.15－30
竹中克行
2013「地中海都市カリアリから考える「普通」の町の再生(15)聖なるものが運ぶ土地の縁 : 祭りで結ばれる世界(上)」『地理』58(6)、pp.62-69
2013「地中海都市カリアリから考える「普通」の町の再生(15)聖なるものが運ぶ土地の縁 : 祭りで結ばれる世界(下)」『地理』58(5)、pp.54-61
竹元秀樹
2008「自発的地域活動の生起・成長要因と現代的意義」『地域社会学会年報』20、pp.89－102
2010「地域社会における地縁的な共同体形成の現代的解明」『法政大学大学院紀要』64、pp.127－145
2012「地域社会における地縁的な共同性形成の現代的解明」博士論文（未刊行)、法政大学
2014『祭りと地方都市　都市コミュニティ論の再興』新曜社
田中重好
1986「都市祭礼としてのネブタ祭り」『ネブタ祭調査報告書』弘前大学、pp.55－79
2007a『共同性の地域社会学―祭り・雪処理・災害』ハーベスト社
2007b「共同性の地域社会学―祭り・雪処理・交通・災害―」博士論文（未刊行)、名古屋大学
田中滋・吉田竜司
2011「祭りのオーソプラクシー化と社会変動 : 曳山祭を事例として」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』13、pp.167-204
田中宣一
1998「厄神の祭祀と正月行事」『成城文芸』161、pp.49-63
2003a『えびすのせかい　全国エビス信仰調査報告書』、成城大院文学大学学研究科日本常民文化専攻田中宣一研究室編、成城大学
2003b「真鍋島のエビス信仰」『成城文芸』182、pp.1-14
2004「現代の祭り状況と祭り類型化の試み―大分県佐賀関町「関の権現夏祭り」を例として」『民俗学研究所紀要』28、成城大学民俗学研究所、pp.69-105
2005「かたちを変えながら生き続ける年中行事 欠かせない「信仰」と「楽しみ」という要素」『望星』36(2)pp.18-24
2005a「松本平のエビス信仰(上)西宮恵比寿神社の神札頒布にかかわらせて」『日本常民文化紀要』25、p.1-28
2005b『祀りを乞う神々』吉川弘文館
2007「松本平のエビス信仰(下)松本市商業地域のエビス社を中心に」『日本常民文化紀要』26、pp.61-95
2010『神・人・自然』田中宣一先生古稀記念論集編纂委員会 編、慶友社
2011「地域の互助協同と高度経済成長」『国立歴史民俗博物館研究報告』171、pp.339-358
2012「人と人とのかかわり : 互助協同」『日本常民文化紀要』29、pp.7-39

田邊 元
2014「藪原祭りにおける日程調節を巡る議論に対する一考察：なぜ日付は変えられたのか」『比較舞踊研究』20、pp.33-42
玉野和志
1999「都市祭礼の復興とその担い手層　―「小山両社祭」を事例として」『都市問題』90(8)、pp.25-38
田蓑健太郎
1999「京都府相楽郡『居篭祭り』にみる綱引きの構造と変容」『日本体育大学紀要』28(2)、pp.115-134
田村一軌・韓成一・戴二彪
2014「都市振興における祭りの役割：北九州の取り組みと課題」『海峡圏研究』14、pp.151-170
土屋直美
2008「拡大する「御園」--祭りを介した新たなコミュニティ形成に関する一考察」『南山考人』36、pp.31-47
2006「民俗芸能と観光客―「花祭現地見学会」を事例として」『南山考人』34、pp.107-122
坪井善明・長谷川岳
2002『YOSAKOI ソーラン祭り　街づくり NPO の経営学』岩波書店
鶴見俊輔・小林和夫編
1988『祭りとイベントのつくり方』晶文社
鄭 暁雲
2000「日本の伝統文化の価値と保護--現代における祭りに関する考察」石 雲艶 訳『國學院雑誌』101(5)pp.28-35
Thidar Htwe Win
2004「地域活性化と伝統芸能の教育―広島県高宮町地域振興会の活動を事例として」『民俗社会研究』3、pp.77-84
2006「地域社会における伝統の対象化に関する人類学的研究　広島県安芸高田市高宮町を事例に」博士論文（未刊行)、広島大学
堂下惠
2008「祭事への外部者参加を通じた体験型観光および地域活性化の検討」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』23、pp.333-336
2009「体験型観光による地域行事の活性化―キリコ祭りの事例より」『年報』29（金沢星稜大学総合研究所)、pp.35-38
東條寛
2001「村落祭祀と都市祭礼、博士論文（未刊行)、関西大学
2006『都市祭礼の民俗学』、岩田書院
冨田晃
2005『祝祭と暴力―スティールパンとカーニバルの文化政治―』二宮書店
中里亮平
2008「祭礼と「顔が利く」人々―東京都府中市大黒魂神社くらやみ祭の事例から―」『民俗学論叢』23、pp.51-64
2009「祭ブームと祭礼の影響関係―東京都府中市大黒魂神社くらやみ祭の事例から―」『民俗学論叢』24,pp.47-60
2010a「祭礼によるもめごとの処理とルール―彼はなぜ殴られたのか―」『現代民俗学研究』2、pp.41-56

2010b「変更からみる祭礼の現代的状況―東京都府中市大黒魂神社くらやみ祭の事例から―」『日本民俗学』261、pp.120-153
2011「祭礼の現代的状況による内部と外部　―動態的祭礼の理解からみる「相互承認的共同」―」博士論文（未刊行)、筑波大学
2013「祭礼の自粛・中止に関する研究 : 被災地以外の地域から見た東北大震災」『民俗学論叢』28、pp.33-45
中野紀和
1996a「都市祭礼における流動層―小倉祇園太鼓を事例として」『日本民俗学』205、pp.31－69
1996b「都市祭礼における有志チームの発生と機能―その考現学的研究」『生活学論叢』1、pp.15－27
2000「視線の力―都市祭礼・小倉祇園からみた新たな紐帯」『生活学』24、ドメス出版、pp.79－101
2001「「語りたい」と「語らない」小倉祇園太鼓における生活史からみた都市の民俗をめぐるダイナミズム」『国立歴史民俗博物館研究報告』91
2004「小倉祇園太鼓の都市人類学的研究　―ライフヒストリーからみた都市の文化動態―」博士論文（未刊行)、慶應義塾大学
2007『小倉祇園太鼓の都市人類学　記憶・場所・身体』古今書院
中野洋平
2013「えびす願人・えびす社人とその支配」『ヒストリア』236、pp.55-78
中村彰
1985『いごもりまつり―天下の奇祭　涌出宮』幻想社
中村孚美
1972a「秩父祭り―都市の祭りの社会人類学」『季刊人類学』3 巻 4 号、社会思想社、pp.149－192
1972b「都市と祭り―川越祭りをめぐって」古野清人教授古稀記念会編『現代諸民族の宗教と文化』社会思想社、pp.353－384
1984「都市人類学の展望」『現代のエスプリ別冊　現代の人類学２』（都市人類学）至文堂、pp.7－26
1986「博多祇園山笠―そのダイナミックスとアーバニズム」馬淵東一先生古稀記念論文集編集委員会編『社会人類学の諸問題』第一書房、pp.161－185
1993「町と祭り―秋田県角館町の飾山はやしの場合」塚本学・他編『日本歴史民俗論集 5　都市の生活文化』吉川弘文館、pp.205－236
2013『都市の祭り』中村孚美遺稿論文集出版委員会
中山和久
2000「巡礼という個人的な祝祭」『生活学』24、ドメス出版、pp.218-236
永吉守
2008「市民に寄り添う活動家兼研究者－近代化産業遺産活用の事例より」『九州人類学会報』35、pp.30-45
2009「地域の記憶を文化遺産として活用する―大牟田・荒尾の事例より」『九州民俗学』6、pp.34-48
名武なつ紀
1999「住宅都市・西宮の生成過程－1958 年住宅悉皆調査の分析を中心に」『市史研究 にしのみや』2、pp.119-148
鳴海邦碩
2013「伝統的な祭りの現代的な意義について：都市化の過程にてらして」『都市問題』104、pp.4-9
西田かほる
2013「近世前期の西宮神社　―他社との比較を通じて―」『ヒストリア』236、pp.31-54

西宮現代史編集委員会
2002a『西宮現代史』第 1 巻 1
2002b『西宮現代史』第 1 巻 2
2002c『西宮現代史』第 2 巻
2002d『西宮現代史』第 3 巻
西宮神社
1976『西宮神社の研究』、西宮神社
1994『西宮えびす』西宮神社
2003『西宮神社』学生社
西宮神社文化研究所編
2011a『西宮神社御社用日記. 第 1 巻』清文堂出版
2011b『近世諸国えびす御神影札頒布関係史料集』西宮神社
2013『西宮神社御社用日記. 第 2 巻』清文堂出版
2014『西宮神社御社用日記. 第 3 巻』清文堂出版
根本美妃子
2003「郷土教育と祭り」『都市民俗研究』9、pp.57-72
野中亮 .
2008「文化圏的視点による祭礼研究の可能性--堺市鳳だんじり祭りの事例から」『人間科学研究紀要』7 大阪樟蔭女子大学人間科学部学術研究会編、pp.301-311
長谷川賢二
1993「「伝統」の創造と再生産」森栗茂一編『都市人の発見』木耳社、pp.145-174
濱千代早百美
2000「都市祭礼の生成と伝承」『生活学』24、ドメス出版、pp.42-60
原武史
1998『「民都」大阪対「帝都」東京』　講談社
原田佳子
2009「厳島の祭礼と芸能」博士論文（未刊行）、広島大学
春木一夫
1980「阪神間をめぐる　阪神・阪急電車の攻防」『大阪春秋』27、新風社、pp.120－127
阪急電鉄株式会社編
1982『75 年のあゆみ』阪急電鉄
「阪神間モダニズム」展実行委員会 編著
1997『阪神間モダニズム：六甲山麓に花開いた文化、明治末期-昭和 15 年の軌跡』淡交社
阪神電気鉄道株式会社編
2005『阪神電気鉄道百年史』阪神電気鉄道
疋田精俊
1986「都市社会の祭礼と自治会」『大正大學研究紀要』、pp.71-98
平山昇
2005「明治期東京における「初詣」の形成過程―鉄道と郊外が生み出した参詣行事」『日本歴史』2005-12、pp.60-73

2006「明治・大正期東京・大阪の社寺参詣における恵方の変容」『交通史研究』61、pp.87-101
2010「明治・大正期の西宮神社十日戎」『国立歴史民俗博物館研究報告』155、pp.151-172
2011a「初詣の成立と展開　近代日本の都市における娯楽とナショナリズム 」博士論文（未刊行)、東京大学
2011b『鉄道が変えた社寺参詣』交通新聞社
2015a「初詣をめぐる言説の生成と流通」『商経論叢』56(1)、pp.11-32
2015b「関西私鉄・国鉄と「聖地」参拝 娯楽とナショナリズムの交錯」『歴史地理学』57(1)、pp.28-45
廣田篤彦
2013「祭りのイメージと嗜好性に関する研究」『日本文理大学紀要』41(2)、pp.21-26
深澤あかね
2011a「商業町の変容と祭りの存続　―岩手県花巻における実証研究―」博士論文（未刊行)、東北大学
2011b「商業町における祭りの変遷--祭りの背後にある商業経営と生活に着目して」『社会学年報』40、東北社会学会、pp.87-97
福間裕爾
1998a「都市祭礼の伝播―北部九州の山笠」『宗教と社会』別冊、pp.83-88
1998b「都市文化の周辺地域への伝播」『日中文化研究』12、pp.103-115
2002「人びとのまなざしと山笠のひろがり―北部九州の事例から」『月刊文化財』467、pp.14-18
2004「「ウツス」ということ―北海道芦別市健夏山笠の博多祇園山笠受容の過程―」『国立歴史民俗博物館研究報告』114、pp.155-226
藤本頼生
2010「神社の祭日変容をめぐる現状と課題―祭礼日の近現代」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』2、pp.47-61
2011「地域社会の変容と神社神道―無縁社会・ファスト風土化する社会のなかで」『神社本庁総合研究所紀要』16、pp.23-85
古家信平　俵木悟　菊池健策, 松尾恒一
2009『日本の民俗 9　祭りの快楽』吉川弘文館
ホブズボウム、エリック
1992『創られた伝統』（前川啓次・梶原影昭ほか訳）紀伊国屋書店
堀内泠
1999「「えべっさん」―庶民信仰の原像」『えびす信仰事典』戎光祥出版、pp.84-91
本多健一
2012「中近世京都における祭礼の空間構造　―今宮祭と六歳念仏をじれいとして―」博士論文（未刊行)、立命館大学
朴桂弘
1981「韓国における堂祭の研究　―日本の村祭との比較研究のために―」博士論文（未刊行)、筑波大学
前川智子
2010「結集の民俗的仕掛け―茨城県土浦市域における伝承課程とその担い手―」博士論文（未刊行)、筑波大学
巻山 圭一
2011「信州安曇野 夏の道祖神祭りとは何か」『信濃』63(1)、pp.51-66

松平誠
1980『祭の社会学』、講談社現代新書
1983a「都市の社会集団―府中祭礼集団にみる町内の実証的研究―」『応用社会学研究』24
1983b『祭りの文化　都市が作る生活文化のかたち』有斐閣選書
1988「都市祝祭の構成原理序説」『応用社会学研究』29
1989「都市生活文化論：都市祝祭の構成原理 」、博士論文（未刊行）、筑波大学
1990『都市祝祭の社会学』有斐閣
1991「現代神田祭仄聞」『国立歴史民俗博物館研究報告』33 号、pp.75－95
1993「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」『応用社会学研究』35 号、pp.49－88
1994『現代ニッポン祭り考－都市祭りの伝統を創る人びと』小学館
1999「都市祝祭の現代的意味」『都市問題』90(8)pp.3-11
2000「都市祝祭論の転回―「合衆型」都市祝祭再考」『生活学』24、pp.199-216
2008『祭りのゆくえ―都市祝祭新論』中央公論社
松田幸子
2013「地域の絆は伝統芸能から：「祭り、伝統芸能」がコミュニティ機能の維持に貢献」『地方議会人』44(3)、pp.27-31
松本和明
2013「近世西宮神社の社中構造―貞享～正徳期を事例として―」『ヒストリア』236.pp.3-30
松本尚之
2007「現代ナイジェリアにおける祭りの政治性―新しい地域社会の形成とその文化の担い手たち」『東北人類学論壇』6、pp.1-22
皆木七緒
2008「川越祭り囃子の研究--川越祭り囃子と川越まつりの関連とその変容」『都市民俗研究』14、pp.55-70
南博文
1999「勢いの場の共同構成―祭礼への心理現象学的接近―」『宗教と社会』別冊
宮家準
2001「府中大国魂神社暗闇祭における持続と変容」『国学院雑誌』102－9
宮本袈裟雄
1987『福神信仰』雄山閣
宮本常一
1961『都市の祭りと民俗』慶友社
1999「エビス神」『えびす信仰事典』戎光祥出版、pp.192-196
宮本英希
2013「文化の伝承：祭り(4)「だんじり」の分類学」『Fiber』69（7)、pp.230-233
宮本（山本）美紀
2002「聖化する音楽祭　―グロカリゼーションとしての祝祭研究―」博士論文（未刊行)、大阪大学
三宅英一郎
2000「集落の祭礼における行動と領域の分析的研究」博士論文（未刊行)、立命館大学

武藤誠・有坂隆道編
1962『西宮市史』4-巻（資料編Ⅰ）、西宮市役所
1963『西宮市史』5 巻（資料編Ⅱ）、西宮市役所
1964『西宮市史』6 巻（資料編 3）、西宮市役所
1967a『西宮市史』3 巻、西宮市役所
1967b『西宮市史』7-巻（資料編 4）、西宮市役所
1967c『西宮市史』8-巻（別編）、西宮市役所
村山弘太郎
2008「近世都市の祭礼と社会　―京都西陣・今宮祭を中心に―」博士論文（未刊行）、関西大学
森栗茂一
1993「「民俗学」および『都市の発見』」森栗茂一編『都市人の発見』木耳社、pp.201-226
1999「なぜ都市を問題にするのか 都市民俗学のフィールドワークのこころざしに関連して」『国立歴史民俗博物館研究報告』78、pp.121-128
2000「神戸アジアタウンのケガレとハレ」『生活学』24、ドメス出版、pp.283-297
森田三郎
1980「長崎くんち考－都市祭礼の社会的機能について」『季刊人類学』11－1、pp.77－119
1990『祭りの文化人類学』世界思想社
2000「祭りの創造―よさこいネットワークを考える」『生活学』24、ドメス出版、pp.237－260
2004「鎮守の森から見えるもの」『文明・宗教・民間信仰―民間信仰共同研究会報告―』民間信仰共同研究会、pp.123-138
森雅人
1999「たった一人が仕掛けた祭り―札幌「YOSAKOI ソーラン祭り」」『都市問題』90(8)、pp.39-51
矢島妙子
2000a「『よさこい祭り』の地域的展開―その予備的考察」『常民文化』23、pp.25-42
2000b「祝祭の受容と展開－『YOSAKOI ソーラン祭り』」『生活学』24、ドメス出版、pp.148－174
2000c「祭りの『旅』－『ねぶた』と『よさこい』の遠征・模倣・移植」、阿南透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子『旅の文化研究所研究報告書』9
2001「『よさこい』の祭りにみる地域性についての人類学的一考察」『常民文化』24、pp.38-50
2002a「祝祭の組織編成にみる都市性と継承性―『YOSAKOI ソーラン祭り』における参加集団の分類と特徴」『名古屋大学人文科学研究』31、pp.41-54
2002b「札幌市北区新琴似の生活文化の創造過程―『YOSAKOI ソーラン祭り』の地域密着型参加集団の歴史・社会背景」『生活学論叢』7、pp.3-16
2003「都市祝祭における「オーセンティシティ」再考　―「YOSAKOI ソーラン祭り」参加集団の地域表象のリアリティをめぐって」『名古屋大学人文科学研究』32、pp.51-64
2005「都市祝祭にみる『地域拡大・開放と地域再確立』」－『よさこい』系祭りにみる都市の伝承母体をめぐって―」現代伝承論研究会編『現代都市伝承論　民俗の再発見』、岩田書院、pp.49-82
2006「「よさこい」系祭りの都市民俗学的研究」博士論文（未刊行）、名古屋大学
2015『「よさこい系」祭りの都市民俗学』、岩田書院
柳田國男
1942「日本の祭」『定本柳田國男集』第 10 巻（1962）、筑摩書房

谷部真吾
2000a「祭りにおける対抗関係の意味―遠州森町「森の祭り」の事例を通して」『日本民俗学』222、pp.64-94
2000b「見せる祭りを目指す実践の誕生」『生活学』24、ドメス出版、pp.61-78
2001「能力における祭りと日常生活の関連性　森の祭りを用いた中村孚美の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』91、pp.715-726
2002「祭りの舞台化にみるフォークロリズム：森の祭りの'99 フェスタしずおか出演を事例として」『生活学論叢』(7)、pp.17-29
2004「祭りの社会人類学的研究―「森の祭り」の史的考察を中心に」博士論文（未刊行)、慶應義塾大学
2008a「地域の再編と祭りの担い手たち--遠州森町の市町村合併反対運動をめぐって」『哲学』119、pp.203-231
2008b「高度経済成長期における祭りの変化:遠州・森の祭りの 1945 年～1974 年を事例として」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』pp.170
2009「所作と伝承--見付天神裸祭における行事構造の解釈をめぐって」『テクスト布置の解釈学的研究と教育』3(2)、pp.13-32
2010「町を浄化する祭り--磐田市見付の祇園祭と裸祭」『テクスト布置の解釈学的研究と教育』4(2)、pp.77-93
2011「祭礼研究の軌跡：中村孚美と米山俊直の祭礼論を事例として」『テクスト布置の解釈学的研究と教育』5(2)、pp.43-66
2012「祭りの変化と社会状況：見付天神裸祭における 1960~61 年の変化を事例として」『名古屋大学文学部研究論集』（哲学 58)、pp.53-72
山下晋司
2007『観光文化学』新曜社
2009『観光人類学の挑戦』講談社
2014『公共人類学』東京大学出版会
山根眞人
2006「秋祭りにおける神賑行事の時代的変遷について--近代『社務日誌』の記述を中心として」『神社本廳教學研究所紀要』、pp.181-224
吉井貞俊
1962「西宮における忌竈習俗」『神道宗教』29、pp.40-45
1967「隠岐西郷町今津の宮竈」『神道宗教』46、pp.42-45
1969「エビス神信仰の研究―エビス神を祀る神社の問題」『国學院大學日本文化研究所紀要』24、pp.1-28
1974「伊勢・志摩におけるえびす信仰」『神道史研究』22(5・6)、pp.338-344
1980a「西宮と今宮」『大阪春秋』27、新風社、pp.80－83
1980b「西宮観光論」『大阪春秋』27、新風社、pp.84－88
1989『えびす信仰とその風土』国書刊行会
2002『阪神風物誌』新風書房
2003『福の神えびすさんものがたり』戎光祥出版
吉井良昭
2012「古文書を通じて伝わるこころ」『神道文化』24、pp.1-4

吉井良隆
1957「エビス神信仰史--特に海神信仰を中心とする」『神道史研究』5(6)pp.518-536
1990『神社史論攷』西宮神社
1998「西宮神社のゑびす信仰」宮田登編『七福神信仰事典』戎光祥出版、pp.8-13
1999a「居籠神事とおこしや祭」『えびす信仰事典』戎光祥出版、pp.8-13
1999b「えびす神研究―ヒルオとヒルメ」『えびす信仰事典』戎光祥出版、pp.197-213
1999c「失われたえびす信仰の本源」『えびす信仰事典』戎光祥出版、pp. 214-227
1999d「十日戎の風景―その歴史と民俗の特異性を探る」『えびす信仰事典』戎光祥出版、pp.368-379
2001『廣田・西宮両宮史の研究』西宮神社
吉井良尚
1962『吉井良尚選集』吉井良尚先生古稀勤続五十年祝賀会
1974「広田南宮と西宮」『神道史研究』22(5・6)、pp.306-325
吉井良秀
1935『西宮夷神研究』西宮神社
1976a「磐櫲樟船上、中、下巻」（資料）『西宮神社の研究』pp.156-201、西宮神社
1976b「武庫郡式社記」（資料）（資料）『西宮神社の研究』pp.202-240、西宮神社
吉川幸宏
2013「文化の伝承 ： 祭り(3)京都祇園祭の神輿 ： 京都人でもあまり知らない祇園祭」『Fiber』69(6)、pp.196-199
吉崎彩子 .
2008「現代の祭りにおける住民の参加形態--新潟市沼垂地区を事例として」『上越社会研究』23、pp.104-113
吉田竜司
2010「伝統的祭礼の維持問題―岸和田だんじり祭における曳き手の周流と祭礼文化圏」『龍谷大学社会学部紀要』37、pp.28-42
米山俊直
1974『祇園祭－都市人類学ことはじめ』中央公論社
1979『天神祭―大阪の祭礼』中央公論社
1986『都市と祭りの人類学』河出書房新社
1999「地縁再生の装置としての祭礼」『都市問題』90(8)、pp.13-23
2000「都市祭礼と地域社会の活性化―半田市の山車まつりを例として」『生活学』24 ドメス出版、pp.24-41
2001a「えびす信仰研究の視座」『―えびす信仰研究会報告―えびす信仰の謎をめぐって』えびす信仰研究会、pp.1－12
2001b「えびす信仰の三源泉―海神・市神・福神のルーツとその融合」『―えびす信仰研究会報告―えびす信仰の謎をめぐって』えびす信仰研究会、pp.131-143
2005「えびす信仰と道教」『アジア遊学』73、pp.67-73
柳川啓一
1987『祭りと儀礼の宗教社会学』筑摩書房

和崎春日
1976「都市の祭礼の社会人類学―左大文字をめぐって」『民族学研究』41－1、p.1-29
1981「左大文字地域におけるシンルイ意識―シンルイ構造・呼称・伝統行事との関連」『人文研究』80、pp.1-30
1987「現代都市と都市人類学の展開―地域人類学とエスニシティの視角」藤田弘夫・藤原直樹編『都市―社会学と人類学からの接近』ミネルヴァ書房、pp.46－79
1987『左大文字の都市人類学』弘文館
1989「都市のボランタリー・アソシエーションとしての祭り保存会―適応メカニズム論を越える都市人類学の試み」『都市問題研究』41(7)、pp.62-80
1994「大文字祭礼の都市人類学的研究　―左大文字を中心として」博士論文（未刊行）、慶應義塾大学
1996『大文字の都市人類学的研究』刀水書房
2000「祭りにおける生活文化の創造―祝祭の 100 年における近代化と生活主体」『生活学』24、ドメス出版、pp.5-22
2007「大文字五山送り火の都市人類学」『季刊民俗学』31(3)、pp.48-64
劉勁聰
2015「西宮神社の講社組織に関する一考察 神輿奉賛講社の結成と運営を事例に」『神戸女学院大学論集』62(1)pp.51-61
李良姬
2014a「担い手からみる祭りの創出と維持 : 関門よさこい大会の事例から」『観光研究論集』13、大阪観光大学、pp.37-47
2014b「祭りの創出・観光資源化の成功要因と課題：韓国咸平郡「蝶々祭り」を中心に」『日本地域政策研究』12、pp.69-76

歴代福男データ

年度	元号	一番福職業など	住所	年齢	二番福職業など	住所	年齢	三番福職業など	住所	年齢	人数
1921	T10	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	21							
1922	T11	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	22							
1923	T12	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	23							
1924	T13	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	24							
1925	T14	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	25							
1926	T15	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	26							
1927	S2	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	27							
1928	S3	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	28							
1929	S4	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	29							
1930	S5	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	30							
1931	S6	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	31							
1932	S7	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	32							
1933	S8	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	33							200
1934	S9	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	34							200
1935	S10	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	35							200
1936	S11	社家町氏子の子息	西宮市社家町	未成年？	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	36				200
1937	S12	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	37							3000
1938	S13	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	38	氷上郡より(同時一番)	丹波氷上郡春日部村	不明				3000
1939	S14	田口樽丸商店	西宮市石在町	25	製材店勤務・在郷軍人	西宮市石在町	29	製材店勤務・青年団	西宮市久保町	39	15
1940	S15	田口樽丸商店	西宮市石在町	26							300
1941	S16	佐々木時計店・青年団	西宮市今在家町	23	田口樽丸商店	西宮市石在町	27	甲陽中学4年		18	300
1942	S17	神戸一中5年	西宮市川東町	18							300
1943	S18	尼崎中学4年	西宮市荒戎町	17	大社青年学校3年	西宮市越木岩	19	関西学院中学3年	西宮市川西町	15	未記載
1944	S19				関西学院中学4年	西宮市川西町	16				未記載
1945	S20	関西学院中学5年	西宮市川西町	17							未記載
1946	S21	(参拝客例年の1割程度、進駐軍も物珍しさに見に来る)									未記載
1947	S22										未記載
1948	S23										未記載
1949	S24										15
1950	S25	(朝来の雨とも言わず、午前6時の開門を待ちかねて、どっと人の波が押し出し・・・・)									100
1951	S26										未記載
1952	S27										未記載
1953	S28	職種不明	東灘区魚崎新堀町	25	職種不明	灘区中原通	不明	職種不明	西宮市浜脇町	不明	1000
1954	S29	住吉中学教諭	東灘区住吉町恋野	26	神戸工業高校2年	東灘区住吉町丸ノ後	16	職種不明	東灘区住吉町恋野	25	未記載
1955	S30	住吉中学教諭	東灘区住吉町恋野	27	神戸工業高校3年	東灘区住吉町丸ノ後	18	米穀商	西宮市東ノ町	18	500
1956	S31	公務員	西宮市川東町	30	住吉中学教諭	東灘区住吉町恋野	28	米穀商	西宮市東ノ町	19	100
1957	S32	田中製樽運転手	西宮市今津中町	19	神戸商業高校3年	東灘区住吉堂	19	会社員	西宮市宮前町	22	100
1958	S33	田中製樽運転手	西宮市今津中町	20	神戸商業高校2年	東灘区住吉町馬場東	18	岡崎牧場	西宮市田代町	27	30
1959	S34	田中製樽運転手	西宮市今津中町	21	神戸商業高校3年	東灘区住吉町馬場東	19	会社員	西宮市越水町	24	100
1960	S35	田中製樽運転手	西宮市今津中町	22	会社員	西宮市越水町	25	店員	東灘区住吉町馬場東	20	150
1961	S36	灘高校1年	西宮市千歳町	16	田中製樽運転手	西宮市今津中町	24	会社員	西宮市平松町	26	60
1962	S37	甲南高校1年	西宮市菊谷町	16	田中製樽運転手	西宮市今津中町	25	灘高校2年	西宮市千歳町	17	50
1963	S38	灘高校3年	西宮市千歳町	18	県立尼崎高校2年	西宮市用海町	18	鳴尾高校1年	西宮市浜町	16	80
1964	S39	会社員	西宮市神楽町	21	鳴尾高校3年	西宮市今津上野町	18	鳴尾高校3年	西宮市甲子園1番町	18	50
1965	S40	市立浜脇中3年	西宮市六湛寺町	15	甲南高校1年	西宮市鳴尾町	16	大阪大学工学部4年	西宮市浜甲子園	22	100
1966	S41	(中止、「静かな十日戎」)									60
1967	S42										2
1968	S43	建材業	神戸市灘区上野通	31	職種不明	岡山県桑市	23	職種不明	和歌山県田辺市	27	300
1969	S44	建材業	神戸市灘区上野通	32							未記載
1970	S45	建材業	神戸市灘区上野通	33							200
1971	S46	ダイエー社員	西宮市松下町ダイエー寮	22							350
1972	S47	建材業	灘区上野通	35	喫茶店経営	西宮市平松町	42	大社中学	西宮市平松町	13	350
1973	S48	会社員	西宮市平松町	19	神戸商大生	灘区城ノ内	23	職種不明	東京都世田谷区下馬	25	160
1974	S49	会社員	西宮市平松町	20	関西学院大学	芦屋市浜町	20	建材業	灘区上野通	37	250
1975	S50	会社員	西宮市平松町	21	学生	西宮市石在町	17	会社員	西宮市泉町	42	未記載
1976	S51	商業	城崎郡香住町香住	27	理容師	西宮市甲子園7番町	27	水産加工業	城崎郡香住町若松	不明	300
1977	S52	理容師	西宮市甲子園7番町	28							未記載
1978	S53	兵庫県警	西宮市甲子園9番町	32	理容師	西宮市甲子園	29	会社員	奈良県生駒市	26	300
1979	S54	水産加工業	城崎郡香住町若松	21	理容師	西宮市甲子園7番町	30	電気工事業	西宮市平松町	25	300
1980	S55	水産加工業	城崎郡香住町若松	22	市立今津中学2年	西宮市染殿町	14	水産加工業	城崎郡香住町一日市	20	350
1981	S56	保養所管理人	灘区六甲山町北六甲	35	高校生	宝塚市安倉町西	16	会社員	尼崎市常光寺町元町	20	150
1982	S57	大阪体育大学3年	茨木市永代町	21	大阪体育大学3年	伊丹市荻野	21	会社員	西宮市染殿町	16	300
1983	S58	大阪体育大学4年	伊丹市荻野	22	大阪体育大学4年	茨木市水尾	22	大阪体育大学4年	茨木市永代町	22	200
1984	S59	県立伊丹北高校職員	伊丹市大野	24	市立大社中学3年	西宮市若松町	15	県立尼崎北高校1年	尼崎市立花町	16	300
1985	S60	海技大学校運輸事務官	東灘区深江本町	28	大阪芸術大学1年	東灘区御影中町	19	大阪高校1年	西宮市建石町	16	200
1986	S61	中学職員	神戸市垂水区五色山	29	大阪芸術大学2年	東灘区御影中町	20	県立尼崎高校1年	尼崎市立花町	16	200
1987	S62	小西酒造	西宮市今津巽町	24	立命館大学3年	伊丹市北河原字北浦	21		西宮市今津巽町	21	200
1988	S63	立命館大学4年	伊丹市北河原字北浦	22		尼崎市武庫豊町3丁目	20	大阪芸術大学4年	東灘区御影中町	22	200
1989	H1	会社員	伊丹市北河原字北浦	23	写真家	東灘区御影中町	23		加東郡社町上田	23	300
1990	H2	会社員	伊丹市北河原字北浦	24		西宮市里中町	18		西宮市若松町	17	260
1991	H3	本庄中学3年	東灘区本庄町	15	市立大社中学3年	西宮市桜谷町	14	県立東灘高校	兵庫区神田町	18	340
1992	H4	尼崎西高校3年	尼崎市元浜町	18	城内高校4年生	尼崎市塚口本町	19	西宮甲山高校1年	西宮市大谷町	16	345
1993	H5	大阪大成高校2年	西宮市桜谷町	16	大阪大成高校2年生	西宮市南郷町	17	西宮今津高校2年	西宮市今津久寿川町	17	450
1994	H6	大阪大成高校3年	西宮市桜谷町	17	西宮今津高校3年	西宮市今津大東町	18	大阪大成高校3年生	西宮市南郷町	18	500
1995	H7	住友電気工業	大阪市此花区西島	18	大阪体育大学1年	大阪府泉南郡熊取町	19	(株)上組	東灘区御影中町		700
1996	H8	大阪体育大学2年	大阪府泉南郡熊取町	20	住友電気工業	大阪市此花区西島	19	国立明石高専	芦屋市	20	650
1997	H9	大阪体育大学3年	大阪府泉南郡熊取町	21	神戸国際大学2年	尼崎市西立花町	20	住友電気工業	大阪市此花区西島	20	900
1998	H10	大阪体育大学1年	大阪府泉佐野市	19	仏教大学3年	尼崎市西立花町	21	関西学院大学	西宮市上ヶ原三番町	21	1200
1999	H11	大阪体育大学2年	大阪府泉南郡熊取町	19	西宮市消防局消防士	西宮市上甲子園	23	辰馬本家酒造(株)	西宮市今津巽町	24	2000
2000	H12	スポーツインストラクター	一宮市花池	21	西宮市消防局消防士	西宮市上甲子園	24	甲南大学	神戸市西区学園東町	20	1500
2001	H13	西宮市消防局消防士	西宮市上甲子園	25	立命館宇治高校	京都府相楽郡精華町	18	県立西宮高校1年生	西宮市山口町名来	16	1300
2002	H14	スポーツインストラクター	一宮市花池	23	甲南大学	神戸市西区学園東町	22	県立西宮高校2年生	西宮市山口町名来	17	1500
2003	H15	県立西宮高校3年生	西宮市山口町名来	18	兵庫リコー	神戸市西区学園東町	23	大阪市消防局	四条畷市	21	2000
2004	H16	大阪市消防局	四条畷市	22	私立大阪高校2年	西宮市甲陽園山王町	16	兵庫リコー	神戸市西区学園東町	24	2000
2005	H17	兵庫リコー	神戸市西区学園東町	25	大学生	大津市	21	介護タクシー運転手	西宮市甲子園町	24	2000
2006	H18	会社員	加古川市野口町	20	宣教師	愛知県一宮市	27	大学生	神戸市須磨区	22	2000
2007	H19	会社員	加古川市野口町	21	消防士	宝塚市鹿塩	24	消防士	川西市多田院	28	2000
2008	H20	関西学院大学3年	西宮市甲陽園山王町	20	自営業	愛知県一宮市	29	消防士	宝塚市鹿塩	25	2500
2009	H21	元保育士	神戸市西区	24	介護タクシー運転手	西宮市甲子園町	28	福岡大学	福岡県那珂川町	20	6000
2010	H22	大阪体育大3年	大阪府熊取町	22	会社員	神戸市垂水区	24	関西大学4年	吹田市	22	6000
2011	H23	会社員	高砂市	26	会社員	箕面市	28	東京消防庁	東京都文京区	26	3000
2012	H24	成美大学経営情報学部3年	福知山市在住(福井出身)	21	大阪商業大学4年	東大阪市在住(岡山出身)	22	茨木市職員	茨木市	26	3000
2013	H25	市立尼崎高校3年	尼崎市	18	興和新薬社員	神戸市東灘区	30	大阪府立千里高校教諭	大阪府池田市	48	4500
2014	H26	同志社大学1年	尼崎市長洲中通	19	大阪体育大1年	堺市	19	京都産業大1年	西宮市東山台	18	5000
2015	H27	摂南大学1年	西宮市	19	関西大学2年	八尾市	20	阪南大学1年	高石市	19	5000

十日戎開門神事アンケート

2015（平成 27）年 1月 10日
北九州工業高等専門学校
総合科学科　荒川　裕紀

このアンケートは西宮神社にて１月１０日に行われる「十日戎開門神事福男選び」に参加されるみなさんに対してのアンケートです。このアンケートは、北九州工業高等専門学校総合科学科の荒川裕紀が行うものです。ここで得たデータは、研究の目的でしか使用いたしません。皆様のご協力の程よろしくお願いいたします。

このアンケートにおいては皆様がお答えになりたくない項目がありましたらお答えにならなくて構いません。個人記入欄が多くなりますが何卒よろしくお願いいたします。

はじめにあなた自身のことについてお聞きします。（都道府県市町村は○をつけてください）

１，出生地はどちらですか？　　（　　）**都道府県（　　）市町村**

２，幼少期育ったところはどちらですか？（　　）**都道府県（　　）市町村**

３，小学生の大半はどこにいらっしゃいましたか？（　　）**都道府県（　　）市町村**

４，青年期の大半はどこにいらっしゃいましたか？（　　）**都道府県（　　）市町村**

５，現在のご職業を番号でお選びください。（　）
１　高校生　２，短大・大学・大学院生　３，小・中学生　４，大学受験生
５，フリーター　６，販売・営業　７，企画・マーケティング　８，エンジニア
９，宣伝・広告　１０，各種研究開発職　１１，公務員　１２，教員　１３，自営業
１４，その他（詳細を差し支えなければお書きください）（　　）

６，何年のお生まれですか？右にお書きください。１９（　）**年、現在、満（　）歳**

７，性別に○をつけてください　（　**男性　・　女性**　）

次に十日戎全般についてお聞きします。

８，西宮神社にて十日戎が行われることをいつから知ってらっしゃいましたか？
番号でお答えください（　）
（１、幼少期から　２，小学生の頃　３、中学高校生の頃　４，それ以降）

９，どこから十日戎が行われるのを知りましたか？　**番号でお答えください**　（　）
１，親兄弟から　２，親戚から　３，近所の人から　４仕事の同僚から
５，学校の友人から　６，新聞　７，テレビ　８，ラジオ　９，インターネット
１０，その他　（差し支えなければお書きください）→（　　）

次に十日戎に行われる「開門神事福男選び」について、お聞きします。
１０，毎年１月１０日に西宮神社にて開門神事が開かれることをいつ知りましたか？**番号でお答えください**
（１、幼少期　２，小学生の頃　３、中学高校生の頃　４，それ以降）　　（　）

１１，どこから開門神事が行われることを知りましたか？
１，親兄弟から　２，親戚から　３，近所の人から　４仕事の同僚から
５，学校の友人から　６，新聞　７，テレビ　８，ラジオ　９，インターネット
１０，その他　（差し支えなければお書きください）→（　　）

１２，今回の出場で何回目ですか？（　）回目
１３，現在、スポーツクラブを含めた体育会に所属してますか？**（はい・いいえ）**
１４，１３で「はい」と答えられた方にお聞きします。**→「いいえ」の方は１５へ**
どう言ったところに所属していらっしゃいますか？下にお書きください
（　　）**→次は、１７へ**

１５，過去に運動部に所属していらっしゃいましたか？**（はい・いいえ）**
１６，１５で「はい」と答えられた方にお聞きします。**→「いいえ」の方は１７へ**
どう言ったところに所属していらっしゃったのですか？下にお書きください
（　　）**→次は、１７へ**

１７，なぜ十日戎開門神事福男選びに参加しようとお考えになられたのですか？
下の欄にご自由にお書きください。

最後に、**複数回出場されている方**にお聞きします　**→初出場の方はこれにて終了です。有難うございます。**

１８，前回以前の神事で門の開いた瞬間のお気持ちをご自由にお書きください。

１９，なぜ今年も走ろうと思われたのですか？ご自由にお書きください。

長いアンケートにお答えいただき、誠にありがとうございました。

クロス検定表①

参加年度 と 職業 のクロス表

度数

		職業																	
		N/A	高校生	短大・大学・大学院生	小・中学生	大学受験生	フリーター	販売・営業	企画・マーケティング	エンジニア	宣伝・広告	各種研究開発職	公務員	教員	自営業	その他	専門学校生	高専生	合計
参加年度	2001年度	0	1	10	0	0	3	0	0	1	0	0	3	0	1	0	0	0	19
	2002年度	0	4	24	0	0	0	1	0	2	0	0	2	1	0	0	0	0	34
	2003年度	1	5	19	0	0	0	3	0	1	0	0	4	0	1	0	1	0	35
	2004年度	0	4	15	0	0	1	1	0	1	0	0	1	1	1	6	2	1	34
	2005年度	0	2	18	2	2	3	3	0	1	1	1	2	2	4	1	1	3	46
	2006年度	2	2	11	0	0	1	5	0	6	0	0	5	0	4	2	1	0	39
	2007年度	0	1	15	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	26
	2008年度	0	2	3	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	3	6	0	0	20
	2009年度	1	12	30	2	1	1	14	1	6	0	2	2	1	4	10	0	0	87
	2010年度	0	6	14	0	1	2	6	1	6	0	1	7	0	3	6	1	0	54
	2011年度	0	1	6	1	0	3	6	0	4	0	1	4	0	1	8	0	0	35
	2012年度	2	1	28	0	2	3	16	1	6	1	2	6	1	5	12	0	0	86
	2013年度	1	9	38	0	0	4	17	1	3	3	0	1	1	5	16	2	0	101
	2014年度	0	16	30	1	0	2	13	0	6	1	0	4	4	6	12	2	0	97
	2015年度	1	8	27	2	0	2	14	1	8	2	3	7	4	2	18	0	0	99
合計		8	74	288	8	6	27	106	5	51	8	10	48	15	41	103	10	4	812

参加年度 と 年齢 のクロス表

度数

		年齢													
		N/A	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
参加年度	2001年度	0	0	0	0	0	0	0	4	4	2	1	3	1	0
	2002年度	0	0	0	0	0	4	3	4	4	8	3	2	1	0
	2003年度	0	0	0	0	0	1	5	5	4	6	5	0	2	2
	2004年度	0	0	0	0	1	2	4	3	5	3	4	4	1	2
	2005年度	1	0	1	1	2	3	0	5	7	8	3	2	4	1
	2006年度	0	0	0	0	0	1	1	2	3	2	5	4	4	3
	2007年度	0	0	0	0	0	0	4	4	2	2	3	1	0	0
	2008年度	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	2	1	1
	2009年度	0	0	0	2	2	5	8	6	7	7	9	5	4	3
	2010年度	1	0	0	0	0	3	4	1	3	5	4	5	6	3
	2011年度	0	1	0	0	1	0	0	1	1	3	1	1	3	1
	2012年度	0	0	0	0	0	1	2	2	3	17	8	6	8	2
	2013年度	0	0	0	1	3	3	5	5	5	8	14	6	5	5
	2014年度	1	0	0	1	3	9	6	9	6	7	8	7	3	3
	2015年度	1	0	0	1	2	3	5	8	7	9	8	5	11	9
合計		5	1	1	6	14	35	48	59	62	88	77	53	54	35

		年齢															
		26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
参加年度	2001年度	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	2002年度	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2003年度	0	1	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
	2004年度	0	1	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2005年度	1	2	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0
	2006年度	0	2	0	1	2	0	2	0	1	0	1	1	0	0	0	1
	2007年度	3	1	2	1	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0
	2008年度	2	0	1	0	0	0	1	0	1	2	0	0	1	0	1	0
	2009年度	1	4	4	3	1	2	4	0	2	3	2	1	0	0	1	1
	2010年度	1	1	3	2	1	3	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0
	2011年度	2	3	0	2	1	0	1	1	2	1	1	1	0	0	0	2
	2012年度	6	3	2	1	9	1	1	1	3	1	3	0	0	0	1	1
	2013年度	2	3	6	4	3	3	2	5	2	3	2	0	2	0	0	1
	2014年度	2	3	3	4	6	2	1	1	2	2	2	4	0	0	1	0
	2015年度	3	0	3	0	2	2	1	2	0	3	0	3	1	0	2	1
合計		24	24	29	20	28	14	17	14	14	19	12	10	5	1	7	7

		年齢													
		42	43	44	45	46	47	48	49	50	55	56	61	64	合計
参加年度	2001年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
	2002年度	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	34
	2003年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35
	2004年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34
	2005年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	46
	2006年度	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	39
	2007年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26
	2008年度	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
	2009年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	87
	2010年度	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	54
	2011年度	0	2	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	35
	2012年度	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	86
	2013年度	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	101
	2014年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	97
	2015年度	2	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	1	99
合計		7	4	3	1	1	1	1	4	3	1	1	1	1	812

職業 と 年齢 のクロス表 (2001-2004)

度数

		年齢																				
		16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	35	50	合計
職業	N/A	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	高校生	1	7	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
	短大・大学・大学	0	0	6	14	13	17	12	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	68
	フリーター	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
	販売・営業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1	1	0	0	5
	エンジニア	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	5
	公務員	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	10
	教員	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
	自営業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3
	その他	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	6
	専門学校生	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	高専生	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計		1	7	12	16	17	19	13	9	5	4	1	2	3	2	3	1	3	2	1	1	122

職業 と 年齢 のクロス表 (2005-2015)

度数

		年齢													
		N/A	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
職業	N/A	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1
	高校生	1	0	0	1	10	25	22	1	0	0	0	0	0	0
	短大・大学・大学院生	1	0	0	0	0	0	10	34	34	55	50	15	15	3
	小・中学生	0	1	1	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	大学受験生	0	0	0	0	0	2	1	1	1	0	0	0	1	0
	フリーター	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	3	3	2
	販売・営業	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	8	9	8
	企画・マーケティング	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1
	エンジニア	1	0	0	0	0	0	1	1	0	3	5	1	2	4
	宣伝・広告	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	各種研究開発職	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	1	1
	公務員	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	1	5	3	1
	教員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3
	自営業	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	1	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	4	6	11	6
	専門学校生	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0
	高専生	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		5	1	1	6	13	28	36	43	45	69	64	44	49	31

		年齢															
		26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
職業	N/A	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	高校生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	短大・大学・大学院生	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
	小・中学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	大学受験生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	フリーター	0	3	0	2	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
	販売・営業	6	5	9	6	10	3	3	2	4	7	3	1	0	0	1	3
	企画・マーケティング	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	エンジニア	1	3	2	2	4	2	4	0	2	3	1	1	0	0	0	0
	宣伝・広告	1	1	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0
	各種研究開発職	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	公務員	4	2	3	3	1	1	1	0	0	1	1	1	1	0	1	1
	教員	2	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	自営業	1	3	1	3	3	0	1	2	1	2	4	1	2	1	2	0
	その他	7	2	6	1	5	6	2	5	6	4	3	5	1	0	2	3
	専門学校生	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	高専生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		23	22	26	18	25	13	14	12	14	18	12	10	5	1	7	7

		年齢													
		42	43	44	45	46	47	48	49	50	55	56	61	64	合計
職業	N/A	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	高校生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	60
	短大・大学・大学院生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	220
	小・中学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	大学受験生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	フリーター	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
	販売・営業	1	1	1	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	101
	企画・マーケティング	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	エンジニア	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	46
	宣伝・広告	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	各種研究開発職	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	10
	公務員	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	38
	教員	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	13
	自営業	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	38
	その他	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	97
	専門学校生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	高専生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
合計		7	4	3	1	1	1	1	4	2	1	1	1	1	690

参加年度 と 出場回数 のクロス表

度数

		出場回数																
		無回答	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	15	18	20	合計
参加年度	2001年度	0	11	4	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	19
	2002年度	0	16	11	5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34
	2003年度	2	18	6	6	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35
	2004年度	2	25	3	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34
	2005年度	1	24	8	3	1	4	0	1	1	2	1	0	0	0	0	0	46
	2006年度	1	23	7	2	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	39
	2007年度	1	16	2	3	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	26
	2008年度	0	15	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	20
	2009年度	0	63	14	4	4	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	87
	2010年度	0	42	8	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	54
	2011年度	1	24	5	2	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	35
	2012年度	1	63	12	4	2	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	86
	2013年度	0	75	12	7	2	3	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	101
	2014年度	4	62	12	7	2	3	0	2	1	1	1	0	1	0	1	0	97
	2015年度	1	78	10	5	3	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	99
合計		14	555	115	50	29	17	6	5	7	3	5	1	1	1	1	2	812

クロス検定表②

青年期 と 出場回数 のクロス表

度数

		出場回数																
		無回答	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	15	18	20	合計
青年期	兵庫県のみ回答	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	西宮市	2	59	17	9	4	3	4	1	3	2	1	0	1	1	0	2	109
	兵庫・旧摂津	1	105	26	11	8	2	1	1	3	1	4	0	0	0	0	0	163
	兵庫旧摂津以外	1	56	9	4	4	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	81
	大阪府のみ回答	0	5	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	大阪・旧摂津	2	60	16	6	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	90
	大阪旧摂津以外	0	60	9	3	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	76
	京都府	2	28	8	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	41
	滋賀県	0	10	1	3	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	17
	奈良県	0	12	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
	和歌山県	0	8	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	広島県	2	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
	神奈川県	0	16	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
	北海道	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	東京都	0	12	3	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
	福井県	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	宮崎県	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	福岡県	0	9	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	愛媛県	0	6	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	石川県	0	7	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	島根県	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	愛知県	2	17	3	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	26
	岡山県	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10
	静岡県	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	山口県	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	佐賀県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	栃木県	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	香川県	0	6	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	鳥取県	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	大分県	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	群馬県	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	埼玉県	0	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	岐阜県	1	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	高知県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	宮城県	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	千葉県	0	5	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	青森県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	鹿児島県	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	三重県	0	7	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	熊本県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	福島県	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	茨城県	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	新潟県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	徳島県	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	秋田県	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計		14	555	115	50	29	17	6	5	7	3	5	1	1	1	1	2	812

クロス検定表③

開門神事に関して と 青年期 のクロス表

度数

		青年期																																													
		兵庫県のみ回答	西宮市	兵庫・旧摂津	兵庫旧摂津以外	大阪府のみ回答	大阪・旧摂津	大阪旧摂津以外	京都府	滋賀県	奈良県	和歌山県	広島県	神奈川県	北海道	東京都	福井県	宮崎県	福岡県	愛媛県	石川県	島根県	愛知県	岡山県	静岡県	山口県	佐賀県	栃木県	香川県	鳥取県	大分県	群馬県	埼玉県	岐阜県	高知県	宮城県	千葉県	青森県	鹿児島県	三重県	熊本県	福島県	茨城県	新潟県	徳島県	秋田県	合計
開門神事に関して	N/A	0	1	3	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	幼少期から	0	18	11	7	2	6	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	54
	小学生のころ	1	36	31	21	1	12	19	7	0	3	1	2	1	0	2	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	1	2	1	0	0	0	0	0	150
	中学・高校生の頃	1	38	74	22	2	38	22	22	8	5	4	2	5	0	3	2	0	5	5	3	0	6	2	3	0	0	0	2	0	0	1	0	2	0	1	1	0	2	3	0	1	2	0	0	0	287
	それ以降	0	16	44	31	2	33	31	10	8	9	4	7	13	4	13	1	2	4	5	6	3	16	7	1	1	1	2	7	3	2	3	5	3	1	1	3	1	1	4	0	0	0	1	2	1	312
	今日知った	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計		2	109	163	81	7	90	76	41	17	17	9	11	19	4	18	3	3	10	10	9	3	26	10	4	2	1	3	9	3	2	5	6	7	1	2	7	1	4	9	1	1	2	1	2	1	812

誰から（開門） と 青年期 のクロス表

度数

		青年期																																													
		兵庫県のみ回答	西宮市	兵庫・旧摂津	兵庫旧摂津以外	大阪府のみ回答	大阪・旧摂津	大阪旧摂津以外	京都府	滋賀県	奈良県	和歌山県	広島県	神奈川県	北海道	東京都	福井県	宮崎県	福岡県	愛媛県	石川県	島根県	愛知県	岡山県	静岡県	山口県	佐賀県	栃木県	香川県	鳥取県	大分県	群馬県	埼玉県	岐阜県	高知県	宮城県	千葉県	青森県	鹿児島県	三重県	熊本県	福島県	茨城県	新潟県	徳島県	秋田県	合計
誰から（開門）	N/A	0	3	3	4	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
	親兄弟から	0	30	23	6	1	1	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	74
	親戚から	1	1	5	1	0	2	5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18
	近所の人から	0	8	5	2	0	1	4	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24
	同僚から	0	6	11	7	1	3	9	2	1	1	1	3	4	0	4	0	0	0	1	1	1	2	2	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0	3	1	0	1	0	0	0	0	1	0	70
	学校の友人から	0	11	24	5	1	16	14	3	1	0	1	2	3	0	0	1	0	1	4	3	2	4	1	1	0	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	104
	新聞	0	0	3	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	9
	テレビ	1	45	83	51	4	62	39	30	12	14	7	5	12	3	12	2	2	8	4	4	0	13	6	2	1	1	3	5	2	1	4	2	4	1	2	3	0	4	6	1	0	1	1	0	0	463
	ラジオ	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	インターネット	0	0	5	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	18
	その他	0	4	1	3	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	15
	今日知った	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計		2	109	163	81	7	90	76	41	17	17	9	11	19	4	18	3	3	10	10	9	3	26	10	4	2	1	3	9	3	2	5	6	7	1	2	7	1	4	9	1	1	2	1	2	1	812

十日戎に関して と 青年期 のクロス表

度数

		青年期																																													
		兵庫県のみ回答	西宮市	兵庫・旧摂津	兵庫旧摂津以外	大阪府のみ回答	大阪・旧摂津	大阪旧摂津以外	京都府	滋賀県	奈良県	和歌山県	広島県	神奈川県	北海道	東京都	福井県	宮崎県	福岡県	愛媛県	石川県	島根県	愛知県	岡山県	静岡県	山口県	佐賀県	栃木県	香川県	鳥取県	大分県	群馬県	埼玉県	岐阜県	高知県	宮城県	千葉県	青森県	鹿児島県	三重県	熊本県	福島県	茨城県	新潟県	徳島県	秋田県	合計
十日戎に関して	N/A	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	幼少期から	0	34	26	10	2	7	5	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	92
	小学生のころ	0	34	42	21	1	14	17	9	0	3	0	1	2	0	3	0	1	2	1	2	0	4	1	0	0	1	1	0	1	0	0	1	1	0	0	2	0	1	2	1	0	0	0	0	0	169
	中学・高校生の頃	1	28	59	27	2	43	23	17	10	7	4	1	5	0	3	2	0	5	5	5	0	7	2	3	0	0	0	2	0	1	2	0	3	0	1	1	0	2	3	0	1	2	0	0	0	277
	それ以降	1	13	34	23	2	26	31	11	7	7	5	8	12	4	12	1	2	2	4	2	3	15	7	1	1	0	2	7	2	1	2	5	3	1	1	4	1	1	4	0	0	0	1	2	1	272
合計		2	109	163	81	7	90	76	41	17	17	9	11	19	4	18	3	3	10	10	9	3	26	10	4	2	1	3	9	3	2	5	6	7	1	2	7	1	4	9	1	1	2	1	2	1	812

誰から（十日戎） と 青年期 のクロス表

度数

		青年期																																													
		兵庫県のみ回答	西宮市	兵庫・旧摂津	兵庫旧摂津以外	大阪府のみ回答	大阪・旧摂津	大阪旧摂津以外	京都府	滋賀県	奈良県	和歌山県	広島県	神奈川県	北海道	東京都	福井県	宮崎県	福岡県	愛媛県	石川県	島根県	愛知県	岡山県	静岡県	山口県	佐賀県	栃木県	香川県	鳥取県	大分県	群馬県	埼玉県	岐阜県	高知県	宮城県	千葉県	青森県	鹿児島県	三重県	熊本県	福島県	茨城県	新潟県	徳島県	秋田県	合計
誰から（十日戎）	N/A	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	親兄弟から	0	46	29	9	0	5	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	102
	親戚から	0	3	7	1	1	3	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	20
	近所の人から	0	11	4	3	0	2	3	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27
	同僚から	0	5	9	7	1	2	9	4	3	2	1	2	4	0	5	0	0	0	0	1	0	2	3	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	67
	学校の友人から	0	8	25	6	1	19	13	4	2	0	3	4	2	0	1	1	0	1	4	3	2	5	1	1	0	0	0	1	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	115
	新聞	0	1	3	2	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	13
	テレビ	2	29	77	48	4	55	40	27	12	13	5	5	12	3	10	2	2	9	6	5	1	13	6	3	1	1	3	5	2	2	4	2	4	1	2	4	0	3	7	1	0	2	1	0	0	434
	インターネット	0	1	4	1	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
	その他	0	4	3	4	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	18
合計		2	109	163	81	7	90	76	41	17	17	9	11	19	4	18	3	3	10	10	9	3	26	10	4	2	1	3	9	3	2	5	6	7	1	2	7	1	4	9	1	1	2	1	2	1	812

出場回数 と 感想 のクロス表

度数

		感想																																							
		興奮した	びっくりした	緊張した	恐ろしい	開放感で一杯	まるで白銀の世界	スローモーションのように感じた	頭の中が真っ白になった	感動した	やっと開いた	絶対勝つの気持ちになった	苦しかった	妨害された	勝てないと思った	ラッキーだった	むちゃくちゃだった	悔しかった	気持ちいい	後光が差していた	例えられない	戦争	頑張る気がいっぱい	不思議な気持ち・神がかり	テレビに映るかなと考えた	迫力を感じた	心が洗われた・清々しい	痛かった	恒例の行事である	一年が始まった気分	混乱した	立てなかった	今年の祈願	怪我の無いように	嬉しかった・楽しかった	行くぞ！の気持ち	日本人でよかった	覚えていない	これまで辞退してきた	実感がわからない	特になし	N/A	合計
出場回数	無回答	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
	2	15	4	7	4	4	1	0	3	3	3	4	0	1	1	3	0	2	3	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	1	3	1	0	0	2	3	0	1	0	4	2	23	101
	3	4	0	5	3	2	0	0	3	3	1	2	1	2	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0	1	0	0	2	1	9	47
	4	5	0	4	0	1	0	0	3	1	1	2	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	27
	5	4	0	0	0	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	16
	6	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	7	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	8	1	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7
	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3
	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	5
	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	15	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	18	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
合計		33	4	18	9	10	3	1	13	8	5	8	1	3	1	5	2	3	6	2	1	1	2	2	1	1	3	1	1	4	3	1	1	2	5	4	1	1	1	8	5	41	225

出場回数 と 複数回参加動機 のクロス表

度数

		複数回参加動機																																							
		友人・先輩・後輩の誘い	門に吸い寄せられた	去年より良い順位になるため	メディアに出たい	熱くなる体験をもう一度したい	友人に会いたい	去年楽しかったから	参加することこそ意義があるから	今年こそ完走したいから	勝ちたい・福男になりたい	上司の指示・アドバイス	恒例行事だから	目立ちたいから	リベンジのため	最高の祭りだから	男だから	勝って、引退したいから	興奮したいため	健康だから	時間が取れたから	清々しいから	福にあやかりたいから	職場の応援があって	くじで当たることを祈念して	去年女性で一番だったので	ただ、走りたいから	思い出を作るため	神事に関わる人々の気持ちを知って	健康のため	意地	家族のため	最後のチャンスと思い	仕事で	近所だから	日本が好きだから	なんとなく	学生時代の集大成として	人生の転機と思い	特になし	N/A	合計
出場回数	無回答	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	2	4	1	9	2	2	0	7	1	0	18	1	2	1	9	0	1	0	1	0	1	1	4	0	6	1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	1	20	101
	3	2	1	3	1	2	1	4	0	1	11	0	5	0	2	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	7	47
	4	0	2	2	0	0	1	0	0	1	5	0	4	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	27
	5	0	1	0	0	2	1	1	0	0	5	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	16
	6	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	8	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	7
	9	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3
	10	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	18	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計		6	6	14	3	7	5	16	1	2	39	2	19	1	13	1	3	1	1	1	4	3	8	1	8	1	3	2	1	1	1	4	2	1	2	1	1	1	1	1	37	225

クロス検定表④

出場回数と参加動機のクロス表

		参加動機																				
		友人・先輩・後輩・同僚からの誘い	好奇心	友人に会えるから	記念に・思い出づくり	挑戦	平等に参加できるから	参加が夢だったから	メディアに出たいから	福にあやかりたい・つかみたい	気合を入れたい	歴史に名を残したい	恒例行事だから	伝統行事に関わってみたかったから	厄年だから	テレビを見て	賞品に惹かれて	時間に余裕が出来たため	関東にはないから	クラブ・サークル活動の一環として	ボーイスカウト活動の一環として	目立ちたい	熱いものを感じたい
出場回数	無回答	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
	1	90	32	1	84	33	0	8	6	42	7	2	1	7	4	15	1	3	0	4	5	3	4
	2	9	7	0	1	6	1	0	3	13	1	0	3	1	0	5	1	1	0	1	0	2	4
	3	5	5	0	0	5	0	1	1	6	0	1	3	3	1	0	0	0	1	0	0	0	1
	4	0	1	1	1	2	1	0	1	3	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0	1	2	0	1	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	6	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	8	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	9	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	10	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	11	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	12	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	18	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	20	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		109	48	7	88	49	2	10	11	68	8	3	13	14	5	21	3	4	1	7	5	5	9

		福男になりたい	名誉のため	上司の指示	人に福をあげたい・分け合いたい	ノリ・気まぐれ・なんとなく	ご縁・宿命	仕事で	男だから	数回出て楽しいから	西宮に転居したため	祭りが好きだから	ひやかし	前から行きたかったため	人生のステップアップのため	近所だから	西宮に生まれ育ったため	「ふく」の下関に住んでいるから	野球の対戦相手が福男になったから	家族のため	子どもが生まれるため	一度目で怪我をして悔しかったから	モテたいから
出場回数	無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	1	56	0	5	6	19	1	4	1	0	6	1	0	1	1	4	2	1	1	2	5	0	1
	2	15	0	1	4	3	0	1	1	2	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0
	3	4	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4	3	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0
	5	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	7	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	9	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		83	2	6	11	24	1	6	3	4	6	1	1	2	1	7	4	1	1	3	7	1	1

																						合計
		兵庫県に在住のため	くじ引きになったから	列に並ぶのが好きだから	恰好いいので	運だめし	出張で近くまで来ていたため	親戚の家に近い	転職のため	楽しいから	人生の経験として	神様に頑張っている姿を見て欲しいから	一年を飾るスタートとして	知り合いに福男がいるから	話題作り	休日が重なったため	神社めぐりが高じて	初の福女になりたい	福男と友だちになりたい	今年は受験の年だから	特になし	N/A	
出場回数	無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	14
	1	3	0	1	0	16	1	1	5	2	2	1	2	2	1	1	1	1	1	2	1	42	555
	2	1	1	0	1	3	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16	115
	3	1	1	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	50
	4	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	29
	5	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	17
	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	6
	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5
	8	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7
	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5
	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計		6	2	1	1	26	1	2	5	3	4	1	2	2	2	1	1	1	1	2	2	80	812

クロス検定表⑤

性別 と 競技名など（現在） のクロス表(2001-2004)

度数

		競技名など（現在）																					合計
		陸上	野球	サッカー	バスケ	バレー	柔道	弓道	ハンドボール	ラクロス	空手道	ラグビー	体操	ヨット	ボウリング	トライアスロン	スポーツジム	ボーイスカウト	福男サークル	色々	職員クラブ	無回答	
性別	男性	21	4	4	1	1	1	1	1	4	2	2	1	2	3	4	1	1	3	2	1	1	61
	女性	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
合計		24	4	4	1	1	1	1	1	4	2	2	1	2	3	4	1	1	3	2	1	2	65

性別 と 競技名など（過去） のクロス表(2001-2004)

度数

		競技名など（過去）																			合計
		陸上	野球	サッカー	テニス	バスケ	バレー	柔道	剣道	アメフト	水泳	ハンドボール	空手道	ラグビー	体操	新体操	色々	パワーリフティング	無回答	学校のクラブ	
性別	男性	17	6	8	1	4	3	2	3	1	3	2	1	5	3	0	1	1	2	2	65
	女性	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	5
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
合計		21	6	8	1	4	3	2	3	1	3	2	1	5	3	1	1	1	3	2	71

性別 と 競技名など（現在） のクロス表(2005-2015)

度数

		競技名など（現在）																		
		陸上	野球	サッカー	テニス	バスケ	バレー	柔道	剣道	アメフト	ハンドボール	ラクロス	空手道	ラグビー	ヨット	トライアスロン	スポーツジム	職員クラブ	パワーリフティング	無回答
性別	男性	48	49	23	12	9	1	1	2	9	2	5	3	10	1	1	8	7	1	12
	女性	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計		52	49	23	12	9	1	1	2	9	2	5	3	10	1	1	9	7	1	13

		競技名など（現在）																				合計
		学校のクラブ	ソフトテニス	合気道	少林寺	ダンス	日本拳法	アイスホッケー	ボクシング	バドミントン	地域のサークル	ジョギングサークル	タッチラグビー	フットサル	ソフトボール	ライフル射撃	ライフセービング	よさこいサークル	陸上ホッケー	スノーボード	自衛隊	
性別	男性	12	1	2	2	1	1	2	1	3	1	3	1	3	3	1	1	1	1	1	1	246
	女性	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	8
合計		13	1	2	2	1	1	2	1	3	1	3	1	3	3	1	1	2	1	1	1	254

性別 と 競技名など（過去） のクロス表(2005-2015)

度数

		競技名など（過去）																													合計
		陸上	野球	サッカー	テニス	バスケ	バレー	柔道	剣道	アメフト	水泳	ハンドボール	ラクロス	空手道	ラグビー	体操	ボウリング	スポーツジム	無回答	学校のクラブ	ソフトテニス	卓球	ダンス	ボクシング	バドミントン	ソフトボール	サイクリング	ウィンドサーフィン	ライフセービング	駅伝	相撲	
性別	男性	89	77	72	23	34	12	14	7	3	5	4	1	4	15	3	1	1	27	26	3	9	1	1	5	2	1	1	1	1	1	444
	女性	3	1	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
合計		92	78	72	23	35	12	15	8	3	5	4	1	4	15	4	1	1	27	27	3	9	1	1	5	2	1	1	1	1	1	453